

博士学位論文（東京外国語大学）
Doctorial Thesis (Tokyo University of Foreign Studies)

氏名	鈴木 佑也
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博甲第 221 号
学位授与の日付	2016 年 12 月 7 日
学位授与大学	東京外国語大学
博士学位論文題目	建築プロジェクト・ソヴィエト宮殿の全体像と建設に関する研究：狂想と国家を双肩に担ったモニュメント

Name	Suzuki, Yuya
Name of Degree	Doctor of Philosophy (Humanities)
Degree Number	Ko-no. 221
Date	December 7, 2016
Grantor	Tokyo University of Foreign Studies, JAPAN
Title of Doctoral Thesis	Research on the Design and Construction Overview of the Palace of Soviets : the Architectural Monument under the Burden of the Megalomania for its own Image and of the Image of State.

建築プロジェクト・ソヴィエト宮殿の全体像と建設に関する研究：

狂想と国家を双肩に担ったモニュメント

鈴木 佑也

東京外国語大学大学院地域文化研究科

博士後期課程地域文化研究専攻

目次

序：建築プロジェクト・ソヴィエト宮殿を取り巻く状況について（2-15 頁）

1. 十月革命後からソヴィエト宮殿競技設計に至るまでの宮殿型建築物の変遷
（1919-1931）（16-43 頁）

1-1. 労働者宮殿競技設計

1-2. 労働宮殿競技設計

1-3. 文化宮殿競技設計とその実現

2. ソヴィエト宮殿競技設計とその結果（1928-1933）（44-96 頁）

2-1. ソヴィエト宮殿競技設計が形成されるまで

2-2. 競技設計準備段階（1 巡目）

2-3. 国際競技設計（公開競技設計、2 巡目）

2-4. 非公開競技設計 1 巡目（3 巡目）

2-5. 競技設計最終段階（非公開競技設計 2 巡目、4 巡目）

3. ソヴィエト宮殿の実現に向けて：ソヴィエト宮殿建設作業とそれを巡る動き
（1933-1937）（97-144 頁）

3-1. 競技設計終了直後の動き

3-2. ソヴィエト建築界における様式に関する議論とソヴィエト宮殿への影響

3-3. 最終設計案の概要と建築計画

3-4. 1920-30 年代のソ連の産業界におけるアメリカとの技術交流

3-5. アメリカ建設技術への着目と最終設計案への影響

3-5-1. 照明効果による空間演出

3-5-2. 地盤調査

3-5-3. 基礎設置

3-5-4. 上部構造（鉄骨）

4. ソヴィエト宮殿の消散：ソヴィエト宮殿建設作業の凍結と中止に至る経緯
（1937-1952）（145-182 頁）

4-1. ソヴィエト宮殿高層部の設計に関する技術論文

4-2. 最終設計案完成後の動き

4-3. 建設作業凍結

4-4. 建設作業復興の萌し

4-5. ソヴィエト宮殿の消滅

結び（183-191 頁）

参考文献（192-204 頁）

参考画像（別冊子 1-91 頁）

序：建築プロジェクト・ソヴィエト宮殿を取り巻く状況について

本稿の目的は、アーカイブ資料を基にして、1930年代にソヴィエト建築界で一大建設事業として扱われた建築プロジェクト・ソヴィエト宮殿のその成り立ちから頓挫までを史実的な裏付けから明らかにすることである。先行研究の多くではソヴィエト宮殿の競技設計について言及されるものの、その企画段階と建設段階、そして建設作業一時中断後からこのプロジェクトが完全に消滅するまでの全過程はほとんど扱われてこなかった。この建築プロジェクトの一連の流れを時系列で追い、各段階（企画段階、競技設計、建設段階、建設作業中止から再開に向けた段階）で生じた問題を把握し、この建築プロジェクトの全貌を明らかにすることが本稿の目的である。まず従来 of 既往研究を、とくに近年のものを中心にレビューしておく。

1930年代から始まるソヴィエトにおける全体主義体制の建築分野を含めた文化現象に対して再検討を促す研究が1980年代から増えてきている¹。権力と芸術の相互関係、プロパガンダを基に生み出された芸術というアプローチにより、ソヴィエト宮殿を取り巻く当時の文化を取り巻く状況が解明されつつある。こうしたアプローチは、1930年代のソヴィエト建築のみならず、同時代の他国における全体主義体制下の建築にも適用され、それらの研究も数多く登場してきた²。こうした研究でソヴィエト宮殿は全体主義政治体制の典型的な建築プロジェクトとしてしばしば紹介されている。本稿はこうした全体主義文化研究の一部を担うものであるが、全体主義文化そのものを論じることが目的ではない。むしろ全体主義文化の中でも重要な位置を占めた建築プロジェクト・ソヴィエト宮殿の特徴を解明することに的を絞りたい。このことにより、ソヴィエト宮殿が全体主義文化の典型とされる理由を逆に浮かび上がらせることができると考える。

¹ 文化現象全般であれば、Igor Golomshtok *Totalitarian art in the Soviet Union, the Third Reich, Fascist Italy, and the People's Republic of China* (London: Collins Harvill, 1990)や Гройс, Б. Утопия и Обмен. М., 1993. などがあり、建築分野に限れば Паперный В. Культура Два, М., 2006 (Vladimir Paperny *Architecture in the Age of Stalin: Culture Two* (Michigan: Ann Arbor Press, 1985)) や Хмельницкий, Д. Архитектура Сталина – психология и стиль. М., 2007.などを挙げるができる。

² 八東はじめ、小山明『未完の帝国ナチスドイツの建築と都市』福武書店、1991年、ヴェンフリード・ネルテイングー（海老澤模奈人訳）『建築・権力・記憶:ナチズムとその周辺』鹿島出版会、2004年、八東はじめ『思想としての日本近代建築』岩波書店、2005年、井上章一『夢と魅惑の全体主義』文春新書、2006年、ディヤン・スジック（東郷えりか訳、五十嵐太郎監修）『巨大建築という欲望:権力者と建築家の20世紀』紀伊國屋書店、2007年、パオロ・ニコロージ（桑木野幸司訳）『建築家ムッソリーニ:独裁者が夢見たファシズムの都市』白水社、2010年等が挙げられる。

建築プロジェクト・ソヴィエト宮殿に関する先行研究は競技設計に関するものが多く、そうした研究には大きく分けて2つの傾向がある。1つ目は、ソヴィエト宮殿競技設計において提出された設計案を分析し、この競技設計とは何であったかを問おうとするものである。

ヴィグダリヤ・ハザノヴァの研究³では、競技設計の準備段階に該当する1巡目に提出された設計案のみの分析ではあったが、他の先行研究で1つのカテゴリー（構成主義）としてくくられる傾向にある SASS、ASNOVA と ARU といった建築家グループの設計案を詳細に分析し、共通点と相違を導き、それぞれが持つ特徴を記した。一方で、当時の建築界で優勢であった VOPRA の1巡目の設計案が敵視するグループ（SASS、ASNOVA と ARU）の設計案とあまり変わらない点、さらにはそれらのグループと同じ着眼点を持っていたことを設計案の分析から導き出し、1巡目に提出された設計案のみの分析とはいえ、そこから導き出される、デモンストレーションと機能性を中心とした空間構成という共通点から最終的に競技設計に求められる「モニュメンタリティ」に至るまでの経緯を提示している。

V.ハザノヴァの研究に立脚する形で、マルガリータ・アスタフィエヴァ-ドゥルガチとユーリイ・ヴォルチョコの研究⁴が全体像を補完し、ソヴィエト宮殿競技設計で問われたコンセプトの追究を行っている。彼らは提出された設計案の分析から導かれる傾向をソヴィエト国内でそれ以前に行われた大型競技設計との比較を試みた。このことによってソヴィエト宮殿競技設計において独自とされていた、設計競技の規模、コンセプト、イデオロギー、都市計画上の概念の前例を引き出しながらソヴィエト宮殿競技設計の特殊性が形成されていく過程を論じた。

ソナ・ホイジントンの研究⁵では設計案の分析というよりは、むしろ2巡目の受賞案、最終的に勝利案となったB.イオファンの設計案が選定された理由とその選定理由の特徴を探ろうとするものであった。このことによって、従来の研究で重点が置かれていた審査員の評価や建設局の公式的なコメント以外に設計案を提出

³ Хазанова В. К истории проектирования Дворца Советов СССР в Москве // Советское изобразительное искусство и архитектура 60-70х годов / Под. ред. В.Э. Хазановой. М., 1979. С. 166-213.

⁴ Астафьева-Длугач, М.И. и Волчок, Ю.П. О конкурсе на Дворец Советов // Зодчество. М., 1989. С. 222-238.

⁵ Hoisington S.S., "Ever Higher : The Evolution of the Project for the Palace of Soviets," *Slavic review* 62, no. 1 (2003), pp. 41-68.

した建築家、特に B.イオフアの職能以外の特質や能力にも焦点が当てられ、競技設計の枠組み以外の要素を導入している。そのことによって建築という枠のみならずソヴィエト文化全般にもその影響力が波及したこと、さらにはその点にこそソヴィエト文化そのものとの相似性を見出し、ソヴィエト宮殿がソヴィエト文化のモデルでありえたということを示唆している。

S.ホイジントンの研究が設計案分析から当時のソヴィエト文化との比較へ波及したのに対し、ピーター・リゾンは十月革命後からスターリンの死後の雪解け期、さらには第2次世界大戦後の東欧の建築まで研究範囲を広げている⁶。競技設計までの期間をソヴィエト宮殿の前段階、それ以降をソヴィエト宮殿の影響範囲と設定し、ソヴィエト建築を捉えたものであった。そのため、ソヴィエト建築そのものの根幹としてのソヴィエト宮殿の影響範囲を通して当時のソ連という国家そのものの理解にも資する研究となった。

こうした先行研究の流れと異なるのは、2つ目に挙げられる一定の文化的枠組みからソヴィエト宮殿競技設計もしくはソヴィエト宮殿を分析する方法である。この先行研究の流れは近年に多く、ヴラジーミル・パペルヌイとドミートリイ・フメリニツキイの研究に見出すことができる。

V.パペルヌイの研究⁷は、ソヴィエト建築のみならず装飾をも含めた意匠史という観点からソヴィエト宮殿を含む、いわゆるスターリン期の文化的特質に光を当てる。彼は、「文化1」と「文化2」というモデルを設定し、この2つの文化類型を更にサブカテゴリーに細分化し、様々な歴史的事象にあてはめながら分析している。彼の研究の中ではソヴィエト宮殿は「平板化」という「文化2」を形成するコンセプトの1つの事例として紹介されている。そのため、上記した1つ目の先行研究の流れとは異なり、設計案分析からソヴィエト宮殿を定義付けるのではなく、ある文化モデルを形成する一事例という位置付けが強調されている。そのため、V.パペルヌイの研究においては、ソヴィエト宮殿の特殊性はそれほど強調されていない。

⁶ Lizon P. *The Palace of Soviets – The Paradigm of Architecture in the USSR* (Colorado: Three Continents Press INC, 1992).

⁷ Паперный. Культура Два (前註1に詳細あり)。

D.フメリニツキイの研究⁸では「スターリン建築」という枠組みが提示され、その概念が形成される過程が記され、その中における重要な転機として、ソヴィエト宮殿競技設計が組み込まれている。V.パペルヌィとは異なり、D.フメリニツキイの場合、設計案の分析を行い、かつ従来取り上げられなかった当時の西欧建築家達の反応をも組み込むことで、ソヴィエト宮殿に対する当時の注目度ないしは影響力の大きさを実証している。D.フメリニツキイも従来の研究と同じく競技設計審査員のコメントを基に分析と比較を行っているので、この点に関して新しい発見はない。だが、その分析と当時の建築雑誌で展開されたソヴィエト宮殿以外の建築様式に関する批評を組み合わせることによって、競技設計で顕著になる建築様式変化の背景を探っている。彼が考える「スターリン建築」の成立に研究の主眼が置かれ、建築家が全体主義体制に組み込まれる過程に焦点が当てられている。これら2つの研究に共通することはソヴィエト宮殿の特殊性よりも、それを取り巻く制度や文化の一部として他の文化事象との共通性に着眼点が置かれていることである。確かに、こうした研究方法はソヴィエト宮殿そのものを異なる角度から分析する上では有益ではあるが、一定の前提や評価を基盤としている。

一方で、1つ目に挙げた先行研究の流れに共通するのは、ソヴィエト建築史の中でソヴィエト宮殿が占めてきた特殊性ないしはその影響力の大きさを立証する試みであった。ソヴィエト宮殿競技設計と前後する国内外の建築競技設計と比較、競技設計に提出された設計案を分析することにより、競技設計のねらいまたはそれに連なるソヴィエト建築の系譜が明確に示されている。つまり、それらに込められたイデオロギーや建築理念を通してその時代のソヴィエト国内の文化形態を把握する試みを可能としている。予めある種の文化モデルを設定するという2つ目の先行研究の流れと異なり、設計案分析や比較を通じて、ソヴィエト建築史における分岐点としてソヴィエト宮殿が位置づけられる。

こうした先行研究の傾向も鑑みて、本稿では2章において競技設計に提出された設計案に対していくつかのカテゴリーによってタイプ化し分析比較を行う。このカテゴリーは近代様式か歴史様式かという様式的なものだけではない。確かに、

⁸ Хмельницкий. Архитектура Сталина (前註1に詳細あり)。

多くの先行研究に共通する、ソヴィエト宮殿が建築様式上のパラダイムシフトであったとする論調を実証するには、様式的なカテゴリーで分類することは不可欠である。しかし、何次もの段階を経たこの特設計競技の特異さは、それを通じて最終案の選択の基準あるいはそのための要求条件自体が変わっていったところにある。最初から明確な基準があったのではなく、これを絞っていくために数次に亘る設計競技が実施されたといっても過言ではないようにも思われる。それは必ずしも様式だけの問題ではない。

本稿では先行研究、ないしは当時の建築雑誌による案の分類のされ方自体に注目し、比較検討を行っている。受賞した設計案の相似性を見出すことで、主催者がこの競技設計を通じて創り出そうとしたソヴィエト宮殿のイメージの傾向を一層明確にできると考えるからである。次に、同じカテゴリーの中でも、相似しているにもかかわらず他の設計案が受賞に至らなかった理由を、公表されている 2 巡目だけではあるが、受賞に関する審査員のコメントないしは当時の評価と照らし合わせてみる。このことによって、設計案の建築様式以外の表現性や機能性といった評価の要素を抽出し得るし、巡回ごとに優勢であった特徴を記すことで、設計者達が自らの設計案で置いた重点の変化を明示することもできると考えたのである。

ソヴィエト宮殿競技設計が開始される前年から 2 年前までのものを比較対象とした研究で M.アスタフィエヴァ-ドゥルガチと Yu.ヴォルチョクが指摘しているように、ソヴィエト宮殿は競技設計以前のソヴィエト国内の様々な競技設計の特徴を引き継いで発案された。しかしながら、「ソヴィエト宮殿」という名称自体がこれら大型建築競技設計から引き継がれたとは考えにくい。十月革命からソヴィエト宮殿競技設計まで、ソヴィエト国内で行われた主要建築競技設計で「宮殿」と名を冠したプロジェクトは 3 つあるが、M.アスタフィエヴァ-ドゥルガチと Yu.ヴォルチョクや P.リゾンらの先行研究では、これらの建築プロジェクトはソヴィエト宮殿に与えた影響という観点、もしくは新旧建築様式の争いとして扱われている。本稿では「宮殿」という名前に着目し、ソヴィエト宮殿以前の宮殿と名を冠したソヴィエト国内建築プロジェクトの共通性を探ると共に、そこから導きだ

された共通性がソヴィエト宮殿にも当てはまるか否かを検証する。このことによって、大型競技設計という規模のみならずソヴィエト宮殿が目指そうとした理念的方向性を確認し、全体主義下における他国での同種建築プロジェクトとの違いをより明確に示すことができると考えるからである。

本研究でとりわけ重視したのは、設計競技段階につづくソヴィエト宮殿の建設段階での経緯の記述である。当時の記事ないしは論文を除いて、先行研究で、ソヴィエト宮殿の実設計及びその後の建設段階に関して論じた論文はほとんどない。このプロジェクトは、競技設計終了の後、プロジェクトの完成を目指しながらも、1941年に建設作業が頓挫した。にもかかわらず、従来の先行研究ではその経緯について言及されることは極めて少ない。建設に先立つ実設計段階においては、競技設計で勝利したB.イオファン案を基としながら何度か変更を加えながら最終案の策定に至る。この経緯の中では、ソヴィエト宮殿の表現という理念的な部分と建設行為のため現実的・技術的な面のすり合わせが生じ、競技設計時とは異なる変更が加えられながら案の策定が行われていった。ソヴィエト宮殿競技設計勝利案は、いわば建設委員会と建設局が考えたソヴィエト宮殿の最終形態を生み出すための基本形態でしかなかったわけだが、それだけではなく、政治指導者の意向にも大きく左右されながら作成作業が進んでいる。この改変のプロセスにこそ、ソヴィエト宮殿プロジェクトの特異性が見出せる。

競技設計後のソヴィエト宮殿のソヴィエト建築への影響に関しては、D.フメリニツキイの研究が論じており、P.リゾンの研究は対象を更に東欧にまで拡げて取り扱っている。ソヴィエト宮殿の規模の大きさを論じるうえでは、その後の影響を記すことは確かに重要である。しかし、本稿ではむしろソヴィエト宮殿への同時代の直接的な影響を重視している。そもそも従来の研究では、この計画は、反動的なスターリン様式の覇権を印すものだけいわれがちだったが、設計競技初期にはなかったその後の推移によって確定されていった案は、当時ヨーロッパにはなかった超高層ビルと言う「革新」的なビルディングタイプであり、それを実現するための建築技術の蓄積は当時のソヴィエトにはなかった。あるいはそれをバックアップする生産体制も当時の第一次五カ年計画の中で同時並行的に整備さ

れていったのである。そのために実施設計段階では、こうした技術を保持していた唯一の国であるアメリカからの多くの情報やアドバイスが取り入れられている。これは他の重工業整備計画でも同様だが、ソヴィエト宮殿の計画はその意味でも五カ年計画の象徴的プロジェクトたり得た。D.フメリニツキイや P.リゾン、S.ホイジントン等らが指摘する第2次世界大戦後の冷戦期に建立されたモスクワの高層建築群もまた、ソヴィエト宮殿で培われた技術的蓄積なしではあり得なかったのである。

こうした研究方法に対応して、本稿は以下のように構成される。1章ではソヴィエト国内で十月革命以降に企画された宮殿型建築物の競技設計を扱い、宮殿型建築物が内包する問題点や方向性を考察し、ソヴィエト宮殿の前提条件を明らかにする。2章では建築プロジェクト・ソヴィエト宮殿という名前が公の場で登場するまでの経緯、競技設計の企画段階や競技設計の各巡回をまとめる。上に述べたように、建築スタイルの覇権争いという側面に固執せずに、建築物の構成からいくつものタイプに分類して競技設計に提出された設計案の分析を行う。これによって先行研究で抜け落ちていた競技設計主催者（権力者）側が競技設計で求めたソヴィエト宮殿のイメージを明らかにする。3章では競技設計終了後から建設段階を対象として、競技設計勝利案を基にしたソヴィエト宮殿最終設計案が完成するまでにアメリカの建設技術の導入及び受容がどのような形で最終案設計に影響を与えたかという点を建設局と設計を担当した建築家達の発言や報告などから分析する。4章では、実施設計過程からソヴィエト宮殿の建設作業が一時中断に至るまでを取り上げ、建設作業を担当したソヴィエト宮殿建設局、建設資材の配分や予算決定に影響力を有していた関連省庁の審議や報告から建設作業が中断した理由の分析を行う。そして建設作業中断後の作業再開に向けた建設局の動き、建設作業を担当した建築家の報告と建設作業再開を促すための提案などを基にして、建設作業中断後のいきさつを分析する。こうした分析から建築プロジェクト・ソヴィエト宮殿がどのようなかたちで消滅していくかを明らかにする。結論ではこうした事実を踏まえて、建築プロジェクト・ソヴィエト宮殿が備えていた特徴をまとめ、その結果ソヴィエト宮殿がどのような文化的現象であったかをまとめる。

1930年代にソ連の首都モスクワにおいて計画された「社会主義建設に向け、労働者の意志を体現する時代を性格づけるようなモニュメンタリティにあふれた建築物、卓越した建築芸術的な記念碑」⁹の建設を目指した建築プロジェクトの総称がソヴィエト宮殿である。この建築プロジェクトでは建築設計競技によって建設のための基本設計案が決定した後、幾度かの審議を経て最終設計案が決定され、この建築物の基礎部分の建設作業が行われた。しかし、第2次世界大戦時には建設資材と建設作業に携わる人員の多くが他事業へ転用され全ての作業が一時中断となり、戦争終結後に作業再開の見込みがあったものの、再開されずにこの建築プロジェクトが実現することはなかった。

この建築プロジェクトは、1930年代の時代精神を象徴する一大建設事業としてソヴィエト国内では受容されていた。例えば、都市計画改造の最中を舞台とした映画『新しいモスクワ』（1938年：未公開）では技師である主人公が発明した模型と映像が一体化した「モスクワの生きた模型」を用いたショーが登場する。ここではかつてのモスクワと共産党政府主導の改造計画によって新しく生まれ変わるモスクワの姿が対比されるのだが、そのラストシーンでは最終設計案を基にしたソヴィエト宮殿の姿がモスクワ中心部の新しい街並から抜きん出るようなかたちで映し出される（図1）¹⁰。この場面では、かつてのモスクワと共産党政府主導の改造計画によって新しく生まれ変わるモスクワの姿が対比され、その最後にモスクワの中心地に建設される予定のソヴィエト宮殿がモスクワの新しい街並から抜きん出るかたちで映し出される。この映画が一般向けに制作されていたことを考慮すると、ソヴィエト宮殿は社会主義の中心地であるモスクワの街並を整備したソヴィエト政権の威容、さらには建築分野における大型建設事業として認識させようという制作者の意図がわかる。またこの建築プロジェクトの建設作業が一

⁹ Дворец Советов. Бюллетень Управления строительством Дворца Советов при президиуме ЦИК СССР. М., 1931. № 2-3. С. 1.

¹⁰ 池田嘉郎「社会主義の都市アイデア」吉田伸之、伊藤毅編『伝統都市1 アイデア』東京大学出版会、2010年、226、230頁。池田は注においてこの映画が公開されなかった（公開中止）理由として、この作品の「奔放な想像力」を一因として挙げている。その一例として、本文にある実演会で女性主人公が誤って実演会用機械のスイッチを逆に入れてしまい、新しい街並が消え、撤去対象となる建築物が登場する場面が言及されている。本文で言及されているのは、男性主人公がそのスイッチを入れ直した後、正常なかたちで模型が実演されている場面である。

時的に中断した後も、ソヴィエト宮殿は「勝利をおさめた社会主義の時代における記念碑として政治的かつ社会的に大いなる意義を持った事業」¹¹であり、建設競技設計が行われた 1930 年代を代表する建築プロジェクトという位置付けがなされていた。実現しなかったにもかかわらず、なぜこれほどまでにソヴィエト宮殿が大々的に宣伝され、ソヴィエト建築史を語る上で重要な要素となったのであろうか。

この理由として挙げられるのは、このプロジェクトの建築設計競技においてソ連国内だけでなく国外の建築家にも参加を求め、競技設計の規模が当時としては最大であったことだ。またその建設段階においても当時世界で最も高い建築物(最終設計案が提出された 1937 年の時点では 415m) となることが公告され、それを実現できるというソ連の建設技術を国内外に知らしめる役割を果たしていた。

さらに付け加えなければならないのは、ソヴィエト宮殿の建設が救世主ハリストス大聖堂を爆破した跡地に予定されていたことである。救世主ハリストス大聖堂は、19 世紀前半に当時大国であった第一帝政期のフランスとの戦争に勝利した記念に建設されたロシア帝政期の記念碑的建築物であり、ロシア正教の頂点に立つ宗教的建築物でもあった。この建築物を爆破して建設することは、ソヴィエト宮殿がロシア帝政のシンボルに取って代わるということの意味していた。ソヴィエト宮殿は「大衆の集会ならびに業務、文化事業を目的とした集会のため」¹²のもので、また「ソヴィエト大会とその会議のための特殊建築物」¹³であり、実務的な目的を明確に打ち出した施設型建築物であった。このことから国家を支える労働者大衆のために開かれた施設となり、大衆自らが主役となり大型建築物を建設するというアピール、それを支える共産党政府という構図が示されていたのである。

また第 2 次世界大戦後では、モスクワの中心に現存する高層建築群のいくつかの建築物にソヴィエト宮殿の建設段階で培われた建設技術が応用されたことは上述したが、この高層建築群はソヴィエト宮殿のように高くそびえる建築物であり、

¹¹ Колли Н.Я. Летопись советской архитектуры 1917-1947 // Архитектура СССР. 1947. № 17-18. С. 22.

¹² ЦАГМ (Центральный архив Города Москвы), ф. 694, оп. 1, д. 2, л. 1.

¹³ ГАРФ (Государственный архив Российской Федерации), ф. 3316, оп. 64, д. 562, л. 1.

第2次世界大戦の戦禍を被ったモスクワ復興事業における目玉の1つとなっていた¹⁴。高層建築物の竣工後にはソヴィエト宮殿の建設作業再開が見込まれていたことから¹⁵、こうした高層建築群にソヴィエト宮殿のイメージが重ねられていたことは想像に難くない。現存する高層建築群と結びついているため、都市の記憶として未だにこの建築プロジェクトはアクチュアリティを失っていない。

この建築プロジェクトは、当時国内のみならず国外においても大々的に宣伝されていた¹⁶。そのためこの建築プロジェクトにおける建築競技設計の段階（1931-33年、4回の競技設計が行われた）では数多くの設計案が提出され、提出された設計案から当時のソヴィエト建築界の潮流だけでなく、外国人建築家の設計案を含めると、当時のヨーロッパとアメリカで勃興した様々なスタイルを見出すことができる。多くの先行研究ではこの競技設計を中心に据え、提出された設計案で用いられる建築スタイルが各巡でどのように変化するかという点に着目されてきた。こうしたスタイル¹⁷の変化は、後にソヴィエト建築界で隆盛を極める歴史主義建築への傾倒の一例として扱われてきた。このことにより歴史主義建築（特に新古典主義、ネオ・ルネサンス）と競技設計後にソヴィエト建築界の方針となる社会主義リアリズムの結びつきをこの競技設計が用意したと論じられることがしばしばある。こうした論が展開されるのは、ソヴィエト宮殿競技設計の過程（競技設計2巡目の審査結果発表の段階）で主催者側から伝統的な建築様式を設計案へ新たなものとして取り入れるようにとの指示が加えられ、再度競技設計を非公開で開催するという通達と関連している¹⁸。また、こうした要求が、「文学・芸術組織の再編」に関する決議された時期（1932年）と重なっている点にも着目しなければならない。そのため、後にこの決議を基に芸術界で確立される社会主義リアリズムが建築分野においては歴史主義建築を基にしているかのように、ソ

¹⁴ この点に関しては4章において詳細に論じる。

¹⁵ ГАРФ, ф. 5446, оп. 86, л. 3291, л. 185.

¹⁶ 国外への宣伝とこの建築プロジェクトに外国人建築家を招聘したいきさつに関しては、2章の外国人建築家招聘に関する部分にて詳しく言及する。

¹⁷ これ以降本文中で「スタイル」という言葉を用いているのはその建築物の姿、外見またはそれらの特徴といったものを意味するためであり、後に文中で用いられる統一的な表現形式としての「様式」と分けるためである。

¹⁸ この点に関する詳細は2章の競技設計を巡る部分で論じることとする。

ヴィエト宮殿の競技設計後半（3巡目、4巡目）では歴史主義建築に特徴的な要素を用いた設計案が増えている。当時ソヴィエト建築界で求められていた新たな表現方法を獲得するために、何かしらの表現方法を歴史主義建築から借用することが有益であるという議論が展開された。だが、ソヴィエト宮殿の競技設計におけるスタイルの変遷とそれを巡る主催者や設計者の意図に論点が集中すると、この建築プロジェクト全体の特徴を把握することから議論が離れてしまう。また多くの先行研究では近代主義建築と歴史主義建築の対立という明快な図式が提示されるものの、この競技設計に提出された設計案を見てみると、そのいずれにも属さないような折衷的なスタイルの設計案が散見される。本稿でもこうしたスタイルの変遷は扱うものの、そのことによって建築プロジェクト・ソヴィエト宮殿全体の特徴付けは行わない。むしろ競技設計の際に問題となった1つのテーマとして取り上げている。

建築プロジェクト・ソヴィエト宮殿が沿うべきとされた社会主義リアリズムの重要な点は、それが芸術そのものが党や政府の方針に従わざるをえない状況を生み出したということである。この芸術方針が教義化された後には、社会主義リアリズムという規範から外れた建築潮流、例えば1920年代に広く流行した構成と美を一致させ建築物の設計に反映させるという主張や機能に建築物の形態または外見が従うという主張¹⁹は退けられる。一方で外見による美と建築物の構成やその機能を別にして、模範となるようなスタイルを過去の建築様式に求めようとする流れが1930年代前半から半ばにかけてソヴィエト建築界で主流を占めるようになる。この一連の流れで重要なのは主流となるスタイルが変化したというよりもことではなく、その主流となるスタイルと異なるものが排除されるようになったという点である。共産党政府による文学・芸術組織の再編に関する決議と結びつ

¹⁹ ここでまず述べておかなければならないのが、社会主義リアリズムに反するもしくは敵対的とされるアヴァンギャルド建築の潮流である。1920年代のソヴィエト建築界において構成主義、合理主義、象徴主義（シンボリズム）といった建築潮流が登場し、これらの潮流に加えてロシア帝政末期に流行したモダニズム、新古典主義が隆盛を極めていた。より詳細に記せば、さらに多様な様式が挙げられる。前者の3つの様式がいわゆるアヴァンギャルド、西欧建築史の文脈であればモダニズム建築（近代主義建築）の流れにまとめることができる。そのため、以下本稿ではアヴァンギャルドとしてくられる建築潮流を一括して、多くの先行研究に従い近代主義建築と表記する。一方で後者の2つのスタイルは、伝統主義ないしは歴史主義建築として位置づけることができるであろう。

き、ソヴィエト建築界でも党政府の方針に従う統一団体が設立され、予め設定された統一的な方向性に基づいたスタイルをソ連の建築家達は追求しなくてはならなくなった。このことは、それ以前まで建築家達がそれぞれの主義・主張によって社会主義体制に適った生活様式やその未来像を自らが発案し、それを掲げて建築活動に従事していた点と大きく異なる。統一的な方向性を掲げて社会主義建設に邁進する中で、建築家の自主性によって生み出される解釈の違いや多様性は妨げとなり、結果として彼らの自主的な解釈やそれによって生み出される闊達な議論は大幅に制限され、統一的な方向性から外れた動きや建築家達に対する批判が生じることとなった。

ソヴィエト宮殿はこうしたソヴィエト建築史の転換期に計画されたプロジェクトである。権力と芸術のつながりを体現したものとして建築プロジェクト・ソヴィエト宮殿全体を特徴付けるのは容易だが、こうした特徴付けでは単に近代主義建築の衰退と歴史主義建築の台頭の背景に触れるだけにとどまってしまい、これによって、競技設計に比べて競技設計後の建設段階と建設作業中断期間が長かったという事実への分析が脱落してしまう。ソヴィエト宮殿実現のため、実際に執り行われた建設に向けた動きは重要で、そこでは設計案の作成や企画の審議段階、そして競技設計とは異なる問題が生じていた。そのような問題の解決に向けたプロセスに注目してこそ政治・文化潮流を含む当時のソヴィエト社会におけるソヴィエト宮殿プロジェクトの特異性が見えてくるのではないか。

結果がどうであれ、本来ソヴィエト宮殿は建設されることを目的としていた。それならば、この建築プロジェクトを具現化するための動きから目を逸らすことはできないはずだ。そうした動きは「いかにして表現するか」ということではなく、「実現するという課題をいかにして解決するか」という設計者とプロジェクトの担当機関の歩みである。そこで我々が知ることになるのは、例えば、建設技術の未熟さを補うための方策、表現されたイメージを実現するための創意や工夫、実現化に向けた設計技術案や全体設計案の変更、さらにはそういったことを正当化するための理由付けなどである。こうしたことを検証することで、はじめてソヴィエト宮殿を建築プロジェクト全体として論じることが可能となる。そのよう

なプロセスを見ていこうとする本稿は、建築プロジェクト・ソヴィエト宮殿を新たに見直す契機となるであろう。

1. 十月革命後からソヴィエト宮殿競技設計に至るまでの宮殿型建築物の変遷
(1919-1931)

十月革命後、1920-1930年代にかけていわゆる宮殿型の建築物がソ連国内で数多く設計・建造されるようになった。建築史家ラリーサ・ニキーフォロヴァの研究によれば、宮殿型建築物はソヴィエト体制下の公共建築物という新たなタイプとして登場してきた。このことを踏まえて、本章ではソヴィエト宮殿を語る上での前段階として、十月革命直後からソヴィエト宮殿が登場するまでの「宮殿」という名を冠した建築物を分析する。本章でその対象となるのは、建築プロジェクト・ソヴィエト宮殿が公に登場する以前に計画され建設されることのなかった2つの宮殿型建築物（労働者宮殿、労働宮殿）、ソヴィエト宮殿とほぼ同時期に競技設計が行われ、建設された建築物（文化宮殿）である。

十月革命以降の宮殿型建築物は、それ以前のような「権力を表象する唯一の場」²⁰としての機能だけのものではなくなっていた。十月革命直後に生じた「感情の社会主義化に適した道具」、社会主義政権を支える階級が「政治力を行使し得るために必要な雰囲気や熱気を生み出すもの」²¹として新たな政権と時代を讃える記念碑的性質が建築にも求められ、宮殿型建築物もその1つとして考えられていた。ソヴィエト政権の正当性を唱える大型施設として様々な用途の建築物にその名称が用いられていく。

こうした記念碑性を宮殿型の建築物いかに反映させるか。本稿で取り上げる宮殿型建築物ではこの点に設計者達は苦慮し、新たな時代に即した表現手法を打ち出すべく多様な表現が試みられた。こうした多様性は、十月革命以降宮殿型建築物の多くで建築競技設計が催されたことと関連している。

建築競技設計は、全ての建築家に均等な機会を与え、実力と成果を競う場を与える。その結果、庇護を受けていた支配者層から建築家の自立を促したと建築史家の近江榮は述べている²²。さらに重要な点として新しい才能の発掘に寄与することが挙げられる。本稿で対象とするソヴィエト宮殿でも、4度にわたる建築競技設計で賞の選定が行われた2巡目において、入賞した建築家の中には無名または若手の建築家が含まれていた。

²⁰ Никифоровна Л.В. Дворец в истории русской художественной культуры. СПб., 2006. С. 46.

²¹ Rene Fuego Miller, *The Mind and Face of Bolshevism: An Examination of Cultural Life in Soviet Russia* (New York: Harper Torchbook, 1962), p. 89.

²² 近江榮『建築設計競技』鹿島出版会、1986年、14-15頁。

本稿で扱う他の宮殿型建築物の競技設計では次のような特徴が認められる：1. 受賞設計案の選定が行われたが建設されない（『労働者宮殿』、『労働宮殿』）、2. 指名建築家もしくは団体から設計案を募る（『労働者宮殿』、『文化宮殿』）が、競技設計不参加の建築家が実施設計を行い建設する（『文化宮殿』）。こうした点を考慮すると、ここで挙げた競技設計で建築家に均等な機会が与えられていたかどうかは疑わしい。L.ニキーフォロヴナが以下に指摘するとおり、ソ連の建築設計競技では対象建築物の理念をよりよいかたちで設計できるかという点に主眼が置かれていた：

一般建築物の設計は勝者や敗者が存在する競技として建造されたのではない、それは集団創作を組織した形式であって、職能的な建築家、広範な世論、学者、エンジニア、アマチュアの発明家、同胞、外国の建築家といった全てのものが協力したというかたちそのものであった。一方で、競技設計のねらいとは勝者を定めることではなく、よりよい理念を選ぶことであり、それを総合したものは新たな時代の芸術作品でなければならなかったのである²³。

つまり、宮殿型建築物は競技設計として「よりよい理念を選ぶ」ために行われたものであるが、同時に「よりよい理念」を建築物に反映させながらもソヴィエト体制の正当性を誇示するというものであった。ここから本章では宮殿という名のついた競技設計を当時の建築潮流として扱う。

本稿で扱う建築設計競技では設計案応募期間中に、建築プロジェクトの理念をより明快なかたちで提示するためとして、幾度かプログラムに変更が加えられているものがある。これは、国際建築設計競技では「公示の時点でその詳細はすべて言明されるべき」²⁴と国際連合教育文化機関（ユネスコ）が推奨する点と大きく異なっている。この競技設計方式が今日の標準とすれば、本稿が対象とする建築設計競技はこの標準から外れたものであり、組織者側の「気まぐれ」で競技設計の内容が大きく変わり得るといふ競技設計参加者と主催者の力関係を表象して

²³ Никифорова. Дворец в истории. С. 28.

²⁴ *International Competitions in Architecture and Town Planning: Preliminary Report compiled in accordance with the Provisions of Article 10. 1 of the Rules of Procedure Concerning Recommendations to Member States and International Conventions by the Terms of Article IV, Paragraph 4, of the Constitution* (Paris, 1971), p. 5. この報告書は1911年にローマで開催された第9回国際建築家会議で採択された建築設計競技に関する規約をまとめたものである。

いる。ソヴィエト宮殿競技設計の各巡回で変更点や条件が新たに加えられたことを鑑みると、こうしたことがそれまでには常態化していたと言える。

こうした状況で、競技設計に参加した建築家が立脚する建築手法、設計者が影響を受けたであろう当時の建築潮流が確認できる。一方で主催者が求めようとした「よりよい理念」というものが、さらなる競技設計の開催を経ることで浮かび上がってくる。こうしたことを念頭に置き 1920 年代から 30 年代に存在した建築潮流に留意しながら、本章では労働者宮殿、労働宮殿、そして文化宮殿という 3 つの宮殿型建築物における競技設計を扱い、それぞれで見られる特徴を分析する。

1-1. 労働者宮殿競技設計

労働者宮殿は 1919 年にペトログラードで計画され、「社会主義体制におけるプロレタリアートの生活」というイデオロギーを反映した建築物の複合体であった。社会生活、学問、芸術作品、余暇そしてスポーツといったものを組織することが課題として含まれ、当時の生活における文化的側面が重視されていた。こうした機能すべてを組み合わせたため、労働者宮殿は「過去に例を見ない」²⁵ 巨大な建築プロジェクトと位置付けられる。競技設計の募集要項は『コミュニンの芸術』紙に掲載され、その意義が強調された。

この建築競技設計が通達された時期は、ソヴィエト政権は未だ不安定な状態であった。1917 年の十月革命の後に人民委員会議を中心とした政権が樹立され、これに反対する勢力がソ連各地で反旗を翻すことになり、また社会主義政権樹立をよしとしない国家が反対勢力に直接もしくは間接援助を行い、ソ連国内は内乱状態に陥る。この状況で、新たに樹立された政権が打ち出す国家の方向性ならびに民衆の要望を反映したもの、そしてソヴィエト政権の正当性を大衆に訴えるといったタイプの建築物が急増する。

特に十月革命直後に計画された建築物の中で、その当時の芸術潮流における精神もしくは雰囲気を反映させているのは記念碑であった。当時設計された記念碑の多くは、あまりに「アマチュア的」で、長期に耐える素材でできてはおらず、

²⁵ Дворец рабочих // Искусство Коммуны. Петроград. 19. 01. 1919.

碑文がなければ何を表現しているのかわからないものが多かったという²⁶。そうしたモニュメントの中には、当時ペトログラードやモスクワを中心に勃興してきたカジミール・マレーヴィチを中心としたスプレマチズムや具象から離れ幾何学抽象を基に絵画の方向性を確立しつつあった構成主義のような特徴も見られる。

また政権側がプロパガンダとしておおいに奨励していたのが労働者クラブである。労働者クラブは「大衆プロパガンダと労働者階級の創造的能力を発展させる真の中心地となる」²⁷ため、その建造の指示が建築に関する当時の政府からの通達で多く言及されていると V.ハザノヴァは指摘している。彼女によれば労働者クラブのうちの1つに十月革命宮殿があり、その建築物には絵画ギャラリーや美術館、映画館、視聴覚ホール、劇場などが配備されており、その延長として労働者宮殿には民衆のための大学、美術もしくは音楽学校、図書館や食堂、スポーツ施設などが予定されていたという²⁸。このことから、労働者宮殿は大衆へ向けたプロパガンダとしてその効果を見込んでいた労働者クラブとしての要素も含んでいたことがわかる。

労働者宮殿の構成は、1. 3,000-4,000 人収容の大会議ないしは劇場ホール、2. 300 人ほどを収容する会議ホール、3. 学問と芸術用施設（2つに段階分けされた人民大学、すなわち芸術学校と音楽院）、4. 文化啓蒙のためのクラブ（学問部門と休暇部門）、5. 公共のレストランと食堂、6. スポーツ部門と民間娯楽、7. 従業員用住居施設、8. 受付、廊下、階段部に分割されていた。労働者宮殿の建設予定地は、ペトログラードの中心からやや離れたユジノプリモルスク公園の近く、ペテルゴフ街道の 47 番地に定められた。設計案提出の際に、設計者は建築物の全体設計案、各階平面図、設計案の全貌がわかる断面図と正面立面図の提出を求められている²⁹。

この競技設計の条件付記で、労働者宮殿のイメージは時代遅れのものであってはならないと指示されており、「内観と同様に外観においても労働者宮殿はその広さ、きらびやかさ、雰囲気によって驚きを与え、来場者に対して建築物の重々しさや重さを心理的に与えてはならない」³⁰とされている。このように、労働者

²⁶ Fueloep-Miller, *The Mind and Face of Bolshevism*, p. 91.

²⁷ Хазанова В.Э. Из истории советской архитектуры 1917-1925 гг. документы и материалы. М., 1963. С. 129.

²⁸ Там же, С. 130.

²⁹ Хазанова. Из истории советской архитектуры 1917-1925 гг. С. 154.

³⁰ Там же. С. 155.

宮殿は宮殿という名称から生み出されるかつてのイメージを拒否するなど、十月革命以前の建築とは異なる条件が強調されていた。だが「広さ、きらびやかさ、雰囲気」を要求している点からは、装飾や規模によって建築物の威厳を求めようとする組織者の意図も伺える。またこの建築競技設計は、「この地区で文化啓蒙の中心地を持つという労働者達の古くからある欲求」をかたちにしたものであり、労働者宮殿は「初めて暮らしの中から引き出された新しいもの、地区の啓蒙文化を具体化した典型的なものとして、未だ過去の歴史に類を見ないもの」となることが求められていた³¹。そのため、既に述べてきたような宮殿型建築物の特徴である、権力の源泉を直接的に誇示するという性質を上記の要求から読み取ることにはできない。むしろ本章の冒頭で記したような、労働者クラブと共通する点をこの競技設計プログラムの文言では確認できる。さらに労働者クラブとしての特徴を示唆するかのようには、この競技設計プログラムには次のような文面が綴られている。

ニコライ二世の人民の家—これは「パンとサーカス」という理念を具現化したものに過ぎず、またブルジョアのクラブ—これは単に絵画の戯れとレストランに過ぎない。労働者宮殿のスローガン—これはプロレタリアートの新しい健康的な生活を文化的に打ち立てることである³²。

旧来のいわゆる「クラブ」を想起させる建築物とは異なること、そして健康と文化を謳うことによって、宮殿という旧来のイメージとは異なるものをこの労働者宮殿に付与しようとしていることがこの文面ではさらに強調されている。旧来のものとして挙げられている「ニコライ二世の人民の家」と「ブルジョアのクラブ」は共に規模やその成り立ちは違えど文教と娯楽の施設である。特に具体的にその名が挙げられている「ニコライ二世の人民の家」とは、厳密には「ニコライ二世による大衆余暇のための施設」であり、禁酒運動の一環として大衆に対して飲酒に代わる娯楽を提供するための施設であった（図2）。

この施設はサンクト・ペテルブルクの中心に近いペトロパヴロフスク要塞の向かい側にあるアレクサンドロフスキ庭園内に建設され、1900年の12月に開園した。娯楽提供の場であったことから、ガラス状のキューポラ（丸天井）を冠し

³¹ Там же. С. 134.

³² Там же.

た正面入口となる中央の棟の両翼に演劇用ホールと野外行事用のホールが備わり、さらに 1912 年には当時世界最大規模のオペラ用ホールが増設されている。このように「ニコライ二世の人民の家」は、ソヴィエト政権が労働者宮殿で望まれていた大衆文化の啓蒙を体現した先駆けであった。十月革命後から 1932 年に火事による一部施設閉鎖までこの施設が利用されていた事実を踏まえると、その意義をある程度政府は理解していたと考えられる。労働者宮殿建築設計競技のプログラムでは「人民の家」を愚民政策の典型として挙げることで労働者宮殿への期待を高めていることがわかる。「人民の家」のように娯楽を享受するための施設ではなく、労働者宮殿には啓蒙活動としての教育やスポーツのための施設が含まれており、積極的に参加を促す娯楽施設が加えられている。こうした対比からも労働者宮殿が前時代の娯楽施設と一線を画すことが、競技設計プログラムの中では強調されていたのであった。

この競技設計の審査員は、教育人民委員 A.ルナチャルスキイ、ペテルゴフ地区ソヴィエトのメンバー 2 名、教育人民委員視覚芸術部門の代表者 2 名、競技設計に参加した設計者の中からの代表者 2 名、計 9 名で構成された。競技設計の結果、5 つの設計案が受賞対象となり、それぞれの設計者は賞に応じて賞金を受け取ることとなった（1 等-15,000 ルーブル、2 等-12,000 ルーブル、3 等-10,000 ルーブル、4 等-8,000 ルーブル、5 等-6,000 ルーブル）。ここで着目すべきはこの競技設計のプログラムには建築物の配置と建築様式に関する記載がないということである。事前に催された競技設計審議会に参加した建築家レフ・ルードネフは、基本的な要求を除いて、設計者に対してある程度自由な発想で設計させることを提案している³³。この提案が採択されたため、建築物の構成や施設に関しては競技設計に参加する建築家の裁量に委ねられたと考えられる。ロシア帝政末期に同じ都市に建設された大型文化施設である人民の家と一線を画すには、その内容さらには建築物の外見においても労働者宮殿はソヴィエト政権の肝いりとして耳目を集める必要があったはずだ。しかしこの人民の家が増設されてから間もないこともあり、それとは異なる新しさを労働者宮殿の外見で打ち出す必要があったのではないか。こうしたことを競技設計主催者側は建築家達に期待し、競技設計プログラムに関する「基本事項の指示にとどまる」という意見が出されたと考えてよいだろ

³³ Дворец рабочих. 19. 01. 1919.

う。しかし、プログラム公示の時点で競技設計主催者がその全体像を把握できないという点は、V.ハザノヴァの言葉を借りれば、この競技設計は建築物の外観を確認し、全く実現性を持たない「単なる理念の追求」³⁴であったと言える。

1919年の5月に労働者宮殿の競技設計の結果が公表され、1等を受賞したのはV.ドゥベネツキイによる設計案、2等賞案はS.セラフィーモフによる設計案、3等賞から5等賞は該当設計案なしとされた。当時の『芸術生活』紙によれば、この競技設計に加えて組織者側が参加者を指名する非公開の競技設計が組織されることが伝えられ、労働者宮殿の競技設計は2度にわたる競技設計となった。この非公開競技設計に参加することとなったのは2つ（モスクワとペトログラード）の建築設計事務所、競技設計での1等受賞者V.ドゥベネツキイ、そして「名声を博している5名の建築家（A.ベログルド、A.ベロボロドフ、I.フォミー、L.イリイン、V.ゲリフレイフ）」であった。「招聘された建築家達は1919年の12月までに設計案を仕上げ、その設計案のいくつかは競技設計終了後の時点で既に紙上にて発表することになって」³⁵いた。『芸術生活』紙に設計例として掲載されたのは、A.ベログルドとI.フォミーの設計案であった。I.イリインによれば、この2つの設計案は「当時の建築アンサンブル全体と調和していた」³⁶。I.イリインが望む「建築アンサンブル全体と調和」する建築物とは、労働者宮殿が建設される地区、または都市に既に建立されている建築物やその環境に配慮したものである。「新たな時代において、新しい要求を満たそうとする時、古いものを保とうとすることに慎重になればなるほど、また都市というものが評価を得れば得るほど、建設事業がより生産的なものとなる」³⁷。つまり労働者宮殿は、確かに新しい時代を象徴するものではあるが、都市全体として見た場合に建設予定地に根を下ろすような建築物として考案されなければならないとI.イリインは主張しているのである。

I.フォミーによる設計案（以下フォミー案：図3、4、5）は、神殿ないしは古代寺院を彷彿とさせる。正面ファサードではドーリス式オーダーが用いられており、スタイロバート（ギリシア建築で用いられた建築物の下にある階段状の

³⁴ *Хазанова В.Э. Советская архитектура первых лет октября 1917-1925 гг. М., 1970. С. 125.*

³⁵ *Рабочий дворец // Жизнь искусства. 28. 05. 1919.*

³⁶ *Ильин И.А. Будущий Петроград архитектурный облик // Красная нива. 1919. № 35. С. 20-21.*

³⁷ Там же.

基壇)とペディメント(切妻型屋根の下に位置する部分で三角状に囲まれた部分)があり、エンタブラチュア(屋根と柱の間に位置する水平材の部分)とペディメントには装飾が施されていない。平面図を見ると、半円型状の大ホールを伴った段状キューポラに覆われた建築物となっている。正面から見た場合、視覚的な奥行きが生じており、労働者宮殿の主要棟は隣接する他の棟よりも大きな印象を与えている。正面入口前の広場を取り囲む棟の側面ファサードには、ペリスタイル(列柱郭:ギリシア・ローマ建築で用いられた中庭を取り囲む列柱)が取り入れられ、建築物全体にモニュメント性が強調されている。

I.フォミーンの設計案で用いられた手法は労働者宮殿設計案以降、例えば彼が設計した『建築家A.ヴォロネーヒンの記念碑』(1920)、『革命モニュメント』(1921)(図6)、ドンバスの『同志アルチョームの記念碑』(1921)(図7)や『共同墓地の記念碑』(1923)(図8)といった作品でも見られる。こうしたモニュメント性を強調した彼の手法は、「労働者宮殿は来場者に対して建築物の重々しさや重さを心理的に与えてはならない」とする競技設計プログラムの要求と相反した新古典主義のスタイルとして見なすことができる。

フォミーン案と比較してA.ベログルドの設計案(以下ベログルド(a)案:図9、10、11)では中世ヨーロッパで建造された城郭のような外観が用いられている。建築物の形態は上部から見ると馬蹄型だが、その中心に配置された大ホールは半円形で迫り出しており、正面から見た場合に大ホールの棟を中心に形成されているように見える。この建築物の背面には庭と公園が配置され、それらと対面するかたちで運動場が設置されている。主要棟となる大ホール脇に配置された棟には小さな正方形の窓が規則的に配置されている。建築物背面の半円形部分は3層から成り、上階のファサードは外光の入らない壁のような形を取り、コーニス下部にある射撃孔のような形をした窓と隣接している。この窓は2層目では水平状に配置されている。こうした城塞型の構造は主要棟に隣接する棟にも用いられている。ベログルド(a)案でも、フォミーン案と同じく、装飾的な要素はあまり用いられておらず、建築物の外観は簡素化されている。「労働者の城塞」と標題が付けられたように、ベログルド(a)案は堅牢な城塞をイメージさせるものとなっている。一方でフォミーン案で見られた神殿型のスタイルから生じる重厚感とは異なり、ベログルド(a)案では防禦施設が備える安定感、力強さといった

ものが表現されている。I.フォミーンによれば、ベログルド (a) 案は「何も差し引く必要のない最終的な建築形態であり、建築物のマッサが厳密なかたちで裏返しにされて配置されており、簡潔であるもののそれと同時に華やかな建築物の形態はその力強さ、雄々しさ、そして美しさによって息を吹き返している」³⁸。

A.ベログルドはモニュメンタリティを追求する上でペトログラードの中心的建築物であったカザン大聖堂のような、大きな前庭を構える馬蹄型の形状を用いた。だがこのような手法は労働者宮殿競技設計まで宮殿型の建築物に対して用いられることがなかったために、彼が設計した労働者宮殿はペトログラードの風景を考慮したものとは言い難かった。この点は当時の建築景観において「建築の斑模様を与えつつある新たな建築は全体の建築的調和を理解することに努めるべきである」³⁹とする I.イリインの言葉によって裏付けることができよう。つまり、この建築物の外観と周囲の建築物との調和を保つ新たな建築モニュメントが求められている。

独自のスタイルを用いるという傾向は労働者宮殿の競技設計のみならず、モスクワの火葬場 (1919)、ペトログラードの火葬場 (1919) (図 12) 等の十月革命直後のいくつかの建築設計においてもあらわれている。こうした建築物の中に形を変えた列柱、スタイロバード、石の台座、アーケードといった新古典主義のモチーフを確認することができるが、同時に華やかさや装飾性といったものを忌避するようなキュビズムの影響もしくは立体的なコンポジションが多く見受けられる。労働者宮殿の競技設計でも革命直後の雰囲気や反映することが求められ、I.フォミーンや A.ベログルドは歴史主義建築を基にしながらその理念の表現を模索しようとしていた。しかし競技設計プログラムからその内実は大型の文化施設であり、帝政時代の「人民の家」または産業革命時代に登場した余暇のための施設 (パブリックハウス) のような「パンとサーカス」とは異なるプロレタリアート教化のための施設という点が強調されていた。その中で、革命の高揚感もしくはシンボル性を強調した記念碑のようなタイプ (フォミーン案) と競技設計プログラムが要求する施設を 1 つの建築コンプレックスとして象徴する宮殿型建築物として表現されている。

³⁸ Степанов В.В. А.Е. Белогруд. Ленинград. 1939. С. 6.

³⁹ Ильин. Будущий Петроград. С. 20-21.

このことが意味するのは、公共建築物とはいえ宮殿型建築物に各種施設を取り入れようとする総合的な性質と記念碑的な性質を反映させるという傾向が建築家達の中から現れ始めたということである。元来宮殿型建築物は社会構造の頂点に立つ権力を表象し、また君主がその権力を行使して治世を執る朝廷のような空間であった。労働者や農民といった大衆の代表であるボリシェヴィキが権力を握ると、その正当性を誇示すべく建築モニュメントやそれに準じる記念碑、大衆教化のための文化施設が優先されたということはこの労働者宮殿は示すこととなった。記念碑と文化施設という互いに異なる建築物のタイプとして考えられていたものが、入り交じったかたちでこの労働者宮殿の競技設計に登場してきたのである。このようなかたちが競技設計に組み込まれるのは後に登場するソヴィエト宮殿においてであり、そこでは異なるタイプが混合する建築物として様々な手法が試みられるのである。

1-2. 労働宮殿競技設計（1922-23年、モスクワ）

労働宮殿はその競技設計の通達で、「現存する同種の建築物の中でも、世界で最も巨大な建築物のうちの1つとなる」⁴⁰ことを目的に計画された。だが、批判対象もしくは基とする建築物が競技設計のプログラム及びその通達では挙げられていない。漠然と「巨大な建築物」を目指し、またそのイメージとして「宮殿」という名称が労働宮殿に用いられたという印象が強い。宮殿という名称が用いられ、モスクワの中心地に構想された巨大建築物という観点から、ソヴィエト宮殿に先行する大型建築設計競技であったとアメリカの建築史家ピーター・リズンは指摘する⁴¹。1922年に開催された第1回全連邦ソヴィエト大会では「労働者の代表者達が会合できるモニュメント」の建設、この建設に共産党「中央委員会がなるべくはやく着手する」こと、「その建築物つまり宮殿がソヴィエト連邦の首都に建立されるべき」⁴²とする発言がなされている。この発言が対象としているのは労働宮殿とも言えるが、厳密なつながりはない。むしろP.リズンの指摘のように、この時期に既にソヴィエト宮殿のような大型建築競技設計が発案されていた

⁴⁰ Конкурс на проекты Дворца труда // Коммунальное хозяйство. 01.10. 1922. С. 24.

⁴¹ Lizon, *The Palace of Soviets*, pp. 66-68.

⁴² Ibid.

証左に過ぎない。ロシアの建築史家イーゴリ・カズシは1922年10月の十月革命五周年に関連してモスクワで開催された第4回コミンテルン会議、第2回国際労働組合会議、さらには過去5年間を振り返る建築展覧会などと連動してこの競技設計が開催されたことを指摘している⁴³。このことを考慮するならば、1つの時代の区切りとしてそれまでとは異なる建築物でありながらも、十月革命の記念碑的建築物として労働宮殿が企画されたとも言える。ただし、この点は労働宮殿競技設計通達の中では触れられていない。

労働宮殿は8,000人収容の講堂、300人用の舞台、発言者用の演壇と議事録速記者用の場所が備わった幹部会室、75人収容の幹部会会議室、受付、電信室、休憩所、オフィス、労農赤軍代表者のための施設（2,500人収容の会議ホール、受付、100人収容のソヴィエト大会幹部会会議室、アーカイヴ用オフィス、電信室、電話、休息所、洗面所）、小ホール（1,000人収容用と500人収容用の2つ）、ロシア共産党モスクワ委員会用の施設（2,500人収容の委員会会議室、受付、オフィス、休息所、洗面所）、博物館（展示ホール、図書館、日直者用の部屋、洗面所）、食堂（簡易食堂を伴う食堂ホール、炊事場、受付、洗面所）、管理・管轄部門（管理人用部屋、管理室、従業員用部屋）といった構成からなる様々な設備を備えた建築物として提案された⁴⁴。労働者宮殿の競技設計と比較して、労働宮殿の競技設計プログラムでは建築物の施設と設備に関する要求がより具体的に指示されている。この競技設計のプログラムに従えば、競技設計参加者は全体見計画図（1:1250）、建築物各階平面図（1:200）、正面立面図（1:1000）、ファサードと講堂断面図をまとめたもの、建築物の面積と容積を記した説明仕様書などの提出が義務付けられていた⁴⁵。またこうした設計資料は標題と共に提出され、建築物の意義と総面積を各設計図に記すことも義務付けられ、設計案の提出期限は1923年2月5日までとされた⁴⁶。この競技設計は、1922年10月1日付『公共事業』誌で発表されており、同年10月15日付同紙では「モスクワ建築協会（MAO）は10月1日付会議において労働宮殿の競技設計の条件を策定する特別委員会の

⁴³ Казусь И.А. Всероссийский конкурс на проект Дворца труда в Москве (1922-1923) // Архитектура в истории русской культуры вып.3 Желанное и действительное. / Под ред. И.А. Бондаренко. М., 2001. С. 251

⁴⁴ РГАЛИ (Российский Государственный Архив Литературы и Искусства), ф. 1981, оп. 1, д. 158, л. 57-58 об.

⁴⁵ РГАЛИ, ф. 1981. оп. 1, д. 158, л. 59.

⁴⁶ Там же.

選定を行った」と発表している⁴⁷。この点に加えて、「この委員会に 8 名が選抜され、そのうちの 4 名はアカデミー会員、2 名は建築家、2 名はエンジニアである」⁴⁸と伝えている。労働宮殿競技設計はモスクワ市ソヴィエトが主導してその建設が計画されたが、実質的にその競技設計を取り仕切ったのは MAO であった。選定委員会の審査対象となったのは 50 の設計案であり、そのうち 7 案のみが賞を授与された。審査委員長は建築家の A.シチューセフが務めている⁴⁹。労働宮殿の競技設計は労働者宮殿の競技設計よりも設計期間が 1 ヶ月長かったので、競技設計参加者は、より時間をかけて設計案に取り組むことが可能となった。労働宮殿競技設計の結果に応じて、労働者宮殿の競技設計と同じく、賞金が授与されることとなった。だが、賞の額面は労働者宮殿の競技設計と比べて減少している（1 等-2,000 ルーブル、2 等-1,500 ルーブル、3 等-1,000 ルーブル、4 等-800 ルーブル、残りの 3 つの賞-それぞれ 500 ルーブル）⁵⁰。

この巨大な建築物は現在のホテル・モスクワのある地点、つまりチアトラリナヤ広場、アホートヌィ・リヤード、革命広場の間に建設が予定された。労働宮殿は「ソ連の首都の最も美しくよりよい広場に建設され」、労働者と農民に必要なもの全てがある場所となることが期待されていた⁵¹。また「過去の何かしら特別な建築様式を除いた簡潔で今日的な形態」⁵²によって表現されることが競技設計の通達で求められていた。一方で、この宮殿の建設予定地はボリショイ劇場、マールイ劇場、アレクサンドロフスキイ庭園、歴史博物館といった歴史的な建築記念碑が位置する場所であり、この建築物は「隣接する広場と通り、主にチアトラリナヤ広場と劇場」⁵³と調和する必要があった。審査員であった建築家 I.ジョルトフスキイは都市景観を保ちながらも、新しいスタイルと歴史的な建築様式のバランスが重要であることを強調した。そのため、都市景観上の調和という点も競技設計に提出された設計案の評価対象となったのである。

⁴⁷ Конкурс на проекты Дворца труда. С. 21.

⁴⁸ Там же.

⁴⁹ РГАЛИ, ф. 1981, оп. 1, д. 158, л. 59 об. この委員会は K.ロゴフ (労働者農民赤軍兵士代表モスクワ市ソヴィエト)、I.ジョルトフスキイ (アカデミー会員、建築家)、ロマン・クレイン (アカデミー会員、建築家)、Ya.ズビャギンスキイ (エンジニア)、イヴァン・マンコフ (建築家)、V.セミョーノフ (土木技師)、D.スホフ (建築家) から成る。

⁵⁰ РГАЛИ, ф. 1981, оп. 1, д. 158, л. 59.

⁵¹ Киров С.М. Избранные статьи. 1912-1934 г. М., 1957. С. 150-152.

⁵² РГАЛИ, ф. 1981, оп. 1, д. 158, л. 57.

⁵³ Там же.

競技設計に提出された設計案は主に 1. 歴史主義建築に立脚し、細部の装飾を簡素化したもの（N.トロツキイ、A.ベログルド）、2. 簡素化を目指したものの革命的高揚感を表現するような誇大かつ躍動感がありシンボリックな形態を用いたもの（I.ゴロソフ、K.メーリニコフ、G.リュードヴィグ）、3. 建築物の構造と素材の表現に焦点をあて、装飾を排除したもの（ヴェスニン兄弟）といった3つの傾向に分類することができよう。これらの特徴に共通するのは、様式の違いを問わず、装飾の詳細が簡素化されている点である。こうした点が受賞作品に認められるということは、新たな建築潮流として審査員にとって受け入れざるを得なくなっていたことがわかる。

労働宮殿競技設計の結果、N.トロツキイの設計案（以下トロツキイ案：図13、14、15、16）が1等案として選出された。彼の設計案に特徴的なのは、柱頭のない二連式の列柱が用いられ、無装飾のファサード、工業に関連したモチーフを使用したシンボル（二連式の柱の間にあるスイッチのようなモチーフ、ネジをかたどったようなガラスの半円形屋根等）からなる構成である。建築物の中心には楕円形の大ホールが置かれ、その周りには様々な施設が配置されている。大ホールの脇には小ホールとモスクワ市ソヴィエトのためのホールが配置され、全体の平面形態は台形で、大ホールの中心軸に沿って対称的になっている。同じような意匠は大ホールのインテリアに複雑なかたちで反映されている。ボックス観客席は、ランプもしくは街灯のような形をしたシリンダー状となっており、ホール階段の低層部にはネジのような装飾が施されている。これと同じような装飾的要素は建築物の低層部で用いられている。

このトロツキイ案に比べて、A.ベログルドの設計案（以下ベログルド(b)案：図17、18、19、20）はペトログラードでの労働者宮殿競技設計の設計案（ベログルド(a)案）をある程度踏襲したものとなっている。例えば、正面ファサードに配置された射撃孔のかたちをした小窓はベログルド(a)案で建築物両脇に配置されたものと同じである。しかし、彼は労働宮殿の設計案ではより簡素化した形態を用いている。建築物中央には上部から見て扇型の棟を配置し、この棟に他の棟を隣接させている。主要棟に扇型ないしは半円形を用いるといった手法は、この労働宮殿競技設計後多くのレニングラードの建築家によって用いられることとなる。

工業製品をシンボライズしたモチーフに関して言えば、I.ゴロソフの設計案（以下ゴロソフ（a）案：図 21）も注目に値しよう。彼の設計案は 5 等を受賞した。この設計案で工業製品のようなものをモチーフとしている部分は、大ホールの屋根、小ホールの屋根に用いられているギアーのような形態である。またこの他にも、それと同調するモチーフが繰り返されており、建物全体が機械のモーターを彷彿とさせる。S.O.ハン=マゴメドフの分析によれば、I.ゴロソフの最終設計案に至るまでの初期段階の設計案では何度かそれぞれの棟の配置が変更されており⁵⁴、建築物の外見だけではなく、配置によってもその躍動感を表現している I.ゴロソフは建築物の外見のインパクトと建築物の配置によって、「特別な建築様式を用いずに」、「今日的な形態」を提示しようとしたのである。

G.リュードヴィグの設計案（以下リュードヴィグ（a）案：図 22、23）におけるスパイラル状の塔の使用、無装飾のマスを密集させた手法などの点は、一見するとゴロソフ（a）案と相似している。しかしリュードヴィグ（a）案では、「建築物に飛行機のための空間を設置してもよい」⁵⁵というプログラムに着目し、建築物の上部に巨大なクレーンが設置され、小型飛行機（今日のセスナ機）のための格納庫、ラジオ受信用のアンテナが設置されている。G.リュードヴィグはこの設計案を作成するにあたり機能的側面を強調したと言われており⁵⁶、リュードヴィグ（a）案では実用性が前面に打ち出されている。

労働宮殿競技設計における受賞設計案の中でもヴェスニン兄弟による設計案（以下ヴェスニン兄弟（a）案：図 24、25、26）はソヴィエト建築史上重要な意義を持ったプロジェクトであった。A.シチューセフの回想によれば、審査員であった I.ジョルトフスキイはヴェスニン兄弟（a）案を授賞に値せず、ソヴィエト建築において「誤った方向」を示すものとして、彼らの設計案に激しく非難を加えたと同じく審査員であった A.シチューセフは回想している⁵⁷。ヴェスニン兄弟（a）案は完全に装飾を取り除いた建築物のファサードに特徴があり、かつ、競技設計のプログラムでは石造が好ましいとされているにもかかわらず、ヴェスニン兄弟（a）案では構造駆体の仕様を鉄筋コンクリートとしており、審査員が重視していた建築様式

⁵⁴ Хан-Магомедов С.О. Илья Голосов. М., 1988. С. 96-101.

⁵⁵ РГАЛИ, ф. 1981, оп. 1, д. 158, л. 59.

⁵⁶ Хан-Магомедов С.О. Генрих Людвиг. М., 2007. С. 28-29.

⁵⁷ Творческая дискуссия // Архитектура СССР. 1934. № 6. С. 14.

にとらわれることなく、当時の産業化ないしは工業化という時代精神を直に表現しようとしたと考えられる。またこの設計案では「電光報道（ネオンサインを意味すると考えられる：著者註）のための枠」や「建物上部に広告を放送するための機構の設置」⁵⁸といったプログラム上の要求も同時に考慮に入れている。トロツキイ案とは異なり、この設計案におけるヴェスニン兄弟の意図は建築物の構成や装飾的要素を用いずにマスを強調したモニュメンタリティを表現することであった。この設計案は、異なる分野で活動していたヴェスニン兄弟の3人それぞれの経験（レオニード：都市計画、ヴィクトル：工場の建造、アレクサンドル：アヴァンギャルド系の劇場ステージデザイン）が1つの設計案に集約されたものと言えるであろう。競技設計プログラムに沿えば労働宮殿プロジェクトは過去の建築様式に頼らず策定されなければならなかったが、審査員にとって新しさを軸に据えたヴェスニン兄弟(a)案を受け容れることは困難であった。この競技設計をきっかけに当時のソヴィエト建築界で、再びA.シチューセフの回想を引用すれば、「漠然とした理念を具体的にし、かつ建築家達の声の中で揺れている抽象的な考えを具現化することが始まった」⁵⁹のであった。

労働宮殿競技設計では、労働者宮殿と比べて歴史主義的な建築様式に頼らない設計案が登場してきたのである。一方で歴史主義建築を簡素化したような設計案もいくつか認められ、この競技設計で劇的に建築の流れが変化したわけではない。こうした中で新たな建築潮流を率い、歴史主義建築からの脱却を試みていた建築家団体ASNOVA(新建築家協会)は、労働宮殿の競技設計への参加を拒んだ。当時ASNOVAは「唯一の革命的な建築組織団体であり、時代を先取りした多くの若い建築家達を抱え、後に新たな建築に関する問題で差異が生じた際にASNOVAを離れてOSA(ソヴィエト建築家協会⁶⁰)の中核を担うことになるグループも含まれていた」⁶¹。このグループの参加者達は、競技設計の主催者であるMAOは当時の建築潮流を議論するのに適さないと考えていた。構成主義の登場は、若い建築

⁵⁸ РГАЛИ, ф. 1981, оп. 1, д. 158, л. 59.

⁵⁹ Афанасьев К.Н. А.В. Щусев. М., 1978. С. 81.

⁶⁰ ASNOVAとOSAは共にソ連における近代主義建築の先駆けとして見なすことができ、前者は合理主義建築、後者は構成主義建築として特徴付けられている。本文にあるように、この当時ASNOVAはMAOに反発するかたちで自らの建築潮流を形成していたが、1930年にはMAOに吸収され、その所属団体となる。またOSAのメンバーであるN.クラシニコフ、M.バルシチ、M.シニャフスキー、L.コマロヴァはOSAに加入する前はASNOVAのメンバーであった。

⁶¹ Петров В. АСНОВА за 8 лет // Советская Архитектура. 1931. № 1-2. С. 49.

家達の間で新しい建築の流れとして、ヴェスニン兄弟(a)案によって現実味を帯びたものとなり、またこの設計案は新しい建築理念のマニフェストとして受け入れられ、OSAの活動規範に据えられることとなった⁶²。しかし労働宮殿競技設計と同じように大規模かつ多くの建築家が参加する競技設計を彼らが先導して行くのはさらに後のことである。

労働宮殿の競技設計においてその名称として用いられた「宮殿」に込められたイメージとは、首都にそびえ立つ威容を備えながらも「簡潔で今日的な形態」であった。このイメージに応えるかたちで、この時代に相応しい産業や工業をモチーフが表現形態に取り入れられた設計案が登場してきたのである。かつての宮殿型建築物は「権力を表象する唯一の場」という特徴を有し、その「権力」とは時代を牽引する政治体制である。だが、労働宮殿に提出された設計案の多くでは、そうした政治体制を表象するようなものが用いられていない。労働者宮殿では十月革命というボリシェヴィキが成し遂げたいわば過去の偉業を刻印するというモニュメント性が強調されていたが、労働宮殿では産業や工業を基盤とした社会主義国家を構築するという当時の雰囲気もしくは社会の方向性が表象されたのであった。

1-3. 文化宮殿競技設計とその実現

労働宮殿の建築競技設計で見られた新たな潮流は1920年代のソヴィエト建築において隆盛を極めることになるが、この流れが強く反映されたのは1930-31年にモスクワで行われた文化宮殿建築競技設計である。文化宮殿の建設予定地はモスクワのプロレタリア地区にあるシモノフ修道院の場所とされた⁶³。この競技設計が企画される段階でソヴィエト政権によって既にシモノフ修道院の一部は撤去されており、工場を中心とした地区の再編が行われていた。そのため、この修道院を新しいソヴィエト政権下のシンボルに置き換える示威的行動として休日返上の撤去作業が「教育的意義の1つ」⁶⁴と宣伝されていた。この点は今まで取り上げてきた宮殿型建築物とはやや異なる。上記2つの宮殿型建築物のコンペでは、

⁶² Хигер Р. Общество современных архитекторов - ОСА // Советская Архитектура. 1969. № 18. С. 14.

⁶³ Хазанова В.Э. Из истории советской архитектуры 1926-1932 гг. М., 1984. С. 77.

⁶⁴ Астафьева-Другач и Волчок. О конкурсе на Дворец Советов. С. 227.

建設予定地は指定されたものの、実際にそれらの建築物を建てるために以前の建築物を撤去するまでには至らなかったが、この事業では、14世紀に建造されたシモノフ修道院の撤去作業がプロパガンダの材料として喧伝されていた。由緒ある建築物を破壊することはロシア正教に対する挑戦であり、この方針は後のソヴィエト宮殿建築競技設計にも引き継がれていく。

文化宮殿はその名前からして宮殿型建築物の建築競技設計であるが、この場合は1920年代末頃から増加する労働者の娯楽ないしは休養施設としての労働者クラブや「文化の家」の系譜に連なる。この系列は、労働宮殿競技設計以降の1920年代半ばから増加する。本稿で扱ってきた宮殿型建築物や国家的なプロジェクトであるソヴィエト宮殿とも、全く規模の異なるものである。しかし、ソヴィエト宮殿の競技設計案の多くで取り入れられた手法が、この文化宮殿競技設計においても見られるのでここで扱うこととした。

労働者クラブないし「文化の家」は1929-32年の間でソ連国内では約480、モスクワ州においては約66棟建設された⁶⁵。住宅を除く公共建築物の中でもこの数は多く、単に娯楽・休養施設としてのみならずシンボリックな意味合いを含んでいた。競技設計の規定には、文化宮殿は「プロレタリア地区の鉄鋼労働者にサービスを提供すること」⁶⁶が目的とされている。この地区は自動車工場を中心として居住区が形成されたことによりモスクワの中でも主要工業地区の1つとなっていた。労働者の家族を含めたこの地区の居住者数を150,000人と見積もっていることから、その居住者数に見あった文化施設の建設が求められていたと考えられる。文化宮殿の施設は主に5,000人収容の大型視聴覚ホール、1,000人収容の映画館、図書館やクラブホール、休憩室などからなる施設、子供用の施設、スポーツ用の広場、学術研究用施設、食堂などから構成されている。この収容数はこの頃までに建造された文化施設ないしは他の都市における文化宮殿と比較しても大規模なものである。例えば、1925-27年に建設されたレニングラードのゴーリキイ記念文化宮殿ではプロレタリア地区文化宮殿の視聴覚ホールにあたる劇場コンサート

⁶⁵ Корнфельд Я.А. История советской архитектуры 1917-1958. М., 1962. С. 74.

⁶⁶ Хазанова. Из истории советской архитектуры 1926-1932 гг. С. 77. 例えば、観客が演者の技術のみに集中できるよう、幻想やトリックを生み出す舞台設備や機械装置を取り払うべきとする意見も生じていた。一方で伝統的なモスクワ芸術座やマールィ劇場などでは、舞台設備や装置を積極的に取り入れた演出が引き継がれていたため、装飾的な舞台空間が完全に否定されていたわけではない。詳細は Луначарский А. Современный театр и революционная драматургия // На посту. 1925. № 1. С. 121-130.を参照。

ホールの収容数は1,900である。この収容数は文化宮殿と同系統の労働者クラブ、例えば同じくモスクワの別の職住地区に建造された「鎌と槌」工場附属クラブ（1929年建設）における1,000人収容視聴覚ホールと比べても多い。もちろん労働者クラブと文化宮殿は同系列ではあるが、工場ないしはある施設に付属するものと単体であるという違いや、その建築物の敷地面積や立地条件が異なってくるため、一概には比較できない。だが、一般に文化宮殿は労働者クラブよりも規模が大きく、その中でもこのプロレタリア地区の文化宮殿は大規模なものであったと言える。

競技設計の規定では、特にこの中で視聴覚ホールに関して多くの説明が割かれている。視聴覚ホールは劇や映画の上演、コンサート、集会といった様々な用途に応じることができるように舞台空間と客席を区切る可動式のプロセニウム・アーチ（額縁舞台）の設置が求められている。ただし、飽くまで競技設計主催者側の希望と留意しながらも、そうした可変式の舞台とそれに応じた客席をこのホールで構築することは「ここ10年の俳優ないしは演出技術の革新」を考慮に入れた結果であるとしている⁶⁷。演劇界での新たな潮流を反映した施設としての新しさが要求されており、これまでの宮殿型建築物とはこの点でも異なっている。建築物内に設置される機器ないしは室内空間についての指示はこれまでの宮殿型建築物競技設計でも見られたが、そうした競技設計で舞台芸術と関連した要求はあまりなかった。そのため、今までの宮殿型建築物競技設計では設計者がある程度自由に設計することが可能であり、そうしたことが提出された設計案の中で建築スタイルの多様性を生み出すに至った。しかしながらこのプロレタリア地区の文化宮殿競技設計においては舞台装置との関連で新しさが求められ、設計者達はそうした指示ないしは要求に応じることが求められた。主催者側から指名された設計者のほとんどは建築グループないしは建築関連の学術機関であり、その半分が当時構成主義ないしは近代主義建築の流れの影響を受けたグループであった⁶⁸。

⁶⁷ Там же. С. 80.

⁶⁸ 選定されたグループは 1. MAO (モスクワ建築家協会: Московское Архитектурное Общество), 2. OSA (現代建築家協会: Общество Современных Архитекторов), 3. VOPRA (全連邦プロレタリア建築家協会: Всесоюзное Общество Пролетарских Архитекторов), 4. VOGI (全連邦土木技師協会: Всесоюзное Общество Гражданских Инженеров), 5. ASNOVA, 6. LOA (レニングラード建築家協会: Ленинградское Общество Архитекторов), 7. LOA (レニングラード建築家・芸術家協会: Ленинградское общество архитекторов-художников), 8. MVTU (モスクワ工芸高等学校建築学部: Архитектурный факультет Московского Высшего Технического Училища), 9. VChUTEIN (M) (モスクワ高等芸術工芸研究所建築学部:

この競技設計プログラムは1930年3月14日に発表され、指名された設計者は同年6月20日に設計案の提出が義務付けられ、全ロシア金属労働者組合が組織した委員会が審査にあたった。今まで見てきたような宮殿型建築物競技設計とほぼ同じ設計期間である。また提出された設計案の中から選抜された設計者が次なる段階の作業と最終設計を担当することができると明記されている⁶⁹。つまり、この競技設計においてある設計者がたとえ勝利したとしても、審査員の判断によって競技設計の2巡目が行われるかもしくは最終設計の段階で勝利案が変更されるという可能性を含んでいる。こうしたことは、ソ連における建築設計競技では既に常態化していたと考えられ、後のソヴィエト宮殿競技設計においても生じている。事実、この競技設計は2度行われ、2巡目においても勝利案は確定されず、最終的にはヴェスニン兄弟に設計が委ねられ、彼らの設計によって文化宮殿が建造されることとなる。

OSAの代表として設計案を提出したのはI.レオニードフである(以下レオニードフ案: 図27)。彼の設計案では文化宮殿を大規模な1つの建築物とするのではなく、いくつかの複合施設が配置された1つの地区というコンセプトが強く打ち出されている。「文化宮殿に訪れるという観点から自発性を高めるための明確な有機性」⁷⁰を文化宮殿に反映させるため、学術研究部門の棟、視聴覚ホールを含むデモンストレーション用のセクション、スポーツ用のセクションに分断されている。I.レオニードフは敷地条件を無視しているため、正確な配置関係を把握できないが、建設予定地の中心に半球形の屋根に覆われたデモンストレーション用ホールと映画用ホールを配置している。これらのホールは等間隔でホールへの入り口が配置されているため、いずれの方向からも入場できるようになっている。全体配置図左側に配置されているのは直方体の形態を取り、ファサードにガラスが用いられた学術研究棟である。1階部分のみがポルチコのように突き出してい

Архитектурный факультет Московского высшего художественного технического института), 10. VKhUTEIN (L) (レニングラード高等芸術工芸研究所建築学部: Архитектурный факультет Ленинградского высшего художественного технического института), 11. LIGI (レニングラード土木技師大学建築学部: Архитектурный факультет Ленинградского Институт Гражданских Инженеров)の11であり、その多くは主に若手の建築家から成るグループである。当時の状況を考慮すると、若手の建築家グループが構成主義や近代主義建築からの影響を強く受けていることから、主催者側は労働宮殿協議設計のようにいわゆる「新しい建築」に対して批判的ではなかったということがわかる。

⁶⁹ Хазанова. Из истории советской архитектуры 1926-1932 гг. С. 81-82.

⁷⁰ Там же. С. 85.

るがファサードにはオーダーや歴史主義建築で用いられるような装飾や構成は一切用いられていない。

このレオニードフ案に近いのは VKhUTEIN(M) (アレクサンドロフ、ボグダーノフ、クズネツォフ、クジミン、マクシモフ、サマーリン) の設計案 (以下 VKhUTEIN(M)案: 図 28) である。彼らの設計案でも円形状のホール、水平状に伸びる直方体の棟、スタジアムをかたどったようなスポーツ用グラウンドが配置されている。レオニードフ案と異なるのは、それぞれの棟及び施設が隣接するかたちで配置されており、建築物の高さが抑えられた陸屋根になっている点である。この高さを抑えたホールと対置するかたちで建設予定地の南側には高層ビルのような学術研究棟が配置されている。各階の断面図から、この棟の 1 階と 2 階は水平状に広がっており、全体配置図を見ると、この棟は円形状のセクションで囲まれ、各施設を区画ごとに仕切る手法が見られる。一方、建設予定地の北側にはスタジアム型のグラウンドがあり、東側の緩やかな丘に水平状の棟が配置され、丘のふもとにも横長のスポーツ用グラウンドが配置されている。レオニードフ案のように文化宮殿のメインとなるホールを独立させ、区画ごとに各棟ないしは施設を含む配置させている。しかし、建設予定地の丘に棟を配置し、また学術研究棟の高さを強調するためホールの屋根部を抑えることによって各々の施設のつながりや一体感が表現されている。

同じく建設予定地にある丘を利用して文化宮殿を設計しているのは VKhUTEIN (L) (V.カリーニン、P.ロガイロフ、P.シュミット) の設計案 (以下 VKhUTEIN (L)案: 図 29) である。丘のふもとにスポーツ用グラウンドを配置し、丘に水平状の棟を配置する手法は VKhUTEIN(M)案と同じである。しかしこの水平状の棟にホールなどを含む主要施設を配置しており、ホールは円形で形成されており水平状の棟から東側にやや突き出た形を取っている。この棟から東側に配置された学術研究棟やふもとに配置されたグラウンドに空中通路が架けられていることから、この丘に配置された棟が文化宮殿の中心となっていることがわかる。またグラウンドの他に建設予定地の南東部は広場となっており、中央部分の棟の脇からこの広場を歩いてふもとのグラウンドへ降りられるよう階段がある。そのため、区画ごとに施設を区切るレオニードフ案や VKhUTEIN(M)案と異なり、1

つの棟を中心としながらもより統合的な施設としてグラウンドと広場の配置が考慮されている。

次は LIGI の設計案（以下 LIGI 案: 図 30）である。この設計案の特徴は競技設計の規定通りに大規模な建築物で劇場ホールを中心に据えて棟を構成し、その棟の脇に連結した別棟を配置している点である。劇場ホールを含む棟は直方体で、棟の中央に配置されたホールの観客席は扇型に広がり、この形状に合わせるかたちでホールの外の廊下が直方体の形態から弧を描いたようなかたちとなり、この棟のファサードのアクセントとなっている。建設予定地の東側には小規模の劇場ホール、扇型の形態を取る映画観賞用ホール、この棟と対置して水平状に伸びる形でクラブ棟がある。この3つの棟はそれぞれ独立しているが2階部分に中央の劇場ホールへの通路によって、劇場ホールの棟の前方（建設予定地の北側）に入り口前広場が形成されている。またグラウンドを含むスポーツコンプレックスは丘のふもとにあり、文化娯楽とスポーツ施設を分けた配置もこの設計案の特徴である。

同じように扇型に広がりを持つホールを設計して、規模を大きくしたものが ASNOVA の設計案（以下 ASNOVA (a) 案: 図 31）である。劇場ホールの棟は建設予定地の南東部に配置され、屋根はドーム型である。劇場ホールの観客席は段状に1階席と2階席に分かれて配置され、観客席部分が講堂として利用できるようにホール部分と観客席の間には可動式の仕切りがある。舞台空間は広めに確保され、舞台のみならずマス・デモンストレーションが行えるような広さで、この舞台空間から直接外部へと連結し「デモンストレーションや行進で通行できる」⁷¹ような構成である。そのため、このホールの正面は広場が形成され、このホール脇を通過して丘のふもとへ通過するための通路と北側にあるグラウンドへ向かうための通路が設置されている。また他の施設は劇場ホールから離れた場所に配置され、デモンストレーションの動線が広く取られているのが特徴である。

この ASNOVA (a) 案と大きく異なるのが ARU⁷²の設計案（以下 ARU (a) 案: 図 32）である。ARU (a) 案ではレオニードフ案と同じく全体配置図に建築物の配置方角が記されていない。しかし、この設計案では南北と思しき位置にスタジア

⁷¹ Там же. С. 97.

⁷² ARU(アーバニスト建築家連合会: Объединение архитекторов-урбанистов)は1928年にASNOVAから分離し、都市計画に重点を置きながら設計を行う団体であった。

ムとホールを含む棟を配置し、外側を取り囲むようにしてホールとスポーツ用グラウンドをつなぐ棟を配置して中央に大きな空間を作り出し、そこにスポーツ用の広場と集会用の広場が配置されている。ASNOVA (a) 案で見られるようなデモンストレーションの動きを重視した配置とはなっていない。

VOPRA の設計案（以下 VOPRA (a) 案: 図 33）はスポーツ用の空間と劇場ホールを分離した、設計案である劇場ホールを建設予定地の中央に配置し南側にはシモノフ修道院の一部を残している。この劇場ホールの形態は円と半円を組み合わせた複雑な形態をとっている。ホールには円形舞台を中心に観客席を扇型に配置している。そのため、ホールのファサードは上階がキャンティレバーによって支えられるかたちで突き出る形態を取り、ホールへの入り口としてホール北側には四つの傾斜路が設置され、ヴォストチナヤ通り（東側）の北側から訪問者を誘導するようになっている。訪問者の動線の妨げにならないように他の施設は建設予定地の西側に配置され、シモノフ修道院に隣接する南西部に逆 L 字型の棟を、この直線上北側にスタジアムとスポーツ用コンプレックスを配置している。

競技設計参加者からの応募が既に始まった 1930 年 6 月 17 日にモスクワ市ソヴィエト地区執行委員会幹部会で文化宮殿の建設について審議が行われている。この審議では 1930 年の「12 月までに最終案が完成し、その後に施工実施設計図が仕上がる」⁷³とされており、この最終設計案も「競技設計後 2 人の建築家に委託し、1 人はレニングラードの土木系大学の設計チームから、もう 1 人は競技設計に参加するモスクワの建築家団体の中で最も優れた建築家」⁷⁴に委託することになっていた。このようなかたちで 1 巡目が終了せず、1931 年に 2 巡目が開催されることになる。「2 巡目の競技設計参加者は 1 巡目の参加者の中から選ばれたモスクワの 3 つの建築家団体、レニングラードの 1 つの建築家団体、つまり ARU-ASNOVA、VOPRA、OSA、LIKS」⁷⁵であった。

2 巡目に提出された各設計案は相似している。どの設計案においても建設予定地の北側にはスタジアムを配置し中央部には劇場ホールの棟、劇場ホールに隣接して各種施設の棟が配置されている。2 巡目に提出された設計案の中で劇場ホー

⁷³ ГАРФ, ф. 5446, оп. 11, д. 2948, л. 1 об.

⁷⁴ ГАРФ, ф. 5446, оп. 11, д. 2948, л. 1-1 об.

⁷⁵ Щерваков В. Культурный Днепрстрой. Второй конкурс проектов Дворца Культуры в Ленинской слободе // Строительство Москвы. 1931. № 1. С. 29.

ルの構成と各種施設の配置で異なっているのが、OSA (I.レオニードフ) による設計案 (以下 OSA 案: 図 34、35) である。劇場ホールは 1 巡目の設計案と変わらず、円形舞台を取り囲むかたちで観客席が構成されている。だが、この劇場ホールを建設予定地の南西部に配置し、各種施設が配置された棟をこの劇場ホールに外接させ、この各種施設が含まれる棟の北側にはスタジアムが隣接し、中央部の各種施設を含む棟からヴォストチナヤ通り (東側) に向けて水平状に伸びるクラブホールが配置されている。1 巡目のレオニードフ案では施設ないしは棟を取り巻く空間を分断し、それらを一定の距離で配置していた。2 巡目の設計案では中央部の各種施設が入るコンプレックスを通過して劇場やスタジアムへ向かうための動線とクラブホールを通過してスタジアムへ導かれる動線が確保されている。そのため、まばらな施設の集合体として提示された 1 巡目とは異なり、より緊密にまとめられた複合施設としての文化宮殿が表現されている。

その他の 2 巡目に提出された設計案では各種施設の配置や劇場ホールの構成と似た点はほぼ同じである。建設予定地中央に円形舞台から扇型に観客席が広がるホールが配置され、北側にはスタジアム、ホールに隣接するかたちで各種施設の棟が配置されている。ただし、各種施設の棟が丘側 (西側) に配置するかもしくはヴォストチナヤ通り側 (東側) に配置するかという点で異なっている。VOPRA (以下 VOPRA (b) 案: 図 36) と LIKS (以下 LIKS 案: 図 37) による設計案では共に南側から北側に伸びる各種施設の棟を西側に配置し、ヴォストチナヤ通り (東側) に向かってこの棟に付随する棟が伸びている。そのため、VOPRA (b) 案ではシモノフ修道院の未撤去部分との壁、LIKS 案では建設予定地の南側に隣接する通りに対面するファサードが形成されている。一方 ARU-ASNOVA (ARU と ASNOVA による共同設計) による設計案 (以下 ARU-ASNOVA 案: 図 38) では、各種施設の棟をヴォストチナヤ通り側に配置し、劇場ホールに接続させ 1 つの複合建築物を造り出している。コンプレックスの北側に劇場ホールが、南側には映画観賞用ホールが配置され、その中間に室内庭園と休憩室が配置されている。また映画観賞用ホールと通路を挟んで体育用ホールが配置されていることで、全ての施設が 1 つの建築物内に収められており、従来の宮殿型建築物のイメージを表現しようとしている。ホールは円形ドーム型の屋根に覆われ、その他の部分は陸屋根で覆われている。

このように2巡目に提出された設計案では、各種施設にそれぞれ独立性を持たせるのではなく、文化宮殿の一体感に焦点があてられている。いずれの設計案も劇場ホールの構成に焦点があてられている。これは、「完全なる技術的な形で新しく理解されそして表現された壮大さ、あらゆる手段を用い、かつ視覚芸術の形態によってこうした課題を解決」⁷⁶するためであったが、審査員はその解釈方法を提示した設計案を見出すことはなかった。その結果、提出された設計案は飽くまで「試みであり、今のところ最終的なものではない」⁷⁷とされた。この2巡目に提出された設計案から最終案が選ばれることはなかったのである。

競技設計主催者側はこの結果を基に、文化宮殿の設計をヴェスニン兄弟に依頼することとなった。この点は、1巡目において当選案が選出されず2巡目が開催された経緯からも明らかなように、競技設計組織者側の都合で競技設計の結果を如何様にも変更できるということを意味している。文化宮殿競技設計の公示において2巡目を行うことは告げられておらず、また競技設計参加者以外の建築家に最終案の設計を委託することは通達されていない。このような競技設計開催公示後に幾度かの変更が加えられるのは、この後のソヴィエト宮殿競技設計においても生じ、常態化することとなる。ここで興味深いのは、労働宮殿競技設計で審査員から否定的に受け止められていたヴェスニン兄弟の影響力の強い構成主義的な設計手法が文化宮殿競技設計において主導的となり、かつ最終的な設計が彼らに委託されたことだ。もちろん、労働宮殿の競技設計が催された時期と、この文化宮殿競技設計が催された時期における彼らの知名度を鑑みれば、彼らに設計委託が回ってきたことも理解できる。だが、ここで留意すべきは、この競技設計の主題である宮殿型建築物が、従来通りソヴィエト権力の象徴である一方、シモノフ修道院という「反啓蒙主義の巣窟に文化の源を建てる」⁷⁸とあるように、労働宮殿競技設計で考慮された歴史的建築物との調和が否定されている点である。つまり、労働宮殿競技設計のような周囲の建築物との調和ではなく、むしろ建設予定地に存在した歴史的建築物（シモノフ修道院）に取って代わることが求められていた。この地区はリハチョフ記念モスクワ自動車工場（1916年建立）など一大産業地区となっており、労働者宮殿や労働宮殿の立地条件とは異なっていたこの地

⁷⁶ *Хазанова*. Из истории советской архитектуры 1926-1932 гг. С. 103.

⁷⁷ Там же.

⁷⁸ *Чиняков А.Г.* Братья Веснины. М., 1970. С. 134.

区の建築ドミナントとなることを求めたものの、結果としては構成主義のスタイルや機能性に重点を置いた建築物となった。このことは、宮殿型建築物においても当時の建築潮流の影響を強く受けたことを示すとともに、立地条件によっても求められるイメージは変化するというを示している。

またヴェスニン兄弟は 1930 年に催されたハリコフのデモンストレーション劇場競技設計で特賞を受賞し、そのことも彼らが最終案設計者として選出されたことに作用している。本稿ではこのデモンストレーション劇場に関する記述は割愛するが、この 2 つの建築物は厳密には異なるタイプの建築物で、デモンストレーション劇場は文化宮殿のように文化施設を複合化したものではないが、文化宮殿競技設計の審査員は、第 2 巡目においては、デモンストレーション劇場と文化宮殿の設計を重ね合わせ、ドミナントな部分に関心を絞っていたことがうかがえる。この点で、1 巡目に提出された設計案で見られた、各施設を分離して配置する設計手法とは異なっている。最終案委託のこうした経緯においても、主催者側が文化宮殿に求めたイメージを読み取ることができる。主催者側の意図が設計者によってどのように翻案されたのか簡潔に見てみよう。

ヴェスニン兄弟の設計案（以下ヴェスニン兄弟 (b) 案: 図 39、40）では 4,000 人収容の大ホールを含む棟と小ホールを含んだ各種施設が別々に配置された棟から文化宮殿が設計されており、1 つの建築物の中に各種施設を配置するという設計手法ではない。実際にこの大ホールを含む棟は着工されず、様々な文化施設を配置した棟のみが建設された。小ホールや各種施設を含む棟は不整形なラテン文字「I」で、その底辺部分先端が 1,200 人収容ホール（小ホール）の棟があり、別の先端部分にはスポーツ用のホールを含む棟が配置されている。小ホールの棟はヴォストチナヤ通り側（東側）に配置され、ホールでは競技設計の規定どおり額縁舞台が用いられ、扇型に広がる観客席があり、建築物のファサードから待合室広間の一部が弧状に張り出したかたちで構成されている。不整形 I 字型の交差部分に休憩用ないしは読書ホールを配置し、この空間を起点にクラブ用、児童用、図書館用の空間ないしはそれらに準ずる空間として 3 つに均等に分割されている。建築物の形態と各種施設の配置、ホールの構成は競技設計 1 巡目の LIGI 案と似ているが、ヴェスニン兄弟 (b) 案ではより厳密な機能的構成が施されている。また実際には建設されなかった大ホール、つまり劇場用ホール棟は円形の形態を

取り、小ホールと同じく観客席が扇型に配置されている。ホールの舞台を西側に、観客席を東側に配置し、ホール入口を3つ設けることで、大人数の出入場を可能にしている。この点は1巡目と2巡目に提出された設計案では見受けられなかった点である。

競技設計で提出された設計案とヴェスニン兄弟 (b) 案は空間構成や建築物の外観で見られる特徴は相似したところが多かったが、この2つで見られる違いは何か。彼らの設計案を基に建設が行われたことを考慮すると、競技設計と委託設計で求められた違いは政治的な集会とデモンストレーションの場が包含できる大型ホールを収容したコンプレックス型の建築物を作成できるかどうかという点にあったと考えられる。デモンストレーションを受け入れる大ホールという通常の文化施設ではあまり考えられないような設備は、「小劇場から何千人をも収容する壮大な劇場まで」⁷⁹が期待されていた当時の文化総合施設に対する考えを反映したものであった。こうした手法はソヴィエト宮殿競技設計の1巡目と2巡目に提出された多くの設計案でも見受けられるものであり、文化宮殿はその先駆けであったと言えよう。

結

労働者宮殿、労働宮殿、文化宮殿は宮殿型建築物であり、それぞれ競技設計が行われたが、競技設計要項やそれぞれの競技設計へ提出された設計案にはその時代の状況が多少なりとも反映され、それに応じて建築物の構成にも変化が見られた。こうした点を総合すると、設計案作成者達は権力そのものを設計案に表現するのではなく、権力が目指す方向性を反映していった。ただし複合施設としての宮殿型建築物は従来の建築物と比べて規模の大きさが求められ、記念碑的な性質であるモニュメンタリティが付与されるに至った。このモニュメンタリティを如何に表現するかということは競技設計要項では明記されておらず、競技設計に参加した建築家達自らが発案する課題であったと言える。

ペトログラードの労働者宮殿とモスクワの労働宮殿は、競技設計の段階で実現に向けた最終設計案が選出されることはなかった。競技設計公示前の時点で建設

⁷⁹ Корнфельд Я. Дворец Культуры пролетарского района Москвы // Архитектура СССР. 1934. № 1. С. 28.

費用や建設予定地の撤去作業に関して審議が行われていなかったことから、これらの競技設計が実現に向けて催されたものかどうかは怪しい。一方、文化宮殿では競技設計審議の段階で既に建設予定地の撤去作業が盛り込まれており、ヴェスニン兄弟の最終設計案を基に建設された。文化宮殿では競技設計主催者側が求めるイメージに合致し、建設費用の目処がついたため、実現したのであろう。労働者宮殿と労働宮殿では主催者側からイメージを具体化する助けとなるような建築様式や設計及び表現手法は競技設計のプログラムにおいて明確には示されていなかった。こうした状況において宮殿型建築物競技設計に参加した建築家達は視覚的なイメージに明確なかたちを与えるため、実験的にその建築プロジェクトを作成した。言い換えれば、主催者が思い描いていると推測されるイメージを建築家達は宮殿という建築物に自らが立脚する設計手法及びスタイルを用いて反映しようとしたのである。一方で再度競技設計が行われ、最終設計案が選定されず、文化宮殿を除き建設にまで至らなかったのは主催者が宮殿型建築物のイメージを創り出すためであったからではなかろうか。だからこそ、宮殿型建築物の競技設計では多様な設計案が見られたと言えるが、他方でこのことは権力を間接的に表現するための確たる手法もしくはスタイルが確立されていなかったことを意味している。1932年4月23日付の「文学芸術組織の改編」に関する全連邦共産党中央委員会決議によって、建築分野を含めた芸術分野全般で党の方針と合致する統一的方向性の模索が始まる。その中で初めて権力を間接的または直接的に表現する手法やスタイルが模索されることになるのだが、この時期にまさしく宮殿型建築物で最も大規模かつ権力を超えた国家のシンボルとなろうとしていたソヴィエト宮殿の競技設計が行われるのであった。

2. ソヴィエト宮殿競技設計とその結果 (1928-1933)

前章ではソヴィエト宮殿の前提として、十月革命以降ソ連国内で生じた「宮殿」と名の付く建築プロジェクトについて考察してきた。それぞれに共通したのは、宮殿という名前が以前のように権力を示すだけでなく、複合施設としての役割を担うようになっていったということであった。本章では、ソヴィエト宮殿が建築プロジェクトとしてどのように企画され、また建築設計競技としてどのような軌跡を辿ったかの検証を行いたい。まずはソヴィエト宮殿が競技設計として成立するまでを記し、次いでソヴィエト宮殿競技設計に提出された設計案を分析し、いくつかに分類する。

「ソヴィエト宮殿」という名前が初めて公に登場するのは、1924年である。V.レーニンの死の直後に開催された第13回ロシア共産党大会の決議を実施するにあたり、ASNOVAが「ソヴィエト宮殿を救世主大聖堂の場所に建造する」と発言したと記録されている⁸⁰。彼らの発言によればソヴィエト宮殿とは、「モニュメント芸術の形式を用いた最もよきレーニンへの記念碑」であった⁸¹。ASNOVAの提案では、ソヴィエト宮殿とはレーニン個人への記念碑という認識が強く打ち出されていた。この提案は「キーロフが1922年12月30日の第1回全連邦ソヴィエト大会で発言した」、「代表者たちが集まることができる記念碑」で、「労働者と農民の新しい宮殿」を踏まえていたとV.ハザノヴァは述べている⁸²。この2つをすり合わせることで、前章で取り上げた宮殿型建築物と見なすことができるが、計画が持ち上がった時期を考慮すると、当初はやはり「記念碑型建築物」の側面が強かったと言えよう。

しかし、1931年に発表されたソヴィエト宮殿国際競技設計準備段階(競技設計1巡目)のプログラムで記載されているソヴィエト宮殿の定義は上記の点と異なり、ソヴィエト宮殿は「大衆の集会並びに業務および文化事業を目的とした集会のために応用されるべき」建築物と記されている⁸³。この告知には「レーニン存命中に政府内でモスクワに党大会用の建築物を建立する考えがあり、1922年にこの種の建築設計競技が公に存在した」⁸⁴という記載がある。この1922年の競技設計が労働宮殿競技設計を指しているのは明白だから、ソヴィエト宮殿の構想は労働宮殿に遡ることができると言ってよい。準備

⁸⁰ АСНОВА Дворец Советов // Советская архитектура. 1931. № 4. С. 52.

⁸¹ Там же.

⁸² Хазанова. К истории проектирования Дворца Советов. С. 166.

⁸³ ЦАГМ, ф. 694. оп. 1. д. 2. л. 1.

⁸⁴ Там же.

段階でソヴィエト宮殿は「ソ連各地の代表団がやってくる労働者大衆の中心地となるべくソ連の赤い首都であるモスクワ」に建設されるものであり、「モニュメンタルな建築形態を具現化し、その建築形態だけでなく、都市の建築アンサンブルの中でも長い間見渡せる場所の1つとなるべき」⁸⁵と定義され、ASNOVA が打ち出したような「記念碑的建築物」という性質が反映されている。プログラムの規定によれば、ソヴィエト宮殿は「広い講堂とそれに付随する部屋を備え、あらゆるインフラ設備と特殊な技術設備を備えていなければならない。後者は一種の見世物、芸術的演出や大衆的祝祭などの可能性を提供する」⁸⁶ことが目的である。また、「会議ホールは単に大勢の観客のためだけではなく、集まった人々が舞台上で生じていることに積極的に参加できるようにしなければならない」とされている⁸⁷。さらに「ソヴィエト宮殿に集まった人々は会議ホールに続く通路を通じて街頭のデモンストレーションと出会う」構造も求められている⁸⁸。ここから、建物内またはソヴィエト宮殿内にデモンストレーションが通行できる空間を確保し、それに応じた規模の会議ホールをメインとするソヴィエト宮殿が掲げられた。

ここでは公式に建築競技設計ソヴィエト宮殿が登場するまでの経緯を記すとともに、その経緯においてどのような審議が重ねられていったのかを見ていくことにしよう。

2-1. ソヴィエト宮殿競技設計が決定するまで

アーカイブの資料によれば、1928年1月17日付ソ連人民委員会議と労働国防会議のメンバーによる会合が行われている。これがソヴィエト宮殿に関連する最初の話合いで、以後定期的に開催されている。だが、この会合では「ソヴィエト宮殿」という名称は用いられず、審議対象の建築物は「ソヴィエト大会と会議のための特殊建築物」⁸⁹と表記されている。この建築物は「大会や会合のためのもの」であり、「第1回全連邦ソヴィエト大会での決議と結びついている」⁹⁰と書かれているから、これを後のソヴィエト宮殿の構想と特定しうる。この審議では、数年後の建築競技設計で取り入れられる基本的な項目に

⁸⁵ ЦАГМ, ф. 694, оп.1, д. 2, л. 1-1 об.

⁸⁶ Там же.

⁸⁷ Там же.

⁸⁸ Там же.

⁸⁹ ГАРФ, ф. 3316, оп. 64, д. 562, л. 1.

⁹⁰ Там же.

についても話し合われており、「1. 大型の大会用の 10,000 人収容のホール、2. 5,000 人と 1,500 人収容のホール、3. 異なる収容数の委員会や会合用、つまり 200 人から 500 人用の 4 つのホール、4. 10,000 人収容の食堂、5. 5,000 人収容のホテル」⁹¹を備えることを条件としている。これ以前の宮殿型建築物に比べると収容数が増し、さらに大型ホールをいくつか備えている。建設予定地は「1. アルバート市場のある広場、2. ソフィスカヤ通りの『ボロト(沼沢地)』」⁹²と記されている。この点は、おそらく当時上記 2 つの地区が開発対象となっており、その中心を形成するために、予定地とされたと考えられる。この会合の約 1 ヶ月後の同年 2 月 17 日付の会合ではこの建築物の建設に向けた準備を行うための専門委員会設置や建設予定地を近々決定することが話し合われた。この会合で重要な点は、この建築物が「大会ビル(Дом Съездов)」という名称で審議対象となっていること、建設予定地をクレムリンに隣接するアホートヌイ・リヤード反対側にあたるトヴェルスカヤ通りと組合会館の一面に決定したこと、さらには「最も優れた建築家達や専門家達を設計作業に参加させるため非公開競技設計を実施する」⁹³方針が決められたことである。ASNOVA が主張したように「モニュメンタルな建築形態を体現し、その建築形態だけでなく、都市の建築アンサンブルの中でも長い間見渡せる場所の 1 つ」とすべく、当時の有力な建築家や専門家をこの建築物の設計に携わらせようとする意図が読み取れる。

また同年の 1 月 26 日の国営建設会社「ゴспромстрой」の会合では大会ビルの詳細が審議されている。この審議では大会ビルの外観について触れられている。「英国国会議事堂、タヴリーダ宮殿、アメリカのスタジアム、ドイツの展覧会建築物の設計を基本とするかどうかは建築家の決めること」⁹⁴と、建築物のスタイルを限定しないとしている。ただし、「鉄筋コンクリートで鏡面ガラス」⁹⁵を用いるべきであると最新の建設用資材を推奨している。このことは建築物の構成に関する提言の中にも見受けられ、例えば「外国で広く用いられているエスカレーター」、「自動の電話と信号装置のための電話室」、「便利

⁹¹ Там же.

⁹² ГАРФ, ф. 3316, оп. 64, д. 562, л. 2.

⁹³ ГАРФ, ф. 3316, оп. 64, д. 562, л. 3.

⁹⁴ ГАРФ, ф. 3316, оп. 64, д. 563, л. 1 об.

⁹⁵ ГАРФ, ф. 3316, оп. 64, д. 563, л. 3.

な自動車用出入り口」⁹⁶を設置するといった点にも表れている。ただし懸念事項として、メインとなる大ホールの収容数が多いため、大掛かりな大会以外の定期的な党大会やその他 1,000 人ないし 200 人程の小規模の会合では、大ホールを部分的に再分割して使用すると取り決め、その場合に音響や換気、照明、暖房が問題となるとされている⁹⁷。

同年 3 月 1 日付に催された会合の議事録では既に非公開競技設計の招聘建築家がリストアップされており⁹⁸、当時のソヴィエト建築界を牽引していた建築家達の名前が確認できる。約 2 ヶ月後(同年 4 月 26 日)には既に非公開競技設計のプログラムがこの会合に提出されている。このプログラムではそれ以前に話し合われた建築物の基本構成や招聘建築家に加えて、この建築物の性質の記述が新たに付記され、設計案には「1. 社会主義建設という労働者の意思を具現化した時代精神、2. 建築物の意義、3. ソ連の首都における建築芸術的な記念碑として、それ相応のもの」⁹⁹が求められている。また、「ゴस्पロムストロイ」での審議で問題となっていた建築物の基本構成要素についても、10,000 人規模のホールを 1 つ、1,000 人規模のホールを 3 つ、200 人規模の小ホールを 2 つにして、また 300,000 冊収容の図書館が加えられており、より規模の大きなものが求められている。このプログラムではさらに建築物外観に関する規定と招聘建築家についても触れられている。建築物の外観は「建築家が決めること」とされていたが、このプログラムでは「簡素かつモニュメンタリティ溢れたもので、装飾的な要素は最小限、しかし調和が取れており、喜ばしい印象を生み出すものでなければならない」¹⁰⁰とされている。この文面のみではどういった建築様式を求めているか特定するのは難しい。また、招聘建築家の中に外国建築家が名を連ねているのも、新たな点である。3 月 1 日付の会合で審議された招聘建築家の中から 6 人と新たに 14 名が加えられて計 20 名となり、その内の 5 人が外国人建築家である¹⁰¹。

⁹⁶ Там же.

⁹⁷ ГАРФ, ф. 3316, оп. 64, д. 563, л. 9-10.

⁹⁸ ГАРФ, ф. 3316, оп. 64, д. 562, л. 5. リストアップされた建築家は計 11 名であり、1. I. マシコフ、2. A. シチュエーフ、3. ヴェスニン、4. クジミン、5. I. ジョルトフスキイ、6. レールベルク、7. I. フォミーニ、8. V. シチュエーコ、9. S. チェルヌイシエフ、10. M. ギンズブルグ、11. I. ゴロソフである。なお招聘建築家ヴェスニンに関しては、レオニード、ヴィクトル、アレクサンドルの 3 名が該当し、3 名全員が建築家である。兄弟揃って招聘するのもしくはこの兄弟の中の誰かということは、名前のイニシャルが記されていないため、この出典資料から特定することはできない。

⁹⁹ ГАРФ, ф. 3316, оп. 64, д. 563, л. 23.

¹⁰⁰ Там же.

¹⁰¹ ГАРФ, ф. 3316, оп. 64, д. 563, л. 26. このプログラムでリストアップされている建築家は、1. G. バルヒンとその子供、2. ヴェスニン兄弟 (レオニード、ヴィクトル、アレクサンドル)、3. ゴロソフ兄弟 (イリヤー、

このプログラムが提出された約4ヶ月後の8月16日付の審議では競技設計に関する新たな点を加えられた。それは1. 競技設計委員会の設置と審査員の選抜、2. 競技設計の回数(3回)、そして3. 競技設計において賞を授与するという点である。1で競技設計審査員は「政府および公共機関からの代表者」で、競技設計委員会はモスクワおよびレニングラードの建築ないしは芸術機関の専門家から選抜され、「競技設計に招聘する設計者のリストを作成するために、競技設計委員は審査員と共に競技設計のプログラム、その条件そして競技期間を設定する」ことが記されている¹⁰²。2では、これまでの審議で大会ビルの競技設計は非公開競技設計とされていたが、これに加えて公開競技設計の案が提示され、合計で3回となっている。ここで興味深いのは、並列して異なるタイプの競技設計を提示している点である。まず1つ目のタイプは参加自由としてソ連国内外から設計案を募るオープンコンペ、2つ目のタイプは指名した設計者から設計案を募る招待コンペ、3つ目のタイプは1つ目と2つ目のタイプを同時に行うものである¹⁰³。3では総額75,000ルーブルを賞金として割り当てることが決められており、競技設計に勝利した設計者は実施設計案作成作業に参加できることが記されている¹⁰⁴。ここからソヴィエト宮殿の基盤となる「大会ビル」建設の審議が始まっておよそ半年で一連の競技設計の土台が固められつつあったことがわかる。

こうした競技設計の基本事項は1929年の1月5日付の審議において正式に承認される。この審議では建築物の基本構成、つまりホールの規模と数や建設予定地などが承認されているが、その他に公開競技設計を組織するために7名の専門家を招聘すること、ソ連中央執行委員会幹部会に対して、専門家並びにモスクワ市ソヴィエトの代表

パンテレモン)、4. S. ヴラシエフ、5. N. ラドフスキイ、6. I. ゲルマン、7. I. ジョルトフスキイ、8. V. ココリン、9. N. コリ、10. B. イオフアン、11. D. フリードマン、12. S. チェルヌイシェフ、13. A. シチューセフ、14. V. シチューコ、15. ガリペリンもしくはニコリスキイの設計事務所、16. E. メンデルゾーン(ドイツ、ベルリン)、17. B. タウト(ドイツ、ベルリン)、18. J.J.P. アウト(オランダ、ロッテルダム)、19. ル・コルビュジェ(フランス、パリ)、20. 雑誌「Stavba」から1人を選抜(チェコスロヴァキア、プラハ)である。

¹⁰² ГАРФ, ф. 3316, оп. 64, д. 563, л. 29. 審査員の候補者はこの段階で選抜されていないが、競技設計委員には1. I. マシコフ、2. I. ルィリスキイ、3. V. セミョーノフ、4. G. クラーシンが選抜されている。

¹⁰³ Там же.

¹⁰⁴ ГАРФ, ф. 3316, оп. 64, д. 563, л. 30. この中で上記賞金総額の配当方法が記されている。1つ目のタイプは、1巡目に招待される15名の設計者に対し3,000ルーブルを配当し、2巡目でよりよいとされた5つの設計案の作成者に対し6,000ルーブルを配当もしくは2巡目でよりよいとされた5つの設計案の作成者に対し5,000ルーブルを配当し、この5つの中で最もよいとされる設計案作成者に賞金(5,000ルーブル)を与えるというもの。もう1つのタイプは1巡目に招待された15名の建築家に同一で2,000ルーブル配当し、提出された設計案の中から1等賞(5,000ルーブル)、2等賞(4,000ルーブル)、3等賞(3,000ルーブル)、4等賞(2,000ルーブル)、5等賞(1,000ルーブル)を授与、2巡目では1巡目で入賞した設計案作成者全員(5名)に5,000ルーブルをそれぞれ配当し、勝利案に対し賞金5,000ルーブルを与えるというものである。

者を含むこの建築物のための委員会設置を要求することが承認されている¹⁰⁵。従って、建設事業の審議が政府関連機関で行われるだけではなく、競技設計それ自体にも専門家委員会を設けることで大会ビル建設の重要性をより高めている。

競技設計の審査員が確定するのは1929年の2月7日付審議においてで、競技設計の審査委員は政府建設委員会から2名の代表者と、各機関からの代表者7名、さらに4名の専門家からなるとされた¹⁰⁶。建築競技設計において建築並びに建設技術の専門家以外に建設予定地を管轄するモスクワ市当局が審査に加わるのは当然であるが、その初期段階から政府関係者が関与しているのは着目すべき事柄である。この関与は、この建築物を建設することが第1回全連邦ソヴィエト大会の決議を実現するという政治的目的と結びついているため、政府にとっても一大事業であったということの意味している。

この2月7日付審議では公開競技設計と非公開競技設計が区別され、「公開競技設計(1巡目)の提出期間は9ヶ月以内とし、1巡目に提出された設計案の審査は1ヶ月、2巡目の設計案作成期間は2ヶ月で、その審査は2週間とする」¹⁰⁷とある。ここでは公開競技設計参加者の中から3名の「審査員によって推薦された設計案作成者」が2巡目の非公開競技にも設計案を提出し、非公開競技には外国人建築家並びに国内の建築家を招聘することが決定されている¹⁰⁸。そのため公開競技に参加し、1巡目から2巡目に選抜された建築家は、競技設計の主催者によって2巡目に招聘された建築家とも競うことになる。一方で主催者からすれば、「最も優れた建築家達や専門家達」によって提

¹⁰⁵ ГАРФ, ф. 3316, оп. 64, д. 562, л. 7. ここで挙げられている7名の専門家は、アメリカから1名、ドイツから1名、フランスから1名、ソ連国内から4名で構成されるとしている。

¹⁰⁶ ГАРФ, ф. 3316, оп. 64, д. 562, л. 8 об. 各機関からの代表者は1. ソ連中央執行委員会から代表者1名、2. モスクワ市ソヴィエトから代表者1名、3. 全連邦労働組合中央評議会から代表者1名、4. レニングラード建築家協会から代表者1名、5. モスクワ建築家協会から代表者1名、6. ソ連人民委員会議から代表者1名、7. 全ロシア中央執行委員会から代表者1名で、4名の専門家はI.マシコフ、I.ルイリスキイ、V.セミョーノフ、G.クラージンである。

¹⁰⁷ ГАРФ, ф. 3316, оп. 64, д. 562, л. 8.

¹⁰⁸ Там же. この審議で検討されている非公開競技設計における招聘建築家は以下の通りである：1. ル・コルビュジェ（フランス）、2. B.タウト（ドイツ）、3. V.シチューコ（レニングラード）、4. ヴェスニン兄弟（モスクワ）、5. I.ジョルトフスキイ（モスクワ）、6. B.イオフアン（モスクワ）、7. S.チェルヌイシエフ（モスクワ）、8. A.シチューセフ（モスクワ）。彼らに加えて「VOKS（全連邦対外文化協会）とAMTORG（アムトルグ貿易会社：1933年にアメリカでソ連大使館が設立されるまで、ソ連とアメリカ間の貿易業務のみならず、アメリカにおける情報収集活動も行っていた（著者註））にアメリカから候補者を1名選出するのを委任し、ウクライナ建築家協会にウクライナからの候補者1名を選出してもらう」としている。またル・コルビュジェに関しては「条件付」という記述があるが、その詳細は説明されていない。

出された設計案と公開競技設計の審査を通過した優れた設計案からよりよい設計案を選ぶことができるということになる。

このように 1929 年の時点で既に競技設計の手順が固められており、その手順が確定するまでに紆余曲折を経ていることがアーカイブの資料からわかる。だがこの時点でこの競技設計はまだ建設に向けた実現性が乏しかった。建設予定地は確定しているものの、大会ビルを建造するための整地や建設資材や労働力の確保などが話し合われていないからである。この点が審議されるのは 1930 年に入ってからである。1930 年 7 月 23 日付の審議では建設予定地の最終的な承認と「次の建設シーズンが始まるまでに建設予定地にある建物を一掃すること」をモスクワ市ソヴィエトが行うこと、またこの地区の住民が移転するための住居の建設が取り決められている¹⁰⁹。この取り決めによって実際の建設に向けた下準備が始まったと言える。

次に建築競技設計ソヴィエト宮殿が始まったとされる 1931 年においてこの大会ビルがどのようにしてソヴィエト宮殿という名称に変わり、また大会ビルの競技設計並びにこの建築物の構成がソヴィエト宮殿に継承されていくのかをも見ていくことにしよう。

1931 年 1 月 1 日付のソ連中央執行委員会幹部会付属大会ビル建設委員会に関する規約では、この題のとおりソ連中央執行委員会幹部会の付属機関として大会ビル建設委員会が組み込まれており、競技設計並びに建築物に関する取り決めをソ連中央執行委員会幹部会に定期的に報告することが取り決められている¹¹⁰。その結果、1931 年から競技設計並びに設計に関する報告が、定期的に行われるようになる。さらにこの建設委員会に対して、競技設計に提出された設計案の審議、競技設計後の建設段階でのとりまとめ、建築物の構成といった大会ビルに関連するほぼ全てのことが委任されている。

この報告に続くかたちで、同年 1 月 24 日に行われた審議では、大会ビルとその建築競技設計に関するいくつかの変更点を加えられた。まずは大会ビルそのものの構成は、「20,000 人収容の講堂ないしはホールが 1 つ、5,000 人収容のホールが 1 つ、3,000 人収容のホールが 1 つ、2 つの 500 人収容ホールと 2 つの 200 人収容ホール」¹¹¹となり、

¹⁰⁹ ГАРФ, ф. 3316, оп. 64, д. 562, л. 11.

¹¹⁰ ГАРФ, ф. 3316, оп. 64, д. 564, л. 1.

¹¹¹ ГАРФ, ф. 3316, оп. 64, д. 562, л. 12.

以前に比べてより規模が大きくなっている。そのため、既に確定していた建設予定地(トヴェルスカヤ通りと組合会館の間にある区画)は「大会ビル建設には不十分であり、この建築物を建設するためにはゲオルギエフスキイ横丁と芸術劇場通りの間に位置する広場を割譲しなければならない」¹¹²としている。この変更は、既に委員会内で承認されたプラン(大会ビルの構成)がこの委員会の上部機関、つまりソ連中央執行委員会幹部会の判断で変更され得るということをも示している。この建設予定地の拡張に関しては、「トヴェルスカヤ通りを拡張する必要性を念頭に置き、また将来に地下鉄が配置されることを考慮し」¹¹³、上記地区の測定とこの地区にある建物の配置図作成を行うことが指示されている。大会ビルそのものは「ソ連の首都における建築芸術的な記念碑」であるが、建設予定地付近の地区再編と交通網整備の考慮も要望されている。

この審議を受けて2月6日に大会ビル設計組織に関する会合では、大会ビルの用地査定、競技設計の組織方法、作業スケジュールが審議対象となった。用地査定はあまり触れられておらず、むしろ競技設計の手順と作業スケジュールそして建築物の特徴に関する審議がなされている。手順として競技設計を次のように分けている:1. 競技設計を確認する意味で5名の建築家に競技設計プログラムに従った設計案を提出させる段階、2. 希望者全員が参加可能な公開競技設計、3. 選定された9名の建築家によって行われる非公開競技設計で、これら全てを9ヶ月間で終了させることが記されている¹¹⁴。建築物の特徴として、「まず20,000人用のホールとそのホールに付随するあらゆる諸室の建設を、残りのそのほかの諸室は次におこなう」ことを挙げている¹¹⁵。この点は、この報告以前の審議内容を踏まえており、構成としてはあまり変化はないが、その主要要素である大型のホールを明確に分割した設計を促す提案となっている。

この審議の後に承認された報告書では新たな変化が見られる。まず、名称である。この報告書以前では「大会ビル」となっていたが、この報告書では「大会宮殿」となっている¹¹⁶。加えてこの建築物に関連する問題を統括する機関として建設局を設置し、「大会

¹¹² Там же.

¹¹³ Там же.

¹¹⁴ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 4, л. 4.

¹¹⁵ Там же.

¹¹⁶ ГАРФ, ф. 3316, оп. 64, д. 564, л. 2.

宮殿の建設期間、つまり、1931年2月10日から1935年の1月1日まで開設される」¹¹⁷としている。この報告以前では建設委員会というかたちで一括して建設に関する問題を処理していたが、この建設局が審議を行い、その上位機関としてソ連中央執行委員会幹部会付属の建設会議が最終的な承認(建設プログラム、期間、予算等に関するもの)を下すという構図が提示されている。またこの建設局は代表者として建設局長、副局長として建設主任技師と主任建築家が就くことが決められており、設計ないし建設段階において技術関連の問題全般を主任技師、建築関連の問題全般を主任建築家に任せるとしている。つまり、競技設計を行うにもかかわらず、最終的な設計はこの建設局の主任建築家が携わることがすでに確定している。これは西側などの競技設計ではあり得ないことで、あくまでソ連での政官主導による建設事業の特徴を示すものである。報告書では「設計に関するプログラムの準備、競技設計全ての準備とその遂行における技術的な準備」¹¹⁸の責任を主任建築家が負うことになり、「建築物の外装や内装」といった細かい点に関する問題全般も扱うことが定められている。そのため、この時点で建設局と建設会議はすでに競技設計後の見通しを立てていたと言える。

この報告書の後に主任建築家に任命されたボリス・イオフアンからソ連中央執行委員会幹部会メンバー、かつその書記であったアベル・エヌキツェに宛てた2月28日付書簡では、同年1月24日の審議で取り上げられた建設予定地の測量に関する報告がなされている。これは「建築物(大会ビル)の概略的配置図」を作成するために行われたもので「20,000人収容の講堂を10,000人収容にして、5,000人収容のホールが1つ、3,000人収容のホールが1つ、2つの500人収容ホールと2つの200人収容ホール」から構成される。この建築物の規模が建設予定地に収まるか否かが問題となっている。B.イオフアンによれば、上記規模の大会ビルの「建蔽率は80%で、建築物を建設予定地に自由なかたちで配置するのは困難である」との見解を示し、大会ビルを二分割し、「大ホール(収容数10,000人)と2つの500人収容ホールと2つの200人収容ホールの建築物を建設予定地に」、「5,000人収容ホールの建築物をアホートヌイリヤード、トヴェルスカ

¹¹⁷ Там же.

¹¹⁸ ГАРФ, ф. 3316, оп. 64, д. 564, л. 3.

ヤ通り、ゲオルギエフスキ横丁と芸術劇場通りの間に位置する区画¹¹⁹に配置することを提言している。

この提言を基に、B.イオフアンは建設予定地に大会ビルがどれほどの面積を占めることになるかということを試算している。この試算の中で大会ビルは建設会議の代表者でもあったA.エヌキツェの書簡で提言したものよりも細かく分割され、全部で5つの部門からなる建築物として提示されている¹²⁰。B.イオフアンのこうした提言は競技設計に向けた諸室を含む分類と考えてよいだろう。

B.イオフアンの報告を基にA.エヌキツェによる3月30日付の報告では大会ビルの競技設計並びにこの建築物の大まかな内容が通達されている。まず建設予定地に関しては、この報告以前に決定していたアホートヌイリヤード、トヴェルスカヤ通り、ゲオルギエフスキ横丁に挟まれた区画から隣接する「トヴェルスカヤ通り、ゲオルギエフスキ横丁、ドミトロフカ大通り」に挟まれた区画に拡張し、一方で建築物自体は「10,000人収容のホール、5,000人収容のホール、2つの500人収容ホールと2つの200人収容ホール」を基にした構成となっている¹²¹。競技設計の段取りは既に2月6日付の審議において3段階に分けて構成され、第1段階において予め指名した建築家に設計案を作成させるとあったが、その時点で招聘する建築家は未定であった。このA.エヌキツェの報告では建設局主任建築家であるB.イオフアンを含む5名の建築家が指名され、彼らに対して「1931年7月1日までの期限を守り」、「事前設計案を作成すること」が求められている¹²²。またこの競技設計の3段階全てを「9ヶ月のうちに終了させる」となっていたが、具体的に「1931年12月」までとなっており、この通達の後すぐに競技設計が開始されることがわかる。こうした予定に合わせて、建設予定地にある既存建築物のクリアランスを「1932年7月1日まで」に完了させ、「遅くとも1932年1月1日までに建築物の構成に

¹¹⁹ ГАРФ, ф. 3316, оп. 64, д. 563, л. 36.

¹²⁰ ГАРФ, ф. 3316, оп. 64, д. 563, л. 37-37 об.; ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 3, л. 2-2 об.; ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 4, л. 10-10 об. この5つのグループとは1. いくつかの部屋を伴う10,000人収容ホール、2. 同じく5,000人収容のホール、3. 2つの500人収容のホールと2つの200人収容ホール、4. 3つの読書ホール、5. ビルの管理室と司令室である。

¹²¹ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 4, л. 3.

¹²² Там же. B.イオフアン以外の建築家は、V.シチューニコ、A.シチューセフ、S.チェルヌイシエフと若手建築家グループの中から1人となっている。

関する基本的な作業を終わらせておく必要がある」としている¹²³。この時点で競技設計並びに競技設計終了後の見通しが正式にまとめられたと言えるであろう。

この A.エヌキッセの報告の後に発表された「大会ビル建設に向けた設計作業プログラムに関する注釈」では先の A.エヌキッセによる報告に関連した問題点が列記されている。建築物に関連した問題点として触れられているものは、建築物の構成要素を「遠方ないしは外国からの使節団等のことを考慮して 10,000 人収容のホールと 5,000 人収容のホールを 1 つにして収容数を 20,000 人にする」こと、または使節団への待遇を考慮した施設である。この点と関連して、10,000 人収容ホールを大会用のホールにふさわしい「ステージや映画の観賞にも用いられるように」、また「技術と産業の成果を誇示するためにも用いられるように」設計することが求められている¹²⁴。そして最後の点として挙げられているのは「大会参加者が大衆と近くかつ目に見えるかたちでつながりを持つ」という点であり、このことは設計する上で「ホールを通してデモンストレーションや行進が通過できるという課題を解決すること」に結びつくとしている¹²⁵。こうした問題点から浮かび上がるのは、単なる巨大な政府関連施設ではなく、イデオロギー的な機能や娯楽も兼ね備えた総合施設としての「大会ビル」という意識が前提とされている点である。ここでも、1 章で触れた文化宮殿ヴェスニン兄弟 (b) 案で見たように、建築物内にデモンストレーションを受け入れるという構成が求められている。

時系列で大会ビルの経緯を辿ってきたが、「ソヴィエト宮殿」という名称に変わるのは 1931 年 4 月 1 日付の公式文書(ソ連中央執行委員会幹部会書記長が、建設局主任建築家 B.イオフアンに宛てた建設会議の会合における摘要を送るという趣旨の書簡)においてである¹²⁶。この日付は 3 月 30 日付 A.エヌキッセ報告の翌々日であり、またこの報告の注釈で言及された競技設計の第 1 段階(事前競技設計)が始まる日付でもある¹²⁷。これらの文書では名称変更については一言も触れられておらず、文書によって裏付けられる確証がない。だが、前後の内容を照合すると事実関係、つまり大会ビルの設計とソヴィエト宮殿の設計に関する多くの事柄が一致している。この点を証明するためにも

¹²³ Там же.

¹²⁴ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 4, л. 7.

¹²⁵ Там же.

¹²⁶ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 18, л. 45.

¹²⁷ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 4, л. 8.

1931年4月1日付け B.イオフアン宛書簡ではじめて言及されている「ソヴィエト宮殿」という名称を巡る取り決めを見ていくことにしよう。

この書簡では「建設会議の会合における摘要を送る」と記されていたが、その摘要には会合が行われた日付が記されていない。しかし、4月1日以前であることは推測できる。この会議の代表者は陸海軍人民委員(当時)のクリメント・ヴォロシーロフで、参加者にモスクワ州ソヴィエト執行委員会代表(当時)のコンスタンチン・ウハーノフそして A.エヌキツェが名を連ねている。この会合では全 12 項目が承認され、大会ビルと同じ点を挙げるとすれば、1. 建設予定地、2. 建設物の構成、3. 競技設計第 1 段階(1 巡目:事前競技設計)の招聘建築家、4. ソヴィエト宮殿建設に関する責任者、5. 競技設計とその後の建設にかかる期間の 5 点である。建設予定地は、大会ビルと同じく「街区 63 番、つまりアホートヌイリヤード、トヴェルスカヤ通り、ゲオルギエフスキイ横丁と大ドミトロフカ通り」に挟まれた区画で「必要であれば、街区 64 番、つまりゲオルギエフスキイ横丁、トヴェルスカヤ通り、大ドミトロフカ通り」に挟まれた区画に拡張すると述べられている¹²⁸。この区画は同年2月に B.イオフアンが行った大会ビルの建設予定地の調査結果を受けて A.エヌキツェが行った報告で言及されている区画である。そして「ソヴィエト宮殿」の構成は「10,000 人収容のホール、5,000 人収容のホール、2 つの 500 人収容ホールと 2 つの 200 人収容ホールから構成される」とある¹²⁹。この点も、既に見てきたように、3月30日付の A.エヌキツェ報告と変わるところはない。招聘建築家に関しては 1 人を除いた残りの建築家は A.エヌキツェ報告で挙げられている建築家と同じであり、この招聘建築家に依頼し競技設計プログラムの作成を完成させる期間、つまり事前競技設計を 1931 年 7 月 1 日までに完了させる点も、A.エヌキツェ報告と同じである。責任者に関しては、建設局長にグリゴリー・ジノヴィエフ、主任建築家に B.イオフアンとこれも同じ内容である。また競技設計後もしくは競技設計と並行して行われる建設予定地の撤収作業と建築物の建設作業に関しても、基本的な作業は「遅くとも 1932 年 1 月 1 日まで、全ての最終的な作業は 1933 年 8 月 1 日まで」としている¹³⁰。この他にも、詳細な点、例えば建設局長と主任建築家の権限なども記されているが、そういった点でも 3月30日の A.エヌキツェ報告

¹²⁸ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 18, л. 56.

¹²⁹ Там же.

¹³⁰ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 18, л. 57.

がほぼ踏襲されている。また、この建設会議での会合の摘要、つまりソヴィエト宮殿の構成、建設予定地、設計案の提出期限、この建築プロジェクトを組織する団体の構成といった内容の通達が1931年4月17日付で建設局から指定の建築家並びに建築家団体に送られている¹³¹。こうしたことから、大会ビルはソヴィエト宮殿と名称を変えたという記載が文書では言及されていないが、1931年の3月から4月にかけての建設局、建設会議の議事録、そして主任建築家 B.イオフアンの報告からこの期間に施設の名称変更が行われたことは明らかである。

競技設計並びにソヴィエト宮殿そのものを計画し、さらには建設まで取り仕切ることになったのが、ソヴィエト宮殿建設局である。この機関は競技設計の主催者として、またこの建築プロジェクトを取り仕切っていた。ソヴィエト宮殿の全体像を把握するためにも、最後にこの機関に関して触れておく必要がある。ソヴィエト宮殿建設局はソ連中央執行委員会幹部会によって任命された建設会議に付属するものであり、建設会議の指示に従いソヴィエト宮殿建設に関するあらゆる作業や報告等を行う実務機関である。この実務機関の構成は、建設局長をトップに据え、その下に補佐役となる3名の局長代理がおり、それぞれ財務行政部門、建築設計部門、生産部を取り仕切っている¹³²。この局長代理に加えて主任建築家のポストが設置され、このポストはソヴィエト宮殿設計案を担当する建築家に充てられることになり¹³³、建設準備作業段階においては一時的にその作業のトップとなることが認められている¹³⁴。主任建築家は、局長代理と同じ立場にありながら、競技設計の組織、競技設計で採択された設計案と事前の予算を基に指示を出し、それらを承認するための申請とソヴィエト宮殿建設事業における実践的な部分を任されている¹³⁵。こうして、全体的な部分は建設局長、設計に関する実務的な部分を主任建築家が担うという役割分担を基にソヴィエト宮殿が策定されていく。

ソヴィエト宮殿建設局と共同する機関として、建設局長に属する常設の科学技術会議が設置されている。この会議のメンバーは建設局長によって選任され、建設に関わる個々の部門の専門家と職員、経済機関の職員、ソ連国内にいる外国人専門家から成る

¹³¹ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 19, л. 29-30.

¹³² ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 1, л. 1-2.

¹³³ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 1, л. 2.

¹³⁴ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 1, л. 8 об.

¹³⁵ Там же.

とされている¹³⁶。この科学技術会議は競技設計の事前段階に、建設局によって依頼された建築家達の設計案ならびに国際競技設計において提出された設計案を「あらゆる方面から検討することを目的」に設立された機関である¹³⁷。この機関は総勢 43 名から成り、建築設計、ワーキングプラン、視覚部門に分かれて構成されている¹³⁸。とはいえ、この機関の決議を承認するのは主任建築家で、参考のために建設局長に提出される¹³⁹。そのため、最終的な決定権は主任建築家と建設局長にあり、科学技術会議の決議はあくまで参考意見にとどめられることになり、主任建築家と建設局長の意向が競技設計に反映されやすい体制となる。

こうしたことを踏まえて、競技設計の各巡回で提出された設計案分析の前段階として、ソヴィエト宮殿競技設計のプログラムを見ていくことにしよう。

2-2. 競技設計 1 巡目（準備段階）

競技設計前の 1 巡目（準備段階）に関して従来の研究では必ずしも十分な注目がなされてこなかった。その理由としては、第 1 に公開競技設計プログラム(2 巡目)を充実させるための事前確認設計としての性格が強く、公に詳細が記載されていなかったことが挙げられるが、大会ビルの競技設計プログラムがソヴィエト宮殿用のものと同一であるにもかかわらず、従来はその言及もほとんどされていなかった¹⁴⁰。競技設計準備段階である

¹³⁶ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 1, л. 2.

¹³⁷ РГАЛИ, ф. 1981, оп. 1, д. 50, л. 21.

¹³⁸ РГАЛИ, ф. 1981, оп. 1, д. 50, л. 15-16. この機関の詳細は以下の通りである: 建設建築グループ 1. M.V.クリュコフ、V.A.ヴェスニン、P.P.ロツテルト、V.N.ヤコヴレフ、I.D.シャドルーイヴァノフ、A.N.サロフ、M.A.ルドニク（書記）、2. I.P.マシコフ、V.N.セミョーノフ、I.S.パヴロフ、F.S.ボゴロツキイ、S.D.タフセーエフ、V.A.ブラノフ、S.A.カウフマン（書記）、3. S.V.ベリャエフ、A.V.シチューセフ、A.G.コゼルコフ、G.V.ジノヴィエフ、F.K.レフト、E.E.カリーニン、P.I.アンチノフ（書記）; ワーキンググループ 1. R.G.ルーベン、A.N.トルストイ、A.A.ファジェーエフ、V.N.ザソプキン（書記）、2. A.F.ロレイト、L.K.マルテンコ、G.A.ガルブノフ（コンサルト）、S.Ya.リープシッツ（コンサルト）、V.N.オブラツォフ（コンサルト）、N.S.ストレルツキイ（コンサルト）I.S.カンネリソン（コンサルト）、3. I.D.フェルスман、V.M.メラウーク、V.P.ネクラーツフ（コンサルト）、A.P.ペヴスネル（コンサルト）、ラブシン（書記）; 視覚部門 A.V.ルナチャルスキー、V.E.メイエルホリド、K.S.スタニスラフスキー（コンサルト）、B.L.ヤヴォルスキー（コンサルト）、A.V.コロブコ（書記）。D.フメリニツキイとI.エイゲリはソヴィエト宮殿建設局長付属の協力機関は、競技設計の準備段階（1 巡目）において臨時技術委員会であったとしている（*Эйгель И. К истории построения и сноса Храма Христа Спасителя // Архитектура и строительство Москвы. 1988. № 7. С. 31., Хмельницкий. Архитектура Сталина*（前注 1 参照）。С. 78-79.）。

¹³⁹ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 1, л. 9.

¹⁴⁰ *Тер-Акопян К.Н. Проект и строительство Дворца Советов СССР в Москве 1931-1932 исторический очерк //*

1 巡目が開催された時期を特定するのは難しい。従来の研究では 1931 年 2 月から 4 月半ばとされている¹⁴¹。この期間は大会ビル競技設計の審議が始まる時期、そして大会ビル競技設計で指定されている事前設計案を建築家達に要請する時期と一致する¹⁴²。また 1 巡目に提出された設計案凡例を参照すると、提出日がいずれも同年の 7 月 10 日から 13 日となっている¹⁴³。こうした事実からソヴィエト宮殿競技設計 1 巡目が行われたのは 1931 年 4 月半ばから 7 月半ばと推定するのが妥当だろう。1 巡目は公開国際競技設計プログラムの確認ということであったが、ここで提示された規定には後に記述する公開競技設計のものとは異なる点があり、またソヴィエト宮殿ではなく「大会ビル」競技設計プログラム用凡例となっている¹⁴⁴。その目的は「競技設計プログラムの確認、建設地の分析、一連の技術的課題全般の解決方法、建築物のシルエットを明らかにすること、その総面積と規模の確認」となっている¹⁴⁵。さらに 1 巡目では、建設予定地に関して「大会ビル」のプログラム作成の際に定められた場所を引き継いだにもかかわらず、再び審議にかけられている。

1931 年 5 月 21 日の「ソヴィエト宮殿建設傍聴委員会会合」では建設予定地とソヴィエト宮殿の構成に関する意見が述べられている。まず建設予定地が先述してきた「街区 63 番」ではなく、「赤の広場の区画、つまりニコリスカヤ通りとイリインカ通りの間となる国营百貨店(グム)、ボゴヤヴレンスキイ大通りまでの地区」となっている¹⁴⁶。しかし、「街区 63 番」を基にして上記区画まで建設予定地を拡張するものなのか、それとも完全に「街

Наум Габо и конкурс на Дворец Советов Москва 1931-1933. Каталог выставки. Берлин. 1993. С. 289-296. 著者は大会ビルの競技設計について触れており、ソヴィエト宮殿以前においてそうした競技設計が行われたということを描している。しかし、この競技設計がソヴィエト宮殿の準備段階の基となっていたという指摘にとどめ、それ以上は言及されていない。

¹⁴¹ Астафьева-Другач и Волчок. О конкурсе на Дворец Советов. С. 229; Хмельницкий. Архитектура Сталина. С. 80-81. Астафьева-Другачとボルчокは自らの論文において「ソヴィエト宮殿の準備段階は 1931 年 2 月から同年 5 月にかけて行われた」と指摘し、D. フメリニツキイは「1931 年 2 月にソヴィエト宮殿の競技設計準備段階の公示がなされた」と述べ、「同年 4 月 17 日にその当時ロシアで存在していた有名な建築家グループや建築家団体全ては、ソヴィエト宮殿建設局長 M. クリュコフによる署名付きの全連邦競技設計 (2 巡目の国際競技設計を指す: 著者註) 準備段階への参加招待状を受け取った」と述べている。しかし両者の論文ではそうした準備段階の開始を確定する出典先が明記されていない。

¹⁴² ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 1, л. 2-3.

¹⁴³ Объединение архитекторов урбанистов АРУ - Пояснительная записка к проекту Дворца Съездов в Москве. 10. 07. 1931; Иофан Б. Пояснительная записка к проекту сооружения Дворца Советов СССР автора проекта арх. Бориса Михайловича Иофана. 13. 07. 1931; Ладовский Н.А. Архитектор Н.А. Ладовский - Пояснительная записка к проекту Дворца Советов С.С.С.Р. 12. 07. 1931. АРУ の汎用例によっても、ソヴィエト宮殿競技設計の準備段階での設計案発注が大会ビル競技設計の準備段階における設計案発注と同じであることがその標題から証明できる。

¹⁴⁴ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 4, л. 6-8.

¹⁴⁵ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 4, л. 8.

¹⁴⁶ ГАРФ, ф. 3316, оп. 64, д. 562, л. 21.

区 63 番」を含まず「赤の広場の区画」に変更したものなのか判断することが難しい。また大ホールは「1. 10,000 人収容と 5,000 人収容、2. 12,000 人収容と 3,000 人収容、3. 15,000 人収容と 5,000 人収容」の 3 つを基にソヴィエト宮殿の設計案を作成することが提案されている¹⁴⁷。こうしたことはあくまで提案に過ぎないが、事前競技設計の期間中に行われているため、未だ競技設計プログラム自体が定まっていないという印象を与える。特に建設予定地に関しては、1928 年の大会ビルに関する審議当初から大きな変更点もなくこの地に確定していた。それにもかかわらず、事前競技設計が始まってから、変更ないしは拡張の提案が出されるのは奇妙である。

この変更理由を推測する手がかりとして 5 月 21 日での会合に付随して建設会議が発表した建設予定地に関する報告書を見てみよう。この報告書ではアホートヌイリヤード広場、つまり現在のアホートヌイリヤード通りとしている。その理由は、「クレムリンと赤の広場は政府機関の中心地であり、デモンストレーションが向かう先のレーニン廟の存在は首都の中心という意義を持つ。そのため赤の広場をこれからもより確かなものとするはずである」から、「都市という地理的な中心とイデオロギー的な中心が一致」する場所という前提からすると、アホートヌイリヤードは「最も適した場所」だからである¹⁴⁸。またこの中で、アホートヌイリヤード広場以外の候補地についても言及されている。しかし、これらの候補地はアホートヌイリヤードと比べて中心部からは遠く、交通の妨げになり得るとして、候補から外されたことが述べられている¹⁴⁹。この意見書では建設予定地選定の際に交通の要衝であることが条件となっていた。だが、ソヴィエト宮殿への「デモンストレーション参加者の入退場並びにその通過」は「モスクワの交通問題と切り離せない一部」と見なされ、この建設予定地に様々な公共交通手段（バス、路面電車、電車、地下鉄）や自動車の乗り入れが想定されている¹⁵⁰。このように 1931 年 5 月の時点では大会ビルの構想をほぼ引き継いで、それを基にして政治ないしはイデオロギー的意味と交通の利便性への配慮が加えられた。

しかし、ヨシフ・スターリン、K. ヴォロシーロフ、ラーザリ・カガノーヴィチらといった党最高

¹⁴⁷ Там же.

¹⁴⁸ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 3, л. 67.

¹⁴⁹ Там же. アホートヌイリヤード以外の候補地とは、1. キタイゴロッド、2. 救世主ハリストス大聖堂の場所、3. ボロートナヤ広場である。

¹⁵⁰ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 3, л. 68-72.

幹部らが出席した1931年6月2日の「ソヴィエト宮殿建設傍聴委員会会合」では、上記の報告書と異なり「救世主ハリストス大聖堂の区画をソヴィエト宮殿の建設地の選択肢として残す」という採択がなされている¹⁵¹。救世主ハリストス大聖堂はそれまでも候補地の1つに挙げられてはいたが、アホートヌイリヤードに比べた場合、中心地からやや離れており、交通の利便性もないと報告されていた。この会合では救世主ハリストス大聖堂をソヴィエト宮殿建設予定地の候補として保留する理由は記されていない。やや先回りになるが、同年6月27日に提出された「ソヴィエト宮殿設計作業プラン」では1. アホートヌイリヤードでのソヴィエト宮殿の設計案を発注—5月20日、2. 救世主ハリストス大聖堂の場所でのソヴィエト宮殿の設計案を発注—7月10日とある¹⁵²。5月20日までは大会ビルとほぼ変わらないかたちで建設予定地を招聘建築家に通達し、それ以降、つまり建設予定地「街区63番」を拡張、もしくは変更したかたちで審議された会合(5月21日付の傍聴委員会会合とそれに付随して発表された建設予定地に関する報告書)と救世主ハリストス大聖堂を「建設予定地の選択肢として保留」となった6月2日での会合を経て、この作業プランが発表されるまでに建設予定地が救世主ハリストス大聖堂跡地に変更されていることがわかる。ではいつ頃に建設予定地が変更されたのであろうか。

この6月27日に提出された報告書から遡って6月18日に建設会議が行った会合では1. ソヴィエト宮殿の建設について、2. ソヴィエト宮殿の競技設計について、3. (競技設計の)賞について、4. 救世主ハリストス大聖堂解体作業の開始について、5. (建設予定地)住民の立ち退きについて、6. (ソヴィエト宮殿建設)組織に関する問題についての6点が審議されている¹⁵³。4の題の通り、この時点で既に建設予定地となるであろう救世主ハリストス大聖堂の解体作業に関する審議が行われているのは興味深い。その中で、「同志クリュコフ(当時の建設局局长:著者註)に数十日間のうちに救世主ハリストス大聖堂の解体手順と期間、並びに大聖堂から芸術的価値あるものの搬出に関する意見書を委員会(建設会議:著者註)へ提出することを求める」とある¹⁵⁴。つまりこの時点では既に建設予定地が決定されているだけでなく、その予定地にある救世主ハリストス大

¹⁵¹ ГАРФ, ф. 3316, оп. 64, д. 562, л. 23.

¹⁵² ГАРФ, ф. 3316, оп. 64, д. 564, л. 32 об.

¹⁵³ ГАРФ, ф. 3316, оп. 64, д. 562, л. 23-26.

¹⁵⁴ ГАРФ, ф. 3316, оп. 64, д. 562, л. 25.

聖堂の解体と芸術作品(絵画、天井画、彫刻等)や装飾で用いられている貴金属類の搬出が審議されている。さらに遡って党最高幹部らが出席し、建設予定地に救世主ハリストス大聖堂を加えるよう指示があった翌日の6月3日付建設局長から建設会議宛の書簡を見てみよう。

建設局局长 M.クリュコフは建設会議のメンバーである A.エヌキツェに対して「近日中に行われる建設会議の会合で以下の問題を提議して頂きたい」と幾つかの項目を取り上げ、その中に「建設作業に必要な建設用資材、用具、機器の割り当て」と「救世主ハリストス大聖堂解体後に残ったすべての建設用資材をソヴィエト宮殿建設局に、金箔と鐘を除いて、組み入れること」が含まれている¹⁵⁵。ここからわかるのは、6月2日の会合では「提案」に過ぎなかった建設予定地候補の救世主ハリストス大聖堂が、その翌日には既に建設予定地として認知されており、さらには建設作業と予定地の撤収作業を既に組み込んだ予定が組まれているということである。おそらく6月2日の傍聴委員会における「救世主ハリストス大聖堂の区画をソヴィエト宮殿の建設地の選択肢として残す」ことは「選択肢として残す」ではなく、ほぼ「決定」と M.クリュコフは解釈したのであろう。それに合わせた物資の手配と建設予定地の撤収を迅速にするため、日を待たずに M.クリュコフは建設会議での実質責任者である A.エヌキツェに建設作業に関する質問提議を建設会議で促したと考えられる。この点は、先に挙げた「幾つかの項目」の中で建設作業に必要な車両(トラック、バイク、軽自動車)を具体的に算出している点にもあらわれている。こうしたことから、候補地が最終的に確定するのは1931年6月2日以降と考えていい¹⁵⁶。提出された設計案の中にはソヴィエト宮殿の建設予定地が、救世主ハリストス大

¹⁵⁵ ГАРФ, ф. 3316, оп. 64, д. 562, л. 16.

¹⁵⁶ Эйгель. К истории построения и сноса Храма Христа Спасителя. С. 30-33 (前注参照). 既に見てきたように、本稿ではソヴィエト宮殿建設予定地に関連した規約の変更過程について指摘した。I.エイゲリの論文からも、ソヴィエト宮殿競技設計準備段階の当初において、救世主ハリストス大聖堂の場所は建設予定地として有力な候補地とはされていなかったという事実を知ることができる。このことは ASNOVA がソヴィエト宮殿建設局に宛てた1931年6月8日付の書簡で「大会宮殿建設のための区画に関して ASNOVA が提出した救世主ハリストス大聖堂の場所を当該建築物の建設予定地とするという提案は、1931年6月2日付のソ連政府の決議を考慮すると、実現されると建設会議は考えている」という点からも裏付けることが可能である(ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 19, л. 63.)。下斗米も同じく、エヴゲーニヤ・キリチェンコの論(Кириченко Е.И. Храм Христа Спасителя в Москве. История проектирования и создания собора. Страницы жизни и гибели 1813—1931. М., 1992. С. 235.)を援用しつつ、6月2日に救世主ハリストス大聖堂が建設予定地として最終的に決定したとしている(下斗米伸夫著『スターリンと都市モスクワ』岩波書店、1994年、54頁)。こうしたことを受けて、1931年6月8日移行に準備段階へ提出された設計案のいくつかでは建設予定地が変更されている(ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 2, л. 101; ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 2, л. 102; ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 2, л. 106.)。

聖堂跡地でないものが含まれている¹⁵⁷。

この準備段階当初に(1931年3月30日)で予定していた建築家は5名で¹⁵⁸、後にヴェスニン兄弟が加えられている¹⁵⁹。1931年4月17日付けのソヴィエト宮殿に関する通達では、ソヴィエト宮殿建設局が正式にソヴィエト宮殿建設競技設計を開催する旨、その事前段階として個々の建築家に設計案を発注すること、4月25日までに発注の承認を届け出ること等が記され、各々の建築家と建築団体が宛先となっている¹⁶⁰。つまり、この通達が出された段階が、ソヴィエト宮殿競技設計の事前段階の始まりと考えてよいであろう。この4月17日付け通達でその宛先となり招聘されているのは4つの建築団体と7名の建築家である¹⁶¹。しかし最終的に1931年7月19日付の「エスキースによるソヴィエト宮殿事前設計案のリスト」によれば、総勢15名の建築家あるいは建築団体が設計案を提出している¹⁶²。

1 巡目である準備段階に提出された設計案を概観してみると、プログラムに従って、デモンストレーションと訪問者の動線を重視した配置計画が多い。また施設配置＝建築物のヴォリューム構成からも特徴付けが可能である。このことに焦点をあててみると、4つのタイプにおおよそ分類できる。1 1つ目は建築物の周囲に広場ないしは通路を設置し、建築物内部へ訪問者とデモンストレーションを導くもの、2 2つ目はいくつかの建物の間に広場ないしはデモンストレーション用の通路を設けているもの、3 3つ目は単一の建築物としてその収容規模ないしは建築物の設備を充実させたもの、4 4つ目は複合建築群を形

¹⁵⁷ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 2, л. 21.

¹⁵⁸ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 4, л. 3. この5名とは1. V.シチューコ、2. A.シチューセフ、3. M.チェルヌイシエフ、4. B.イオフアン、5. 若手建築家グループの中から1人である。

¹⁵⁹ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 3, л. 65.

¹⁶⁰ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 19, л. 29-30.

¹⁶¹ Там же. この宛先には M.チェルヌイシエフが除かれ、G.リュードヴィグ、N.ラドフスキイ、A.ニコリスキイ、MOVANO (全連邦建築科学協会モスクワ州支部: Московское областное отделение Всесоюзного архитектурно-научного общества)、ARU、VOPRA、ASA (原文ママ: OSA のスペルミスと思われる(著者註))、ヴェスニン兄弟が含まれている。ここに、最終的に準備段階に自らの設計案を提出した B.イオフアンとクラシンは含まれていない。その代わりに彼らは建設局のメンバー、つまり組織者として言及されている。また建設局は I.ジョルトフスキイを含めていないが、建設局長 M.クリュコフがソヴィエト宮殿の建設予定地の変更に同意を求めており、建設局名義ではなく個人として彼に設計案の提出ではなく建設の依頼を行っている。

¹⁶² ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 2, л. 21. 最終的に建設局が要請したのは B.イオフアン、A.ニコリスキイ、N.ラドフスキイ、LOVANO (代表者ローゼンブリューム: 全連邦建築科学協会レニングラード州支部: ЛОВАНО)、ASNOVA、VOPRA、ARU、OSA である。このリストは GIM (国立歴史博物館) によって作成されたもので、そのリストには1931年7月13日にエスキース設計案が展示されると記されている(ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 11, л. 45.)。その後の同年8月20日に全連邦建設美術館の施設で巡回され、常設展示として設計案は保存された(ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 2, л. 20.)。

成しそれぞれの建築物に各種の機能を振り分けているものという分類である。1 つの設計案がいくつかの分類に重なる場合もあるが、この分類によってそれぞれの建築家ないしは建築団体の共通点を見出すことができる(表 1)。

表 1: ソヴィエト宮殿競技設計 1 巡目(準備段階)で提出された設計案の分類(1)

a. 建築物周囲に広場や通路によって建築物内部へ訪問者とデモンストレーションを導くもの。	b. 建築物間に広場ないしはデモンストレーション用の通路を設けているもの。	c. 単一の建築物をソヴィエト宮殿としてその収容規模ないしは建築物の設備を充実させたもの。	d. 複合建築群を形成しそれぞれの建築物に各種の機能を振り分けているもの。
ASNOVA、VOPRA、N.ラドフスキイ。	B.イオフアン、D.イオフアン。	※表 2 にて分類	ARU、A.シチューセフ。

1 つ目のカテゴリー(a)に分類できるのは ASNOVA、VOPRA、N.ラドフスキイらの設計案である。ASNOVA の設計案(以下 ASNOVA (b) 案: 図 41、42、43)ではソヴィエト宮殿本館は立方体となっており、壁面には V.レーニンが前方を指差し民衆を導くレリーフがある。これは建物内部とヴォルホンカ通り(西側)を結ぶ橋を直結させるためであり、アプローチには複雑な螺旋状の傾斜路が設定されている。この傾斜路は通りを結ぶ橋と同じく建築物内部にまで螺旋状で続き、そのまま大ホール下までの通路となり、デモンストレーションの動線とホールの利便性や有用性に応じた空間構成である。VOPRA の設計案(以下 VOPRA (c) 案: 図 44、45、46)では楕円形状のソヴィエト宮殿本館が大聖堂跡地に配置され、この建物を中心に赤の広場からモホヴァヤ通りへと至るデモンストレーションの流れを誘導する動線に合わせて設計されている。ボロヴィツカヤ広場(北側)からソヴィエト宮殿本館までの空間が傾斜状の広場となっており、その脇のプレチステンスカヤ河岸通り沿い(東側)にはいくつかの棟がある。これらの棟には広場側(北側)と沿岸側(東側)に出入り口があり、「傾斜部分に(デモンストレーションの)広場全体が含まれることになり、一方で全ての傾斜部分にある大会用ホールはデモンストレーション参加者に対して開かれている」¹⁶³。本館を含めたこれらの建築群を上空から見ると、ラテン文字の J をかたどるように配置され、本館に至るデモンストレーションの動線や本館を取り巻く建築群と広場の構成は、ASNOVA (b) 案と比べて、より整然とした印象を受ける。

¹⁶³ ВОПРА Дворец Советов // Советская архитектура. 1931. № 4. С. 49.

ラドフスキイの設計案(以下ラドフスキイ(a)案: 図 47、48、49)では、クロポトキンスカヤ広場(南西部)と隣接する大聖堂の敷地(南側)に幹部会並びにプレスや代表団用の棟が配置され、大聖堂の場所に大小ホールを含む本館、ソイモノフスキイ通り(南側)とモスクワ沿岸通り(東側)が交差する部分の脇に本館と空中部分の渡り廊下で結ばれている高層の棟がある。デモンストレーション用広場は設置されていないが、ASNOVA(b)案や VOPRA(c)案のように、デモンストレーションあるいは訪問者を建築物内部へと誘導するためのスロープ状の回廊が設置されている(図 49)。20,000 人を収容する大ホールで大規模なデモンストレーションや会合が行えるように舞台とバルコニー観覧席の距離が広くとられ、外観だけでなく大ホールの空間構成も ASNOVA(b)案や VOPRA(c)案と異なっている。これらの設計案では、本館を取り巻く傾斜路や広場によってデモンストレーションや訪問者を誘導し、大ホールの観客とデモンストレーション参加者が対面できるように配置されている。

2 つ目のカテゴリー(b)に分類できるのは、D.イオフアン、B.イオフアンの設計案である。D.イオフアンの設計案(以下 D.イオフアン案: 図 50、51、52)はアホートヌイ・リヤードを建設予定地として、革命広場側(北側)に小ホールを含む棟、南側には大ホールを含む棟、その間に古代のスタジアムのようなデモンストレーション用の空間(広場と通路)をとっていることが大きな特徴である。北側の小ホールを含む建築物の両脇には柱廊をもった導入通路が突き出して、小広場が形成されている。B.イオフアンの設計案(以下イオフアン(a)案: 図 53、54、55)ではメインとなる大ホールを含む建築物が救世主ハリストス大聖堂跡地に配置され、ボロヴィツカヤ広場とヴォルホンカ通りの一部、レニフカ通りとレビヤジ通りから成る区画(北側)に小ホールを含む棟を配置し、両建築物の間に位置する空間はデモンストレーション用の広場となる。この広場には両建築物とつながる柱廊があるため、芸術美術館(現プーシキン記念現代美術館)側(西側)が広場への入口となる。芸術美術館の両脇(北側と南側)、ソイモノフスキイ通りの脇(南側)に通りを新たに設けることでデモンストレーションの流れを分散させて、敷地を超えた地区の整備計画に踏み込んでいるのも特徴的である(図 55)。このホール内広場と観客席の間にヴォルホンカ通り(西側)とプレチステンスカヤ河岸通り(東側)から直接建築物内を通過する弧状の通行路がある。この 2 つの設計案で特徴的なのは、大ホールを含む建築物と

小ホールを含む建築物の間にはデモンストレーション用の広場が設置され、この広場が建築物内へと誘導する機能を果たしている点である。一見すると、1 つ目のカテゴリとあまり変わりはない。しかし、広場を取り囲む回廊によって分離された建築物がつながられ、建築物の面積が大幅に割かれている点で大きく異なる。また、この回廊中央にスカイスクレーパーを思い起こさせる塔屋があり、その頂部には労働者と思しき像が据えられている。この意匠は後に実施設計案で V.レーニンの像をのせたかたちとなって再び設計案に反映される。

3 つ目のカテゴリ(c)には多くの設計案が含まれる(表 2)。

表 2: ソヴィエト宮殿競技設計 1 巡目(準備段階)で提出された設計案の分類(2)

c. 単一の建築物をソヴィエト宮殿としてその収容規模ないしは建築物の設備を充実させたもの。			
1. キューポラ(ドーム)型。	2. 段状型。	3. スタジアム型。	4. 直方型。
N.ラドフスキイ、SASS の設計案(建設予定地:レーニン丘)。	クツァーエフとクラーション、G.リュードヴィグ、ローゼンブリューム。	ブロンシテイン、フィードマン。	ニコリスキイ、SASS の設計案(建設予定地:ハリストス大聖堂)。

このカテゴリの中でさらに形態別では、キューポラ(ドーム)型(c-1)、段状型(c-2)、スタジアム型(c-3)と直方型(c-4)に細かくタイプを分類できよう。球もしくは楕円型に含まれるのは N.ラドフスキイとレーニン丘を建設予定地とした SASS(以下 SASS(a)案: 図 56、57、58)らの設計案、段状型にはクツァーエフとクラーション(以下クラーション(a)案: 図 59、60、61)、G.リュードヴィグ(以下リュードヴィグ(b)案: 図 62、63、64)、ローゼンブリュームの設計案(以下ローゼンブリューム案: 図 65、66)、スタジアム型にはブロンシテイン(以下ブロンシテイン案: 図 67、68)とフィードマン(以下フィードマン案: 図 69、70)らの設計案、直方型にはニコリスキイ(以下ニコリスキイ案: 図 71、72、73)と救世主ハリストス大聖堂を建設予定地とした SASS(以下 SASS(b)案: 図 74、75、76)の設計案である。

球もしくは楕円型(c-1)に分類されるラドフスキイ(a)案で大ホールのバルコニー上部は、開閉可能の窓の外側は遮光板で覆われる(図 49)。SASS(a)案では大ホールのみ

立面図が提示され、全体的に見た建築物の配置関係が記されていない。大ホールを含む建築物は半球形の屋根が地表を覆う空間によって形成され、その内部空間の地階に円形劇場のステージを設置し、観客席は地上階に向かって階段状になり、その周囲を通路が取り巻く形となる。小ホールの立面図はないが、位置関係からして地下に埋め込まれていると考えられる。

段状型(c-2)で特徴的なのは、1階にメインの大ホールを配置し、その周囲に各種施設を配置し、ホール天井部分を丸屋根もしくは段状にしている点であろう。ローゼンブリューム案では入口正面側(北側)が半円型で、下層階に大小ホール、3階より上の階にロビー、休憩所、簡易食堂、映画及びオーケストラ用ホール、屋上階には飛行場施設が配置される。そのため、屋上部分は陸屋根となる。リュードヴィグ(b)案では、中央に配置された建物を基にして等間隔で5つの棟が隣接し、上空から見た場合星型のピラミッド形態になる。円形の建築物は大ホールを収容し、その周囲を通路が取り巻き、ホール上部はやや上に引き伸ばされた段状キューポラである。

スタジアム型(c-3)に分類されるブロンシテイン案では大小ホールを収容する建物は、その一部が「油圧装置で持ち上がる壁」¹⁶⁴によって構成される。北側(クレムリン側)に比べて南側(ソイモノフスキイ通り側)がやや幅広く、スタジアムのようなかたちとなる。フィードマン案では横に長く展開された20,000人収容のスタジアム型の形態を取り、ホールは障壁によって3つに分割され、仕切りによって分割される前の形態はスタジアムのようなかたちである。

直方型(c-4)のニコリスキイ案では北側に本館が配置され、建物上部はテントのような膜構造で(図72)、この円錐型の天井をつなぎ梁で留め、周囲は円型の壁となる。この外壁をシリンダー状の支柱が支える構造である。この建築物の南側には長方形の建築物が配置され上階は通路によって本館とつながる。しかし、これらのタイプではいずれの設計案も下階に設置される大ホールの規模が大きいため高さよりも建築物自体の重厚さが強調される。4つ目のカテゴリー(d)ではSASS(b)案(図74、75、76)、ARU(ARU(b)案: 図77、78、79)とA.シチューセフ(シチューセフ(a)案: 図80、81、82)の設計案が当てはまる。SASS(b)案では正方形の建築物にホールが配置され、隣接する

¹⁶⁴ Бюллетень Управления строительством Дворца Советов (前注9参照). С. 18.

広場が円形劇場の舞台となる。建築物自体は台形の形態をとっており、ガラスと鉄鋼によって構成され、周囲に大きな照明塔が配置されているため、照明を意識した構成となっている。ARU(b)案では明確にホールと代表団用施設が分離され、デモンストレーション広場がその間に配置されるが、それぞれの建築物は渡り廊下や通路によって連結されているわけではない。だが、デモンストレーション用広場が各種の建築物をつなぐ役割を果たしているのが特徴的だ。シチューセフ(a)案では、ARU(b)案と比べて、用途ごとに棟が分かれているため、いくつかの施設から成る建築物の集合体のような印象を与える。

このように4つのタイプに分類はできるが、1巡目に提出された設計案の多くではデモンストレーション用広場もしくはそれに該当するような広場を中心に構成されている。競技設計プログラムの「ソヴィエト宮殿に集まった人々は会議ホールに続く通路を通じて街頭のデモンストレーションと出会う」空間構造が重視され、設計案でその位置付けが中心課題として受け止められていた。この点と比べて、「モニュメンタルな建築形態」に関してあまり注意が払われていない。このことを裏付けるように建設局の評価では「設計者のイデオロギー的傾向に関係なく、ほとんどの設計案において真剣に課題が提起されていない—機能的な設計案を基に論理的かつ厳密で、プロポーションにおいて調和の取れた建築的フォルムを見出さなければならない」¹⁶⁵と建築物の外観に関するさらなる要求が付されている。ここから、設計者と主催者で「ソヴィエト宮殿」に求めるイメージに隔たりが生じていたことが理解できる。主催者は空間構造に関して言及したものの、結果として建築物の形態を重視した。これは、準備段階後の度重なる競技設計で「モニュメンタルな建築形態」というソヴィエト宮殿に適ったイメージを導こうとする傾向を示唆するものだ。

2-3. 国際競技設計（全ソヴィエト競技設計、2巡目）

2巡目である国際競技設計のプログラムが公になるのは1931年7月18日付『プラヴダ』、『イズヴェスチヤ』紙上においてであるが、6月21日の時点で建設局長 M.クリュコ

¹⁶⁵ Там же. С. 1.

フがそのプログラムを発表している¹⁶⁶。1巡目と比較して、建設地とソヴィエト宮殿の構成が明記されている点が異なる。建設予定地は「モスクワ河沿岸地区、ヴォルホンカ通りの拡張を伴う救世主ハリストス大聖堂の区域、レニフカ通りまで隣接する救世主ハリストス大聖堂撤去を伴い、最終的にはアレクサンドロフスキ庭園までの区域が選ばれた」¹⁶⁷。既に述べてきたが、1巡目では最終的に候補地はアホートヌイリヤードとしながらも、いくつかの設計案では救世主ハリストス大聖堂以外の場所が選定されていた。このことに加えて、救世主ハリストス大聖堂を建設予定地とする設計案においてもその敷地の範囲が定められていなかった。また1巡目ではソヴィエト宮殿の構成は10,000人と5,000人を収容するホールを中心としていたが、設計案によって構成は様々であり、収容数も一定ではなかった。2巡目の規定によれば、15,000人収容のホールを含むAグループ、5,000人収容のホールを含むBグループ、2つの500人収容ホールと2つの200人収容ホールを含むBグループと隣接するBグループ、守衛室と管理設備等を含むΓグループの4つの機能グループがソヴィエト宮殿を構成している¹⁶⁸。この点に加えて、「共用ホールは全域にわたる照明がなければならず、上部からの光源でもよく」、「音響に考慮しなければならない」と記されている¹⁶⁹。一方で「建築物の規模はプログラムによって規定されない」¹⁷⁰ため、建築物の外観について厳密な指示はないが、「社会主義建設への労働者の意思を具現化した時代の特質、建築物の特殊な名称、ソ連の首都における建築芸術的な記念碑としての意義に相応する」¹⁷¹外観とするようにと付け加えられている。建築物の建設予定地、備えるべき施設と機能そしてそれぞれの収容数といった構成は定められたものの、外観や建築材料についてはソヴィエト宮殿の名称に「相応しいもの」とする以外は、設計者に委ねられた。

次に競技設計案に対する要求事項を挙げてみる。設計図書は「指定の区域に配置された建築物を示し、動線を書き加え、隣接地区の概略図を前提とした1:2,000の」全体配置図、「1:400の建築物のプラン」、「1:200の正面図、1:400の側面図」「建築物のパースペクティブ」、「説明書」と「設計者の名前と住所を記した応募名が刻印された封筒」か

¹⁶⁶ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 2, л. 4-6.

¹⁶⁷ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 2, л. 1 об.

¹⁶⁸ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 2, л. 4-6 об.

¹⁶⁹ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 2, л. 4.

¹⁷⁰ Там же.

¹⁷¹ Там же.

ら構成される¹⁷²。

1 巡目では、主催者が指名した建築家による応募のみだったが、2 巡目はソ連国内外からの一般公募による競技設計と建設局が招聘した設計案(主に国外の有名建築家による)から成り、一般公募はソ連全土のみならず、国外にもその対象を広げている¹⁷³。1931 年の 8 月 15 日までに応募者は自らの住所を建設局に伝え、国外での宣伝は建設局が各国の全権代表またはそれに準ずる担当者を通じて行ったため、国内(7 月 18 日)と比べて1ヶ月程遅れて8 月半ばに告知され、提出期限は、海外発送を考慮し、国内の応募者(12 月 15 日)よりも逆に早く 12 月 1 日に設定されている¹⁷⁴。国外から応募する建築家たちにとって、ソ連国内の応募者よりも極めて不利な制作条件であった。また、国外応募者への告知は各国のソ連全権代表に委ねられたためか、アメリカのケストナーには 8 月半ばに告知されているのに、フランスのル・コルビュジエには 9 月 2 日であるというなばらつきが生じている。一方で、国内での設計案の締め切りは同年の 10 月 1 日までとされていたが¹⁷⁵、後に同年 11 月 20 日、最終的には 12 月 15 日までと締め切りが延長されている¹⁷⁶。

競技設計では、まず技術審査委員会に設計資料が託され、審議が行われる。「モスクワ市の建築プロジェクト・ソヴィエト宮殿の評価に関する技術審査委員会の作業に関する指示」では、「あらゆる観点から提出された設計資料を検討するため 7 つのグループを技術審査委員会付属で設置」¹⁷⁷し、このグループの評価やコメントに基づいて最終的

¹⁷² ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 2, л. 3.

¹⁷³ 本文では国外でのソヴィエト宮殿競技設計に関する一般公募告知については割愛するが、註-で触れるように、国内での告知よりも約 1 ヶ月程遅れて国外では告知された。また募集要項に関しても情報が少なくルートヴィヒ・ヒルベルザイマーやナウム・ガボ(ドイツ)、ヨハネス B. ローゲム(オランダ)、アルフレッド・ケストナー(アメリカ)から競技設計の応募に関する問い合わせが送られている(ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 10, л. 49, 112, 120, 215.)。

¹⁷⁴ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 10, л. 209.

¹⁷⁵ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 2, л. 2 об.

¹⁷⁶ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 2, л. 36; ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 2, л. 116. 1931 年 7 月 28 日付のソヴィエト宮殿建設会議の指示によれば、同年 11 月 20 日までに設計案の提出期限が引き延ばされている(ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 2, л. 36.)。設計者達が設計するための期間(3 ヶ月)が短いことから、同年の 8 月 17 日に建設局は建設会議に対して設計案の提出期限を引き延ばすよう請願している(ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 2, л. 116.)。実際にドイツの建築家 L. ヒルベルザイマーは、「外国プレスに出た(ソヴィエト宮殿の競技設計に関する: 著者註)情報は非常に少なく、またかなり遅れて伝えられたため」、建設局に対して提出期限の延長を直接依頼している(ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 10, л. 112.)。この競技設計で 2 等を受賞する A. ケストナーも「ロシアの告知よりもアメリカの建築家達は 1 ヶ月遅れて競技設計プログラムを知った」ため、提出期限の延長を願っている(ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 10, л. 215.)。最終的にこうした請願は受け入れられることとなる。

¹⁷⁷ РГАЛИ, ф. 1981, оп. 1, д. 50, л. 15-16. この 7 つのグループは以下の通りである: 建設建築グループ 1. M.V. クリュコフ、V.A. ヴェスニン、P.P. ロッテルト、V.N. ヤコヴレフ、I.D. シャドルーイヴァノフ、A.N. サロフ、M.A. ルドニク(書記)、2. I.P. マシコフ、V.N. セミョーノフ、I.S. パヴロフ、F.S. ボゴロツキイ、S.D. タフセー

に技術審査委員会が提出された設計案の評価を下す。この委員会で全ての設計資料は「1. 受賞に値する設計案、2. 奨励もしくは推薦にふさわしい設計案、3. それ以外の全ての設計案」というかたちで 3 つに分類される。また「依頼を受けた設計案は競技設計に参加しないが、他の残りの設計案と共に審査を受ける」¹⁷⁸と項目を改めて記載されている。技術審査委員会が 1. に分類した設計案から、つまり「建設する際に応用が可能という観点から」賞が選出され、1 等には 10,000 ルーブル(3 案)、2 等には 5,000 ルーブル(5 案)、3 等には 3,000 ルーブル(5 案)が与えられ、受賞案以外に「課題の条件に十分に応えたと認められる」設計案には 1,000 ルーブルを授与する規定が設けられている¹⁷⁹。一方でソ連国外から招聘された設計案は、1 つの設計案に対して平均 3,000 アメリカドルで発注することが提案されている¹⁸⁰。さらに、本章で指摘したように、1 巡目以前の大会ビル競技設計の構想時では、2 巡目後に次の段階として非公開競技設計を計画しており、この構想を基に 1 巡目と 2 巡目は行われた。こうしたことを考慮すると 2 巡目の公開競技設計では最終的な決定を下さないと主催者は当初から考えていたと思われる。

次に 2 巡目に提出され、受賞した設計案と招聘された設計案の分析を行うが、まずは招聘されたソ連国外の建築家がどのような基準で選定されたのか考察する。そこで、公開競技設計とはいえ、建設局が予めソヴィエト宮殿に求めている建築的イメージを知ることが出来る。

エフ、V.A.ブラノフ、S.A.カウフマン（書記）、3. S.V.ベリャエフ、A.V.シチューセフ、A.G.コゼルコフ、G.V.ジノヴィエフ、F.K.レフト、E.E.カリーニン、P.I.アンチノフ（書記）；ワーキング（設計図下案）グループ 1. R.G.ルーベン、A.N.トルストイ、A.A.ファージェエフ、V.N.ザソプキン（書記）、2. A.F.ロレイト、L.K.マルテンコ、G.A.ガルブノフ（コンサルト）、S.Ya.リープシッツ（コンサルト）、V.N.オブラツォフ（コンサルト）、N.S.ストレルツキイ（コンサルト）I.S.カンネリソン（コンサルト）、3. I.D.フェルスマン、V.M.メラウーク、V.P.ネクラソフ（コンサルト）、A.P.ペヴスネル（コンサルト）、ラブシン（書記）；視覚部門 A.V.ルナチャルスキイ、V.E.メイエルホリド、K.S.スタニスラフスキイ（コンサルト）、B.L.ヤヴォルスキイ（コンサルト）、A.V.コロブコ（書記）。

¹⁷⁸ Там же.

¹⁷⁹ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 2, л. 3. 本文にある「課題の条件に十分に応えたと認められる」設計案は佳作に該当するものと思われる。またこの「佳作」に関して、建設局は当初 30 の設計案を選抜することを見込んでいる（ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 2, л. 3.）。

¹⁸⁰ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 10, л. 23. こうした総額は招聘した建築家によって隔たりがある。例えば、フランスの建築家であるコルビュジェと A.ペレはそれぞれ上記総額の半額（1,500 アメリカドル）で設計案の作成に同意している（ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 10, л. 144.）。アメリカの建築家 T.ラムとノーマン・ベルの設計案に対してはフランスの建築家よりも遥かに多く、それぞれ 10,000 アメリカドルを支払うことが提案されている（ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 10, л. 209.）。2 巡目終了後、招聘建築家及び本文で触れた「課題の条件に十分に応えたと認められる」設計案（「佳作」該当の設計案）作成者（サイモン・ブレイネス、パーシバル・グッドマン、ニコライ・ヴァシーリエフ：いずれもアメリカ）に対してソ連人民委員会代表 V.モロトフ名義での支払いの通達が建設局に対して出されている（ГАРФ, ф. 5446, оп. 13a, д. 823, л. 5-9, 21-21 об.）。

当初、建設局が上位機関にあたるソヴィエト宮殿建設会議に報告した招聘予定の外国人建築家リストには、7カ国から19名の建築家がリストアップされている¹⁸¹。このリストに名を連ねているのは主に1910年代から20年代後半までにヨーロッパで有名だった建築家達である。その中でも、競技設計翌年に出版される『今日の西欧建築』の中で「現代建築家」として紹介されていたのは、ワルター・グロピウス、ル・コルビュジェ、フランク・ロイド・ライト、リチャード・ノイトラ、ヨハネス・ペーテルス・アウトであった¹⁸²。先行研究では、2巡目における競技設計の結果によって歴史主義建築に依拠した設計案の作成が求められていくと述べられがちだったが、この招聘リストからは、開始時点においては建設局内に当時の「現代建築」（近代主義建築）をソヴィエト宮殿に反映させようとする意向もあったと言える。しかし、例えば、イタリアからアルマンド・ブラジエーニとマルチェロ・ピヤチェンティーニが候補に挙げられている点を鑑みると、「現代建築」のみを推し進めていたとは言いがたい。この2人の建築家は歴史主義建築に立脚した折衷様式を用いて、イタリアで自らの作風を確立していた建築家である。またハンス・ペルツィヒやエーリッヒ・メンデルゾーンは1920年代のドイツにおける表現主義建築の旗手であり、ラグナル・エストベリに至っては1920年代初期にスウェーデンで生じた民族主義的ロマンチズムの先駆者であった。従って、こうした招聘建築家の選定基準は、特に定まったものではなかったと考えられる。強いて挙げるとすれば、この競技設計の6年後（1937年）に開催される第1回ソヴィエト建築家同盟大会で国外から招聘を予定していた建築家のリストと類似している。すなわち「当該国内で建設・建築界に権威のあるもの」（a）、「一世代前の有名建築家」（b）、「近代主義建築を信奉する建築家」（c）、「ソ連に友好的な建築家」（d）という分類である¹⁸³。建築家同盟大会のリスト（b）のオーギュスト・ペレとM.ピヤチェンティーニと（c）のル・コルビュジェとW.グロピウス、これらの分類に含まれないトーマス・ラムといった建築家達がこの競技設計招聘リストに含まれているため、1920年代にヨーロッパで勃興した様々な建築潮流のそれぞれにおける旗振り役と考えられた建築家が選ばれ

¹⁸¹ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 10, л. 13. このリストに記載されているのは、ペーター・ペーレンス、H.ペルツィヒ、W.グロピウス、マックス・リットマン、リチャード・カウフマン（ドイツ）、ヴィクトール・ラルー、A.ペレ、ル・コルビュジェ（フランス）、ヘイマンス（ベルギー）、A.ブランジエーニ、M.ピヤチェンティーニ（イタリア）、ザイデンバーグ、F.L.ライト、リチャード・ノイトラ、N.ベル（アメリカ）、ヤン・ヴィルス、J.J.P.アウト（オランダ）、L.エストベリ（スウェーデン）である。

¹⁸² Аркин Д. Архитектура современного Запада. М., 1934.

¹⁸³ РГАЛИ, ф. 674, оп. 2, д. 47, л. 30, 32.

たといえる。建築家の中で、最終的に設計案を提出することになるのが、H.ペルツイヒ、E.メンデルゾーン、W.グロピウス、コルビュジェ、A.ペレ、A.ブラジーニ、T.ラム(アメリカ)、ジョセフ・アーバン(アメリカ)の8名であった¹⁸⁴。国外の建築家による招聘設計案に加えて、準備段階にて設計案を提出したクラージンも招聘設計案として自らの作品を提出している。

次に2巡目における受賞設計案について分析してみよう。招聘設計案と異なり、受賞設計案は本来「建設の際に、設計案が実際に応用できるという観点で [...]賞を決める」¹⁸⁵ことになっていた。つまり最終の実施設計に反映出来る案かどうかという点が重視されていたように思われる。結果として審査員の満足のいく設計案はなかったが、16の設計案が受賞に値するものとして選ばれた(最優秀賞-3案、1等賞-3案、2等賞-5案、3等賞-5案)。以下、その内訳は最優秀賞案：1. H.ハミルトン(アメリカ)、2. B.イオフアン、3. I.ジョルトフスキイ、1等賞案：1. K.アラビヤンとV.シンビルツェフ、2. Ya. ドジツァとA.ドゥーシキン、3. A. ジューコフとD.チェチュリン、2等賞案：1. UOPRA (VOPRA ハリコフ支部：G.アガピエフ、Yu.アフナーシェフ等)、2. G.ヴオリフェンゾーンとZ.ローゼンフェリド、3. A.ヴラーソフ指導の学生グループ「VASI」、4. A.ケストナーとO.ストナロフ(アメリカ)、5. I.ラングバルト、3等賞案：1. 「VASI」(応募名「5181040」)、2. 「VASI」(応募名「40」)、3. G.ゴーリッツ、I.ソヴォレフ、M.パルスニコフ、4. I.リハチョフ、5. A.クズネツォフ指導特別作業班である。この中で最優秀賞は競技設計告知の際には含まれておらず、この3案は競技設計外から選抜されたものである。また、招聘案はその内容にかかわらず、競技設計に参加しない、つまり授賞対象とならないとされた。

『モスクワの建設』誌において、建築家ニコライ・ザプレーチン(審査員ではない)は「1. 1つの建築物に大小ホールを収め、共通のホールで両ホールが結ばれているもの、2. 主要ホール(大ホールと小ホール)を一方のホールの上に配置し1つの建築物にまとめ

¹⁸⁴ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 10, л. 37, 39, 40. L.エストベリもこの8名と同様に設計案の依頼を受け、それに対する謝礼の交渉が行われているが、彼は最終的に設計案を提出していない。J.L.コーエンによれば建設局が提示した謝礼とL.エストベリが要求する額の折合いが付かず、彼への依頼は破談となったとしている

(Jean-Louis Cohen, *Le Corbusier and the Mystique of the USSR: Theories and Projects for Moscow, 1928-1936* (Princeton: Princeton University Press, 1991), p. 168)。

¹⁸⁵ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 2, л. 3.

るもの、3. 主要ホールが1つの建築物に収められているが、1つのホールとして結びついていないもの、4. 主要ホールが2つの別々の建築物に収められ、共通の建築コンポジションによって結び付けられているもの」と招聘案と受賞案を4つに分類している¹⁸⁶。競技設計の規定で記されたとおり、ソヴィエト宮殿で主眼が置かれているのは、大小2つのホールである。1巡目ではこの2つのホールの位置付けや機能性は明確に規定されておらず、他の機能も重要視されていたことに加えて、建設予定地も正式に定められていなかった。そのため核となる構成要素の配置が曖昧となり、ソヴィエト宮殿そのものの機能をいくつかの棟に分散するという手法が1巡目のARU(b)案やシチューセフ(a)案で見られた。そのため、2巡目では建設予定地の確定と施設に関する規定によってソヴィエト宮殿が備える機能の優先順位が与えられ、建築物自体が1つの総体としてまとまるように意図された。こうしたことから、N.ザプレーチンの分類を基に受賞案と招聘案をさらに細分化して分類をしてみると以下のようになる(表3)。

表3: ソヴィエト宮殿競技設計2巡目に提出された招聘案と受賞設計案の分類

1. 1つの建物に大ホールと小ホールがあり、両者を1つにすることが可能。	
1-1. 大小ホールを対面で配置。中央の建築物が一方のホールを遮断した形。	1-2. 大小ホールを対面で配置。中央に高さの異なる建築物は用いられず。
E.メンデルゾーン、A.ドゥーシキンとYa.ドジツア、A.クゾネツォフ指導の特別作業班。	UOPRA、A.ケストナーとO.ストナロフ。

2. 1つの建物に大ホールと小ホールがあり、上下に配置。		3. 1つの建物に大ホールと小ホールがあるが、1つになっていない。	
2-1. 技術的側面を打ち出したもの。	2-2. シンボリック側面を強く打ち出したもの。	3-1. 機能性(訪問者の動線)を重視したもの。	3-2. 視覚性(装飾や外観、訪問者に与える印象)を重視したもの。
G.クラージン。		W.グロピウス。	A.ブラジーニ。

4. 異なる建物に大ホールと小ホールを配置。		
4-1. 袖部のような通路状の建築物によって大小ホールがつながっており、北側から大ホールの入口に至るまで大きな広場を配置。	4-2. 大小ホールそれぞれの間には東西の通りに沿って中庭もしくは通路を囲い込むような2つの袖状の建築物が形成されている。	4-3. 大小ホール建築物の中間に位置する広場ないしは通路が広い。

¹⁸⁶ Заплетин Н. Переломный этап пролетарской архитектуры (по материалам комиссии технической экспертизы) // Строительство Москвы. 1932. № 3. С. 18.

K.アラビヤンとV.シンビルツェフ、G.ヴォリフェンゾーン、A.ヴラーソフ指導の「VASI」、「VASI」(応募名「518 1040」)、「VASI」(応募名「40」)、I.リハチョフ。	I.ジヨルトフスキイ、B.イオフアン、A.ジューコフと D.チェチュリン、G.ゴーリツツ。	コルビュジェ、O.ペレ、H.ペルツィヒ、J.アーバン、T.ラム、H.ハミルトン。
---	---	--

N.ザプレーチンによれば、1 の分類に当てはまるのは、UOPRA (VOPRA ハリコフ支部:G.アガピエフ、Yu.アフナーシェフ等) (以下 UOPRA 案:図 83、84、85)、A.クズネツォフ指導の特別作業班(以下クズネツォフ案:図 86、87、88)、A.ドゥーシキンと Ya.ドジツア(以下ドゥーシキン(a)案:図 89、90、91)、A.ケストナーと O.ストナロフ(以下ケストナー案:図 92、93、94)、E.メンデルゾーン(以下メンデルゾーン案:図 95、96、97)らの設計案である。これらの設計案は、建築物全体が長円形平面に収められているメンデルゾーン案(図 95、96、97)、ドゥーシキン(a)案(図 89、90、91)、クズネツォフ案(図 86、87、88)を 1-1、台形ないしは扇形を基にしたケストナー案(図 92、93、94)そして UOPRA 案(図 83、84、85)を 1-2 とさらに 2 つに分類することが可能であろう。前者(1-1)は大小ホールの部分が中央舞台をはさんで向かい合うように配置され、この両ホールに共有の中央舞台は、ホールのキューポラよりも一層高いヴォリューム(フライタワー)となっている。両ホールの観客席はアンフィシアター状のオーソドックスなものが採用されているという構成も、これらの案では共通している。ホール部分の屋根は、メンデルゾーン案では半球形キューポラが用いられ、ドゥーシキン(a)案、クズネツォフ案では陸屋根となっている。後者(1-2)は前者とやや異なり、大小ホールは共通の屋根を持ち、中央に高さの異なるヴォリュームは用いられていない。そのため 1 つの建築物としての印象をより強めている。これに該当するケストナー案と UOPRA 案は、舞台から観客席に向かって天井が高くなっていく断面形で、もコンパクトであるため、「最もよい音響の環境を実現するための」設計案として挙げられている¹⁸⁷。1-1 に分類された設計案の天井形状は音響効果への配慮が十分ではないと判断されたのかもしれない。この 1 の分類に当てはまる設計案は、ファサードに装飾が施されておらず、垂直状と水平状の簡素な分節となっているだけで、ドゥーシキン(a)案における北側正面の 1 階の列柱とクズネツォフ案で見られるファサードの連結式柱を除けば、歴史主義建築で用いられる要素はない。

¹⁸⁷ Там же. С. 20-21.

N.ザプレーチンによる 2 の分類に当てはまる設計案は、主要ホールの上に別の主要ホールを積み上げるタイプである。この分類にあてはまるのは、上記してきた設計案の中では招聘案として提出されたクラージンによる設計案(以下クラージン(b)案:図 98、99、100)である。この案では、下層階に大ホールが配置され、その上に小ホールが重なり、小ホールのキューポラがそのまま建物全体の屋根となる。ザプレーチンは技術的側面を打ち出したもの(2-1)とシンボリック側面を強く打ち出したもの(2-2)とさらに分類しているが、招聘案と受賞案の中で 2-2 に該当するものはない。

3 の分類に N.ザプレーチンが当てはめているのは、A.ブラジーニの設計案(以下ブラジーニ案:図 101、102、103)、W.グロピウスの設計案(以下グロピウス案:図 104、105、106)であるが、グロピウス案はむしろ 1-2 で台形状ないしは扇形を基にした大小ホールの設計案に近い。グロピウス案(図 104、105、106)では円を中心に置き、環状に添えられる形で 4 つの楔形が北側に、扇型の部分が南側に各々配置されている。東側と西側には階段状の斜路が設けられ、北側のボロヴィツカヤ広場からレニフカ通りまでの区画は広場として設計されており、そこからの訪問者ないしはデモンストレーション参加者の正面入口が 3 つの楔形部分の中央にある。ブラジーニ案(図 101、102、103)では南北に伸びる軸を基に大小ホールを 1 つにまとめた建築物としてソヴィエト宮殿が設計され、ボロヴィツカヤ広場側(北側)に設置された正面入口部分にオベリスクのような三角柱の塔屋が設置されており、その頂部にはレーニンの彫刻が据えられている。中央の南北に通じる通路を配置し北側に小ホールと南側に大ホールが配置され、大ホールの空間構成はバロック劇場や宮廷劇場で見られるもので、グロピウス案における大ホールの空間構成とは大きく異なる。そのため機能的な空間構成という観点では、ブラジーニ案はグロピウス案と同一のものとして扱うことはできない。N.ザプレーチンは大小ホールの配置関係という観点からこの分類を行っているので、この分類に従いこの 2 つの設計案を分けるのであれば、グロピウス案を機能的(訪問者の動線)を重視したもの(3-1)、そしてブラジーニ案を視覚性(装飾や外観、訪問者に与える印象)を重視したもの(3-2)となるであろう。

4 の分類に仕分けされているのは、K.アラビヤンと V.シンビルツェフ(以下アラビヤン(a)案:図 107、108、109)、A.ジューコフと D.チェチュリンによる設計案(以下ジューコフ

(a)案:図 110、111)、G.ヴォルフエンズーンと Z.ローゼンフェリド(以下ヴォルフエンズーン案:図 112、113、114)、V.ヴラーソフ指導の「VASI」(以下ヴラーソフ VASI(a)案:図 115、116、117)、「VASI」(応募名「518 1040」)(以下 VASI「518 1040」案:図 118、119)、「VASI」(応募名「40」)(以下 VASI「40」案:図 120、121、122)、B.イオフアンの設計案(以下イオフアン(b)案:図 123、124、125)、I.ジョルトフスキイの設計案(以下ジョルトフスキイ(a)案:図 126、127、128)、コルビュジェの設計案(以下コルビュジェ案:図 129、130、131)、A.ペレの設計案(以下ペレ案:図 132、133、134)、T.ラムの設計案(以下ラム案:図 135、136、137)、J.アーバンの設計案(以下アーバン案:図 138)、H.ペルツイツヒの設計案(以下ペルツイツヒ案:図 139、140、141)である。この 4 の分類には多くの受賞案と招聘案が含まれている。

アラビヤン(a)案(図 107、108、109)、ヴォルフエンズーン案(図 112、113、114)、ヴラーソフ VASI(a)案(図 115、116、117)、VASI「518 1040」案(図 118、119)、VASI「40」案(図 120、121、122)は 1 つのカテゴリー(4-1)に分類することが可能である。いずれも袖部のような通路状の建築物によって大ホールと小ホールがつながっており、レニフカ通り側(北側)から大ホールの入口に至るまで大きな広場が設けられている。アラビヤン(a)案は 1 巡目に VOPRA 名義で彼らが提出した VOPRA(c)案を踏襲しているため、大ホールを半球キューポラが覆い、その脇にラテン文字「J」のかたちでプレチステンスカヤ河岸通り(東側)に沿って各種施設の棟が等間隔で配置されている。ヴォルフエンズーン案も大ホールを含めた本館の屋根は半球キューポラで、ヴォルホンカ通り(西側)にこの大ホールへと至る通路兼袖部となるような細長い建物が配置されている。4-1 に挙げられる設計諸案では大ホールの屋根は半球状ないしはキューポラに近い形態が用いられ、大ホール部分が本館となっている。こうしたことから、このカテゴリーでは大ホールを核としたモニュメンタリティが追求されていると言える。さらにこのカテゴリーには、同じく袖状の通路を経由して大小ホールがつながるリハチョフ案も加えられる。

もう 1 つの別のカテゴリー(4-2)として分類することが可能なのは、ジョルトフスキイ(a)案(図 126、127、128)、イオフアン(b)案(図 123、124、125)、ジューコフ(a)(図 110、111)であろう。これらの設計案ではそれぞれ大ホールと小ホールの間には東西の通り(ヴォルホンカ通り、プレチステンスカヤ河岸通り)に沿って中庭もしくは通路を囲い込むよう

な 2 つの袖状の建築物が形成されている。この分類には G.ゴーリッツらによる設計案（以下ゴーリッツ案：図 142、143、144）を含むことができる。彼らの設計ではジョルトフスキイ(a)案のように南側に向かって末広がり延びる楔形の空間に、大ホールを中央、小ホールを南側に配置し、その周囲を他の施設が取り囲む。イオフアン(a)案を除き、他の 3 案（ジョルトフスキイ(a)案、ジューコフ(a)案、ゴーリッツ案）はいずれも歴史主義建築のような外観となっており、全ての設計案では大ホールと小ホールをつなぐ部分に列柱が取り入れられている。さらに大ホールの平面形態は円形が用いられ、陸屋根という点も共通する。これらは前述した 4-1 の特徴と異なり、大ホールが大小ホールをつなぐロビーもしくは通路と一体となり、大ホール自体が独立した建築物となっていない。そのため、単体の建築物によってモニュメンタリティを追求したとは言い難く、むしろ大小ホールを南北に対置することで「規模とモニュメンタリティという特徴」¹⁸⁸を持つに至ったと言える。

そして 4 の分類でさらに分けることができるのは、コルビュジェ案（図 128、129、130）、ペレ案、ペルツイツヒ案（図 131、132、133）、アーバン案（図 138）、ラム案（図 135、136、137）である。コルビュジェ案ではソイモノフスキイ通り側（南側）に大ホールを含む棟、レニフカ通りの場所（北側）に小ホールを含む棟が配置されている。共に外側（北側と南側）に開いた扇形を取り、2 つの建築物の間にはデモンストレーション用の通路もしくは広場としての空間が確保され、大ホールを含む建築物の入口部分は陸屋根を冠した低層部である。この大ホールの建物正面には巨大なアーチが架かっており、ここから屋根を吊っている。クレムリン側から見た場合、大ホールの建築物がこのアーチの下に広がるかたちとなる。ペルツイツヒ案では東西の軸を基に扇形の大ホールの建物と馬蹄形の小ホールの建物が切り離した形となり、大ホールはソイモノフスキイ通り側（南側）、小ホールはレニフカ通り側（北側）に配置されている。またこの 2 つのホールの上に東西（ヴォルホンカ通りープレチステンスカヤ河岸通り）に貫通した通路が設置されており、交通の便を重視した構成が特徴である。これら 2 つの設計案で共通しているのは、大小ホールの入り口を中央に集中させた配置構成である。アーバン案では大ホールと小ホールの棟は中央の空間をはさんで切り離されている。大ホールを収容する扇形の棟はクロポ

¹⁸⁸ Там же. С. 22.

トキンスカヤ広場(南西)と隣接する場所に、小ホールを収容する楔形の棟はレニフカ通り(北側)に配置され、建物間にある広場が中心となって構成されている。ラム案では大ホール、小ホール、200-500人収容のホールと3つの建築物が南北の長細い軸に沿って連結されている。建築物の周囲が基壇で取り囲まれており、この基壇によって建物は一層神殿のように見える。偶然にそのほとんどが招聘案だが、これらの設計案に共通するのは、大ホールと小ホールが連結されておらず、その中間に通路(空中通路もしくは地下通路)ないしは広場、別の建築物が配置されているという点だ。つまり N.ザプレーチンが分類したカテゴリーそのものである。この中に、優秀賞案を受賞した H.ハミルトン(以下ハミルトン案: 図 145、146、147)案も含むことができる。このカテゴリー(4-3)には多くの招聘設計案が含まれ、特徴として大小ホールが分離して配置されている。しかし、外観に共通した特徴は薄い。なぜならばこのカテゴリーには、建築物よりも大小ホール建物の中間にある広場や通路が目立っているもの(アーバン案、ペレ案)、建設指定区域外からソヴィエト宮殿入口までの距離が短く、入口前広場が大小ホールをはさんだ場所にあるため、建築物そのものが強調されているもの(ペルツィヒ案)、建築物そのものを強調しながらも巨大なアーチによって建物全体が一層モニュメンタリティにあふれたもの(コルビュジェ案)、大小ホールとその他の施設を含む建築物の高さがほぼ同じため、建築物の外観において強い印象を与えないもの(ラム案、ハミルトン案)が含まれているからである。

このようにまとめてみると、最優秀賞と1等賞の案が最も多く含まれるのは表3の4-1と4-2の分類である。これは、その表現性、つまりモニュメンタリティを重視した建築物がイメージとして求められたということを示唆している。そのモニュメンタリティとは、特に4-2で見られる歴史主義建築を基にした、対称的で閉鎖的な中庭の取り方を特徴としている。一方で4-3に含まれる設計案は、配置計画は4-2と共通するものの、大小ホール間には通路もしくは広場が取り入れられ、外部空間に対して開放的である。この特徴はコルビュジェ案、ペレ案、ペルツィヒ案で見られ、歴史主義建築を基にしたモニュメンタリティとは別のモニュメンタリティが反映されている。ただし、ハミルトン案を除いた4-3に含まれる設計案(招聘案)は授賞対象になっていないことを考慮すると、当初からそうしたものは求められておらず、古典的なモニュメンタリティが求められていたと考えられる。この

点をさらに明確に示しているのが、1932年2月28日発表された「モスクワにおけるソヴィエト宮殿の全連邦公開競技設計に関する設計案の結果に関する」建設会議決議と同日付の「モスクワ市におけるソヴィエト宮殿プロジェクトの最終的な構成に応じたプランの策定に関する」決議であろう。競技設計の結果に関する決議ではどの設計案が受賞したかということが報告されている。最優秀賞の3案は、この競技設計で建設会議が導こうとしたイメージがある程度反映されたものだった。

建設会議は、提出されたどの設計案もソヴィエト宮殿を実現するための最終設計案とはならないと結論付けた。だが他方で設計過程で提示された課題を解決する手法や方策が定められていることを確認した。こうした観点から建設会議は、競技設計後(2巡目の締め切り後を指す:著者註)に提出された建築家(I.V.ジョルトフスキイ、B.M.イオフアン、H.ハミルトン)の設計案に賞を与えることにした。彼らの設計案はよりよいものであると認められたものである¹⁸⁹。

そのため最優秀賞作品を基にした「ソヴィエト宮殿プロジェクトの最終的な構成に応じたプランの策定」に関する決議が下されたと考えてよい。

プラン策定に関する決議では、2巡目の結果を受けて、それ以降の非公開競技設計で改善すべき点や留意すべき点が挙げられている。その中で、「ソヴィエト宮殿は主要ホールを1つの建築物に配置したもの、もしくは1つの建築コンプレックスに配置されたものとし、極端な場合、グループA(大ホールを含む要素:著者註)とグループB(小ホールを含む要素:著者註)を別々の建築物に配置することも可能である。しかし、グループAは(クレムリン側からの)第1プランに配置し、その他のグループはグループAの背後に配置するという必須条件の下に可能である」¹⁹⁰とする一方で、「主要ホールを1つにまとめてはならない」¹⁹¹という条件が付されている。これに従えば、4の分類全般が望ましいものとなる。

報告書で語られているモニュメンタリティに対応する建築物のイメージは「勇ましい高層建築のコンポジション」で、これは「多くの設計案で目にする建築物のずんぐりとしたさ

¹⁸⁹ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 10, л. 3; Дворец Советов СССР. М., 1933. С. 55.

¹⁹⁰ Дворец Советов СССР. С. 55.

¹⁹¹ Там же.

まを[...]克服する」。「その際に、他の建築物を牽引することが望ましい」¹⁹²とされ、ここでは主要ホールとその他の施設が上下に構成される形態、つまり2の分類のものが好ましいとされている。この留意点では、高さを志向するという点も重要だが、それ以上に「他の建築物を牽引すること」とい表現がキーワードとなっている。これは高さで周囲の建築物を圧倒するプロポーションを獲得するということを意味するコメントであろう。そのため、建設会議は「一定の建築様式を予め定めないものの、古典建築の持つよりよい手法を、新しい手法のように用いることへ探求が向かうべきと考え」¹⁹³たと言える。ここではモニュメンタリティを主軸に置いた建築的な「牽引」が優先され、その手段として歴史主義的な建築様式が求められたと考えるべきであろう。以上のことから主要ホール(大小ホール)の位置関係、ソヴィエト宮殿と周辺環境との相関性、モニュメンタリティを表象する建築物の形態という3点が主催者からの要求としてこの報告には盛り込まれており、表4の分類のいずれかに属する設計案の中でこの3点全てを満たす設計案はなかったと言える。だが賞の配分を考慮した場合、この3点の中で建築コンポジションにおける相関性を考慮したと解釈された4の分類に重点が置かれているのがわかる。

この2巡目の結果によって、周囲の建築的環境で支配的な建築物となるための具体的な要求が通達されたのだが、何故建設会議は「古典建築を新たなものとして利用する」ことを推奨するに至ったのであろうか。このことに影響を及ぼしていたのは、2巡目に提出された設計案の審査を始める前から既に取り決められていた建設会議の方向性であった。

2巡目における設計案募集期間中の1931年10月1日に「ソヴィエト宮殿の建築芸術的な外見に関する課題」という報告書が提出された¹⁹⁴。この報告書では、1巡目で見られた機能的な空間構成を基に設計しようとする建築家達が非難されている。その理由は「形態が有する芸術性を看過し、建築における芸術性を完全に否定し、あらゆる功利的なものや単なるこじつけの議論で建築家達を抑え込ん」でおり、自らの課題を「建築

¹⁹² Там же.

¹⁹³ Там же. ここで用いられている「古典建築 (классическая архитектура)」とはネオ・ルネサンス、新古典建築、ネオ・バロック、ゴシック・リヴァイバル、グリーク・リヴァイバルといった歴史的な建築様式を復古的に用いる建築を包括している。そのため建築史の文脈では19世紀から20世紀初頭に生じた歴史主義建築とほぼ同義であると言える。そのため本稿でロシア語文献からの引用で「古典建築」という用語が用いられた場合、それは歴史主義建築を指すものとして了解されたい。

¹⁹⁴ ГАРФ, ф. 3316, оп. 64, д. 563, л. 67-74.

物が構成や建築材料の機能を反映しているか」というテーゼの中でしか見出せないからとしている¹⁹⁵。そのためこうした理論を擁護する建築家達は「現実から遅れており、また現実を単に追従するという残念かつ価値のない地位に甘んじており」、この理論に取って代わるものが「芸術的」な建築で、その役割は「一般大衆を組織する最も重要な教育的手法であり、強力な武器」であり、「こうした条件に適合しなければならないのがソヴィエト宮殿における建築的形態の芸術的側面である」¹⁹⁶。このことから、設計案締め切り以前では既に反近代主義建築の潮流が建設局内で打ち出され、競技設計の結果に影響を及ぼしていたであろうことがわかる。

この「芸術的」な建築が立脚するものとして、報告書では歴史的建築物が取り上げられている。歴史的建築物に内在する「高い芸術性はその国に優れた創造力があるということ」を証明し、その創造力はその国の豊かな歴史的未來を保証してきた」としている。この高い芸術性を示す例としてあげられているのがモスクワのクレムリンで、「モスクワ支配の発展とペテルブルク誕生の遺産」であり、「ヨーロッパにはないペテルブルクの建築はソヴィエト体制誕生の先駆」として位置付けている¹⁹⁷。一方で、「構成主義」や「機能主義」を含んだいわゆる近代主義建築では、「今日的な工業的意匠や技術は急速に時代から取り残されることになり、将来の世代の目には縁がなく、下らぬ懐古主義の様相を呈すことになる」。そのためソヴィエト宮殿は「永年にわたり存在するものと見なされる」べく、「その時代の気分ではなく人類の精神性、さらにはその特性が有する共通性によって支えられる観念的なものでなければならない」としている¹⁹⁸。この点に関しては、ソヴィエト宮殿の外見というよりもその前提となる理念についての確認と見なし得る。その時代の技術や建築材料といった物質的特性を外見に反映させるのではなく、その時代の理念が後の世代に理解できるようなかたちで反映させるとなると、その時代まで名声が保たれていた建築物、つまり歴史的建築物を参考にせざるを得ないというのがこの報告書の核心である。

¹⁹⁵ ГАРФ, ф. 3316, оп. 64, д. 563, л. 67.

¹⁹⁶ Там же.

¹⁹⁷ ГАРФ, ф. 3316, оп. 64, д. 563, л. 69-70.

¹⁹⁸ ГАРФ, ф. 3316, оп. 64, д. 563, л. 71.

ではこのような点を外観に反映させるにはどうしたらよいのか。報告書では「装飾し、快活さや生きる喜びを呼び起こし」、また「社会的意義ある建築物はそれにふさわしい外観をも備えなければならない」としている¹⁹⁹。こうした性質に合致するのが、古代における建築(古代ギリシア・ローマ建築)であり、「社会生活において自由に生活した市民が広く存在していた」時代の建築である。つまり、ある時代の民衆生活はその時代の建築に反映され、後年まで遺されることとなる「芸術的な」歴史的建築物となるため、そうしたプロセスを辿ることがソヴィエト宮殿に求められているとこの報告書では主張されている。またこの考えを補足するように、「オリンピック競技が今日の身体修養の礎となっているように、ソ連のモニュメンタルな建築は古典建築にその礎を築く」²⁰⁰ことが述べられている。またこのような「古典建築にその礎を築く」というのは、「西欧現代建築の偉大な建築物にしばし見られる」ものであり、イデオロギー的側面、つまり理想とする民衆の生活環境を反映したのみならず、建築史上においても、「古典建築」を取り入れることが正当であるということが強調されている。

こうした点に加えて、ソヴィエト宮殿の建設予定地にあった救世主ハリストス大聖堂の分析もなされている。救世主ハリストス大聖堂は「芸術的な価値は何もないが、その丸天井(キューポラ)は都市全体の景観にとって大きな意義を持ち」、「世界的な意義を持った建築物に数えられる」ため、ソヴィエト宮殿も「こうしたもの、もしくは印象という点での鮮やかに輝く金色の表面(救世主ハリストス大聖堂のキューポラを指す: 著者註)と張り合うことができるような、もしくはキューポラの形態を想起させるような何かしら別の建築的手法を見出すことが必要になる」²⁰¹。この大聖堂の分析からわかるのは、都市景観を考慮して、救世主ハリストス大聖堂のようにソヴィエト宮殿が遠くから目視できるとともに周囲の建造物とは明確に異なる、あるいは抜きん出ているという印象が求られているということである。

この報告書で触れられているソヴィエト宮殿に求められる外観は、過去の歴史的建築物を参考にするという方向性が打ち出されているものの、具体的に定められたものではない。この報告書が競技設計の2巡目の設計案募集期間中に提出されたことを考慮す

¹⁹⁹ Там же.

²⁰⁰ ГАРФ, ф. 3316, оп. 64, д. 563, л. 72.

²⁰¹ Там же.

ると、既に受賞作品の評価基準が定まっていたと言える。

こうした授賞の評価基準が最優秀賞というかたちになってあらわれ、そのことは特に外国の建築家に対して大きな波紋を呼ぶことになった。招聘建築家として設計案を提出したル・コルビュジェは M.ギンズブルグと A.ルナチャルスキー宛てに、最優秀賞の傾向に対して抗議文を送っている。両者への抗議文の内容は異なるが、建築史家のジャン・ルイ・コーエンが「憤激」²⁰²と称すように、激しい口調で2巡目の結果から導き出されるソヴィエト建築界の現状を非難している。「憤怒」の原因は「国際連盟競技設計と同じく、ソヴィエト宮殿がイタリアのルネサンス様式で建設されてしまう」²⁰³ことである。コルビュジェが考えていたソヴィエト宮殿とは「五カ年計画の賜物」、「五カ年計画を奮い立たせる新体制を建築的な原則から讚美すべき」²⁰⁴もので、「現代の大衆が創造した表現」²⁰⁵であった。これに反する結果が導かれた受賞設計案は、彼が思い描いていた建築物とはかけ離れた「空疎な人間性」²⁰⁶に満ちたものであった。中身の無いものとしてソヴィエト宮殿が映るのは、自らが提出した設計案が「循環性、優れた外見、音響、通風、換気、建築物の静力学」を基にしており、それらが審査基準である「技術的な観点から、また建設的及び建築的な現実性」²⁰⁷を基に競技設計課題の要求を満たし、ソヴィエト宮殿の理念を反映したものと考えていたからである。この発言は、彼が設計案審査に関する一般告知を了解していたことを示すものである。彼はソ連側(在仏通商代表ボリス・ブレスラフ)から「この(ソヴィエト宮殿:著者註)再設計(2巡目への参加:著者註)を行うかどうか」²⁰⁸という書簡を受け取り、設計の発注を受諾したが、この際に B.ブレスラフは設計案提出期限と設計引受料を伝達するようにとだけ建設局から指示を受けていた²⁰⁹。このことは「注文を受けた設計案は競技設計に参加することはないが、そのほかの設計案と同じく審査する」²¹⁰ことをコルビュジェは設計案発注の時点で伝えられず、また通常の競技設計に

²⁰² Cohen, *Le Corbusier and the Mystique of the USSR*, p. 193.

²⁰³ ГАРФ, ф. 3316, оп. 24, д. 521, л. 13.

²⁰⁴ РГАЛИ, ф. 674, оп. 1, д. 8, л. 5.

²⁰⁵ ГАРФ, ф. 3316, оп. 24, д. 521, л. 13.

²⁰⁶ ГАРФ, ф. 3316, оп. 24, д. 521, л. 12.

²⁰⁷ РГАЛИ, ф. 674, оп. 1, д. 8, л. 5 об.

²⁰⁸ 原典は Boris Breslov *Letter to Le Corbusier*. Paris. September 2, 1931. Fondation Le Corbusier (FLC). 出典は Cohen *Le Corbusier and the Mystique of the USSR*. p. 168.

²⁰⁹ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 10, л. 160.

²¹⁰ РГАЛИ, ф. 1981, оп. 1, д. 50, л. 21.

参加すると理解していた可能性を意味している。そのため、競技設計後の授賞結果通知の際に、彼が苦心して作成した設計案が競技設計に参加せず、「今後の建設作業で綿密に考慮すべき価値ある資料」²¹¹の 1 つとして扱われたことになる。他方同じく競技設計には参加せず、かつ「競技設計後に提出された」設計案(ジョルトフスキイ(a)案、イオファン(b)案、ハミルトン案)が最優秀賞を授賞したという公平性に欠けた選抜方法へコルビュジェは怒りをあらわにしたと言える。こうしたことから彼の抗議文で表出された「憤怒」は、もちろん彼が推奨する近代主義建築の流れがこの競技設計の結果に反映されていないことが背景にある²¹²ものの、設計依頼の際に「競技設計外」と通知しなかった主催者の不誠実さに対しても向けられていた。

こうしたことを鑑みると、授賞基準は確かにモニュメンタリティに特化したかたちと建築物の配置関係が影響しているものの、とりわけ最優秀賞に限っては「競技設計後に提出された[...]競技設計外の設計案」から選抜されたものであり、これが主催者の求めるソヴィエト宮殿のイメージに近かったと言える。その最優秀賞設計案の中に建設局の主任建築家(主催者側の人間であり、内部事情を知る人物)の B.イオファン案が含まれていたのは、競技設計に参加した建築家達に対して「不誠実」である。他方で、このことはそうした規定に収まるかたちでソヴィエト宮殿のイメージを主催者が決められなかったことを意味する。これは、2 巡目で競技設計を終了させず、更に非公開競技設計で最終案を選抜すると予め定められていた点にもあらわれている²¹³。

2-4. 非公開競技設計 1 巡目 (第 3 巡目)

以下ではこの設計競技の 3 巡目と 4 巡目について述べるが、その具体的な内容に触れる前に、この 3 巡目と 4 巡目を含むソヴィエト宮殿の建築設計競技がソ連の競

²¹¹ Дворец Советов СССР. С. 57. 本文中の「価値ある資料」には、本文で分析した外国人建築家による招聘設計案全てが含まれている。

²¹² また彼の「憤怒」の理由と関連付けられるのは、第 4 回近代建築国際会議(Congrès International d'Architecture Moderne: CIAM) が 1932-33 年にモスクワ開催を控えていたことである。CIAM は近代主義建築の伝播を自らの課題とし、この団体においてコルビュジェは中心的役割を果たしていた。本文で指摘したように、一大建築プロジェクトの競技設計であるソヴィエト宮殿で、この団体が推奨する流れと逆の傾向が生じたため、CIAM の望む土壌が整っていないとするソ連において第 4 回会議開催が危ぶまれていた。詳細は Cohen, *Le Corbusier and the Mystique of the USSR*, pp. 195-196; Eric Mumford, *The CIAM Discourse on Urbanism, 1928-1960* (Cambridge: MIT Press, 2000), pp. 44-49, 71-73. を参照。

²¹³ ГАРФ, ф. 3316, оп. 64, д. 563, л. 29-31.

技設計事情からしても前例のないことであった点について述べて、その異例さを指摘しておきたい。

1929年3月26日付「建設事業における競技設計を組織することに関する」ソ連人民委員会議決議(以下「競技設計に関する規定」とする)における詳細では、ソ連国内で実施される建築設計競技の組織手順、運営方法が規定されている。その中では、非公開競技設計それ自体は「競技設計委員会の許可がある場合において例外的に許されるもの」²¹⁴として、非公開競技設計を原則的に望ましくないものとする。さらに、公開競技設計と非公開競技設計が1つの競技設計プログラム内で同時に行われることも許されていない。ここから、競技設計において公開と非公開の競技設計が同時に行われる、つまりソヴィエト宮殿の2巡目(公開競技設計)と3巡目(非公開競技設計)のような構成で建築設計競技が行われることは、この規定に照らし合わせた場合、望ましいものではない。また、「競技設計課題の修正が必要な場合、然るべく競技設計委員会の決定に従って、2段階目(つまり2巡目を指す:著者註)の競技設計が行われ」、「2段階競技設計の際には2度にわたって設計案が提出されることになり、1度目で受賞を果たした建築家または受賞に値すると審査員に認定された設計案の建築家に対して2度目の競技設計に設計案を提出できる権利が保証される」²¹⁵。ソヴィエト宮殿競技設計3巡目では2巡目の受賞者の中から幾人かは設計案を提出していたものの、あくまで建設局が選定した建築家であって、その他の参加者が設計案を提出したのは「競技設計に関する規定」に則ったわけではない。この3巡目においても組織者が、2巡目の受賞結果に関係なく設計案を注文しており、建築家の意向を問わず、指定した建築家の組み合わせで設計案作成に取り組ませている。また回数に関しても、2度までを想定した「競技設計に関する規定」を超える3度(準備段階を除く)の開催となり、この点でもソヴィエト宮殿競技設計が規定の枠から逸脱したものである。こうしたことから、この競技設計は一般的な競技設計のみならず、「競技設計に関する規定」と比較してもその異質さを際立たせるものである。

²¹⁴ РГАЛИ, ф. 1981, оп. 1, д. 47, л. 3.

²¹⁵ Там же.

建設会議は2巡目で受賞設計案を選出したが、「ソヴィエト宮殿設計案の要素を発展・補完させるために」、非公開競技設計である3巡目を催す。さらに建設局長に対して「(2巡目で)受賞し、かつ最も良い設計案を作成した個々の名だたる建築家」に個別設計案の作成を依頼している²¹⁶。2巡目の公式結果発表後の1932年3月9日付で、依頼する建築家が既にリストアップされている。上記の発表に基づいて招聘建築家として選定された「招聘者は6組1名であった²¹⁷。2巡目で優秀賞を授与した3名の建築家(B.イオフアン、I.ジョルトフスキイ、H.ハミルトン)は、招聘建築家の発表時点でほぼ確定していることが示唆されている²¹⁸。またM.クリュコフに変わって建設局長のポストに新しく就いたヴァシーリー・ミハイロフは、このリストアップにおいて「個人的な提言」として計5名の建築家を推挙している²¹⁹。当初建設会議によって決定した6組1名とH.ハミルトンを除く優秀賞受賞建築家の2名の6組3名が3巡目(厳密には非公開競技設計1巡目:本稿では3巡目とする)に設計案を提出することになり、提出期限は1932年6月10日とされた²²⁰。結果として締め切りの段階で、建設局が設計を要請したのは5組8名で、2組6名が「個人の発案として」(建設局の依頼を受けていない)設計案を提出している²²¹。最終的に非公開競技設計に参加が許されたのは16の設計案であった²²²3巡目では1:1,000の尺図による設計案(全体平面図、立面図、断面図、アクソノメトリー図)の提出が求められ、提出期限は当初6月10日であったが、最終的には6月25日まで延長されている²²³。2巡目と3巡目の設計内容はほぼ同じであるが、1つだけ、大ホールの収

²¹⁶ Дворец Советов СССР. С. 56.

²¹⁷ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 19, л. 301. 対象となった建築家は1. シチューコとゲリフレイフ、2. ドジツァとドゥーシキン、3. ヴラーソフ指導建築家グループ「VASI」、4. シチューセフ、5. アラビヤンとシンビルツェフ、6. ヴェスニン兄弟、7. ジューコフとチェチュリンの6組1名である。

²¹⁸ Там же.

²¹⁹ Там же. この5名の建築家とはN.ラドフスキイ、I.ゴロソフ、M.ギンズブルグ、G.リュードヴィグ、労農赤軍軍事建設局から1名の建築家である。

²²⁰ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 19, л. 302-302 об.

²²¹ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 19, л. 71. 建設局が招聘したのは1. K.アラビヤンとV.シンヴィルツェフ、2. ヴェスニン兄弟、3. A.ヴラーソフ、4. M.ギンズブルグ、5. I.ゴロソフ、6. Ya.ドジツァとA.ドゥーシキン、7. A.ジューコフとD.チェチュリン、8. B.イオフアン、9. N.ラドフスキイ、10. G.リュードヴィグ、11. V.シチューコとV.ゲリフレイフ、12. A.シチューセフ、13. I.ジョルトフスキイで「個人の発案で」設計案を提出したのは1. ベリャコフ、ブロンシテイン、マルコフ2. ハミルトン、3. クラーシン、4. クリンスキイ、5. メシコフ、ニコラーエフ、ヴァシーリエフ、6. フィードマン、7. オルタルジェフスキイ(アメリカ)、8. チェルカスキイ(レニングラード)である。

²²² ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 19, л. 72. この16の設計案とは1. K.アラビヤンとV.シンヴィルツェフ、2. ヴェスニン兄弟、3. A.ヴラーソフ、4. H.ハミルトン、5. M.ギンズブルグとS.リサゴール、6. I.ゴロソフ、7. Ya.ドジツァとA.ドゥーシキン、8. I.ジョルトフスキイ、9. A.ジューコフとD.チェチュリン、10. B.イオフアン、11. G.クラーシン12. N.ラドフスキイ、13. G.リュードヴィグ、14. A.マシコフ、15. V.シチューコとV.ゲリフレイフ、16. A.シチューセフで、最終的には4. H.ハミルトンと14. A.マシコフは設計案を提出していない。

²²³ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 19, л. 64-65.

容数が 15,000 から 20,000 に変更された²²⁴。3 巡目では 2 巡目と比較して、規模が大きくなり、また一層大ホールを中心とした設計案が作成された。3 巡目の設計案に求められた要件のうちの 1 つは、「古典建築のよりよい手法を新たに用いる」ことを念頭に置き、にソヴィエト宮殿を設計することであった。この建設会議局の留意点を基に作成された設計案は、それ以降のソヴィエト建築全体で見られるモニュメンタルな歴史主義建築への傾倒の端緒と見なされるようになる。

この点を確認する形で、3 巡目に提出された設計案の傾向を見ていくことにしよう。

表 4: ソヴィエト宮殿競技設計 3 巡目に提出された設計案の分類。

3. 1 つの建物に大ホールと小ホールがあるが、1 つになっていない。		
3-a. 袖部が大ホールの周囲に配置され、大ホールの高さあるいはその規模によって小ホールが隠されている。	3-b. 大小ホールを対面させ 1 つの建物に収め、その建物ないしはその手前にソヴィエト宮殿の規模を表象するモチーフが用いられている。	
	3-b-1. 大ホールを北側に配置し垂直状の建築物やモニュメントを配置。	3-b-2. 大ホール天井部を高く設けている。
I.ゴロソフ、A.ヴラーソフ指導「VASI」、B.イオフアン、G.リュードヴィグ、V.シチューコと V.ゲリフレイフの第一案。	K.アラビヤンと V.シンピルツェフ、Ya.ドジツァと A.ドゥーシキン、I.ジョルトフスキイ、A.シチューセフ、ヴェスニン兄弟。	A.ジューコフと D.チェチュリン、V.シチューコと V.ゲリフレイフ第二案、ヴェスニン兄弟。

3 巡目に提出された設計案の多く(表 4)は 2 巡目設計案の分類(表 3)の際に用いた 3 に分類されるといってよい。その中でも、3-1 と 3-2 以外の別のものとして分類されるのは、I.ゴロソフ(以下ゴロソフ(b)案: 図 148、149、150)、A.ヴラーソフ指導「VASI」(以下ヴラーソフ VASI(b)案: 図 151、152、153)、B.イオフアン(以下イオフアン(c)案: 図 154、155)、G.リュードヴィグ(以下リュードヴィグ(c)案: 図 156、157、158)らによる設計案と V.シチューコと V.ゲリフレイフの第 1 設計案(以下シチューコ(a)案: 図 159、160)である。ゴロソフ(b)案では北側から南側に広がる台形平面を土台として、その台形中央に円形を基にした大ホール、正面には階段が配置されており、階段の上段から入口前まで広がる広場が設けられている。プレチステンスカヤ河岸通り側とソイモノフスカ通り側の側面は段状の基壇となり、大ホールの周囲を取り巻く。そのため、大ホールがある棟の周

²²⁴ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 19, л. 210.

囲は地上からやや高くなり、大小ホールの舞台が中央を向く形となり凸形状の通路が周囲に形成されている。北側入口正面から見て、小ホールは大ホールの袖に隠れ、大ホールの大きさが一層強調されている。大ホール入口正面には高い塔門が構えられ、その中央に指導者の彫刻(設計図では具体的な描写がなく、シルエットのみが描かれている)が配置される。イオフアン(c)案でも北側と南側に生じる土地の起伏をそのまま活かした構造が取り入れられ、大ホールが中央、小ホールが南側に配置されることでレニフカ通り(北側)から見た場合、小ホールが大ホールに隠れるかたちになる。建築物の外観は、大ホール部分では列柱が取り巻く円形のファサードとなっており、同形態が反復する形で3つの層が積み上げられている。ヴラーソフ VASI(b)案、リュードヴィグ(c)案、シチューコ(a)案でも大ホールが北側もしくは中央に配置され、小ホールはその脇に配置されている。これらの設計案は3-aとして分類できる。特徴として挙げられるのは、袖部が大ホールの周囲に配置され、大ホールの高さないしはその規模によって小ホールが隠されている点である。袖部にあたるコンポジションが大ホールの周囲に配置されることで、結果として大ホールの規模が強調されている。この点を補う形で北側大ホール入口正面には基壇もしくはポルチコが用いられている。

さらに、もう1つのグループ(3-b)として分類できるのは K.アラビヤンと V.シンビルツェフ(以下アラビヤン(b)案: 図 161、162)、ヴェスニン兄弟(以下ヴェスニン兄弟(c)案: 図 163、164、165)、A.ドゥーシキンと Ya.ドジツァ(以下ドゥーシキン(b)案: 図 166、167)、I.ジョルトフスキイ(以下ジョルトフスキイ(b)案: 図 168、169、170)、A.ジューコフと D.チェチュリン(以下ジューコフ(b)案: 図 171、172、173)、A.シチューセフら(以下シチューセフ(b)案: 図 174、175、176)の設計案と V.シチューコと V.ゲリフレイフの第2案(以下シチューコ(b)案: 図 177、178)である。このグループで特徴的なのは、大小ホールを対面状に配置し、1つの建築物に収める手法であり、2巡目終了後のソヴィエト宮殿建設会議の留意点どおり大ホールを北側に配置し垂直状の建築物やモニュメントを配置している設計案(3-b-1)、その大ホール天井部を高く設けている設計案(3-b-2)に分けることが出来る。前者(3-b-1)にはアラビヤン(b)案、ドゥーシキン(b)案、ジョルトフスキイ(b)案、シチューセフ(b)案が含まれ、後者(3-b-2)にはジューコフ(b)案、シチューコ(b)案が含まれる。この両者に含むことができるのはヴェスニン兄弟(c)案である。

前者(3-b-1)の特徴として、垂直状の建築物ないしはモニュメントが用いられ、全体的に南北へ引き延ばされた直方体もしくは楕円形という印象が強い。そのため重厚感あるものとして表現されてはいるが、建設会議の留意点に含まれていた「建築物のずんぐりとしたさまを勇ましい高層建築コンポジションによって克服すること」が果たされていない。一方で 3-b-2 に分類されるジュコフ(b)案では大ホール部分は列柱による 1 階から 4 階にわたる観客席部分を柱頭と柱礎のない柱に覆われた円形ドラム状のファサードとし、大ホールの屋根は極めて特徴的な三角錐状、その頂上には労働者の彫刻群がある。また大ホール観客席を覆うファサードの北側と東西側にはポルチコのように水平状に突き出たバルコニーが設置され、大ホール部分をその周囲の建物より高く見せる工夫がなされている。シチューコ(b)案では長方形の土台に大小ホールが収められ、大ホール部分は垂直状に引き延ばされた形である。これら 2 つの設計案では大ホール部分が他の要素を圧倒する形でそびえており、上記した留意点が考慮されていると言えよう。

こうした分類から外れるのは、N.ラドフスキイによる設計案(以下ラドフスキイ(b)案: 図 179、180、181)と M.ギンズブルグ(以下ギンズブルグ案: 図 182、183)による設計案である。ラドフスキイ(b)案は、大小ホールを含む建築物を別々に配置し、共通の広場に収められているものの、厳密には「ソヴィエト宮殿はグループ A と B という主要ホールを 1 つの建築物に配置したもの、もしくは 1 つの建築コンプレックスに配置されたものとすべき」とする建設会議からの留意点が果たされていない。2 つのホールのヴォリュームが全体の基壇の上に載っているような構成とされ、基壇レベルにはプレチステンスカヤ河岸通りから傾斜路で導入されている。このような傾斜路を通じて建物に至る来訪者またはデモンストレーションの動線は 1 巡目の設計案(ラドフスキイ(a)案)でも用いられており、その手法を踏襲し発展させたものである。一方ギンズブルグ案は、1 つの建築コンプレックスにまとめられている。彼の設計案では、大ホールの半球型キューポラ屋根が突出し、その下に各種施設を含むロビーが水平状に配置、小ホールの建物と大ホールのキューポラ屋根が強調された全体像が提示されている。

このように 2 巡目で用いられた分類を基に、3 巡目に提出された設計案を分類するとモニュメンタリティという性質が、必ずしも歴史主義の様式を厳格に応用するのではなく強引なかたちで様式を取り入れ、その結果建物全体の均斉を損なっている設計案が多

く見られる。これらは、元々こうした規模あるいは空間構成と違う枠組みで成立した歴史主義の様式を、強引によりモニュメンタルなシルエットを求めるコンペの要項に合わせて転用しようとしたための消化不良と考えられる。これらと対比して厳密に過去の建築様式（ネオ・ルネサンス）を遵守しているのがジョルトフスキイ(b)案による設計案であるが、規模の演出の面では折衷的な手法が用いられた設計案よりも劣った印象を与え、翻って、建設会議の留意点を全て満たしえないということとなった。ラドフスキイやギンズブルグの案はこの点でバランスのいいシルエットになっているが、モニュメンタルではないと理解されたく、この時点で姿を消す。この巡回で終わる予定であった競技設計は、建設会議が望むソヴィエト宮殿のイメージを求めて、さらに続けられた。

2-5. 競技設計最終段階（非公開競技設計 2 巡目、4 巡目）

競技設計 3 巡目終了後、1932 年 8 月 7 日付の K.ヴォロシーロフ、L.カガノーヴィチ、V.モロトフらに宛てられた I.スターリンからの書簡で競技設計 3 巡目の結果に対する彼の「個人的な意見」が語られている。その中で彼はイオファン (c) 案が最も良いと述べており、この設計案の改善点をいくつか指摘している。この指摘を通じて I.スターリンが求めるソヴィエト宮殿のイメージを垣間見ることができる。彼は B.イオファンの考えるソヴィエト宮殿の上に「高い柱の形のもの（つまり、1 巡目の B.イオファンの設計案にあった柱）を高く延ばして、宮殿をかたちづくるのがよい」として、「柱の上に鎌とハンマーを据えて、内側から電気で輝かせるべきだ」²²⁵と述べている。この「高い柱の形」は「できればエッフェル塔と同じくらいの高さあるいはそれよりも高いもの」であることが望ましいとしている²²⁶。ここで I.スターリンが求めているソヴィエト宮殿のイメージはエッフェル塔のような末広がりの高層建築物ではなく、むしろ 1922 年のシカゴ・トリビューン社屋国際競技設計に提出されたアドルフ・ロースの設計案のようなものと考えられる（図 185）。こうした I.スターリンの「個人的な意見」がきっかけとなっ

²²⁵ РГАСПИ (Российский государственный архив социально-политической истории), ф. 81, оп. 3, д. 99, л. 133.

²²⁶ РГАСПИ, ф. 81, оп. 3, д. 99, л. 134.

たかどろかは知る由もないが、「新しい設計案の大半はその性質において、以前よりもレベルの高いものであるが、提出された設計案はいずれも受け入れることはできないとソヴィエト宮殿建設会議は考えた」²²⁷ため、非公開競技設計の2巡目である4巡目が行われることとなった。

1932年の8月22日の時点で、4巡目は同年8月から同年の11月1日までとされ、5つの建築家グループへの依頼が検討された²²⁸。しかし、3巡目が1932年の7月15日に終わり「ソヴィエト宮殿の設計案を作成する建築家達に休養をもうける必要があり、9月半ばにならないと作業に入ることができなかつた」ので、同年の12月1日まで延期する旨を当時のソヴィエト宮殿建設会議 V.モロトフ宛に建設局長が通達している²²⁹。結果としては1933年の1月1日までとなり²³⁰、最終的には1933年の2月まで延びた。1932年11月15日には4巡目に設計を任された建築家達が「1. 建設予定地の設計、2. ソヴィエト宮殿に至るまでの交通路の組織図、3. 建築素材に関連した質問に対する報告」を行うことになっていた²³¹。さらに4巡目では3巡目のように「個人の発案」、つまり建設局より依頼のない設計案は受け付けない方針をほのめかしており²³²、依頼を受けた設計案のみが競技設計の対象となった。

表5: ソヴィエト宮殿競技設計4巡目に提出された設計案の分類。

3-a. 袖部が大ホールの周囲に配置され、大ホールの高さあるいはその規模によって小ホールが隠されている。	
3-a-イ. 大ホール部を円形にして、さらに高さを強調。	3-a-ロ. 塔屋による高さもしくは塔状のモニュメントによって高さを表現。
ヴェスニン兄弟、B.イオフアン。	K.アラビヤンらによるグループ、I.ジョルトフスキイとA.シチューセフ、V.シチューコとV.ゲリフレイフ。

4巡目に提出された全ての設計案(表5)は、1つの建築物に大小ホールとその他施設が収容されている。しかし、大ホールを中心としてモニュメンタリティを表象しようとしてい

²²⁷ Луначарский А.В. Социалистический архитектурный монумент // Строительство Москвы. 1933. № 5-6. С. 10.

²²⁸ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 19, л. 324. この5つの建築家グループとは1. ジョルトフスキイとシチューセフ、2. シチューコとゲリフレイフ、3. ヴェスニン兄弟(アレクサンドル、レオニード、ヴィクトル)、4. イオフアン、5. アラビヤン、ドジツァ、ヴラーソフである。

²²⁹ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 19, л. 253.

²³⁰ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 19, л. 267-268.

²³¹ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 19, л. 255.

²³² ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 19, л. 257.

るのは、ヴェスニン兄弟による設計案(以下ヴェスニン兄弟(d)案: 図 186、187)とB.イオフアンによる設計案(以下イオフアン(d)案: 図 188、189、190)のみである(3-a-イ)。ヴェスニン兄弟(d)案では南北の軸を基に北側に大ホール、南側に小ホールが配置され、その中間に通路が設けられ、それらが1つの建築物となっている。下階部は土台部と同じく長形状に、上階部は大ホールにあわせた円形状の形態である。外観は、3巡目と大きく異なり、1階部は基壇を伴った列柱で構成されている。列柱の上の部分は、ガラスの連続窓で覆われ、さらにその上部には列柱を伴うバルコニーが設けられている。上階部側面ファサードには、1章で触れた文化宮殿(ヴェスニン兄弟(b)案)で用いられたガラスの割り型ファサードなどが内部の室の規模や機能に応じて用いられている。イオフアン(d)案は3巡目の設計案(イオフアン(c)案)とほぼ同じであるが、3巡目の設計案で用いられたファサードの列柱付きのバルコニーが省かれ、より簡素化された垂直状のリブの分節に置き換えられている。これらの設計案では、大ホール部分の外枠は円形となり、その部分が垂直状に突出するかたちになっているのが特徴的である。

この2つの設計案と比較して、他の案(3-a-ロ)ではソヴィエト宮殿自体の高さは一定であるが、塔屋を用いて高さにアクセントを与えている。I.ジョルトフスキイとA.シチューセフによる設計案(以下ジョルトフスキイ-シチューセフ案: 図 191、192、193)では大小ホールをつなぐ通路中央部分に塔屋が配置され、その周囲は列柱に囲まれた低層の棟となっているため塔屋の高さが目立っている。逆にいえばジョルトフスキイの前案と比べてもモニュメンタリティは更に抑制されている。K.アラビヤンとV.シンビルツェフ、Ya.ドジツァとA.ドゥーシキン、A.ヴラーソフによる共同設計案(以下アラビヤン-ドゥーシキン案: 図 194、195、196)では大小ホールが1つの建築物にまとめられており、ソヴィエト宮殿全体は楕円形のかたちで、正面入口に塔状のモニュメントが設置されている。V.シチューコとV.ゲリフレイフによる設計案(以下シチューコ(c)案: 図 197、198、199)は3巡目のシチューコ(b)案を発展させたものである。彼らの設計案は、ヴェネツィアのドゥカーレ宮殿とよく似ている。大小ホールは南北に伸びた長方形の建物に収められており、ファサードは列柱が用いられており、正面にソ連の国章のレリーフを中央に配置することで訪問者の視線を上へ導こうとしており、高さへの志向がうかがえる。また塔状のモニュメントが正面手前に配置され、これもドゥカーレ宮殿に接するサン・マルコ広場にある巨大な塔を

参照にしていると考えられる。これら 3 案に共通するのはソヴィエト宮殿の強調点を大ホールとせず、建物全体に置いている点である。むしろ、3 巡目の分析(表 4)で用いた 3-a に分類される設計案の高さを整えたタイプと言えよう。

4 巡目に提出された設計諸案は 3 巡目の 3-a と比べて全体的に均斉がとれている。ヴェスニン兄弟(d)案では、大ホールのヴォリューム上部が建築コンプレックスから突出しているものの、袖部が大ホールを取り囲む形で形成されており、機能上の必要性より突出した高さにデザインされたイオフアン(d)案と比べれば大ホールの高さが抑えられている。しかし、北側正面入口前広場の中央に塔状モニュメントを設置しているため、他の 3 案の特徴を折衷したものとも受け取れる。イオフアン(d)案では大ホール上部がキューポラで覆われ、その上部に空間を設置して高さを水増し、小ホールが大ホールに従属する建築物の裾部となっている。北側入口の階段から中央に向かってソヴィエト宮殿の高さが増し、南側も同じような構造となっている。そのため、ヴェスニン兄弟(d)案と比較して高さへの志向がより強く反映されている。これと同じように、東西南北の軸に沿う形で段状ピラミッドのように高さが増すため、1 巡目のクラーシン(a)案やリュードヴィグ(b)案で見られた寺院型建築物と表現できるかもしれない。このように 4 巡目の設計案をまとめてみると、3 巡目と同じく歴史主義の様式を用いながらも建物全体、または塔状のモニュメントを用いて高さを誇示しようという試みが見受けられる。建設会議が提示した高層のコンポジションをいかに反映させるかという点に課題は集約され、模範解としてイオフアン(d)案が選出されたのである。

結

ソヴィエト宮殿建築設計競技の特徴をまとめてみると次のようになる。1 巡目ではソヴィエト宮殿の機能性を中心にした空間構成が重視され、建築物の外観よりも構成に重点が置かれる設計案が多く提出された。そのため建設会議が念頭に置いていたモニュメンタリティという性質よりも、建物の利便性や功利性を反映させる設計案が多く提出された。このため、1 巡目で提出された設計案の多くにデモンストレーション用の通路ないし広場へ至る複雑な動線を考慮した空間構成が取り入れられ、それに適合する建築形態

が考案されている。2 巡目の公開競技設計段階では、1 巡目と異なり、建設予定地が確定され、建物のプログラムもより詳細に提示された。ここでは、受賞案と招聘案のみではあるが、建築物を空間構成に応じて分類することで、空間配置や訪問者の動線、大小ホールの関係性といった機能やモニュメンタリティを追求する表現性などを特徴付けた。建設会議がソヴィエト宮殿に求めるイメージに近いものとして競技設計外の設計案であるジョルトフスキイ(a)案、イオファン(b)案、ハミルトン案が最優秀賞に選出されたが、スタイルとしてそれぞれが一致しているわけではなく、空間配置という点で一定の共通点を見出すことができる。3 巡目の非公開競技設計では、2 巡目の受賞結果並びに建設会議からの通達を受けて提出された設計案によって競われたが、ここでは一定の傾向が見られる。一部の設計案を除いて、歴史主義建築を独自に発展させたスタイルを用いて、大ホールを中心とした巨大な建築物を配置するという傾向である。結果として、2 巡目の競技設計での受賞案や招聘案の全体的な特徴と比べて、威容、つまり建設会議が求めるモニュメンタリティを与えることとなった。このモニュメンタリティとは、空間構成や装飾性を排除した外観というよりも、視覚的に訪問者を圧倒するようなものであった。しかし最終決定には至らず、非公開競技設計2巡目つまり通算4巡目が行われた。そこでは、高さによる建築物の威容さの探求がより鮮明になったと言ってよい。塔状のモニュメントの導入やホールのヴォリュームを高くすることでより垂直性を志向し、周柱や柱列、アーチなどの装飾的要素が多用されながらも、構成的にはマスを単一化するなどして逆に単純化されたという点に全体的な特徴を見出すことができる。

その名前と理念からしても、競技設計初期段階からモニュメンタリティは表現されていたが、何を持ってそれが表現できるかということは主催者から述べられなかった。だが、2 巡目終了後の通達に「古典を新たなものとして利用する」ことが明記されたことから、この性質をどのように表現するかということにそれ以降の焦点が当てられたことは疑いない。競技設計以前の審議において3回にわたり競技設計を行うことが予め決定されており、その中から具体的なイメージを建設会議は求めたと考えられる。結果として、当初の予定より1巡多く競技設計を開催したことで建設会議に具体的なイメージが喚起され、最終的にはイオファン(d)案がそのイメージに近いものとして選出されたのである。

また B.イオファンがクレムリンに自らの設計事務所を構える政府「お抱えの建築家」で

あり、競技設計で彼の「勝利が予め決まっていた」²³³という説もあるが、これは推測の域を出ない。だが、建築プロジェクト・ソヴィエト宮殿の実務を担当するソヴィエト宮殿建設局主任建築家に、B.イオフアンはこの競技設計が始まる以前から就任していたにもかかわらず、準備段階の1巡目から最終段階の4巡目まで全ての競技設計に自らの設計案を提出している。これは、本文でも触れた「競技設計に関する規定」にある「審査員またはそれに準ずるものとしてその構成員が、競技設計へ直接または間接的に参加することは許されない」²³⁴という項目に抵触する。ソ連国内一般の建築設計競技においても異例の事態である上記のような推測を招き寄せるような状況があったことは否定出来ない。B.イオフアンは確かに職務によって競技設計およびこの建築プロジェクトの詳細を得ることができる立場にいた。1-2巡目ではVOPRA名義で、3-4巡目から個人名義で設計案を提出したK.アラビヤンとV.シンビルツェフを除けば、彼は一貫して個人名義(4巡目では他の建築家達と共同ではあるが)でこの競技設計全てに設計案を提出している唯一の設計者である。彼の設計案がそれぞれの巡回で主催者側からの提言という役割を担っていたと読み解くことはあながち不当ではない。1-2巡の設計案では中央の塔に強調点を置き、3-4巡目は大ホールを中心とするピラミッドのような段状に形成されていったことはこうした主催側の意図の絞り込みを反映していたとも考えられ、それは次章で述べる最終設計案の特徴の一部となっている。この推測の当否はともかく、結果として競技設計勝利案作成者と競技設計後の建設段階で最終設計案を調整する主任建築家が一致することになった。

4巡目終了後(1933年の5月10日付建設会議決議)とその後の同年6月4日付建設会議決議からの通達において、B.イオフアンの競技設計勝利案は最終設計案のための基本案であるとされた。だが、なおも建設会議が要求するイメージを完全なかたちで満たしていなかったとされた。ではどのような点が満たされていなかったのか。次章では、建築競技設計終了後から最終的なプランが承認されるまでを見ていくことにしよう。

²³³ Паперный. Культура Два (前注1参照). С. 29.

²³⁴ РГАЛИ, ф. 1981, оп. 1, д. 47, л. 6.

3. ソヴィエト宮殿の実現に向けて：ソヴィエト宮殿建設作業とそれを巡る動き
(1933-1937)

4巡目では、B.イオファンによる設計案が競技設計勝利案として選出されたが、建設会議の留意点に沿って改変されることが前提とされた。着目すべきはソヴィエト宮殿の内装に関する留意点であろう。競技設計の各巡回で焦点があてられていたのはその外観であり、内装に関しては触れられてこなかった。従来の競技設計の段階でも内装に関する描写を取り入れていた設計案は少ない。例えば2巡目の招聘設計案であるブラジーニ案では大ホールの内装が描かれているが、大ホールの広大さと高さも表現に力点が置かれている。4巡目のイオファン(d)案でも、内装というよりも、高さへの志向の表現にとどまっている。この点は建築競技設計2巡目以降の留意点であった「低さの克服」を補完する材料としての内装の描写であったと考えられる。内装に関する留意点は、ソヴィエト宮殿競技設計後に浮かび上がった新たな課題と言えよう。

4巡目が終了した段階で、B.イオファンによる設計案を基に付された要件とは、競技設計の勝利案に選ばれた建築家(B.イオファン)はV.シチューコとV.ゲリフレイフと共同で最終案の策定に取り組むこと、ソヴィエト宮殿の頂部に高さ50-75m程のレーニン像を設置することであった²³⁵。ここでは建設会議がイオファン(d)案を最終案への基本案として選出した明確な理由は表記されていない。建設会議のメンバーであったA.ルナチャルスキイは「巨大な建築物であるが、軽快かつ上方を志向する建築物となっている」²³⁶とイオファン(d)案を評価している。このことは、4巡目終了時に建設会議の中で既に高さを重視したモニュメンタリティを体現する外観のイメージがある程度定まっていたことを意味する。また2巡目と3巡目に提出された設計案の分析からも、建設会議がソヴィエト宮殿の外観に求める方向性が定まっていたことが証明された。そのため、こうした方向性を確認する意味でA.ルナチャルスキイの評価は建設会議の公式見解と考えてよい。

このルナチャルスキイの見解に加えて、ある程度影響を及ぼしたと考えられるのが、2章で挙げた競技設計3巡目の後にI.スターリンが述べた「個人的な意見」

²³⁵ Дворец Советов СССР. С. 59.

²³⁶ Луначарский. Социалистический архитектурный монумент. С. 9.

である。確かに、2章では4巡目に彼の意見が反映された可能性はそれほど高くない。だが、「宮殿の上に高い柱の形のものを配置する」というI.スターリンの「個人的な意見」は、競技設計終了後の「建築物の頂部にレーニン像を据える」という建設会議の指示と重なる部分がある。それは「柱の形のもの」と「レーニン像」が建築物本体と別個のものとして扱われていることだ。競技設計勝利案は上部に「柱の形のようなもの」あるいはそれに類する垂直状のものを設置するというI.スターリンの「個人的な意見」が前提となって選ばれたという推論はあながち否定出来ない。しかし「個人的な意見」の中では建物の上に設置されるのは柱であって、「マルクス、エンゲルス、レーニンの記念碑をソヴィエト宮殿の前に建てること」が推奨されており²³⁷、建築物と彫刻を1つにするというアイデアが出されたわけではない。こうしたことからI.スターリンの「個人的な意見」が競技設計勝利案選定の直接的あるいは決定的な要因となったと断言することは出来ない。しかし、この個人的な意見が最終的には建築プロジェクトとしてのソヴィエト宮殿の頓挫と関連することになるのだが、この点は4章の最後で触れることにする。

一方で、実務面を執り行う建設局内では実現に向けて「最終案の策定において、またソヴィエト宮殿建設におけるあらゆる方面からの助言を補うため建築技術常設会議を建設局に付属するかたちで組織する」²³⁸こととなる。この常設会議が競技設計2巡目の審査を行った技術審査委員会と異なるのは、非公開競技設計において設計案を提出した建築家が含まれている点である。さらに公開競技設計段階（2巡目）での技術審査委員による審査は準備段階で提出された設計案の問題点を踏まえた上で行われていた。その中で留意された点はソヴィエト宮殿と周囲との調和、宮殿の設計に関する構造上の問題（地盤、基礎、音響、採光、荷重、送風、避難経路等が十分に確保されているかという点）、ソヴィエト宮殿の外見等であり、ホールや宮殿内の設備に関する技術的な問題を除けば、内装に関する点は触れられていないので²³⁹、内装はこのような問題を解決した後、審議される対

²³⁷ РГАСПИ, ф. 81, оп. 3, д. 99, л. 133.

²³⁸ Дворец Советов СССР. С. 59-60.

²³⁹ РГАЛИ, ф. 694, оп. 1, д. 50, л. 26-31.

象となったことがわかる。ただしここで問題となるのは、内装が単に建築物の内装としてのみならず、その外見と同じく「ソヴィエト建築を代表するような」例となるように求められていることだ。そのため最終案の作成において、外見と同じくソヴィエト宮殿の内装も重要な要素として引き合いに出されるようになったのであろう。本章ではそうした要素を加味しながら競技設計後の建設段階の経緯を記していくことにする。

3-1. 競技設計終了直後の動き

1933年の競技設計終了後、1933年6月4日付の通達で、設計者は1934年1月1日までに建築的な部分のプランを完成させ、同年5月1日までソヴィエト宮殿建設に必要な設計図全体を提出することが求められた（実際には建設作業に着手するために必要な設計図が同年4月1日までに準備できているようにするとの付記がある）²⁴⁰。競技設計段階と同じように、設計に関する変更点（頂部にレーニン像の彫刻を設置すること）が加えられているだけでなく、実現に向けた作業行程の作成が加わり設計者への負担は競技設計時に比べて増している。この時点での課題は、「建築物と彫刻の完全なる調和を生み出すことであり、その後詳細にプランを策定すること」²⁴¹であった。ソヴィエト宮殿の建築物の全体は、レーニン像を頂く土台と位置づけられることでこの段階に至るまで課題となっていたモニュメンタリティが位置づけられることになった。競技設計終了後すぐにイオフアン(d)案を基に「大ホールの上へ伸びる垂直軸、ないしはファサードにより近い垂直軸にそってレーニン像を配置し」²⁴²た設計案(以下イオフアン(e)案: 図201)、円筒部分を長方形に置き換えファサードは前者とほぼ同じとした設計案(以下シチューコ(d)案: 図202)の2つが策定された。共に設計者名義はB.イオフアン、V.ゲリフレイフ、V.シチューコの3名であるが、実質的には前者はB.イオフアン

²⁴⁰ Дворец Советов СССР. С. 59-60.

²⁴¹ Атаров Н. Дворец Советов. М., 1940. С. 35.

²⁴² Иофан Б. М. Об архитектуре Дворца Советов. Доклад на первом съезде архитекторов // Архитектурная газета. 21. 06. 1937.

による設計案で、後者は V.ゲリフレイフと V.シチューコによる設計案である。2つの設計案の大きな違いは、シリンダー状の形態を基にしているか長方形の形態を基にしているかという点で、基本となる労働者像の配置や入口部分の階段は全く同じである。それぞれの設計案では、上方へ行くに従って段状の層が高くなり、頂点に聳えるレーニン像へ収束するかたちが取られている。イオフアン (e) 案では大ホールより上の建築物が 5 層なのに対し、V.ゲリフレイフとシチューコ (d) 案では 3 層となっている。こうした違いは、共同設計と留意されたにもかかわらず、それぞれ (B.イオフアン、V.ゲリフレイフと V.シチューコ) が 4 巡目に提出した設計案を基にしたためと思われる。結果としてイオフアン (e) 案が受理されることとなり、1934 年 2 月 19 日付で建設会議によって承認された。レーニン像の高さは 80m となり、それを含めた全体の高さは 415m に及ぶ。だが、「レーニンの彫刻と高い位置に配置された 16 の彫刻群は単なる装飾的な要素となり」、「雄々しい彫刻と建築物の調和の取れた組み合わせという課題は達せられなかった」²⁴³。こうしたことから、イオフアン (e) 案は受理されたが、ソヴィエト宮殿の表現という面ではなおも課題の残るものとなった。こうした課題を克服するため、B.イオフアンは「あらゆる巨大かつ最新の建築物を見学すること」を提案し、一方でソヴィエト宮殿に応用する最新の技術を建設委員メンバーのエンジニアらに習得させるため、アメリカへの出張を 1934 年の 3 月 27 日付で建設局長宛に提案している²⁴⁴。この点は詳しく後述するが、B.イオフアンにとってアメリカの建築は新しいと言わないまでも、競技設計 2 巡目終了後に掲げられた「古典建築を新たなものとして利用する」ことの実践例であり、高さへの追及の前例として理解されていたと言えるかもしれない。このことと関連して、当時のソヴィエト建築では「過去の建築の習得」がテーマとなり、歴史的建築物ないしは過去の建築様式の評価を巡る論争が建築雑誌を中心に巻き起こる。当時のソヴィエト建築界でのこうした論争が最終設計案にどのようなかたちで影響を与えたのだろうか。次節ではこの問題を論じる。

²⁴³ Эйгель И. Борис Иофан. М., 1978. С. 98.

²⁴⁴ РГАЛИ, ф. 694, оп. 1, д. 39, л. 25-26.

3-2. ソヴィエト建築界における様式に関する議論とソヴィエト宮殿への影響

ソヴィエト宮殿競技設計終了後、ソヴィエト建築界の潮流は徐々に「過去の遺産」を習得しそれを反映させるという方向に傾いていった。こうした傾向はソヴィエト建築界で 1930 年代前半に登場し、1930 年代後半には競技設計に提出された多くの設計案の中で例示されるようになる。

歴史主義建築を基にして統一的な潮流を生み出そうとする動きは「過去の建築の遺産を習得」²⁴⁵するという名のキャンペーンによって建築雑誌、特に『ソ連の建築』誌において展開されていく。当時のソヴィエト建築界では、過去の建築が辿った経験を利用することに触れられてはいたが、いかなる建築様式を基にするかということは明確に定められていなかった。また表面的かつ外面のみを利用することを建築家達は否定していたものの、どのようなかたちで自らの設計案に「過去の建築遺産」を反映させるか、また自らの設計手法や建築理念に活かすかは様々であった。

こうした歴史的な建築様式に対して建築家各々の態度が照射されたのは、モホヴァヤ通りのビル（図 203）への評価においてである。この建築物はソヴィエト宮殿建設予定地から近く、モスクワの中心となるアホートヌィ・リヤード地区に I. ジョルトフスキイの設計によって 1934 年に建設されたものである。この建築物は 6 階建てのオフィス兼住居ビルで、当時この地区に建設予定であった建築物（ソヴィエト宮殿、重工業人民委員部ビル、ホテル・モスクワ、ゴスプランビル（現：ロシア下院ビル）等）に比べると、設計の段階ではほとんど関心を持たれていなかった。しかし竣工後、この建築物はソヴィエト建築界で話題をさらうこととなる。その理由は建築物の用途や機能ではなく、建築物の外見とそこに反映された設計者の美意識にあった。建築物の外見といえども、高さやその規模は上述した

²⁴⁵ Творческая дискуссия Союза Советских Архитекторов // Архитектура СССР. 1933. № 3-4. С. 12-15. М. Гинзбургと A. ヴェスニンは、この議論において、過去の建築遺産に対して自らの態度を表明している。彼らは、過去の建築様式は『純粋なかたちで』用いるべきではない」としながらも、その様式を基に新しい建築潮流を生み出すべきであると主張している。しかし、この議論に参加した他の建築家達は彼らとは異なる意見、異なるかたちの建築様式の利用について言及している。

建築物に比べると遥かに控えめであり、周囲と何ら変わりはない建築物である。正面ファサードはコリント式ジャイアントオーダーをモチーフにした付柱が等間隔で配置され、その間に装飾のない窓枠を配置し、アクセントとして最上階にアティカ（エンタブレチュア上部に設けられた屋上階のような部分）を配置した外見である。I.ジョルトフスキイによれば、この建築物で提示したものは「古典であり、もし失敗したのであれば、古典の原理をないがしろにしたことになる」²⁴⁶。ここで彼が用いる「古典」という言葉は、ソヴィエト宮殿の競技設計で自らの設計案において表現しようとしたルネサンス期の建築様式を指している。この彼の発言から、彼が表象しようとしたのは古典的な建築美である。この点が当時のソヴィエト建築界で議論を巻き起こす原因となり、ソヴィエト建築界ではこの建築物に対する評価が大きく分かれることになる。『ソ連の建築』誌の1934年6月号では、この年に竣工もしくは計画された建築プロジェクトの展覧会に関連して、ソヴィエト建築界の方向性が議論されている。実際は、モホヴァヤ通りのビルを巡る意見を基に議論が交わされた。V.ヴェスニンはこの建築物を「19世紀に建造されたものと見紛うようなものであり、防禦施設のよう」であり、「美しいが、ソヴィエト建築が進むべき正しい道なのであるか」²⁴⁷と疑問を投げかける。またこの建築物を「今までには見られないほどの美しいもの」²⁴⁸として、この時代のソ連に建設される住居として求められるような外見に適さない「美術館で展示される模型」で、「キッチンや在宅就労者のための部屋のような様々な細かい点」といった「住居建築における最新の成果」が反映されていないと非難する²⁴⁹。このことから V.ヴェスニン は住居の機能性や利便性を追求した空間構成を問題を取り上げ、その点が建築物の外見によってなおざりになっている点を指摘している。I.ジョルトフスキイが取り入れた建築様式に関して V.ヴェスニンは、審美的観点からの非難ではなく、「時代にそぐわない」という点からの非難にとどめ、歴史主義的なスタイルを全面的に非難している訳ではない。彼が指摘するように、住居

²⁴⁶ Уроки майской архитектурной выставки. Творческая дискуссия в Союзе Советских Архитекторов // Архитектура СССР. 1934. № 6. С. 13.

²⁴⁷ Там же. С. 5.

²⁴⁸ Там же.

²⁴⁹ Там же. С. 6.

としての機能が外見の美によって覆い隠されているわけだが、一方で I.ジョルトフスキのように建築に内在する美やその内部に宿る調和を求めることに同意する意見も多くあった。例えば、I.フォミーンはI.ジョルトフスキがこの建築物を設計し、かつ竣工されたことにより、他の建築家達が「上手く設計せず、また建築できていないということ」を浮き彫りにしたと述べる²⁵⁰。同じく A.トゥルキニツェは、当時竣工されたヴェスニン兄弟による文化宮殿やル・コルビュジェによるツェントロソユーズ（ソ連消費者協同組合中央同盟）ビルと同じく I.ジョルトフスキの設計した建築物を「議論の対象となりうるもの」として挙げている²⁵¹。その中でも I.ジョルトフスキが設計した建築物を一般訪問者と自らの観点で「美しく、優れたもの」と評価しているが、どの点において優れているのかは言及していない。このように、I.ジョルトフスキにより設計されたモホヴァヤ通りのビルは住居やオフィスビルとしての機能よりもその外見上の美しさないしは完成度の高さに評価の基準が向けられている。だが、その美しさや完成度の高さがどの点に起因しているのかは論じられていない。こうした「美しく、優れたもの」を的確に表現しないもしくはできないという事態は、「時代にそぐわない」とされながらも I.ジョルトフスキがいわゆる「古典建築」の要素をいかに組み合わせ、表現しようとしたかを他の建築家達が汲み取れなかったことを意味する。ソヴィエト宮殿の競技設計期間中にソヴィエト宮殿建設局長を務めた M.クリュコフが、こうした歴史主義建築への傾倒を、「知識が少ないためにその歪曲、古典の折衷を生み出している」として、「単なるコピー、無批判な模倣、様式化」が生じる恐れを懸念しているのはこのことを指すと思われる²⁵²。つまり「過去の継承」がある一方で、そういった建築物の形態や空間構成を解決するような学問的作業が未だ深められていないというのである。この点を婉曲的に述べているのは当時の建築史家ボリス・ミハイロフである。時代に求められるのは「建築物の形態如何にかかわらず、モニュメンタルなフォルム」であるのに、この展覧会ではそれを

²⁵⁰ Там же. С. 8.

²⁵¹ Там же.

²⁵² Там же. С. 9-10.

見出すことはない」と断罪する²⁵³。「モニュメンタルなフォルム」を形成する要素として窓枠や柱の柱頭を挙げているが、それらは「本からの切り抜き」であり、正しい様式作法によりながらも、時代の要求に即してそうした要素を修整していくような「現代性」を「感じさせない」。B.ミハイロフの主張を基にすれば、歴史的建築物に立脚した「過去の建築遺産の習得」の模範となるのは、その歴史的建築物から得た原理を有機的に組み合わせ、空間を構成する。そのような空間にモニュメンタリティという性質が付与され、彼が「現代的」とするところの「社会主義的有機性を持った新しいタイプ」の建築物が生み出されるのである。この点を考慮すると、V.ヴェスニンや他の建築家がこの展覧会で特に印象を受けたモホヴァヤ通りのビルは、良くも悪くも一貫した歴史主義的なスタイルであり、各々の建築要素や装飾が有機的に結びついた空間が生み出されたために「美しさ」、「優美さ」が観賞者の目に映ったと言えよう。

こうした「美しさ」や「優美さ」は建築物の外観や形態だけでなく、内装を含めた内部空間構成の点でも当時の建築プロジェクトで反映されることとなる。1934年に『ソ連の建築』誌で「内装の問題」という記事が発表され、この中で様々な建築家達が自らの意見を述べている。報告者の中で、内装で用いられるべき建築様式は新古典主義建築とネオ・ルネサンスであるという意見を述べたのはG.ゴーリッツであった。G.ゴーリッツによれば、内装は「建築的には自立せず」、「建築物全体を規定する様式の内実の1つ」²⁵⁴である。だからこそ、調和の取れたコンポジションの必要が導かれ、この点を自らの様式の特徴の中に備えている伝統的な建築様式を習得する必要があるというのが、彼の結論である。

M.ギンズブルグやA.ヴェスニン構成主義グループは、機能的な建築の構造やプロポーシオンは建築物の規模や内部空間の調和を乱すことはない」と主張している。それにもかかわらず、A.ヴェスニンは「今まで以上に建築系の工業大学で内装の問題に注意を割くことが必須であることを鑑みると、豊かな古典遺産を批判的に習得することを上座（貴賓席）にすえるべきだと提案したい」²⁵⁵と述べてい

²⁵³ Там же. С. 11.

²⁵⁴ Творческая трибуна // Архитектура СССР. 1934. № 7. С. 7.

²⁵⁵ Там же. С.4.

る。彼らによれば、「内装は複雑な組織の有機的部分の1つ」で、建築物の「ファサードや内装は建築物の中で結合された空間を解決する部分である」²⁵⁶。こうした考えは、上記した G.ゴーリッツが述べた内装に関する考え方とほぼ変わらない。したがって、機能を中心とした空間構成を標榜する構成主義建築は「本質的には古典建築やインテリアの有機性と対立したことは一度もなく、建築物のプロポーションと規模の相互関連性という古典建築のシステムにも対立したことはない」²⁵⁷ということになる。1920年代後半に彼らが導いた建築潮流は広汎に支持されソヴィエト建築界にも受け入れられていたが、1930年代に入ると既にソヴィエト建築界では旗色を失っており、対局にある潮流や勢力とある程度歩調を合わせざるを得なくなっていた。インテリアに関する G.ゴーリッツの意見は建築家達の間には、彼等の建築的趣向如何を問わず、広まっていたと考えるべきであろう。

チェコの建築家で当時ソ連で活動を行っていたアントニン・ウルバンは当時建設された住居や計画された住居の内装に関する論文を『ソ連の建築』誌に寄稿している。この論文で反映されているのは建築物内部空間に関する当時の建築家達が有していた共通の考え方である。彼は有名な建築物を例に取りながら、居住者に安心感や深い感情を与える心理的側面について着目している²⁵⁸。彼によれば、「内部空間と外部空間の対比で深い感情を呼び覚ます空間の印象が強ければ強いほど、この空間の価値、光彩や色彩、照明、素材そして特性に対する印象がより一層激しくなる」²⁵⁹。この考えが興味深いのは、こうした特徴によって内部空間をいくつかの類型に分けて説明するだけでなく、内部空間を構成する要素（プロポーション、規模、建材、色彩、照明）の調和を重視しているからである。このような流れとはやや異なる傾向として、A.ウルバンは当時の建築でコルビュジェや A.ペレの設計を挙げている。彼らが設計した建築物では「交互するパースペクティヴと分散された空間の方向性」²⁶⁰によって内部空間が広がっていること、内部空間から外部空間への広がり指摘している。彼らによる設計で重要な役割を

²⁵⁶ Там же. С. 9.

²⁵⁷ Там же.

²⁵⁸ Урбан А. Архитектура жилого дома // Архитектура СССР. 1935. № 6. С. 11-16.

²⁵⁹ Там же. С. 12.

²⁶⁰ Там же.

果たしているのは人間の動線であって美的表現によって喚起される「深い感情」ではない。このような「深い感情」が A.ウルバンの考える内装において重要なものであって、こうした考えは G.ゴーリッツが「人々の考えを鼓舞しなければならない」²⁶¹とする大型建築物におけるインテリアの心理的作用に近いと言える。そのような「内部空間のアンサンブルを際立せる手法の例はイタリア後期ルネサンスの邸宅や宮殿、ミケランジェロやヴィニョーラ、パッラーディオの作品」²⁶²として、内装の心理的作用が歴史的な建築作品でしばしば見受けられることを A.ウルバンは例示している。こうしたことから、ソヴィエト宮殿競技設計後のソヴィエト建築家の間で議論された「過去の遺産の習得」という流れの中では、機能よりも「美しさ」や「優美さ」を備えた有機的な空間や心理的作用に重点が置かれるようになる。こうして、心理的作用によって内部空間をより広く感じさせる歴史主義建築の手法がソヴィエト宮殿のような大型建築物に推奨される素地が形成されていった。

ソヴィエト宮殿は大規模な宮殿型建築物であると共に建築、絵画、彫刻の総合作品でもあった。そのため、内部空間の全体性と調和もまた総合的な芸術イメージによって果たさなければならなかった。このことは建築物の外観、つまりレーニン像の彫刻部分とその下に続く建築部分が自然なかたちで結びつくような姿と調和した内部空間が求められていたことを意味している。このことに加えて、ソヴィエト宮殿内部空間の全体性は「ある部屋から別の部屋へと移動する際に達せられる」²⁶³とも述べられているが、このことは大小ホールを中心として構成されている内部空間を指している。B.イオフアンの言葉を借りれば、大ホールは「公共ないしは政治的機能のための世界で初めてのホールとなり」、小ホールは「コミンテルン、党の会議、ソヴィエ大会や労働組合議会や他の一般的な作業用として定められ」、「交響楽団のコンサートや演劇のために利用されることとなる」²⁶⁴。

²⁶¹ Творческая трибуна. С. 8.

²⁶² Урбан. Архитектура жилого дома. С. 12.

²⁶³ Там же.

²⁶⁴ Иофан Б. Дворец Советов СССР // Плановое хозяйство. 1933. № 7-8. С. 170.

そのため一般的な住居や公共施設の内部空間と異なり、ソヴィエト宮殿の内装では大小ホールを中心としたまとまりが各種施設の一体性によって達せられることとなる。1934年の実施設計案が承認された後、1937年の3月にソヴィエト宮殿の最終案が提出される。その最終案の大小ホール内装を概観してみよう。

大ホール（図 204）はソヴィエト宮殿の中心に位置し、円形平面をしている。ホール中央は舞台を観客席が取り囲み、ホール中央上部はキューポラに覆われる。ホールの規模は建築物の1/7を占め、広さは130m、高さは17.5mとなり、舞台の直径は42mとなった。このホールは単に登壇者の演説のためだけではなく、当時の工業製品やその成果を展示する空間としても計画された。同様にホールの舞台は劇の上演用空間として利用される。舞台の前には200人収容の1階席があり、大ホールで行われるイベントに応じて奈落に収納が可能とされている。1階席の上には大理石のテラスがあり、幹部会会議用となっている。このテラスと隣接して外交使節団用のテラス、その下には外国プレス用のボックス席がある。幹部会用テラスの反対側にはソ連プレス用のボックス席が配置され、このテラスの周囲には階段状のフロアーがある。大ホール丸屋根天井の高さは100mに及び、昼間はこの丸天井を通じて光が差し込むかたちで、夕方と夜間は観客席後方に配置された付柱のエンタブレチュアから上方へ向かって光が照らされる。このようにして、大ホールの観客は「あたかも開かれた空の下にいるような感覚になる」²⁶⁵。舞台の上にはレーニンとスターリンの彫刻を先頭にした労働者達の彫刻、ホール上層にはホール脇に配置された他の部屋への入口や舞台袖への出口、その上にあたる壁にはプロレタリアートの歴史を描いた壁画、ホールの壁には3つの電飾画面が配置される。こうしたことを技術的に保証するため建築物自体をラジオステーションないしは映画館化することが打ち出されている。

小ホール（図 205）は大ホールの後方、建設予定地区の南側に位置している。半円形型を取り、会議、集会そして劇の上演に用途が定められている。観客席背後を取り巻くフリーズ（エンタブレチュアのほぼ中央に位置する部分）には彫刻が施され、大ホールの天井壁画のようにプロレタリアートの歴史が描かれている。

²⁶⁵ Рожин И. Интерьер Дворца Советов // Архитектура СССР. 1939. № 6. С. 15.

天井の舞台寄り部分は光天井で、そこから光が放射される。大ホールと異なり、小ホールの天井は平らである。このような形態は当時の大型建築物の内装にも用いられ、例えば、1章で触れた文化宮殿のホール観客席がそれである。

大ホールの舞台袖ならびに両ホールのローマ劇場に隣接する部分には市民戦争の英雄ホールと憲法ホールが配置され、大ホールと同様に天井壁画と壁龕に据えられた彫刻がある（図 206、207、208）。大ホール入口部分と同じく、この2つのホールの入口部分もアーチ飾りの支えがある。内戦の英雄ホールでは外側のファサードはガラス張りで、列柱廊が形成され、この柱の下の部分には内戦の犠牲者の名が刻まれている。一方で憲法ホールには大ホールと隣接し、壁に沿って同様に列柱廊が形成され、柱の下部には1936年に施行されたソ連憲法の条文が刻まれている。

このように、最終案における大小ホールの内装は来訪者の心理に、否が応でもモニュメンタリティを生じさせる意匠である。こうした内装は外観とどのようなかたちで結びついていたのであろうか。

3層からなる円筒状のファサードを持つ最終案の外観（図 209）は1934年のイオファン（e）案（図 201）と比較した場合に、いくつかの違いが認識できる。1つ目は建物高層部の円筒の数及び各々の高さに変化していること。2つ目はその円筒部脇に配置された塔門の幅が狭まり、柱型のデザインに変化していることである。イオファン（e）案では、胸を張り右手を斜め45度に挙げるレーニン像が描かれていたが、最終技術設計案では前方に手を突き出している。基本設計案と比較して以上のような違いが認められたが、建築物の外見では「簡潔さ、表現性を目指し、建築物の構造部においても簡素化とコストダウンを目指す」とされていた²⁶⁶。その「簡潔さ」と「表現性」はどの点で果たされたのであろうか。

1935年11月14日付のソヴィエト宮殿建設アトリエによる会議において、建築内部構造は「自然採光による光の浸透を上からホールへあたるよう、キューポラ部分の3列に配置されていた窓を2列に減らし」、「円筒部ファサード壁面を直線

²⁶⁶ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 45, л. 32.

的な外観にする」とされている²⁶⁷。曲面でなく細かく直線上に分割してコストダウンをはかったということであろう。建築物のほぼ中心に配置される大ホールの周囲にはロビーが配置される。このロビーは外見上において地上階にあたるスタイロベート部分²⁶⁸に位置し、そのロビーの内部空間装飾と照明の関係から自然採光を重視した窓が外見に取り入れられた。だが、高層部に関しては建築物の頂点に据えられるレーニン像がソヴィエト宮殿のメルクマークとなるため、外見が重視されていた。イオフアン（e）案では主任建築家である B.イオフアンが見立てたレーニン像であったが、最終設計案では彫刻家セルゲイ・メルクーロフが担当し、この2人の間でレーニン像の形態に関する意見が一致していない²⁶⁹。そのため、下案から最終設計案を作成する際にレーニン像の形態は後回しとなり、建物の内部構成の処理が優先された。しかし、高層部への訪問者数を減らしその部分への荷重を減らすため、高層部は「奥行き 11m で高さ 13.5m の階を 3 つ設計する」としている²⁷⁰。この点に関して共同設計を担当した V.ゲリフレイフは「3 つではなく 4 つに分割するのが建築的に優れた処理である」と提案したものの、この意見は取り入れられていない²⁷¹。

正面と背面両端にある塔門²⁷²は中央部分から両脇に後退するかたちで形成され、それに合わせるかたちで垂直状の分節も二連式に仕上げられている。奥行きと水平においてこうした律動性を伴ったファサードは、両端の塔門頂点に配置された彫刻群によってさらに高さへの志向が加えられている。この彫刻群はシリン

²⁶⁷ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 51, л. 11-11об.

²⁶⁸ スタイロベート («стилобат»)とは本来古代ギリシア、古代ローマにおける神殿建築で取り入れられた階段状基壇最上段の床面を指す。ソヴィエト宮殿の下案及び最終設計案では正面入口に続く階段があり、その最上段の床面を含めたそこから上の容積全てを指して「スタイロベート」と記述している。本来であればこの部分は、建築物の低層階もしくは地上階部分とするのが妥当である。この考えを基にその上にある「高層部」を中心にした場合、「スタイロベート部分」は建築物部分とはいえ、階段状の基壇を形成しているから、その基壇を指すステレオベート («стереобата»)となる。だが、ソヴィエト宮殿の最終設計案に関する資料全てにおいて、スタイロベート («стилобат»)という表現が用いられているため、本文でもそのように記していることを留意されたい。

²⁶⁹ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 99, л. 5 об.

²⁷⁰ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 99, л. 11.

²⁷¹ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 45, л. 10 об.

²⁷² 本来建築用語で塔門とは2つの塔状もしくは台形状の建造物を結んだ門構えを意味する。だが、ロシア語の建築用語としての«пилон»(日本語で「塔門」もしくは英語で“pylon”)は周囲から垂直状にやや高くなった2つの構造物から成る門構え(例えば日本の学校などで見られる入口の門構え)またはそのどちらか一方に対しても広く用いられている。そのため、意味としては差し詰め「塔状のモニュメント」ないしは「垂直状のモニュメント」という意味であろう。『ソヴィエト宮殿』を扱う資料では一貫して«пилон»と記されているため、それに従い日本語で「塔門」として記していることを留意されたい。

ダー部の下から1層目と2層目、そして正面入口両脇の真上にあたる部分にそれぞれ配置されている。シリンダー部には「万国の労働者、団結せよ」という社会主義のスローガンにあたるものを擬人化した彫刻群、そしてスタイロベート部、正面入口上部とその背面部分の彫刻は「内戦の英雄」（プレチステンスカヤ河岸通り側：東側）と「社会主義建設の英雄」（ヴォルホンカ通り側：西側）というテーマを擬人化した彫刻群が配置されている。これらの彫刻群は建築物の頂点に据えられているレーニン像に集約する。その理念としては、シリンダー部の彫刻群は「労働者の権力、プロレタリアート独裁、人間による人間への搾取殲滅にむけて闘う共産主義インターナショナルを創り出すために導いた V.I.レーニンの闘争を偲ぶ」ためであり、正面入口上部の彫刻群は V.レーニンと当時の指導者（I.スターリン）を讃えるためのものとされている²⁷³。最終設計案では基本的な構成をできる限り変えずにソヴィエト宮殿の高さを引き立てるような構成が取られ、特に視覚効果を強調した構成が意識された意匠になっている。

ソヴィエト宮殿の全体的な意匠はよりモニュメンタルな性質を帯び、外観では塔門を円筒部に配置することでその性質と垂直性が強められ、内装では歴史主義的な意匠が用いられることで調和への志向が反映された。特に、大ホールの内部空間は他のホールのインテリアと調和するように注意が払われている。これは「建築遺産の習得」という潮流が形成される中で、歴史的建築物で用いられた有機的なつながりが反映された結果とも言える。B.ミハイロフが述べたように「過去の建築遺産の習得」が「ソヴィエト宮殿の設計によって始まることになった」²⁷⁴とすれば、この内装はその集大成であり、また模範例として解決策を提示したことになる。この有機的な統一感によって、B.ミハイロフが憂慮していた「モニュメンタルなフォルム」は解決に至る。しかし、それは「社会主義的有機性を持った新しいタイプ」になり得たのであろうか。同様に、ソヴィエト宮殿の内部空間がその機能性をも反映しているという点にも着目しなければなるまい。建設段階で

²⁷³ Милютин Н.А. Опыт тематической композиции // Дворца Советов. 1940. № 3. С. 21-22.

²⁷⁴ Уроки майской архитектурной выставки. С. 11.

ソヴィエト宮殿設計の際に求められていたのは照明、昇降機、大ホールのモニター等に関係した技術や設備であった。こうしたことは全て「ソヴィエト宮殿はソ連の首都における真の建築的ドミナントとなる」²⁷⁵と予告された建築物の外観と直接結びついている。次にこの点を把握するため最終設計案の詳細に触れ、どのように計画されていたのかを見ていこう。

3-3. 最終設計案の概要と建築計画

ここで 1937 年の最終設計案及びその後の技術案提出の際に通達されたソヴィエト宮殿の建築概要を見てみよう。建設予定地はモスクワ河に隣接するソイモノフスキイ通り、ヴォルホンカ通り、レニフカ通りに囲まれた区画でソヴィエト宮殿の建築面積、地上部の水平投影面積は 110,000m²、うち高層部が 77,000m²、(地下部は 109,000m² で地上部とほぼ同じ)、建物の高さは 419m (うちレーニン像の高さは 75-100m) で総階数は 24-25 階²⁷⁶、建物の総容積は 65,000,000m³ (うち鉄筋コンクリート容積は 3,600,000m³、鉄骨重量は 228,000t) となり、建物の構成は大ホールを含むスタyroベード部、小ホールを含む地下部分、大ホール上部となる高層部 (中身はレーニン博物館とされる)、高層部の上に立つレーニン像と大きく分けて 4 つの部分から構成されている。建物内部には換気及び冷暖房設備と移動運搬設備を設置し、換気用ダクトの全長は 163km、暖房用ダクトの全長は 137km、電気用ケーブルの全長は 744km、排水配管設備の全長は 84km、エレベーターは 140 機以上、エスカレーターは 62 機設置予定となっている²⁷⁷。

ソヴィエト宮殿は最終設計案作成の段階でいくつかの要望が追加され、それに応じて基本設計案が作成され、いくつかの変更点を経ることとなった。ただし、ソヴィエト宮殿全体の建築計画の詳細な全容はこれまで本稿では取り上げてこなかったもので、ここでは基本設計案が作成され、それを基に建設作業 (施工) に入る段階で企画された建築プロジェクトとしてのソヴィエト宮殿の全体構想をまと

²⁷⁵ Там же.

²⁷⁶ この階数は ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 51, л. 3. の断面図を基に導き出したものである。

²⁷⁷ Архитектурно-технический проект дворца советов // Архитектура СССР. 1937. № 6. С. 29.

める。これによって、最終設計案でどの点に力点が置かれるようになったのかということが明らかになる。

1934年3月29日付の建設局長 V.ミハイロフから建設会議議長 V.モロトフに宛てた報告書では「建設作業が始まるまでにクレムリンからソイモノフ通りにまたがって位置している区画の建築物、ソヴィエト宮殿の配置に関するあらゆる問題を明らかにする」²⁷⁸として、基本設計案作成後の建築計画を詳細に伝えている。この通達には建築物に関する以下の基本情報が明記されている（表6）。この情報は建築概要で記した情報よりも後に公になる情報と考えられ、専有面積に関してはより正確な数値で記載されている。

表6：ソヴィエト宮殿の規模の概要（1934年2月19日時点）

建物の容量	5,700,000m ³
建設予定地専有面積	120,000m ²
ソヴィエト宮殿に求められる資材の重量 (副次的なものは除く)	2,500,000t
土木工事	1,000,000m ³
コンクリート容量	500,000m ³
漆喰及び外装	750,000m ²

公開競技設計では建物内部の主要施設が4つに分かれており、それぞれの占める面積が割り出されてはいたが、その組み合わせは設計者に委ねられていた。最終案設計の段階でこの組み合わせは、B.イオフアンによる競技設計勝利案を基に既に確定していたので、競技設計終了後に基本設計案作成と同時にソヴィエト宮殿建設に必要な建設資材の量が算出されたのは、不思議ではない。

このようにおおまかなかたちでソヴィエト宮殿の見通しが立つと同時に、競技設計で定められていた建設予定地では、基本設計案を基にしたソヴィエト宮殿が「かなり窮屈そうな建物に見えてしまう」²⁷⁹という問題が生じてきた。この問題に対する設計者達（B.イオフアン、V.シチューコ、V.ゲリフレイフ、G.クラーション）から、競技設計後に定められた高さ415mと長さ285mの規模をほこるソヴィエト宮殿の「建物の全貌が見られない」ため決定していた建設予定地の区画か

²⁷⁸ ГАРФ, ф. 3316, оп. 64, д. 563, л. 157.

²⁷⁹ ГАРФ, ф. 3316, оп. 64, д. 563, л. 161.

ら建物を移動させるという提案が出されている²⁸⁰。「建物の全貌」をその理由として設計者達は挙げているが、施工する際に生じる作業上の問題も大きな理由であったと思われる。その理由とは「ソヴィエト宮殿の長方形部分の基礎設置環境」であり、建設予定地から建物を「かつてあったザチャチエフスキ修道院の場所（ソイモノフスキ通りよりも南側に位置し、建設予定地と比較してプレスチステンスカヤ河岸通りよりすこし離れた場所：著者註）」に移動させることで工事環境が「より最適なものとなり、全体的に見て経済的になりかつ作業を早めることになる」²⁸¹。この点は後に触れるが、施工段階で建設予定地にソヴィエト宮殿の基礎部分を設置する際に、モスクワ河に近いことから湧き水を留める山留め工事が困難となる。そのような困難を避けるため、建物位置を変更する提案が行われているのは興味深い。この点に関連しては、V.ミハイロフのV.モロトフ宛報告書では、「建築物の基礎工事は、かなり複雑な地盤構造を考慮すると、極めて困難な課題であり」、「建物周辺部分に関して最終的な処理方法は見つかっておらず、建物高層部中央にあたる部分に関してもモスクワ河の水位から 21m の深さにある第 2 石灰岩層まで下ろしたケーソン基礎を設置する必要がある」²⁸²としている。設計者達の要望では建物位置を動かすことのみに触れられており、基礎工事の具体的な点には触れられていなかった。だが、建設局長 V.ミハイロフが報告書でその具体的な内容に触れていることから、設計者の要望のみならずエンジニアの意見も総合的に反映されていることがわかる。

建築物の構造に関しても、この報告書では、大ホールとそれに続く高層部に「作用する大きな荷重と並外れたモニュメント性を考慮すると、この建築物は高強度の鉄骨で仕上げられなければならない」²⁸³と言及されている。一方で大ホールのキューポラ部分の付け根（観客席部分の上部）より下にあたる建物低層部はコンクリートでつくられ、天然石で外装が施される。またレーニン像に関しては板金を用い、小ホールでは鉄骨もしくは鉄筋コンクリートを用いるが、それ以外の施

²⁸⁰ ГАРФ, ф. 3316, оп. 64, д. 563, л. 157-158.

²⁸¹ ГАРФ, ф. 3316, оп. 64, д. 563, л. 158.

²⁸² ГАРФ, ф. 3316, оп. 64, д. 563, л. 161-162.

²⁸³ ГАРФ, ф. 3316, оп. 64, д. 563, л. 162.

設の構造に関してはこの報告書の時点でまだ明らかになっていないとしている。外装材に関しては、外壁は二重の構造となり、断熱効果を必要とする内壁側はセラミックブロックで、建物の外壁側は天然石またはステンレス鋼で仕上げる事が述べられている。

こうしたソヴィエト宮殿に用いられる建築材料については、「建設局に対して様々な建築材料の確保が必要で、それらの生産はこれまでのところソ連国内で行われてこなかった。そのため高品質な製品の供給が必要なことから独自の副次的な事業（ソヴィエト宮殿用のみならず住居建設のための建設業用採石場、石材加工、新素材の開発、建設局の特別注文のための機械工場）を組織することに迫られている」²⁸⁴。ここから建設作業に用いられる建築材料に関しては既に検討はされているが、その生産及び供給に関しては未だ解決されておらず、そのほとんどが外国産のものを頼らざるを得ない状況であることが示されている。ただし、建設現場への資材の搬入または輸送経路は確保されていた。即ち、資材の輸送量は「約 3,400,000t に及び、そのうちの 60%までを鉄道に割り当てる[...]そのため資材貯蔵所となるルージニキのそばにあるヴォロビョーヴィ・ゴーリ駅の拡張が求められる」²⁸⁵。ルージニキとはハモブニキ地区にあるモスクワ河沿岸の地区であり、ソヴィエト宮殿建設予定地からそれほど遠くない。ヴォロビョーヴィ・ゴーリ駅はモスクワの中心地を円環状に結ぶ鉄道の乗降駅として 1908 年に建設され、この環状鉄道（モスクワ鉄道小環状線）²⁸⁶はモスクワと他の都市を結ぶ鉄道とは接続されていないが、いくつかの駅でモスクワと他の都市を結ぶ鉄道との連絡が行われるため、遠方からの輸送が可能となる。こうした鉄道網を利用して、資材貯蔵所から建設現場へは「モスクワ河沿いに蒸気機関車の牽引による貨車用の線路を敷設する」²⁸⁷こととしている。資材輸送は鉄道のみならず河川の利用も含まれていた。ソイモノフスキイ通りとモスクワ河の中州となっているボロトナヤ地区

²⁸⁴ ГАРФ, ф. 3316, оп. 64, д. 563, л. 163-164.

²⁸⁵ ГАРФ, ф. 3316, оп. 64, д. 563, л. 164.

²⁸⁶ この環状鉄道は 1908 年に開通し、1934 年から貨物輸送のみに限定して利用されていたが、2012 年から 2016 年にかけて再建され、2016 年から旅客としても利用されることになる。貨物輸送に限定されていた期間はおもにモスクワ市の建設事業、特に住居建設の資材運搬に活用されていた。

²⁸⁷ ГАРФ, ф. 3316, оп. 64, д. 563, л. 164.

の南側に挟まれた部分にあったバビエゴロツカヤ・ダム²⁸⁸付近に「埠頭を設置し [...]この埠頭以外にも河川輸送によって積荷が直接建設現場に輸送されることになる」²⁸⁹。こうしたことから、建築材料そのものの供給は覚束ないものの、その輸送基盤はこの時点で明確に計画されていたことがわかる。

こうした見通しに沿って、建設作業開始までに済ませておく作業として挙げられているのが、1. 建設予定地区の地下に埋められた電話線や水道管などを束ねた共同溝の撤去、2. ソイモノフ通りの下を走る地下鉄が敷設される高さの調整、3. 建設予定地区に隣接するポリショイ・カーメンヌィ橋と芸術美術館の移設である。1と2は既に挙げた建築物の基礎工事に応じた作業であり、3は建設予定地周囲の道路拡張に伴ったものである。こうした作業はこの報告書の時点で1934-35年の間に行われるとしている。ソヴィエト宮殿そのものの建設作業では、建築物高層部と関連した作業が主要な位置を占めるとしている。なぜならば、ソヴィエト宮殿全体の「建設作業期間を決定し、建物の規模の約60%を占める」²⁹⁰のがこの建築物高層部だからであり、「他の部分はそれよりも遅く着工されて、(高層部に関連する建設作業と)同時期に終わる」と見通しているからである。

このような見通しのもとで建設作業を機械化した場合、工期は最短で5年、またいくつかの問題点などを考慮に入れても6年以内には建築物が竣工するとしている。競技設計を企画した段階で工期は3年と見積られていたが、それよりも長い期間となっているのは競技設計企画当初と建設予定地が異なること、建築物の規模が増大したこと、また高層部に関連した建設作業に時間がかかると認識されていたことなどが挙げられよう。ソヴィエト宮殿に関連する土木工事の着工はこの報告書が提出された約2ヶ月後の1934年5月末としているが、着工の時点で「必要な機器と運搬手段が整っていることが条件である」²⁹¹。さらに設計者達が提案したように建物位置を動かすことになれば、基礎工事は1935年の春に開始されるとして、さらに遅れる見通しを立てている。

²⁸⁸ 1836年にモスクワ河の航路水位を上げるため建設され、1937年にモスクワ運河開通に伴い撤去された。

²⁸⁹ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 23, л. 10.

²⁹⁰ ГАРФ, ф. 3316, оп. 64, д. 563, л. 164.

²⁹¹ Там же.

こうした計画から建設局は建設会議に対して、1. 設計者達が提案する建物位置の移動を承認するかどうか、2. それと関連した建設作業期間の展望、3. 建設作業に関連した副次的な事業を建設局が組織することの承認、4. 機械工場への特殊な注文及び大掛かりな修理のために必要な何らかの権限を建設局に付与することを求めている。さらに建設予定地を管轄するモスクワ市ソヴィエトに対しては、1. 年内（1934年）に建設予定地の地下にある共同溝の撤去と1935年には河岸通りの建設を終わらせること、1936年には建設予定地に隣接するポリショイ・カermenヌィ橋を移設すること、2. 10,000人までを見込んだ建設労働者用の寮を建設局に提供すること、3. 建築材料貯蔵所となるルージニキから建設現場まで資材運搬用蒸気貨車のための線路を敷設することを要望している²⁹²。

1934年の基本設計案完成とほぼ同時期に提出された見通しでは、主に建設作業と建設予定地には言及されているものの、建築物個々の部分に関するもの、特にソヴィエト宮殿の施設で主軸となる大小ホールに関する言及がない。この点に関する具体的な条件が明らかになるのは、1度目の国外出張²⁹³を終えた1935年6月29日付の建設会議決議においてである。この決議では1. ソヴィエト宮殿の建築デザインの変更、2. レーニン像の彫刻デザインのコペティションについて、3. ソヴィエト宮殿開発の基本方針、4. 基礎の設置の4つの項目が審議された²⁹⁴。ソヴィエト宮殿開発の基本方針では大小ホールの内訳が詳細に記されている。既に3-2においてその内装に関しては触れているので、ここでは簡潔に大小ホールの構造について言及するに留める。競技設計の段階では大ホールの収容人数は15,000と定められていたが、この決議では5,000人増の20,000と定められ、その内訳は以下の通りである（表7）：

表7：1935年6月29日時点での大ホールの収容人数内訳

代表団	3,000名
一般観衆	14,300名
幹部会	200名

²⁹² ГАРФ, ф. 3316, оп. 64, д. 563, л. 166.

²⁹³ ソヴィエト宮殿建設局は1934年と1935年の2度にわたりヨーロッパ諸国及びアメリカに長期出張している。この国外出張に関しては3-3で詳細に触れる。

²⁹⁴ ГАРФ, ф. 5446, оп. 16a, д. 560, л. 13-16.

外交団	150名
外国プレス	150名
ソ連プレス	200名
オーケストラ	700名
舞台関係者	1,300名 (舞台の楽屋で従事する者が1,300名で、アリーナもしくは舞台ではさらに1,700名を見込んでおり、この1,700名には幹部会及び代表団用休憩室の250名を含まない)

計 20,000名
(接客担当職員数は含まず)

このような内訳から、一般観衆に最も席を割り当てていることがわかる。このホールは、大規模な党大会や政治集会及びコンサートや演劇といった催し物の上演、さらには工業製品や技術成果を展示する空間として考えられていた。一般観衆の収容数を除くと代表団が次いで多く、これは党大会や政治集会の出席者用の席数であると考えられる。例えば、1919年以降のロシア共産党大会（1925年以降は全連邦共産党大会）はモスクワのクレムリン内にある元老院のスヴェドロフスキイ・ホールで行われており、当初は約400名の参加者であったが、ソヴィエト宮殿の競技設計が開催される前年（1930年）の第16回大会では約2,150名が参加している。ここから代表団の席数である3,000はやや多いが妥当な数だと考えられ、むしろ一般観衆の収容数の多さが際立つ。1度目の国外出張ではアメリカのみならずヨーロッパ諸国を訪問し、その中でもイタリアを訪れた際に「ポンペイ遺跡の15,000-20,000人収容の劇場跡とヴェローナにある40,000人収容のアレーナ・ディ・ヴェローナを見学した」²⁹⁵とあり、「音響の観点から」この屋外劇場を参考にするとしている。こうした視察はソヴィエト宮殿の大ホールにおける一般観衆の収容数に応じた屋外劇場の実例を確認し、収容数の妥当性を判断するためであったのかもしれない。一般観衆用の客席はアンフィテアトルムで構成され51列となり、中央に位置するアリーナには、必要に応じて奈落に片付けることが可能な外交団用のパルテール（1階後方部のバルコニー下にある半円形の部分）が配置されている。観客席となるアンフィテアトルム円周部分には幹部会用の席が段状のテラスのかたちで配置されており、その上部には彫刻群が、その下には登

²⁹⁵ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 45, л. 12.

壇者用の演壇が配置されることになる。大ホールの周囲は環状のロビーとなり、パイロンが等間隔で配置され、このパイロンが建物中央部の構造的な支えとなっている。大ホールと接するかたちで回廊、喫煙所、ロビーが配置され、それぞれはアンフィラード（続き部屋）のかたちでつながっている。

一方、小ホールは 6,200 人収容と定められ、これは競技設計時の 5,900 人収容からわずかに増加したに過ぎない（表 8）。

表 8：1935 年 6 月 29 日時点での小ホールの収容人数内訳

代表団	3,000 名
一般観衆	1,800 名
幹部会	100 名
外交団	150 名
外国プレス	150 名
ソ連プレス	200 名
オーケストラ	200 名
俳優	600 名

計 6,200 名
(接客担当職員数は含まず)

小ホールは機械製品などの展示や催し物を主要用途とはせず、党及び政府関連の大会や委員会の審議を主目的としており、俳優の収容数が数えられているのは大会や審議などの空いた時間に催される短い時間の演劇などのためである。そのため、小ホールは政府及び党関連の集会向けの空間であり、訪問客数は大ホールと比較して少なくなっている。全体の構造は半円形のアンフィテートルムで、円周上にはバルコニーが配置され、舞台は約 1,200m²、パルテールは 8,800m² に及び、「劇場用ホールとしては西欧一のホールとなる」²⁹⁶。この小ホールには読書室と 4 つの講堂を備えた 500,000 冊所蔵の図書館が付属する。

基礎工事に関しては、後に詳細を記すが、1935 年の決議では基礎を設置する深さ、ソヴィエト宮殿の荷重を支える主要構造部の設置位置、基礎工事の掘削で生じる湧水への対応としてアメリカの建設技術を導入し、専門家を招聘することが決められた。ここから 1934 年の時点で設計者達が提唱した建物位置の変更は承認されず、競技設計の際に定められた場所に基礎を設置する方向で話が進められて

²⁹⁶ Архитектурно-технический проект. С. 29.

いることがわかる。一方でこの点をより明らかにするため基礎部分の設計を担当するエンジニアの3ヶ月にわたるアメリカ出張を認めている²⁹⁷。こうしたことから1935年6月29日付の建設会議決議では下案完成後に提出された報告書で触れられていない部分、または明瞭でなかった部分を補うかたちで、ソヴィエト宮殿建設の方向性が示されている。

しかし、1934年の報告書で指摘されていた「建物の規模の約60%を占める」高層部に関する見通しには触れられていない。これは、高さ50-75mを予定していたレーニン像とそれを支えるソヴィエト宮殿高層部の荷重を受ける大ホール部分を構造上どのように解決するか、つまり力学的に極めて困難な構造の解決方法が示されていないことを意味している。1935年の建設会議による決議前の建設局による国外出張報告（1935年4月25日付）ではアメリカの鉄骨構造の専門家を招聘して、最終設計案作成に彼らを参加させることが記されている。確かに1回目の出張において橋梁の専門家から当時アメリカに建設されていた大型橋梁の設計図を譲り受けてはいる²⁹⁸。だが構造全体に関する設計図の作成は「アメリカから専門家を招聘し」、「予め考えていた鉄骨構造の概略図を基に具体的な設計図を作成する」²⁹⁹としている。こうしたことから高層部の構造については、この「アメリカから専門家を招聘」することが実現できていない段階、つまり1935年の段階では具体的に見通しが立っていないことがわかる。

このように競技設計後の1933年から始まる建設作業に関する計画を総合すると、建設予定地に関連した土木工事と建築物の基礎部分に関する見通しが立てられ、それに応じて使用される建設資材の量の概算が見積もられ、運搬方法もほぼ固まっている。だが基本設計最終案が完成した1934年の段階では建築物の構造に関する見通しは建設会議に提出されておらず、1935年の建設会議決議で、全てではないが、明るみとなる。またこの決議前の1回目の国外出張でアメリカの専門家との協議から「予め考えていた」とされているソヴィエト宮殿の鉄骨構造の概略は、それ以前では建設会議に報告されていない。こうしたことを総合すると建

²⁹⁷ ГАРФ, ф. 5446, оп. 16а, д. 560, л. 15.

²⁹⁸ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 45, л. 52-53.

²⁹⁹ Там же.

建築物の構造についてはソ連国内では最終的な判断はできなかったと考えられる。この点を裏付けるように、1 回目の出張の直前に催された建設局の技術委員会会合では「確実に協議を要する基礎、構造、音響に関する 3 つの主要な問題を取り決めなければならない」³⁰⁰としており、この問題を解決させる目的こそがアメリカを含む国外出張であることがこの会合で語られている。

3-4. 1920-30 年代のソ連の産業界におけるアメリカとの技術交流

ソヴィエト宮殿の高層化に伴い、建設局は、アメリカの摩天楼建築物に用いられる建設技術を習得していくことになる。ソ連に限らず戦前のヨーロッパでは超高層ビルは建設されておらず、それがあったのは 19 世紀の後半以来のアメリカに限られていたからである。また鉄道技術者など土木・建設の分野では世紀の変わり目以前からロシア人技術者がアメリカに渡って研修を務めている。革命後のソ連でも、建設界のみならず産業界全般で 1920 年代半ばからアメリカを含めた西欧の産業技術が継続的に導入されていた³⁰¹。一方では、1925-1926 年には約 320 人、1927-1928 年には 400 人以上、1928-1929 年には 500 人以上のソ連のエンジニアが研修目的で国外へ渡航している³⁰²。その中でも 1920 年代半ばから 1930 年代初頭まではドイツ系企業との技術交流（ソ連側からのエンジニアの派遣、技術関連の文献及び専門機器の供与もしくは購入、専門家及びエンジニアのソ連への招聘など）が最も多く、1929 年において正式に技術交流のあった外国系企業 64 社のうちドイツ系企業は 29 社あったとされている³⁰³。これは内戦後の 1922 年にドイツとの間で締結されたラパッコ条約によって外交関係が樹立されたことと関係している。この条約により軍事及び経済的支援、それらに伴う技術支援をドイツから

³⁰⁰ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 39, л. 71.

³⁰¹ 十月革命から 1930 年までの西欧産業技術の導入及び技術交流に関しては Antony C. Sutton, *Western Technology and Soviet Economic Development 1917 to 1930* (California: Hoover Institution Press, 1968); Antony C. Sutton, *Western Technology and Soviet Economic Development 1930 to 1945* (California: Hoover Institution Press, 1971); E. H. Carr and R. W. Davies, *Foundations of a Planned Economy 1926-1929 (vol. 1, part 1)* (London: Macmillan, 1969); E. H. Carr and R. W. Davies, *Foundations of a Planned Economy 1926-1929 (vol. 1, part 2)* (London: Macmillan, 1969)に詳しい。ここでは上記の著作を基に 1920 年代から 1930 年台半ばのアメリカとソ連の技術交流のみに焦点を充てることにする。

³⁰² Sutton, *Western Technology 1917 to 1930*, p. 321.

³⁰³ Carr and Davies, *Foundations (vol. 1, part 2)*, p. 711.

引き出し、そのことが新経済政策（ネップ）と連動して内戦で低迷したソ連経済復興の一端を担っていたのである。

1929年の外国系企業との技術交流に戻ると、ドイツに次ぐ国は21社のアメリカであった³⁰⁴。ドイツと異なり当時アメリカとは国交が正常に結ばれておらず、アメリカ政府は「ソ連との個人でのつながりや商取引に関して支援もしなければ干渉もしない」³⁰⁵という立場を取っていた。それにもかかわらず、1929年の段階でドイツに並ぶ技術交流が培われた背景には2つの機関の後援がある。それは全連邦対外文化交流協会（VOKS）とAMTORGである。

VOKSはソ連及び外国における文化・科学の発展と相互交流を目的として1925年に人民委員会議の承認を経て設立された団体で、アメリカのみならずヨーロッパやアジア諸国などとも積極的な交流を図ることが目的とされていた。アメリカとの文化及び学術交流に関しては、1933年にアメリカとの国交が正式に樹立されるまで、1926年に設立されたアメリカ共産党が支援するアメリカ・ロシア研究所を通じて行われていた。当初はVOKSの会長であったオリガ・カーメネヴァによる積極的なソ連側からのアプローチと外務人民委員会の非公式代表としてアメリカに駐在していたボリス・スクヴィルスキイによって、1930年ごろまでにはアメリカの様々な学術機関代表者によるソ連への視察、アメリカ及びソ連からの短期間交換留学、アメリカ国内でのロシア・ソヴィエト文化に関する定期的な展覧会、映画や文学の紹介が行われている。こうした活動を通じて、非公式ではあるが、ソ連側とアメリカ側は互いに関連事業における現地での窓口を把握し、そうした協力者を得ていた³⁰⁶。

後者のAMTORGはソ連の政府機関ではなく、ソ連側がアメリカとの通商を行うために1924年に設立したアメリカの貿易会社である。同じく1933年にソ連とアメリカの間で国交が樹立されるまではソ連政府の貿易業務が委託されただけでなく、外交関係樹立に向けた交渉も引き受けており、双方向からの経済及び政治

³⁰⁴ Ibid. ドイツ、アメリカ以外の外国系企業はフランス（7）、スウェーデン（3）、イギリス（2）、スイスとイタリア（1）である。

³⁰⁵ Sutton, *Western Technology 1917 to 1930*, p. 296.

³⁰⁶ Norman E. Saul, *Friends or Foes? The United States and Soviet Russia, 1921-1941* (Lawrence: University Press of Kansas, 2006), pp. 157-164.

関連の窓口となっていたと言える。

こうした VOKS や AMTORG といった機関が主導した文化・経済交流と並行して、技術交流が行われていくことになる。その中でも自動車及びトラクター工場建設に関連して 1926 年から始まるフォード社との交流による自動車製造技術の導入、マグニトゴルスクの製鉄プラントとそれに関連する冶金業におけるアメリカ型システムの導入、そしてドニエプル水力発電所建設準備における土木技師ヒュー・クーパーの関与は特記すべきである。

ソ連政府は 1920 年から 1926 年の間にフォード社から 25,000 台のフォードソン・トラクター F 型を買い上げており、1927 年のソ連におけるトラクターとトラックの約 80%がフォード社のものであったと言われている³⁰⁷。ソ連国内で広く利用されていたフォード社車両の修理は、ソ連国内で生産された部材で賄われ、フォード社正規の方法では行われておらず、十分な修理が行われていなかった。こうしたことから、1926 年フォード社に修理システムの構築とソ連にフォード社の工場建設を将来に見据えた視察のためエンジニアを派遣するようにソ連側は要求している³⁰⁸。しかし、それ以前にフォード社は数回ソ連国内を視察旅行しており、ソ連側からの申し出をフォード社は断り、1929 年まで両者の間で数回に渡り交渉が行われている。最終的にはソ連最高国民経済会議幹部会メンバーの V.メジュラークと AMTORG の代表ソル・ブロンがフォード社と契約を交わしている。その内容は、自動車の購入に 30,000,000 ドルが割り当てられ、1933 年以前の自動車部品の供給、そして 1938 年までニージニー・ノヴゴロドに自動車製造工場を建設するための技術的援助を行うというものであった³⁰⁹。さらにフォード社の特許はソ連側の国立冶金工場設計研究所 (GIPROMEZ) に譲渡され、フォード社から自動車製造に関する技術援助を行うためのエンジニアが派遣されている。またフォード本社で用いられている生産方式を学ぶための設備や器具も供与されることとなっ

³⁰⁷ Allan Nevins and Frank Ernest Hill, *Ford: Expansion and Challenge, 1915-1933* (New York: Charles Scriber's Sons, 1957), p. 573. そのほかにもオーストリアのシュタイアー社、ドイツのメルセデス社、フランスのルノー社から自動車及びトラクターを購入しているが、フォード社からの購入が圧倒的に多い。

³⁰⁸ *Ibid.*, p. 676.

³⁰⁹ Sutton, *Western Technology 1917 to 1930*, pp. 246-247.

た³¹⁰。このニージニー・ノヴゴロドでの工場建設に関して、フォード社との契約の後に、オハイオに本社を置くプラント設計及び建設を専門に行っていたオースティン社とニージニー・ノヴゴロド工場を建設する契約を交わし、自動車製造工場建設を統括する Avtostroi のエンジニアがオースティン社へ派遣されている³¹¹。フォード社の工場設計に携わった A.カーンによって設計されたトラクター工場がチェリャビンスク、スターリングラード等で建設されていた。1930年の時点で約42,000,000ドルが農業関連機器、約36,000,000ドルがトラクターの購入に費やされ、これはソ連のトラクター及びその関連部品の輸入の約95%を占めていた³¹²。確かに、十月革命以前ではロシア国内にモスクワ自動車（AMO）が設立されており、1924年に初の国産車であるAMO-F-15が生産され始めてはいた。だが、年間製造台数は2,000台を下回り³¹³、フォード社から購入していた数よりも遥かに少なく、性能も優れず高価であった。1929年にAMOの工場再編に関してデトロイトに本社を置くA.J.プラント社が参入することになり、工場設備に最新機器が導入され、フォード型2.5tトラック（AMO-3）の年間製造台数が25,000台に達し、またAMOのエンジニアがデトロイト本社へ研修のため派遣されている³¹⁴。こうしたことから1920-1930年代のソ連における自動車産業に関しては、車両及び関連機器の購入から技術の導入が行われ、そして特許取得によりアメリカ型の製造システムがソ連のものとして定着していく。

アメリカ型製造システムはフォード社による自動車製造工場のみならず、冶金業や製鉄業においても導入されることとなった。その代表例がマグニトゴルスクにおける冶金及び製鉄工場プラントの建設とそれに関連する事業である。南ウラル地方に位置するマグニトゴルスクはアタチと呼ばれていた丘ほどの大きさの山麓に位置する都市である。ロシア帝政期にはこの地で既に鉱床が確認されており、1912年に地質学者ニコライ・ザヴァリツキーによる初めての試掘調査が行われ、

³¹⁰ Ibid., p. 247.

³¹¹ Ibid., p. 249.

³¹² Saul, *Friends or Foes?*, p. 221.

³¹³ Sutton, *Western Technology 1917 to 1930*, pp. 244.

³¹⁴ Ibid., p. 248.

鉍石の埋蔵量はおよそ 87,000,000t と見積もられた³¹⁵。十月革命後の 1917-1918 年に行われた鉍山学者ヴラジーミル・バウマンによる調査では埋蔵量 164,000,000t、1928 年には再び N.ザヴァリツキーが調査を行い、埋蔵量 275,000,000t と見積もられている³¹⁶。帝政末期の時点で既にこの地を包括するウラル地方に冶金業の一大拠点の設置が計画されており、石炭の一大産地と知られていたシベリア地方のクズネツクにある石炭盆地（通称：クズバス）とウラル地方を資源産業拠点にする「ウラル-クズネツクコンビナート」という案がソヴィエト政権初期に登場し³¹⁷、マグニトゴルスクがそのような冶金業の拠点の一部を担う計画が浮上したのである。1925 年 4 月 27 日から 29 日に行われた第 14 回ロシア共産党会議で採択された決議では「冶金業に関する」決議案があり、そこではソ連国内産業のうち冶金業が占める割合をその 1/4 とし、冶金業発展に注力することが謳われている³¹⁸。この時点で冶金業の拠点地選定は行われていないが、「冶金工場の建設が第一の課題として認識する必要がある」³¹⁹とされた。そのため、莫大な埋蔵量が確認され、資源はあるものの、その生産拠点が無いマグニトゴルスクが候補地に挙げられたのは不思議なことではなかった。

冶金業の生産拠点としてクズネツク、ウクライナのクルィヴィーイ・リーフそしてマグニトゴルスクが選ばれ、1926 年頃から製鉄コンビナート建設計画がすすめられ、4 つの高炉と平炉、ベッセマー転炉³²⁰、連続分塊圧延機などを備えたアメリカ型のプラントが設計された³²¹。このプラントの動力源及び製鉄の原料として上記したクズバスで採取される石炭が念頭に置かれており、クズバスとマグニトゴルスク間の 2,000km を運搬する点が懸念されていたものの、その案が採用された。これはアメリカのフレイン社がクズバスの採掘権を得たことにより、その運

³¹⁵ A. Malenky, *Magnitogorsk: The Magnitogorsk Metallurgical Combine of the Future* (Moscow: Co-operative publishing society of foreign workers in the USSR, 1932), p. 11.

³¹⁶ Ibid.

³¹⁷ Carr and Davies, *Foundations* (vol. 1, part 1), p. 436.

³¹⁸ Коммунистическая партия Советского Союза в резолюциях и решениях съездов, конференций и пленумов ЦК (1898-1986). Т. 3: 1922-1925. М., 1984. С. 384.

³¹⁹ Там же. С. 42.

³²⁰ 高炉は鉄鉍石から銑鉄を取り出すための炉であり、平炉は鉄の精錬に用いられる反射炉の平型である。ベッセマー転炉とは高炉によって抽出された銑鉄を鋼に転換する炉であり、ヘンリー・ベッセマーによって開発された炉であることからこの名前が付けられている。

³²¹ Sutton, *Western Technology 1917 to 1930*, p. 67.

搬業務を引き受けたため可能となった。アンソニー・サットンによれば、1927年にフレイン社とソ連最高国民経済会議との間でソ連国内の冶金工場及びプラントの再編と新たな工場設置に際して技術援助を行う契約が交わされている³²²。これと関連するかたちで1926年に設立された国立冶金工場設計研究所と提携して研究所内に冶金に関する部署を設置し、その部署にフレイン社のエンジニアを駐在させている³²³。

1928年にはアメリカで高炉や鉄鋼プランとの設計などを専門にコンサルタントを行っていたアーサー・G・マッキー社とソ連側の代表者がマグニトゴルスクのプラントに関する協議を行っている。この協議の際にソ連側は既に決定していたプラントの設計図をマッキー社側に提示したが、マッキー社側からインディアナ州ゲーリーに彼らが建設した鉄鋼プラントを基にした新たな設計図が提示されることとなった³²⁴。マッキー社側が提示したプラント案は、当時世界最大規模のものとして考案され、「ソ連のどの組織でもやり遂げることが明らかに不可能であったため」³²⁵、マッキー社のエンジニアがモスクワへ渡り、その概要を詳細に説明するに至った。結果として彼らの設計案を基にプラント建設の審議が進められることになる。当初はゲーリーに建設された鉄鋼プラントの20%ほどの規模でマグニトゴルスクのプラントを計画していたが、年間約2,500,000tの銑鉄製造または鋼片製造を見込んだゲーリーに建設されたプラントと同規模のものを建設する方針に変わっている。1928年から建設が進められたが、建設は滞ることになり、1930年5月に建設の最高責任者としてR.W.スタックをマッキー社から招聘し³²⁶、建設作業の加速化が図られている。建設作業のピークとなった1931年後半には250人のアメリカ人エンジニアがプラント建設に従事し、高炉の建設にはR.スタックと27人のアメリカ人エンジニアだけで建設が進められている³²⁷。R.スタックによれば、「ロシアの高炉建設技術は50-75年ほど遅れており、ロシア人エンジニアによる改良の試みは、効果的に高められたというよりもむしろその効果を薄めてい

³²² Ibid., p. 74.

³²³ Ibid.

³²⁴ Sutton, *Western Technology 1930 to 1945*, p. 62.

³²⁵ John Scott, *Behind the Urals* (New York: Arno Press, 1971), p.68.

³²⁶ Sutton, *Western Technology 1930 to 1945*, p. 75.

³²⁷ Ibid.

る」³²⁸ため、プラントの建設はかなり手間取っていた。1931年の時点で第1高炉が未だ3/4しか完成していないにもかかわらず、党政府から1932年に稼働することが通達されており、これに間に合わせるかたちで建設は進められていく。1932年1月31日に第1高炉が稼働し、同年の夏には第2高炉、1934年には第3及び第4高炉が稼働し、当初計画されていた全ての高炉が完成し製鉄コンビナートとして機能するようになる。こうしたことからマグニトゴルスク製鉄コンビナート建設過程において、マッキー社の影響がかなり大きかったことがわかる。これはアメリカ人エンジニアが建設に携わり、またアメリカのプラントをそのまま導入したことによって冶金業のアメリカ化が図られたことに起因している。

マグニトゴルスクのコンビナート建設と同じくして、冶金業を統括する国立冶金工場設計研究所にもアメリカの影響が色濃く反映されるようになる。冶金工場設計研究所にフレイン社のエンジニアが駐在するようになった後、この両者によって新しい標準型の高炉が開発されている。この標準型高炉では1日に約1,000tの銑鉄製造が可能とされ、フレイン社がアメリカで設計した標準型高炉とほぼ同じであり、マグニトゴルスクやクズネツクと同様に鉍石埋蔵量が豊富であったクルィヴィーイ・リーフでも導入されることとなった³²⁹。A.サットンが紹介している1934年におけるマグニトゴルスクとクズネツクを除いたソ連における主要製鉄所での標準型高炉稼働状況³³⁰によれば、稼働中及び建設中の高炉は1台か未稼働、多くとも2台であるのに対して計画中の台数は最大で6台となっている。このことは、フレイン社と冶金工場設計研究所が設計した標準型高炉が1934年以降のソ連国内の多くの製鉄所で取り入れられられ、ある程度定着してきたことを示している。

製鉄の基となる標準型高炉の設計のみならず、平炉やその後の加工段階で必要となる板用鋼片圧延機、分塊圧延機、幅広帯材圧延機といった設備設計においても、ドイツ企業の関与があるものの、その多くにはアメリカ企業が深く関与し、その中でもフレイン社が突出している。製鉄コンビナート建設にあたってアメリ

³²⁸ Ibid.

³²⁹ Ibid., p. 67.

³³⁰ Ibid.

カ企業の設計による設備を導入したことにより、その運用や保守においてもアメリカ型の手法が求められることとなった。しかし、実際には運用や保守専門のエンジニアをアメリカから招聘し、対処する手法が取られていた³³¹。これはソ連のエンジニアが設備の運用や保守に関して理論を重視するあまり、実際に生じる問題への対処ができず、「理論と実践は別物」という点を理解していなかったためとA.サットンが述べている³³²。そのため、設備が新たに導入された時期、つまり1930年代初頭から半ばまでは、プラント設計と建設段階のみならず、その後の段階にあたる運用及び保守でもアメリカ人エンジニアが関与することとなり、鉄鋼製品製造の流れ全体においてアメリカ型の手法が導入されたと言えるであろう。

もう1つアメリカとの技術交流を語る上で無視することができないものはドニエプル水力発電所建設である。この水力発電所建設に至る経緯は、国立ロシア電化計画委員会（GOELRO）が1920年に設立され、その後にドニエプル河中流の都市アレクサンドロフスク（現ザポロージェ）に電力発電所を建設することが決定したことから始まる。1921年から1922年には現地調査、1923年から1926年に水力発電所用のダム建設が行われていた。ダムの建設が終わり水力発電所を建設する段階で、この水力発電所の設計者のI.アレクサンドロフ率いる水力発電所建設委員は1926年の4月にアメリカを訪れ、7月にはこの建設プロジェクトを綿密な調査を行うこととソ連政府の顧問となる契約をアメリカの土木技師のH.クーパーと交わしている³³³。この後に彼の事務所の職員と彼自身がモスクワを訪れ、現地調査を行い、1927年に再度訪問した際にはドニエプル水力発電所建設プロジェクトの最高顧問エンジニアとしてこのプロジェクトに関わっている³³⁴。また彼はアメリカから建設に携わるエンジニアを招聘し、彼らが長期滞在できるような定住地を、政府から許可を得た上で、建設している³³⁵。建設が進むにつれ、水力発電所委員は発電所の設備に関連した機器（主に発電機とタービン）などをニューポート・ニューズ造船所とゼネラル・エレクトリック社から購入し、建設作業に

³³¹ Ibid., p. 12. この事例として1929-1932年までソ連に滞在したアメリカ人エンジニア、ジョン・カルダーが紹介されている。

³³² Ibid., p. 320.

³³³ Harold Dorn, "Hugh Lincoln Cooper and the First Détente," *Technology and Culture* 20, no. 2 (1979), p. 334.

³³⁴ James C. Young, "Soviet Power Project Rivals Muscle Shoals" *New York Times* (October 17, 1926), p. 18.

³³⁵ H. R. Knickerbocker, *The Red Trade Menace: Progress of the Soviet Five-Year Plan* (New York: 1931), p. 179.

必要な器具の購入に約 1,500,000 ドルを費やしている³³⁶。こうしたアメリカ製の器具の大掛かりな購入や主要機器の導入は H.クーパーの助言に従ったものであるが、建設方法を巡って彼と建設主任の A.ヴィンテルの意見が別れ、A.ヴィンテルの案が取り入れられ建設が進められる。しかし、政府上層部では H.クーパーの設計案を「極めて有益」³³⁷と評価していた。結果として H.クーパーの監理のもとで建設が進められ、1932 年 5 月 1 日に試運転が開始され、同年 10 月 10 日に最初の電力供給が開始された。ダム管理棟の上屋のデザインは構成主義建築家グループのリーダーであったヴェスニン兄弟がコンペに勝って担当した。この水力発電所建設プロジェクトは当時世界最大出力を誇り、大戦中はナチス・ドイツ軍の侵攻に対処するため一旦破壊されたものの、その後再建され、現在でもウクライナ国内における最大出力の発電所として稼働している。

こうしたアメリカの技術への信頼は、A.サットンが指摘するように「1927-1928 年以降ソ連へ技術を導入するドイツのエンジニアや専門家はアメリカのエンジニアに取って代われ[...]『鍵』となる活動において多くのアメリカの専門家が集中していた」³³⁸点に表れている。さらに、ソ連政府に代わって AMTORG がアメリカ人専門家のソ連への招聘及びアメリカでの技術関連製品の購入と契約に対して支払った費用は 1925-1926 年では 13,000,000 ドルをわずかに超える額であったが、1929 年までにはそれまでの総計でほぼ 50,000,000 ドルに達していた³³⁹。このことは、1920 年代半ば以降から製品を含めたアメリカの技術そのものに対してソ連政府が重点を置き始めた結果と言えるであろう。こうした技術導入や関連製品購入が活発化する過程で、H.クーパーの功績は看過できない。彼はドニエプル水力発電所建設に携わっていた 1927 年にアメリカ・ロシア商工会議所の役員会に選出され、1930 年にはその商工会議所所長となっている³⁴⁰。商工会議所の業務において H.クーパーはアメリカ財務省に対して、当時ソ連との通商において障害とな

³³⁶ Sutton, *Western Technology 1917 to 1930*, pp. 203-204.

³³⁷ Материалы по истории СССР 7. М., 1959. С. 189-190.

³³⁸ Sutton, *Western Technology 1917 to 1930*, p. 320.

³³⁹ Saul, *Friends or Foes?*, p. 248.

³⁴⁰ Dorn, *Hugh Lincoln Cooper*, P. 342. この商工会議所は 1926 年に再編され、その会員にはチェース・ナショナル銀行、ゼネラルエレクトリック社、アメリカン・ロコモティブ社、インターナショナル・ハーベスター社など 1920 年代を通じてソ連と取引のあるアメリカの大手企業が会員となっていた。

っていた懸念³⁴¹を失くさせるよう呼びかけ、そうした懸念を彼自身が払拭させ、ソ連との取引を始めることをためらう企業に対して講演や新聞のインタビューなどで後押しを行っている³⁴²。

1933年11月16日にソ連とアメリカの間で国交が樹立された後でも、H.クーパーは自らを対ソ連貿易における報道官と自認していることから、アメリカ側からも重宝されていたことは明らかである。国交樹立後は、アメリカではH.クーパーが後押しした経済交流よりも「多くのアメリカ人達が求めていた文化の相互交流」³⁴³を促すことになり、1933年から観光事業の増加と技術分野での交流が活発になる。技術交流が更に活発になった背景として、アメリカの技術そのものに対する信頼及び憧憬が根底にあったと言える。こうした雰囲気はアメリカの各種団体と通商を担当するAMTORGにも伝わっており、当時(1930-1934年)AMTORGを指導していたパーヴェル・ボグダーノフは次のように述べている：

技術的達成度を定期的に照合する尺度としてアメリカはあるべきであり[...]我々の状況に応じてアメリカの手法を取り入れる—これがアメリカの技術を習得するための主要必須条件の1つである³⁴⁴。

この発言はアメリカとの国交が樹立された後のものであるが、技術分野全般に対してソ連側がアメリカの技術を基準と設定していたことがうかがえる。こうしたことから、ソヴィエト宮殿の建設段階においてアメリカの技術が参考とされたのは唐突なことではないことがわかるであろう。

3-5. アメリカ建設技術への着目と最終設計案への影響

³⁴¹ Ibid. 1920年代半ばよりアメリカとソ連の商取引が活性化し両国関係が良好になる中で、それを善しとしない人々によって、ソ連の輸出品は強制労働及び囚人労働によって生産されたものであり、アメリカに輸入すべきではなく、また国際市場においてこのような事実を隠すため不当廉売を行っているという非難がなされた。アメリカ財務省内でもこうした非難を受け、ソ連との通商に消極的であったとH.ドーンは述べている。

³⁴² Ibid., pp. 343-344.

³⁴³ Park J.D., *Culture, Conflict and Coexistence American-Soviet Cultural Relations, 1917-1958* (Jefferson: McFarland, 1983), p. 46.

³⁴⁴ Ibid., p. 43.

ソヴィエト宮殿の最終案に向けた内装と外観のデザインが検討されていた時期に、建設局は 1934-35 年にかけてソヴィエト宮殿の設計を担当する建築家とエンジニアを 2 度国外に派遣している。主な目的は、アメリカの専門家ならびに大手建設会社からソヴィエト宮殿に応用できる建築材料と技術に関する助言を仰ぐためであった。

ソ連の産業界におけるアメリカとのつながりは既に述べてきた通りだが、競技設計段階でもその傾向はすでに現れていた。1931 年 9 月に建設局は、ソヴィエト宮殿建設に関連した問題と課題に対する助言を受けるため、建設局の代表者何人がアメリカへ出張することを建設会議のメンバーであった A.エヌキッセに既に申し出ている³⁴⁵。同じく、ソヴィエト宮殿技術審査委員会は「公開競技設計の結果を待たず、ソ連国内と同様に外国の専門家、特に大型建築物の音響効果について学んだ専門家の助言を引き出し、またその結論を大掛かりなかたちで実証しながら、この研究を進めなければならない」³⁴⁶と考えていた。

最終案作成において技術的な問題が洗い出されてきた段階で、最終案設計者の 1 人 B.イオフアンはアメリカ建築技術の導入を考えていた。1933 年 8 月の在米の知人（建築家ヴァチェスラフ・オルタルジェフスキイ）から B.イオフアン宛の手紙では「ソヴィエト宮殿の参考のために」とラジオ・シティーとエンパイア・ステート・ビルディングの情報が伝えられ、それらに関する資料が添付されている³⁴⁷。この手紙の中でこの 2 つの建築物の機能面と建築材料が取り上げられているのは興味深い。例えば、エンパイア・ステート・ビルディングに関しては荷物運搬手段、そうした運搬手段の速度、通信設備、電力、建築物の収容人数、利用されている建築材料はインディアナ州産の花崗岩と多孔性の岩石が使用されていると記されている³⁴⁸。また、同年の 11 月 25 日付け AMTORG 宛ての B.イオフアンから手紙では、「ソヴィエト宮殿のための音響機器、鉄鋼の腐食、ステンレス金属に関する情報」を求め、特に「窓枠や天井と天井装飾、隔壁、ドアの仕上げ、できれば柱

³⁴⁵ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 10, л. 221.

³⁴⁶ РГАЛИ, ф. 1981, оп. 1, д. 50, л. 28.

³⁴⁷ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 43, л. 9-13.

³⁴⁸ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 43, л. 10.

の仕上げにも—あらゆる建築芸術的かつ装飾的な作品といったものを含み、ステンレス金属の応用という問題を広げたい」³⁴⁹との記述がある。この例として、アール・キャロル劇場、ラジオ・シティ、エンパイア・ステート・ビルディングが挙げられ、これらに関する記事と資料を B.イオフアンは請求している。以上のことから、ソ連国内で不足する建設技術やそれに必要な建築材料が設計者（ここでは B.イオフアン）に理解されていたと考えてよいだろう。

1 回目の建設局による国外出張は 1934 年 8 月 8 日から 11 月 19 日までで、ヨーロッパ諸国とアメリカが訪問先となっていた。1934 年 3 月 27 日付の報告で B.イオフアンはこの出張の目的を「巨大で新しいあらゆる建築物の視察」で、そうした建築物のメカニズムや技術を「応用する」ためとしている³⁵⁰。この出張には歴史的建造物の視察も含まれていたが、アメリカ訪問にほぼ日程の半分以上が割かれている。このことは建設局がヨーロッパ諸国の建築よりもアメリカ建築の視察により重きを置いていたということを示している。1 回目の出張の後、B.イオフアンはその報告の中では「アメリカの技術はテンポ、複雑な問題の解決、また施工の正確さにおいて優れており、施工に従事する企業も然りである」³⁵¹と強調した。一方でスタイルに関しては「アメリカ建築は建築的フォルムを最も明確に発揮するために自らの成果を発揮できていなかった」と批判的な見解を示している³⁵²。ここでいう「アメリカ建築」とはワシントンで見られる「驚くべきほど折衷的で表面的な[...]古典建築の例をしばしばコピーし続けているアメリカのモニュメント建築」、あるいは「緑地も広場もなくスカイスクレーパーを見回すことのできない」³⁵³ニューヨークの建築として、アメリカの建築それ自体には否定的な評価を下す。評価はあくまで技術水準に対してだけに限定されている。一方で、この出張から B.イオフアンは、「さらなるソヴィエト宮殿の設計を行うには、設計の本質を変えることなく、我々の設計案に建築物の簡潔さ、表現性、構造の単純化、

³⁴⁹ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 33, л. 29.

³⁵⁰ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 39, л. 25-26.

³⁵¹ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 39, л. 3.

³⁵² ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 45, л. 30.

³⁵³ Там же.

全体的にコストダウンを志向するようないくつかの訂正を加える必要がある」³⁵⁴という見解に至る。

また B.イオフアンは報告の中でアメリカ建築技術の着目すべき点を詳細に挙げていて、すなわち 1. 建築物の地盤と基礎、2. 鉄骨、3. 音響、4. 内部輸送、5. 暖房と換気装置、6. 電気系統の組織、7. 舞台装置、8. 採石場の開発と天然石の加工、9. 建築材料、10. 作業の取りまとめ方である³⁵⁵。彼が挙げた点のほとんどに従うかたちでアメリカの建設会社や専門家から助言を受けること、またアメリカの建築材料や技術を起用することが提案された³⁵⁶。

1935年7月15日から11月18日にかけて、ソヴィエト宮殿の設計を担当するエンジニアのみが2回目のアメリカ出張を行った。2回目の出張目的は 1. 建設作業個々の問題への設計作業班メンバーを個別に配属させる方法、2. ソヴィエト宮殿の土台の設計と解析、地盤の調査に関連した問題の調査、3. 製造機器の調査と選定、4. ケーソン位置からボーリングを行うための機器と実験機器の調査と選定であった³⁵⁷。A.カーンは音響と照明技術の権威あるアメリカの技術者と教授をモスクワに招聘し、出張の際にその専門分野の専門家から助言を受けることを勧めていたが、実現しなかった³⁵⁸。後述するが、照明に関する問題は建設技術というよりも空間演出として把握され、1回目の出張報告では重要な問題と認識されていた。

2回目の出張の後に行われた B.イオフアンの報告では、改めて「アメリカの高層建築物とソヴィエト宮殿は最も近い」ことが強調され、「アメリカのようにエンジニアと建築家が共同して設計課題に取り組むべき」³⁵⁹と述べられている。この

³⁵⁴ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 45, л. 32.

³⁵⁵ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 39, л. 3-10.

³⁵⁶ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 45, л. 4-29. 派遣団は個別の問題に合わせてアメリカの各社から助言を受けている：建築物の土台部にかかわる問題に関して「Moran & Proctor」社と「Lockwood Green Engineer」社（л. 4., л. 7.）、音響に関しては「Bell & Western」社と建築技師スヴェン（л. 11.）、内部輸送システムに関しては「OTIS」社と「Besthousing」社（л. 13.）、換気システムに関しては「Career & Brunswig」社、「Ice Box Machinery Co.」（л. 14.）から助言を受けている。また石材加工と建築材料の加工に関して、ラジオ・シティーやエンパイア・ステート・ビルディングで用いられたものに着目し、それらを扱ったいくつかの企業にカタログを請求している（л. 15 - 19.）。建設作業のノウハウに関しては、ラジオ・シティーとエンパイア・ステート・ビルディングに関するワーキングプラン、また前述の「Lockwood Green Engineer」社からは巨大建築物に関するワーキングプランを受け取っている（л. 28.）。

³⁵⁷ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 50, л. 104.

³⁵⁸ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 50, л. 28, 32-34, 37, 54.

³⁵⁹ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 83, л. 48-49.

ことに言及がなされたということは、建築家と設計技術部門の連携が取れていないことを意味しており、建設技術だけでなくその作業形態に関してもアメリカから学ぶ点があったことを認めている。こうした2回に及ぶアメリカへの出張から実際の設計及び建設作業に影響を及ぼしたのは、照明による空間演出、地盤調査、基礎設置、建築物の上部構造計画であった。以下その各々について述べる。

3-5-1. 照明効果による空間演出

空間演出装置としてホールを見た場合、照明も重要な構成要素であった。国外出張前に建設局はそれほど興味を示していなかった。だが、当時の建築雑誌『ソ連の建築』では建築物をよりよく見せるための照明効果を取り上げた論文が掲載され、建設局は帰国後の報告で「観客に調和的印象を与えるため、照明効果と演出に興味を持つようになった」³⁶⁰。彼らが興味を抱くきっかけとなったのが、ニューヨークのラジオシティである。この背景には当時のソヴィエト建築において「照明技術は未熟で、ソヴィエト宮殿設計の際に生じる困難な課題を解決できるような経験を有していない」³⁶¹という認識があったからだ。その中でも「特に困難な課題となっているのは劇場化したパノラマをライトアップすることである」³⁶²。こうした点からも、照明もホール内空間の演出装置として期待が込められていたことがわかる。ラジオシティの照明は「アメリカだけでなく、ヨーロッパの中でも最も優れた成果」³⁶³と建設局は評価しており、出張後の報告ではその空間演出を次のようなかたちで言及している。

アメリカの照明技術の理論家およびオペレーターの間で、こうした照明効果と音楽を一体感の中で結びつけるという流れがある。これによって観客に対して極めて調和した印象を与えることになる³⁶⁴。

³⁶⁰ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 45, л. 44.

³⁶¹ Майзель С. Световое оформление Дворца Советов // Архитектура СССР. 1934. № 5 С. 68.

³⁶² Там же, С. 72.

³⁶³ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 45, л. 44.

³⁶⁴ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 45, л. 45.

ここではホールで行われる演説や劇の上演、コンサートの際にホール全体を演出することであり、観客席と舞台を一体にしようとする演出への志向があらわれている。最終設計案作成前に下案として提出された技術プランの中では、「帯状の回廊に配置された投影機と特殊なランプによってホールは照らし出される。キューポラの頂部には磨き上げられたクリスタルでできたシャンデリアが吊るされることになり、その裏には強い光源が配置される。これに加えてアリーナと幹部会用の席を照らし出す投影機の設置が予定されている。特に厳粛な場面用に祝祭的かつ色とりどりの照明を予定している」³⁶⁵。このような説明を念頭に置いて、再び大ホールの完成予定図を見てみると、観客席の最奥部（天井桟敷）に配置された列柱上部の奥に光源があり、キューポラの垂直状の筋に従うかたちで光の筋が伸びている（図 204）。

こうした照明の方向は、建設局が「最も印象的だった」とするラジオシティー内のミュージックホールの照明とは異なっている（図 210）。ラジオシティーのミュージックホールは天井部分と壁が1つの弧を形成し洞穴のような構造となっており、そのアーチ壁が舞台に向かうに従って狭まっていく。アーチ壁にはリブ状に配置された光源があり、舞台に向かうかたちで光の環が続く。そのため観客の視点が舞台に集中する効果を生み出す。こうした演出効果は舞台と観客を一体にするというものではなく、舞台上の空間で展開される行為を観客に向けて発するという構造である。こうした照明方法はソヴィエト宮殿の大ホールでは用いられず、キューポラ頂部から舞台に差し込む主照明と天井桟敷上部の背後からキューポラ壁をリブ状に上方に照らす間接効果照明とがある。またソヴィエト宮殿の外見において、その頂きにそびえる国家の創設者へと視線を集中させ、その下に民衆が集うという理念を内部空間にも当てはめた場合、キューポラ上部のさらに上に配置されたレーニン像へと導かれ、例えばゴシック建築様式における教会建築のような祈りの場と天空とをつなぐような照明効果が望まれる。なぜならばこのホールの理想的な用途は「民衆祭典のホールとしてであり、その民衆の幸

³⁶⁵ ГАРФ, ф. 5446, оп. 20, д. 2210а, л. 10.

福のため自らの生涯を割いたのは V.I.レーニンである」³⁶⁶からだ。そのため、民衆が集うであろう観客席と舞台空間から崇拜の対象となる彫刻がそびえる上部へと垂直状に放射される照明を多く配置していることがわかる。こうした照明効果による演出は、ニュルンベルクにおけるナチス党大会会場での光のデモンストレーション（『光の大聖堂』）でも用いられている（図 211）。このデモンストレーションでは参加者と登壇者が「無限に高くそびえ立つ外壁の列柱となっている一つの巨大な空間」³⁶⁷に包み込まれる演出効果を生み出した。もちろん、このデモンストレーションは屋外で行われ、光源の強いサーチライトが用いられておりソヴィエト宮殿の大ホールにおける照明効果とは大きく異なっている。しかし、上方に向けられる光の束によって1つの空間を創り出し、その場にいる人間に一体感を与えるといった効果は共通している。「外観と内装の一致」という方針を考慮した場合、観客と舞台という水平状の双方向性ではなく、飽くまでこの建築物の強調点となっているレーニン像へと向かう単一的な方向性がソヴィエト宮殿大ホールの基本空間構成である。参考としたラジオシティのミュージックホールとは一見すると異なるものの、その本質を為す空間演出用技術という点でアメリカの建設技術が取り入れられていった。ホールに設置される舞台の設計に関しても「アメリカの舞台装置技術が最高度のものであることを考慮すれば、アメリカで受け取った資料を利用することは不可欠である」としている³⁶⁸。だが、設計に携わる B.イオフアンはそのような舞台装置である「照明に関する（専門家からの）助言は第一の問題とは考えていない」³⁶⁹ことを明かし、照明関連の専門家招聘については消極的であった。B.イオフアンのこうした態度は、2 回目の建設局による出張目的が高層建築物の地盤と基礎に関する調査手法やその技術習得であったように、建物内の演出手法よりも高層建築物の建設作業方法を習得することに優先順位が置かれていたためである。

³⁶⁶ Милютин. Опыт тематической композиции. С. 24.

³⁶⁷ アルバート・シュペール（品田豊治訳）『ナチス狂気の内幕』読売新聞出版社、1970年、70頁。

³⁶⁸ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 45, л. 37.

³⁶⁹ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 50, л. 37.

3-5-2. 地盤調査

建設予定地の地盤に関しては、競技設計とは別のかたちで建設局の主任技師ローテンベルグが報告を行っている。この報告が行われたのは1932年4月5日付「産業及び公営住宅建設労働者組合エンジニア技術部門幹部会出張会議」においてである。彼の報告は、建設予定地となるハリストス救世主大聖堂跡地の撤去作業の進捗と関連して、建設予定地の地盤に触れている。ハリストス救世主大聖堂爆破の後、建物の残骸撤去作業が未だ終わっておらず、この撤去作業が全て終了した後に「巨大な規模を誇る大聖堂の地下部分の造成作業があり」、「この造成作業は地盤に関する作業と関連して」、大聖堂の地盤をそのまま「利用することは不可能で、ソヴィエト宮殿にとって合理的ではない」³⁷⁰としている。その理由は建設予定地の「地盤はきわめて多様なもの」であり、「大聖堂の地盤は密な砂地盤であり、その下には石灰岩層」があるが、「レニフカ通りの部分には望ましくない地盤があり」、「その場所の断層からかつて三日月湖があったために大きな浸食があったことがわかった」³⁷¹からである。そのため地盤改良が提案されているが、「未だ最終的な調査結果は出ておらず、追加調査が続けられている」³⁷²。この地盤調査の全貌が明るみになるのは、4年後の1936年である。

その1936年の『モスクワの建設』誌8月号に掲載された記事「ソヴィエト宮殿高層部基礎」では、競技設計段階で調査が進められていた建設予定地の地盤に関する情報が掲載されている。この情報が掲載された時点では既に基本設計案が公表され、最終設計案及び建築物の詳細技術案が作成されている。上に示したように、ソヴィエト宮殿基本設計はアメリカの摩天楼建築と比べて紹介されることが多かったが：

ソヴィエト宮殿の規模は巨大である。高さにおいてこの建築物は世界で最も高いニューヨークのエンパイアステートビルディングを凌駕している[...]モスクワっ子によく知られているソヴィエト宮殿の形状は、巨大なレーニン像を頂く高層部分を

³⁷⁰ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 23, л. 18-19.

³⁷¹ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 23, л. 19.

³⁷² Там же.

際立たせている。ソヴィエト宮殿の高層部は、収容数 20,000 人の巨大なホールの上に配置される。415m 以上の高さを誇る建築物の総重量は 450,000 トンである³⁷³。

このような「巨大な」建築物であり、「壮大さ、巨大な重量、建築的意匠によるモニュメンタリティ」を実現させるために必要なのは「丈夫な基礎部分をつくること」であった。この記事の前半ではその基礎部分の地質調査結果が報告されている。基本設計案完成の時点では、建設予定地の区画からやや南側に建築物を移設する提案がなされたが、これは「基礎工事環境」に問題があったためである。この「基礎工事環境」の問題とは石灰岩層を含む建設予定地の地盤形状とモスクワ河との近接度から由来する湧水の可能性を意味しており、その詳細がこの記事で明らかにされている。

この地盤調査はソヴィエト宮殿の用地に限らず、その周囲のレニフカ通り、ヴォルホンカ通り、オストジェンカ通り、モスクワ河通りをも調査対象にしている。これは「建設予定地の土壌の構造的特性に関する具体的な情報を受け取るため」、その「調査結果をほぼ完全なものにするため」であるとしている³⁷⁴。この調査で設置された「130 のボーリング孔」のうち「主要な支柱が各々置かれるべき場所に 30 カ所設置され、そのうちの 16 ヶ所は中央の大ホール及びその上部の超高層部を支える一対の支柱に相応する位置に敷設される」³⁷⁵。ここで挙げられている「一対の支柱」とは、円形で二重に縁取りされた部分に内周と外周それぞれ対になって埋め込まれたものである（図 212）。この「一対の支柱」が敷設される「16 ヶ所」とは、ソヴィエト宮殿の水平断面図における大ホールの外周を二重で取り巻く柱の柱間（ベイ）32 ヶ所に 1 つおきに置かれた数に対応している（図 213）。つまり、地質調査に必要なボーリング孔の約半数を「中央の大ホール及びその上部の超高層部を支える」部分に対応した箇所に宛てており、大ホールと垂直状に連なる超高層部の荷重に対応した地盤調査に重きがおかれていた。大ホールと超高層部の荷重に対応した地盤を調査することは、ソヴィエト宮殿の「壮大さ、巨大な重量、建築的意匠によるモニュメンタリティ」実現に向けた重要な足がかり

³⁷³ Попов Б.П. Фундаменты высотной части Дворца Советов // Строительство Москвы. 1936. № 8. С. 20.

³⁷⁴ Там же, С. 21.

³⁷⁵ Там же.

である。

この地質調査で用いられる「ボーリングは世界で初めての特殊な構造で、柱状の装置によって深度 100 メートルまで『切り抜くように』掘削するものである。この特殊な作業用の工作機械は建設アトリエが特別に誂えたもの」であり、「成層岩の性質やその地質構造を研究するために、ボーリング孔以外に、立坑設備がつけられ、直径 5m の試験用坑が敷設された。この試験用坑は深さ 30m 以上に及び、深さの絶対高度（絶対深度）によるとモスクワで最も深い掘削坑である」³⁷⁶。

この調査では、建設予定地の地盤はモスクワ河の古代第 2 記沖積層に位置しており、上から第 1 石灰岩層、石灰粘土層、第 2 石灰岩層、泥灰岩層、第 3 石灰岩層となっていることが報告されている（図 214）。この石灰岩層には氷河期の浸食によって生じた窪溜まりがあり、この窪溜まりは水が浸透する土壤にあるため、石灰岩層の裂け目の水が別の石灰岩層へ入り込むおそれがある。このような条件は既に競技設計の段階で行われていた調査で把握されていた。この記事が掲載される以前のアメリカへの出張の際に「ソヴィエト宮殿建設予定地の地質写真図」と「技師である A.ルベンシテインと A.インツェルトフによるソヴィエト宮殿建設予定地の地質に関する概論」を渡航する訪問団に手渡し³⁷⁷、その後現地では「何人かの専門家から助言を受け、土壤に関する問題の話し合いを行い[...]建設局は（ソヴィエト宮殿建設予定地の）土壤に関する資料をアメリカへ追加送付」³⁷⁸し、更なる助言を仰いでいる。ここで受け取った助言とは「ケーソン（建築物基礎を構築のためのコンクリートもしくは鋼製の地下構造物）設置の際に生じる地下水の問題」³⁷⁹に関するものであった。この点が 1936 年の時点では解決の見通しが立てられ、「技術的に見て最も目的に適っており、経済的に見て最も効果的なのはソヴィエト宮殿の基礎部分を第 2 石灰岩層であるハモブニキ亜階に基礎を置くこと」³⁸⁰という結論が導かれた。

³⁷⁶ Там же, С. 20-21.

³⁷⁷ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 39, л. 70.

³⁷⁸ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 39, л. 71.

³⁷⁹ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 39, л. 71 об.

³⁸⁰ Попов. Фундаменты высотной части Дворца. С. 22.

3-5-3. 基礎設置

地盤の調査結果を基にして、基礎部分はどうのように計画されたのであろうか。地盤調査と同じく基礎部分の設計に関してもアメリカでの専門家との協議及び専門家からの助言が影響を与えている。アメリカ出張報告で、「基礎部分の最終的な決定のためにソヴィエト宮殿の高層部分にあたる場所にケーソン設置を急いで着手する必要」があり、「主要構造柱用に 60 のケーソンを設置」³⁸¹すると記述されている。こうした方策は「地盤への荷重条件を有利にするためのアメリカの専門家からの指摘を」受けて、「技術的かつ経済的な」観点から採用したとしている。この「アメリカの専門家」とは「Moran&Proctor」社と「Lockwood Greene Engineer」社であった。特に「アメリカで実績のある」「Moran&Proctor」社には「基礎を設置する地盤と基礎の深さを建設予定地で把握してもらう必要がある」³⁸²として、実現することはなかったが、同社からの専門家招聘を促している。この背景には、建設局が出張した際にこの会社から「ケーソンの設計図を受け取り」、さらに「基礎工事に関する調査及び基礎工法の決定の作業に参加するための条件」³⁸³が提示されたためであった。

1935 年 6 月 25 日付の建設会議決議ではこうした基礎部分のおおよその目処が立てられている。まず「ソヴィエト宮殿の主要支持構造部（中央高層部分の基礎）は地表からの深さ 30m の第 2 石灰岩層上に設置し、残りの基礎は部分的には第 2 石灰岩層と第 1 石灰岩層に設置する」³⁸⁴としている。この主要基礎部の具体的な形状は、大ホールと高層部に対応する 32 対の柱に対応して、「2 つの環状基礎とそれをつなぐ放射状の基礎梁による一体構造」³⁸⁵となっている（図 212）。支持体となる柱にはそれぞれ「5,500t から 8,500t の荷重」がかかり、また二重環状の基礎部分も「直径 140m と 160m」という大規模なものである。そのため、それぞれ

³⁸¹ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 39, л. 3.

³⁸² Там же.

³⁸³ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 45, л. 6-7.

³⁸⁴ ГАРФ, ф. 5446, оп. 16а, д. 560, л. 15.

³⁸⁵ Попов. Фундаменты высотной части Дворца Советов. С. 22.

の柱下部と円環に基礎梁を取り付けることで、「一枚岩の堅固な基礎」³⁸⁶として
いる。この形状は「Moran&Proctor」社の助言を取り入れた最新の手法であった。

「基礎梁の高さは 20.5m で梁幅は 3.5m としたが、これは世界でも最大の基礎構
造物となるはず」³⁸⁷としている。この基礎工事のために「第 4 期堆積層つまり第
1 石灰岩層及び第 1 石灰岩粘土層を掘削する必要」³⁸⁸があった。しかし、「途切れ
のない帯状の基礎をつくる作業の際に、第 1 及び第 2 石灰岩層からの湧水によっ
て多大な困難が生じることが予想される」。そのため、「土台穴の底の湧水は天然
の隔壁である泥灰岩層によって防護されると期待されるが、側面からの湧水は基
礎工事の掘削穴の周囲に非浸水性の幕を設置する方法が検討され、アメリカの専
門家やエンジニアの助言に従い、更にアスファルトグラウチングによって地盤の
亀裂を充填する地盤改良工法が取り入れられた」³⁸⁹。そのため、競技設計段階で
既に爆破された救世主大聖堂の跡地そのままではなく地盤改良を施し、新たな支
持地盤の上にソヴィエト宮殿の基礎部分は構築されることとなった。

3-5-4. 上部構造（鉄骨）

地盤調査及び基礎工事に関連して巨大なソヴィエト宮殿の上部構造もアメリカ
での専門家との協議を通じて明確な方針が立てられていく。特にソヴィエト宮殿
の「建築物全体の約 60%を占める」高層部については鉄骨造が使用されることに
なり、「長年の実績のあるアメリカの経験を応用する」³⁹⁰とされた。また「技術
案作成の際には鉄骨構造の詳細、鋼の種別の選定、組み立て方法に関しても（ア
メリカの専門家からの）提案を取り入れる必要がある」³⁹¹としている。建設局は
アメリカ出張の際に、こうした問題を当時サンフランシスコのゴールデンゲート
ブリッジ建設に携わっていたラトビア系アメリカ人技師であるレオン・モイセイ
フ、同じく大型橋梁の設計で実績を残していたポーランド系アメリカ人技師のラ

³⁸⁶ Там же.

³⁸⁷ Там же.

³⁸⁸ Там же.

³⁸⁹ Там же.

³⁹⁰ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 39, л. 4.

³⁹¹ Там же.

ルフ・モジェスキーと協議を行っている。その際に話し合われたのは 1. 風圧に対する剛性の強化、2. 鉄骨の構造図作成、3. 構造の簡素化などであった³⁹²。

こうした話し合いの成果の詳細が明らかになるのは 1936 年に建設会議に提出された「ソヴィエト宮殿建築技術設計案の計画概要」においてである。この書類ではソヴィエト宮殿の高層部分にどのような施設が配置されるかが詳細に記述されている。まずソヴィエト宮殿の高層部は「絶対高さ 194.80 の位置から始まり[...]大ホールキューポラを囲む正方形平面の基壇部と 5 つの段状シリンダーのボリュームから成る」³⁹³とされている。この部分に配置されるのは、展示用空間、博物館用施設、モスクワが一望できる展望用ホールとそのテラス、建物の設備などを制御及び管理するための施設である。展示用空間は大ホールキューポラ周囲の 211.80 のレベルに、博物館用施設は 283.20、304.80、345.75、359.25、386.25、399.75 の 6 レベル、展望用施設は 211.80、234.30、271.80、336.75、426.30、466.80、481.80 の 7 レベルに各々配置され、高層部のそのほかの箇所には機械制御室が分散的に配置される³⁹⁴。大ホール上部の空間にも多くの訪問客を収容すると思われる施設が配置されており、地上部分から高層部への人の往来が見込まれる。そのため、「入口を地上高 130.00 の地点に設置し[...]130.00 の地点から 222.60 の地点まで訪問客用のエレベーターが配置されそこから 249.30 の地点までエスカレーターが配置される。その地点はそれよりも上階をつなぐ 8 つのエレベーターが配置されたホールとなり、レーニン像の足下のテラス（地上高 481.80）までつながっている³⁹⁵。こうしたことから高層部は単に建物の荷重だけでなく、多くの数が見込まれる訪問客による荷重（ライブロード）も考慮した上で構造計算を行う必要があった。高層部の構造はアメリカの専門家との協議を通じて「高層建築物の鉄骨はアメリカで長年にわたり応用されてきたことから、ソヴィエト宮殿の骨組みを鉄筋コンクリートではなく、鉄骨で組むことが正しい」³⁹⁶と報告された。こうして、建物の上部構造には鉄骨が用いられ、その詳細は技術案に記されるこ

³⁹² ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 45, л. 9.

³⁹³ ГАРФ, ф. 5446, оп. 20, д. 2210а, л. 19.

³⁹⁴ ГАРФ, ф. 5446, оп. 20, д. 2210а, л. 20.

³⁹⁵ Там же.

³⁹⁶ ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 45, л. 34.

ととなった³⁹⁷。

このようにアメリカへの出張による建設技術の習得と専門家及び建設企業からの助言によって、建設局はモニュメンタリティを反映させるための空間演出と建築物の構造に関わる土木技術、そこで用いられる建築材料の構造理解、そしてそれらの使用方法を得ることになった。しかし、この段階では建築物の基礎が設置されただけであり、建築物の組み立て作業にまでは至っていない。そのため、アメリカで習得及び助言を受けた全ての建設技術が建設作業において活かされたと断言するのは難しい。実際の建築現場で、より詳細に建築物の構造とその建築材料に関連した問題が生じるのは、基礎設置が終わり施工作业及び建築材料の供給が始まる 1938 年からであり、この点は次章にて論じる。しかし、最終設計案が完成するまでにこうした技術が取り入れられながら作業が進められていったことを勘案すると、アメリカの建設技術はソヴィエト宮殿というイメージを具体化するための必要条件であったと言えるであろう。

結

建築競技設計後に生じたソヴィエト建築界で議論されたテーマ、「過去の建築遺産の習得」は、単に建築物の外観だけでなく、内部空間の構成、内装に対する考察や設計にも影響を与えていた。こうした中でモニュメンタリティはより重視され、大型建築物に求めるべき性質としてソヴィエト建築界での議論を通じて認められるようになる。限りある空間でモニュメンタリティを表現するためには装飾のみならず、照明技術やその効果による空間演出に負うことになる。大ホールでは観客と舞台の登壇者が共に国家の設立者の像を頂く空間に集うという構図が現われ、ホール内装ではその理念に従った空間演出が施された。こうした空間演出をするにあたり、設備や機器、そしてそれらの技術が求められた。

³⁹⁷ 1940年に提出された断面図ではレーニン像頂部が 532.40、その足下台座の上が 431.40 その下に続くシリンドー頂部が 402.55、そのシリンドー底部が 332.20 次のシリンドー頂部が 323.30、そのシリンドー底部が 279.20 となっている (ГАРФ, ф. 5446, оп. 82, д. 121, л. 13.)。この数字は本文にある 1936 年の文書のみで提出されたものには記載されておらず、両者には違いがある。

建築物の構造、とくにその基礎と上部構造部においてアメリカ建設技術が取り入れられたことで、ソヴィエト宮殿は新たな局面を迎えることになった。建築家V.オルタルジェフスキイの言葉を借りれば、ソヴィエト宮殿は「エンジニアと建築家の密接な共同作業の時にのみ果たされる半ば工学的な建築物」³⁹⁸へと変容しつつあった。この「エンジニアと建築家の密接な共同作業」はB.イオフアンが課題として、アメリカ出張後の報告で触れたことでもあった。実際の建設作業として基礎に関する作業のみが着手された時点で、この共同作業の成果は明確に現れたわけではない。だが、このようなことを含めて、アメリカの建設技術はソヴィエト宮殿建設段階におけるあらゆる側面で用いられていた。ロックフェラー・センター近くにあるラジオ・シティのホールを「格納庫や船台を彷彿とさせ、モニュメンタリティを備えた一連の建築物と同等に扱うことはできない」³⁹⁹として、アメリカの高層建築物とソヴィエト宮殿は相容れないことが表向きには強調されていた。しかし、ソヴィエト宮殿を実現するためにアメリカの建設技術を参照した結果、非難対象であったエンパイア・ステートビルディングやロックフェラー・センターといった当時のスカイスクレーパーと相似するようになったのは、自然な流れだったのである（図 215、216）。

³⁹⁸ *Олтаржевский В.* Архитектура Соединенный Штатов Америки // Архитектура СССР. 1935. № 9. С. 56.

³⁹⁹ *Атаров Н.* Дворец Советов. М., 1940. С. 111.

4. ソヴィエト宮殿の消散：

ソヴィエト宮殿建設作業の凍結と中止に至る経緯（1937-1952）

1937年から1952年にかけてのソヴィエト宮殿プロジェクトの推移に関する1次資料はかなりの数が存在しているにもかかわらず、先行研究ではあまり扱われない。1941年の建設作業凍結後から1957年の公式な中止発表までの経緯がほとんど公表されていないからである。現存する1952年頃までのソヴィエト宮殿に関する1次資料で扱われているのは、建設作業を担当するソヴィエト宮殿建設局と関連省庁との審議、または新たに制作された設計案を巡る交渉がほとんどである。また、1937年の最終設計案完成後から1941年までの建設状況に関しても、基礎完成後の施工をめぐる動きが定期的に報告され、ソヴィエト宮殿が建築物としてどの程度まで実現していたのかを窺い知ることができる。こうした1次資料からわかることは、摩天楼のような巨大な建築物を実現するための理論的な枠組みが構築されたにもかかわらず、建設現場での作業や建築材料の生産体制に不備があり、当初の予定から大幅に遅れていたことである。このことは結果として建設会議及び政府首脳部から不審を招き、建設局がこのプロジェクトを遂行する上での躓きとなる。これと関連するかたちで、建設局と関連省庁との駆け引きによって得られる予算やそれを巡る承認が円滑に得られなかった。こうした交渉及びやり取りを行っていたのは建設局の事務担当者だが、建築プロジェクト・ソヴィエト宮殿が発表された時点で事務処理を行うことが明記されていた主任建築家も加わっている。1940年代には、政治局や関連省庁に対する主任建築家からの陳情および交渉が急増する。こうしたことはソヴィエト宮殿という一大建築プロジェクトの一面を反映しており、このプロジェクトの全体像をやや異なるかたちで我々に提示してくれるであろう。

まずは最終設計案が公になった後に出版された設計に関する技術理論書と施工をめぐる動きを見ていくことにしよう。

4-1. ソヴィエト宮殿高層部の設計に関する技術論文

3章ではソヴィエト宮殿の高層化に伴い、アメリカにおける高層建築物の建設技術を習得していく過程を取り上げた。その中で実際の建設作業を通じてソヴィエト宮殿の構

造をまとめた技術報告書が登場した。ソヴィエト宮殿の構造全般を担当したフセヴォロド・ナソフ⁴⁰⁰は 1939 年に出版された論集『高層階建築の鉄骨』の中に『ソヴィエト宮殿の鉄骨』という論文を掲載している。この論集は「鋼構造に関連するエンジニア及び設計家に対して」編集されたものであり、また「学術研究の教材として用いられるものでもある」⁴⁰¹として、ソ連国内及び国外の鉄骨使用事例、構造設計計算の方法、高層建築物の構造と荷重に関する情報などが収録されている。その中で具体的な建築物の事例として紹介されているのはソヴィエト宮殿のみである。この論文を基にソヴィエト宮殿の鉄骨構造躯体の詳細を知ることが可能である。そのためここでは彼の論文を基に、ソヴィエト宮殿で用いられる予定であった鉄骨に触れ、その構造を見ていくことにしよう。

V.ナソフの論文は 1.建築物の固定荷重(デッドロード)と積載荷重(ライブロード)、2.使用される鉄骨の種類、3.構造概要(高層部とスタイロバード部)、4.構造の詳細、5.躯体概算から構成されており、各項目の説明に対しておそらく技術案で提示されたと考えられる図版及びの指標が挿入されている。V.ナソフは自らの論文の導入部において「エンジニアの観点から最も興味深いのはこの建物の高層部」⁴⁰²として、高層部の鉄骨を中心に解説を行うことをまず述べ、「鉄骨でできた高層建築、主にアメリカのものに関する広範な資料を収集し学習した」上で作成した鉄骨案を「概要的な情報と鉄骨構造の詳細及び計算に関するデータ」⁴⁰³を基に解説している。「ソヴィエト宮殿の鉄骨案作成の際には摩天楼建築の経験が最大限に活用された」⁴⁰⁴のであった。

まず 1 のソヴィエト宮殿の荷重についてだが、建築物の重量に占める鉄骨の割合は 30%で長期荷重は 200kg/m²、短期荷重は 400kg/m² で算出されており、建設予定地で観測された風速を基にして建物の階に応じた風荷重によって生じる曲げモーメントと断面力が算出されている(図 217)。これはソヴィエト宮殿の建築物模型を用いて風洞実験をしており、流量比率に応じて算出されている。

⁴⁰⁰ 彼はソヴィエト宮殿での構造設計の主任技師として建設作業に携わり、後にホテル『ウクライナ』やワルシャワに建設された『科学と文化の宮殿』といった第 2 次世界大戦後のソ連を代表する超高層建築物の構造設計を担当している。

⁴⁰¹ От редактора // Стальные каркасы многоэтажных зданий / под ред. В.А. Балдина. М., 1939. С. 3.

⁴⁰² Насонов В.Н. Стальные каркасы Дворца Советов // Стальные каркасы многоэтажных зданий / Под ред. В.А. Балдина. М., 1939. С. 81.

⁴⁰³ Там же, С. 79-80.

⁴⁰⁴ Там же, С. 81.

2で説明されている建設に使用される鉄骨用鉄鋼は4種類あり、躯体や基本的な要素となる部分には圧延鉄鋼である SDS-P、この鉄鋼の接合に用いられる鉄鋼が SDS-Z、鉄骨の補助及び低層基壇部用の鉄鋼には圧延鉄鋼 3M、その接合には 2M となっている。使用鉄骨総重量は 300,000t と見積もられ、そのうちこの圧延鋼 (SDS-P) の総重量は 190,000t、もうひとつの圧延鋼 3M は 110,000t として、他にも 500t のステンレス鋼をレーニン像用に充てるとされている。こうした相当量の鉄骨の大部分は高層部に充てられており(表 9、10)、構造部分の中でとくに主要なものは柱で約 102,000t に及び、その次は二重環状梁部の 34,000t である。この部分の下になる低層基壇部に用いられる「高強度の」鉄鋼 3M の量は、摩天楼建築の平均値よりも少ないとしている⁴⁰⁵。

表 9: 建物の要素に応じた SDS-P と 3M の重さの分配

建築物の部分の名称	重量(t)		
	SDS-P	3M	合計
大ホールアンフィテアトルム...	-	7,500	7,500
スタイロバード...	-	56,000	56,000
小ホール...	3,000	13,000	16,000
高層部...	181,000	35,000	216,000
V.I. レーニン像...	4,000	500	4,500
総計...	188,000	112,000	300,000

表 10: ソヴィエト宮殿高層部の鉄骨要素に応じた重量別鉄鋼分配

鉄骨要素及び構造	主要構造部				副次的鉄骨					総計
	柱	接線方向のつなぎ梁	放射状のつなぎ梁	二重環状梁部	つなぎ材	放射状のトラスと天井	柱	梁と桁、つなぎ材	その他	
重量	102,000	9,000	4,000	34,000	23,000	5,000	12,500	24,500	3,000	217,000

3 の高層部鉄骨の概略説明によると、この建物の高層部の鉄骨は躯体とそれに付随する構造体の 2 つに別れて構成されており、躯体は基礎部分の構造と同じく二重の環状を基にして、等間隔で 32 本の柱が配置されている。この柱は高さ 50m のところで建物内側へ斜めに折れ曲がり、135m のところから 270m まで建物中心部に向かって緩い角度で斜めに伸びるようなかたちで組み合わされている(図 218)。柱の継ぎ目には垂直状の荷重がかかる環状接合部材が配置され、他の階の天井の高さでは、柱を載せた円

⁴⁰⁵ Там же, С. 85.

環状の構造物を放射状の梁でつなぐことにより水平の荷重(風荷重)に耐える構造となっている。270mからレーニン像までは垂直状に柱が継ぎ足されていく。この高層部の荷重を支える大型の二重環状梁部が高さ 135m のところに設置され、二重環状梁部で受けた荷重は折れ曲がった柱が支え、低層基壇部へと荷重が伝播する構造となっている(図 219)。この折れ曲がった柱の間に格子状のトラス(三角形を基本単位とした構造体)を放射状に組むことでキューポラとなり、大規模なかたちで大ホール天井空間を確保できる。こうした躯体を支える補助構造となる副次的鉄骨は、壁を支える梁と天井のプレート、躯体の柱の傾いた部分に配置された補助柱などから成る。こうした鉄骨構造は「建築的形態によって規定され」、「垂直にはたらく荷重はおよそ 650,000t で、その際に高層部で水平にはたらく荷重はおよそ 8,000t である」。「基礎部分へ垂直にはたらく荷重を伝えるための最も短い経路」で柱の向きが決められたため、「建物の建築形態に応じて上へ徐々に向かう」⁴⁰⁶かたちとなっているが、水平の荷重に対して基礎側取り付け用プレートやトラス、梁を組むことで剛性が高められている。

4 の構造の詳細では、使用されている形鋼、柱を支えるための基礎側取り付け用プレート(図 220)、鉄鋼の接合、そして二重環状梁部の説明がなされている。柱は H 型鋼の複合によってつくられており、部分によっては別の形鋼が用いられている。一方で柱の土台となる基礎側取り付け用プレートは、「アメリカのタイプ」が用いられており、上部から伝わる荷重を水平に分散させるよう基礎側取り付け用プレートの下には支持プレートが配置されている。さらに柱の横梁を固定するため筋交いをはめ込むことでよりいっそう強度を高める工夫がなされている。二重環状梁部では予め行われた構造計算を基にしてその設置が行われることが説明されている。

5 の鉄骨設計では建物全体に影響を与える外力の構造計算についての説明がなされている。ここで重要なのは「摩天楼の鉄骨設計用の構造計算に用いられた手法はソヴィエト宮殿の鉄骨では有益でない」⁴⁰⁷として独自の手法を強調している点である。特に大ホール上部空間のドラム部分をいくつかに分けて別々の方法で構造計算を行い、それぞれの部分にかかる重量の均衡と歪みなどを算出し、それらを建物全体との構造体系

⁴⁰⁶ Там же. С. 88.

⁴⁰⁷ Там же. С. 96.

に適合させようとしている。この部分を除いては個々に構造計算は行われず、循環性を持った性質としているため、この時点で概算されたリベットの強度と歪みを基に試算されている。大ホール上部空間が構造計算においても特殊な扱われ方をされ、この点によってソヴィエト宮殿は「アメリカの摩天楼」とは異なる鉄骨構造計算を取り入れることとなったのである。この構造計算によって得られた建物の各階の接点荷重と累積された総合荷重が算出されている(図 221)。一方で、超高層建築物であるソヴィエト宮殿は風による荷重の影響によって水平状の変形が生じる。この変形の算出に摩天楼建築で用いられる計算式を用い、建物全体の変形を図解している(図 222)。変形は許容範囲内としているが、「最終的な構造計算の結果ではかなりの縮小が期待される」⁴⁰⁸として、更なる詳細な設計及び構造計算がなされることが示唆されている。

こうしたことから、V.ナソフの論文ではソヴィエト宮殿の鉄骨構造及びその設計方法が詳細に記されており、そのことによって実現可能性を認知させたと言えよう。確かに、彼が記しているようにアメリカの高層建築を参照に粗鋼の生成、荷重に応じた部材の配分を行っているが、その外形が独特であるが故に摩天楼建築の構造をそのまま取り入れてはいなかった。特に対の柱をつなぐ梁の構造に関しては、「トラスの橋梁のほうが摩天楼よりも似ている」⁴⁰⁹として、3章で触れたアメリカ出張の際に橋梁の専門家である R.モジェスキーと L.モイセイフからの助言を基にしている。彼らが設計を担当したフィラデルフィアの橋(ベンジャミン・フランクリン橋)とゴールデンゲートブリッジの桁と V.ナソフが設計担当した対の柱の構造は確かに相似している。こうしたことから、摩天楼建築を含めた「鉄骨でできたアメリカの建築物」がソヴィエト宮殿の鉄骨構造に与えた影響の大きさが理解し得る。

4-2. 最終設計案完成後の動き

最終設計案である技術設計案が 1937 年 3 月に完成し、同年 5 月には現場での作業を統括するエンジニアから『ソヴィエト宮殿の建築事業状況に関する資料』が提出され、

⁴⁰⁸ Там же. С. 99.

⁴⁰⁹ ЦАГМ. ф. 694. оп. 1. д. 45. л. 9.

公には『建築のソ連』誌 1937 年 6 月号の記事『ソヴィエト宮殿建築技術案』で、既に技術案が完成したものとして発表され、技術案完成後すぐの作業状況が明らかにされている。『ソヴィエト宮殿の建築事業状況に関する資料』では最終設計案及び技術案に対して、作業に携わるエンジニアの観点から不明瞭な箇所や建設作業をすすめる上で問題となりそうな箇所も列挙されている。これはこの技術案がまだいくつかの問題を未解決のまま残しており、施工に取りかかるための最終案ではないということを示している。

まずは高層部だが、この資料が提出された時点でもなお「作業班は高層部の建築計画案とそれと構造を結びつけた設計案の作成に取り組んでいる」⁴¹⁰という報告がなされている。この部分を担当する建築家(セミョーン・ゲリフェリド)が「作成された設計案を最終的なものではなく、鉄骨構造の構造計算のために与えられた中間段階であると見なしている」⁴¹¹といているように上記の技術案が不完全であることの確認である。例えば、高層部の下に位置する低層部や大ホールにおいては確認事項が列挙されているが、特に設置される機器に関連した電気系統や配線、またその部分に配置される施設に関するものがほとんどである⁴¹²。他方、高層部では建物の外見と内部構造があつていないとして、技術案を作成した「鉄骨構造部門の要求はかなり困難なものである」⁴¹³と懸念が示され、結果として「鉄骨構造部門は新しい設計を行い、鉄骨構造に変更点を加えなければならない」⁴¹⁴なった。しかし、その設計を担当する鉄骨構造部門は「必要な資料(基礎部分の資料に関する情報、変更点のある建築設計図、衛生関連の設計図)全てを把握していない」ため、「個々の構造部分の応力や建物の重さが増えたことで明らかになった許容誤差を取り入れて」⁴¹⁵詳細設計を行わざるを得ないとしている。鉄骨構造に関して、技術案提出後にこのような問題が指摘されるということは、それぞれの部分を担当する部門との連携が取れていないということを意味している。

基礎部分では、この報告書が提出された時点で、基礎全体の形が決まり杭の設計図があるにもかかわらず、基本柱とそれらを水平につなぐ梁を強化するための鉄筋コンクリート用のボルトの規格と配置が決まっていないため、作業が行えないとしている。さらに

⁴¹⁰ ЦАГМ. ф. 694. оп. 1. д. 99. л. 10 об.

⁴¹¹ Там же.

⁴¹² ЦАГМ. ф. 694. оп. 1. д. 99. л. 6-9 об.

⁴¹³ ЦАГМ. ф. 694. оп. 1. д. 99. л. 5 об.

⁴¹⁴ ЦАГМ. ф. 694. оп. 1. д. 99. л. 16 об.

⁴¹⁵ ЦАГМ. ф. 694. оп. 1. д. 99. л. 17.

は作業を行うエンジニアたちに「完全な地質情報が提供されていない」ため、彼らは「地下の構造も何もわからない」⁴¹⁶状態にあるという。こうしたことから技術案が完成したとされているにもかかわらず、現場を統括するエンジニア達には技術案の詳細な諸前提に関する情報が行き渡っていないことがわかる。

『建築のソ連』誌 1937 年 6 月号では施工に関する記事『ソヴィエト宮殿の基礎構造部組み立てについて』が掲載されており、基礎部分の工事と鉄骨の組み立てで用いられる機器(デリック)と組み立て手順が説明されている(図 223)。建築物の組み立てに必要な 228,000 トンの鉄骨は、制作から躯体を組み立て完成に至るまでには約 3 年かかると記されている。この鉄骨を組み立てるための基礎となる部分は 1937 年末に完成予定とされ、そこから建築物の鉄骨の建て方を始め、建築物の外形に合わせた高さの調整や「壁や外装の充填材や天井の設置」は、この建て方作業中に行うとされている⁴¹⁷。ではこうした作業はどのように行われるのであろうか。

記事では「建設の産業化」、特に「ソヴィエト宮殿の基本構造組み立ての機械化」によって作業が行われると説明されている。「組み立ての機械化」とは、予め工場で生産・加工した鉄骨を建設現場で組み立てる体制の確立と揚重機の導入による作業である。

まず「機械化」の基となる鉄骨建て方工事だが、ここでは主に工場での生産と加工に関する説明が記されている。それによると、鉄骨部品は主にドニエプロペトローフスク(現ドニプロ)とウラル地方ヴェルフニャヤ・サルダールの工場で生産され、建設現場まで輸送し、毎月約 10,000 トンペースでの制作と建て方を見込んでいる⁴¹⁸。この 2 つの工場は、主に鉄骨の主要構造部材の生産が集中する主要工場とされ、そのほかの部品材は国内の別の圧延工場や冶金工場で行うとし、このことによって作業の効率化が打ち出されている。

「機械化」のもう 1 つの基となる揚重機の導入であるが、記事には組み立ての際の揚重機の配置図が描かれており、具体的な説明がなされている。既に挙げたように、組み立ての際にはガイデリックが用いられる。この揚重機は基礎部分の二重の円環の内側に

⁴¹⁶ ЦАГМ. ф. 694. оп. 1. д. 99. л. 16.

⁴¹⁷ Николаев В. Монтаж основных конструкций Дворца Советов // Архитектура СССР. 1937. Но. 6. С. 34.

⁴¹⁸ Там же.

等間隔で 12 台配置される。建設現場に配置されたデリックは一定の高さまで鉄骨を組み立てた後、次の高さまで上げられ、さらに上部の鉄骨を組み立て、組み立て部分が高くなるに従って内部の円環が狭くなる(シリンダーの径が小さくなる)からデリックの台数も減る。ことになる。そのため、ソヴィエト宮殿の躯体をいくつかのセクションに分けて、どの高さでデリックの台数を減らすかということが説明されている。大ホール上部にあたるドラムではその上部に組み合わせる部分が狭くなることから、デリックが地上部から鉄骨を持ち上げ、さらにその上部では台数を減らし、最終的には 4 台で組み立て作業を行い、残りのデリックは鉄骨を上部へ受け渡すかたちとなる。このような手順で鉄骨の建て方が行われるが、建て方作業が全て終わるのは 1941 年、つまりこの技術案が提出されてから 4 年後とされている。この建て方作業の懸念材料として挙げられているのは、「工場で生産された鉄骨部品の供給を途切れることなく(建設現場に)送り込むこと」⁴¹⁹である。鉄骨部品の供給が途切れることは建設作業遅滞の原因となるが、この記事が書かれた時点では組み立て作業の円滑化を促すための訓告であると考えられる。

こうしたことから、ソヴィエト宮殿技術案が提出され、建築物の躯体とその構造が明らかになり、その建て方手順が提示されたことにより、「世界最大となる」ソヴィエト宮殿の完成が現実味を帯びるようになった。ここでは特に建築物躯体に必要な鉄骨の量が試算されていること、そして複雑な組み立て手順をデリックによって効率的に行うことが報告されている。こうした点は記事の中で「産業化された建設作業とその規模を組織するシステム」として、「建設の新しい方法、高い水準にあるソ連の技術文化を底上げする模範例」⁴²⁰とし自賛している。こうした鉄骨の建て方やその効率化はアメリカ出張の際に受けた改良案と助言を基にしているので、ソ連技術独自の賜物ではなく、既に指摘してきたようにアメリカにおける「長年の実績と経験」によって負うところが大きかったのである。しかし、超高層自体がヨーロッパではなかったし、超高層の直下に(柱を降ろしてこれない)大きなホールを設けるという構造は、アメリカにしても未曾有の大構造物であったことは間違いない。

⁴¹⁹ Там же, С. 38.

⁴²⁰ Там же.

この点を補足するかのように、1938年9月27日付ソヴィエト宮殿建設会議決議では、3度目となるアメリカ出張の許可申請が提出され、承認されている。この申請では1. 鉄骨、2. 換気と暖房の機器設置、3. 音響検査、4. 防音と振動防止、5. ラジオおよび火災報知、6. 高層エレベーターの設計、製造と稼働、7. 電気設備機器と照明、8. 高層建築物の建設作業、9. 石材加工産業の9つの項目を調査するためそれぞれの専門家をアメリカに派遣、専門家より助言を仰ぐ旨が伝えられている⁴²¹。すでに2度にわたりアメリカへのお出張を行い、ソヴィエト宮殿の建設に関連する技術の協議が行われていたが、いずれも技術案及び最終設計案作成の段階であった。この3度目の出張は実際に施工する際に、ソ連側が積み残していた問題点を解決するためのものであった。例えば1.の鉄骨に関しては「構造の複雑なユニットの詳細、構造を組み立てる際に正確さを要するような実践方法、組み立て方法、杭打ちとその取り外し方法、ワイヤーロープの取り扱い」⁴²²と現場での作業と関連した事案が協議の対象となっている。この1年後の1938年に設計者のB.イオフアンがニューヨーク万博ソ連パヴィリオンの設計で長期滞在をしている際に、V.モロトフにニューヨークの建設状況を報告している。「1934年に来た際に、大きな公共建築はあまりなかったが」、この1938年の滞在で特に彼が目を見張ったのは、「ラジオシティーのほぼ無音のエスカレーター」、「壮大で新しい住居区」、「様々な刻印を施した装飾金属」、「建物の棟が我が国よりも奥行きがある」⁴²³建築物であった。これらはソヴィエト宮殿で実現しようとした壮大さをこうしたニューヨークの高層建築物に投影していたと言えよう。こうした建築物を見学し、「ソヴィエト宮殿の専門家を派遣してくれれば、より深くアメリカの最新の建設状況を学べる」⁴²⁴とV.モロトフ宛てに報告していることから、3度目の出張は承認されていたが実現に至らなかったと考えられる。

このように現場レベルでは建設作業に関する不明瞭な点が生じており、それを解消するものとしてアメリカで更なる情報を受け取ろうとしたが、実際にはそれが叶わなかった。そのような状況の中で建設作業はどのように進展していったのか。B.イオフアンがニューヨークからV.モロトフへ書簡を送る1ヶ月前の1938年9月に「ソヴィエト宮殿建設に関

⁴²¹ ГАРФ, ф. 7523, оп. 9, д. 376, л. 6.

⁴²² Там же.

⁴²³ РГАСПИ, ф. 82, оп. 2, д. 505, л. 134.

⁴²⁴ РГАСПИ, ф. 82, оп. 2, д. 505, л. 133.

する」報告が全連邦共産党モスクワ州委員会で行われている。この報告は、全連邦共産党モスクワ州委員会の依頼により行われたソヴィエト宮殿の建設現場の調査に関するものである。調査によれば作業の進行は「破滅的」⁴²⁵と結論付けられており、特に建設を指導する建設局長 A.プロコフィエフと設計者及び主任建築家である B.イオフアンに因るところが大きいと、報告書の冒頭で報告されている⁴²⁶。建設作業の責任の所在は彼らにあったが、実際には現場での指揮系統が統制されていなかったことが「破滅的」となった原因と言える。モスクワ州委員会が挙げているのは、「技術案がないため、必要な建材の量が算出できない」こと、その中でも「鉄骨の供給と生産に関する問題が解決されおらず、ソヴィエト宮殿の外装で大理石を除いた部分に用いる素材が決まっておらず [...]外装に必要な大理石をソ連国内で賄うには 10 年かかる」⁴²⁷として、見通しの甘さが指摘されており、さらには 1937 年の段階で提出されている技術案そのものが存在しないと報告している。「ソヴィエト宮殿のような巨大かつ重要な建築物では最終的な技術案というものはあるはずもなく、またそうした技術設計は建設作業と並行して行われるべきである」⁴²⁸というソヴィエト宮殿の主任技師 G.クラージンの発言を基にすれば、提出された技術案というのは全てを網羅したものではなかったと考えられる。こうしたことは、建設局がソヴィエト宮殿の設計と建設を担当し、その責任所在が分離していないために生じたものである。またソヴィエト宮殿は競技設計後、その規模や構成に変更が加えられ、それまでの予想を超えた建築物となっており、建設局に属する部門を細分化しなければもはや対処しきれないものとなっていた。しかし、最終案設計の時点で地区委員会にとっては、こうした同時並行の進め方がソ連人民委員会議の提示する建設作業の全体的な見積もりを達成できず、不足がちな建設材料の誤った利用を導き、基礎の設置や鉄骨構造部分の作業といった基本的な作業の遅延となっているとしている⁴²⁹。全体的なコーディネートがされたプランがないという点は 1937 年 5 月のエンジニアによる報

⁴²⁵ РГАСПИ, ф. 82, оп. 2, д. 506, л. 4.

⁴²⁶ 本稿ではソヴィエト宮殿に関連した政治指導者及び建設局の設計者や党活動家達による政治的闘争及び権力闘争を詳細に論じることはない。1937 年まで建設局長を務めた V.ミハイロフは「人民の敵」として突如粛清され、後任の A.プロコフィエフもこの報告書では「ミハイロフの敵対的雰囲気を引き継いで作業にあたっている」として、「建設現場での党活動を積極的に導入すべき」と報告されている。しかし、この報告以降そのことによって主任建築家、建設局長、主任技師といった建設作業の最高責任者が解任されることはなく、建設作業に直接的な影響を及ぼすことはなかった。

⁴²⁷ РГАСПИ, ф. 82, оп. 2, д. 506, л. 7.

⁴²⁸ Там же.

⁴²⁹ РГАСПИ, ф. 82, оп. 2, д. 506, л. 9-10.

告でも指摘されていたことであり、その 1 年後のモスクワ州委員会報告では作業全体の遅延の原因に結びつけられていることがわかる。基礎部分の作業では「当初は設計図ではなく、下案や表に従って作業が行われ土台穴の設計図は作業を進めていく中で変更された」⁴³⁰として、現場では計画通りに作業が進められていないことが非難されている。

しかし、1938 年末の V.モロトフ宛の『ソヴィエト宮殿建設に関する情報』による作業報告はこの地区委員会の報告と異なっている。この報告では既に基本的な建設作業(高層部及びスタイロバード部の基礎設置)はほぼ 80%を終え、既に鉄骨の準備作業に入っていると伝えられた⁴³¹。この準備作業のため「建築用資材貯蔵所に鉄骨を搬入する作業が行われ、45t クレーン用のトラスが設置され[...]組み立て用の機器(デリッククレーン)が発注された」⁴³²と報告している。ここから技術案完成後に掲載された『ソヴィエト宮殿の基礎構造部組み立てについて』の通りに作業が進められており、鉄骨構造の組み立て開始は 1939 年の第一四半期末で、「1939 年に 80,000t まで鉄骨構造を組み立てることができる」⁴³³と建設局が見積もり、建設作業が完成するとされた 1942 年までの鉄骨構造の必要供給量が算出された(表 11)。

表 11:ソヴィエト宮殿建設局による鉄骨構造の供給量

年	建設局が見積もる供給量: ()は重工業人民委員部が見積もる供給量
1939 年	80,000t (-)
1940 年	145,000t (125,000t)
1941 年	70,000t (20,000t)
1942 年	5,000t (-)

この鉄骨供給量は建設局にとって「切迫した問題」であり、報告書では供給元である重工業人民委員部との折衝する必要性が説かれている。確かに「暖房、動力、換気、ラジオ配線、電話配線、信号系統といった問題などといったソヴィエト宮殿の建設作業と結びついた重要な一連の問題に建設局はまだ取り組んでいない」⁴³⁴が、これらの問題

⁴³⁰ РГАСПИ, ф. 82, оп. 2, д. 506, л. 9.

⁴³¹ ГАРФ, ф. 5446, оп. 22, д. 3198, л. 7.

⁴³² Там же.

⁴³³ Там же.

⁴³⁴ ГАРФ, ф. 5446, оп. 22, д. 3198, л. 6.

は建物自体がある程度出来上がった段階で取り組み得る問題である。だが、技術案作成の時点で述べられていたように「建設作業期間を決定し、建物の規模の約 60%を占める」高層部及び建物の枠組みを形作る鉄骨の問題は「最も重要」であり、見積もった供給量を確保できるか否かがこの時点で建設局の緊要な問題であった。建設局は重工業人民委員部の提示する量を自らが希望する供給量に対応させるため、建設会議に対して提案を出している。それはソヴィエト宮殿用の鉄骨生産を請け負っているうちに「ドニエプロペトローフスクの工場には簡素な構造部品を発注」し、同じように鉄骨生産を請け負うヴェルフニャヤ・サルダールの工場の方に「総額 160,000ドル分の輸入機器を取り入れる」とする鉄骨生産の分業化である。

この点に加えて、建設作業に必要な製品(特に鉄骨構造に関連する製品)の供給元の技術水準の問題もその進捗に影響を及ぼし始めた。1939年の建設局からソ連人民委員会議付属経済会議宛の書簡では、鉄骨構造で用いられる鉄鋼の欠陥に関する報告がなされている。この報告では、建設局が発注した躯体用鉄骨を組み立てる段階で「かなり多くの潜在欠陥が加工する過程で生じていることがわかった」⁴³⁵。こうした潜在的欠陥は「圧延技術の未熟さと製品が規格化されていないこと」⁴³⁶から生じると分析され、このことが結果として建設作業の遅れを引き起こしているだけでなく、供給元へのクレームもしくは生産改善要求すらも経済会議で定められた「鉄骨構造物の引き渡し条件」(1938年11月29日にソ連人民委員会議付属経済会議で承認された規約)によって阻まれている状況が伝えられている⁴³⁷。こうした状況は、技術案完成時に見通していた建築計画と高層部に必要な鉄骨構造供給の年次計画に狂いを生じさせた。しかし、1939年4月23日付モスクワ州委員会によるソヴィエト宮殿の建設状況調査では、「1938年の調査報告で指摘した点が改善しておらず」、「この時点(1939年の調査時点:著者註)まで全体の技術案が存在しない」ため「建設局は鉄骨構造製品を工場へ発注できていない」⁴³⁸ことが指摘された。さらに「予め建設局が発注した製品は技術水準を満たしていない」

⁴³⁵ ГАРФ, ф. 5446, оп. 23, д. 4431, л. 76.

⁴³⁶ Там же.

⁴³⁷ Там же. この規約では、製品の欠陥に対するクレーム申し立ては製品を受け取って3ヶ月以内であれば可能としている。しかし、その製品の組み立て段階(つまり潜在欠陥がわかる段階)に入るのは供給から5-6ヶ月後かそれ以上かかるため、供給元に対してクレームの申し立てができないとA.プロコフィエフはV.モロトフに訴えている。

⁴³⁸ РГАСПИ, ф. 82, оп. 2, д. 506, л. 2-3.

いとして、不合格品とされている」ため、予め決められた量の鉄骨構造製品納入が途絶え、「第18回全連邦共産党大会で可決された1942年にソヴィエト宮殿の基本的な建設作業を終わらせるという決定を遂行することができない」⁴³⁹と懸念されている。

この調査は建設局がソ連人民委員会付属経済会議へ宛てた報告を補っているが、建設局側にも非があることを伝えている。1939年12月29日付V.モロトフ宛建設局の報告書では「1942年に基本的な建設作業を終らせるという党大会での決定」が「1939年の設計及び建設作業を規定し、また翌年の作業プログラムをも予め決めることになった」⁴⁴⁰と、それまで建設局が行ってきた作業と照らし合わせて、1940年の作業課題が列挙された。ここでは1940年から行われる作業の確認のため、既に着手した1. 設計、2. 制作準備、3. 建築工事の3つが挙げられている。1.では「技術建築設計図が既に作成され、ワーキングプランの組立が始まり、内装デザインの作業に着手し」、2.では「機器及び衛生設備の製造に関する契約、セラミックブロックなどの新素材の生産、国内のいくつかの場所で大理石の採掘」が行われ、3.では「高層部の基礎と低層部の基本的な部分が完了した」⁴⁴¹。この3つの中でも3.は建設作業に直結しており、これを基にした1940年の作業予定に「低層基壇部の基礎の設置を完了させ、鉄骨構造を組み立てる上で必要な部分に工事用の搬入口を設置し、小ホール建設準備を行い、鉄骨構造の組立を行う」⁴⁴²と報告された。この報告書からでは、1938年の建設現場からの報告で「地下の構造が何もわからない」とされていたにもかかわらず、基礎部分の工事はすすめられており、大きな問題が生じることなく作業が進められている印象を受ける。しかし、1939年のモスクワ州委員会報告で再び指摘された「全体の技術案がない」ため現場での作業員は全体像を把握しないまま作業が行われていること、さらにこれとは別に、前述のように、納入される鉄骨製造品に不合格のものが多く、1938年に見積もられた各年次の鉄骨供給量が予定通り納入されたとしても組み立てに用いられる量はその供給量よりも下

⁴³⁹ РГАСПИ, ф. 82, оп. 2, д. 506, л. 3. この党大会の決定とは、『ソ連国民経済発展の第三次五カ年計画。第18回全連邦共産党大会同志 V.モロトフ報告の決議』で決定された「建築物ソヴィエト宮殿の基本的な建設作業を第三次五カ年計画の終わりまでに完了させる」(XVIII съезд Всесоюзной коммунистической партии (б). 10–21 марта 1939 г. Стенографический отчет. М., 1939. С. 663.) という文言を指している。

⁴⁴⁰ РГАСПИ, ф. 82, оп. 2, д. 506, л. 2-3.

⁴⁴¹ Там же.

⁴⁴² РГАСПИ, ф. 82, оп. 2, д. 506, л. 74.

回るため、作業に遅れが生じることになる。特に見積もり供給量に関しては、半年後に提出される報告書で修正された(表 12)。

表 12:1940 年 7 月 18 日付建設局報告書に記された見積もり鉄骨供給量

年	供給量
1939 年	40,000t
1940 年	125,000t
1941 年	125,000t
1942 年	10,000t

※1939 年の供給量が 1938 年末の建設局による作業報告で提示された見積もり量と異なるのは、実際に供給された量のうち製品化されたもの、つまり不合格品とならなかったものを「供給された量」と換算していると考えられる。そのため、見積もっていた量の半分近くが製品化に適していなかったことがわかる。

表の見積もりでは 1938 年の見積もりと各年度の供給量は異なるが、総供給量は 30,000t である。1938 年の見積もり表と比較して、この表からわかるのは 1939 年に供給されなかった(製品化に適さなかった)鉄骨が多く、不合格化を見越して 1940 年の供給量は少なく、その不足分を 1941 年で大幅に補っている点である。「1940 年の第一四半期で予め 30,000t 受け取る予定が 491t しか受け取れなかった」⁴⁴³と報告されている。そのため供給量が後ろ倒しとなり、「基本的な建設作業を完了させる」1942 年にかんがりの量を見積もる必要が生じることになり、建設作業に遅れが生じるのは想像に難くない。この見積もりが提出された約 3 ヶ月後となる 1940 年 10 月 3 日付の『設計資料の説明書』では、この時点で完成している基礎部分と鉄骨構造に関する報告がなされている。基礎部分に関しては「大ホールと高層部、ヴォルホンカ通り(西側)とモスクワ河側(東側)の大ホールを囲む直角部分、正面入口の柱列の用地」⁴⁴⁴の部分が既に終了している。鉄骨に関して「基礎部分の柱をつなぐプレート、及び大ホールの柱用の環状接合部材」と「ヴォルホンカ側(西側)」の鉄骨組み立てが既に始まっており、建物全てに必要な総重量は 396,200t と算出されている⁴⁴⁵。この総重量は同年 7 月及び 1938 年の見積もりで算出された総供給量を約 100,000t 超えており、建設局の見通しが甘い点は否めない。さら

⁴⁴³ ГАРФ, ф. 5446, оп. 82, д. 121, л. 31.

⁴⁴⁴ ГАРФ, ф. 5446, оп. 82, д. 121, л. 49.

⁴⁴⁵ Там же.

に鉄骨の設計は「アカデミー会員の B.ガリョールキンを中心とした政府委員会で審議された」⁴⁴⁶とある。この「政府委員会」はソヴィエト宮殿の構造設計を専門的に審議する委員会を指す。この委員長を務めていたボリス・ガリョールキン(ガラーキン)は、ヴォルホフ水力発電所やドニエプル水力発電所の設計及び建設の際に助言を行っており、ソヴィエト宮殿においても同様の助言が求められていた。必ずしも彼一人のみがこの委員会で権限を持っていたわけではないが、彼を中心に据えたということはその実績と経験が買われたということである。建設局はアメリカ出張で大型橋梁の専門家(L.モイセイフ、R.モジェスキー)に設計に関する助言を仰ぎ、さらには建設局の考える鉄骨供給が予定よりも後ろ倒しとなり、必要な量も変化していた。このことから無駄な鉄骨を増やさないように鉄骨の構造計算の正確さの重要性が認識されていたと考えられる。

1940年の時点では、供給量に遅れが生じており、1941年に国家保安人民委員フセヴォロド・メルクーロフから V.モロトフに送られたソヴィエト宮殿建設現場の調査報告では建設局による資金及び建設に必要な資材の「無駄遣い」が報告されている。この報告書では「技術案の最終版、数にして4度目のものには明らかな欠点、つまり高層部と小ホール設計作業が完了しておらず、また衛生設備の設計案がない」⁴⁴⁷ことが伝えられた。だが何度も指摘されているように、「ソヴィエト宮殿の完成された技術案がなく、建物の個々の部分の度重なる変更のため余計な出費が生じ、建設及び組み立て作業のやり直しが行われている」⁴⁴⁸。さらに組み立て作業に用いられるアンカーボルトや梁部材の多くも使用できなくなり、「586tの構造部分が、錆び付いたまま、今まで建設現場に留め置かれている」⁴⁴⁹。この量は1940年の建設局による作業報告で述べられていた「1940年の第1四半期で受け取った鉄骨」より少し多い量であり、うまく活用されていないことがうかがえる。こうしたことから V.メルクーロフは「ソヴィエト宮殿建設局の欠陥のある運営管理の例は尽きることがない」⁴⁵⁰と報告している。1941年1月1日の時点で組立が完了している鉄骨は135,000tであり、これは「ソヴィエト宮殿の鉄骨構造の総重量の3.5%

⁴⁴⁶ Там же; В.Гарьолькин (Гарькин) 是数学者かつ工学者で、数值解析の有限要素法を補完する重み付き残差法の1つである「ガラーキン法」発案者であり、ソ連における弾性波研究の第一人者である。1936年4月からソヴィエト宮殿の構造設計を専門的に審議する委員会の委員長を務めていた。1942年にはスターリン勲章が授与されている。

⁴⁴⁷ РГАСПИ, ф. 82, оп. 2, д. 506, л. 76.

⁴⁴⁸ РГАСПИ, ф. 82, оп. 2, д. 506, л. 77.

⁴⁴⁹ РГАСПИ, ф. 82, оп. 2, д. 506, л. 78.

⁴⁵⁰ РГАСПИ, ф. 82, оп. 2, д. 506, л. 79.

に過ぎない」⁴⁵¹。結論として「ソヴィエト宮殿建設局の経済活動を国家統制人民委員に調査させるのが得策である」としている。これは、1938年とその翌年のモスクワ地区委員会報告でも提言された点と同じく、建設局側の報告では取り上げられなかった建設局側の咎である。そのため、建設作業の遅延を製品の供給元の技術が要求に追いついていないというだけでなく、建設局側にも問題があったと言える。またメルクーロフ報告から判断すると、1942年に基本的な建設作業を終わらせようとする目標も危うい状況にある。

このように1941年までの施工状況を見てみると、以下のようなことがわかる。まず建築計画で確認してきたような見通しどおりに建設作業が進められていない。これは、建設現場での作業員やエンジニアらの建設技術が未熟であるということよりも、現場間での情報共有や作業を連携及び統括する体制が上手く構築されていないことに起因している。建設局による報告では、多少の問題はあるにせよ、あたかも順調に進められているかのような建設作業の進捗が伝えられていた。だが、外部による調査(モスクワ州委員会報告、国家保安人民委員報告)では建設局の報告では伝えられていない点を取り上げられ、建設局の提示する情報と一致しない部分が明らかにされた。このことは、党大会で決定した「基本的な建設作業を1942年までに完了させる」という目標に建設局が固執するあまり、自らに都合の悪い点は報告しなかったと考えるのが妥当である。2度にわたるアメリカでの出張では、飽くまで高層建築物の建設作業に必要な技術及び手法に関して助言を受けたが、高層建築物の構造に関連する土木技術と用いられる建築材料の構造理解やその利用方法に主眼が置かれたものの、それを実際に運営すべき現場でのトータルなコーディネーションのシステムが欠けていたために引き起こされた結果であったと見なされ得る。

この点に加えて、建設作業に必要な資材、特に鉄骨の供給が不安定であったことも作業が遅れる原因であった。供給量が一定でなかったのは、生産体制と生産技術が建設局の要求する供給量に応えることができなかったことを示している。ソヴィエト宮殿の「建築物の重量に占める[...]30%」の鉄骨供給が不安定となったことで、「建物の60%を占める高層部」の基本的な建設作業がほとんど進まなかったというになる。この供給体制

⁴⁵¹ Там же.

の安定化は単に増産を計画するだけでなく、1938年の供給段階で潜在欠陥が多く見つかったため、生産技術の強化も伴ったものである。だがこうした点はソヴィエト宮殿の建設作業を統括する建設局の権限ではなく、建設局が指摘したように重工業人民委員部の管轄である。また当時ソヴィエト宮殿用の鉄骨製品工場のみならず、ソ連国内の各種工場の一部にはアメリカのみならず欧州から導入した最新設備を備えたものがあつた。しかし五カ年計画のノルマ達成と生産性向上を推進する「スタハノフ運動」によって、最新設備の限界を超えるかたちでそれらの工場は稼働していたとされ、それらの定期点検や補修が疎かにされ、長く耐えうるものは少なかった⁴⁵²。ここから、ソ連国内における最新機器を導入していた工場では、生産される製品の品質管理よりも生産量に注意が向けられていたとするのは想像に難くない。ソヴィエト宮殿用の鉄骨を供給するヴェルフニャヤ・サルダー工場とドニエプルペトロフスク工場も最新機器を取り入れており、おそらく同じ状況であつたことが予想される。述べてきたような製品の潜在欠陥が多く見つかったというのは品質管理を怠つたためであり、それは最新機器を西欧から取り入れた当時のソ連国内の工場が抱える構造的な問題でもあつたのだ。結果として生産体制の不備に直面したソヴィエト宮殿の施工段階において、その技術的な達成可能性に暗雲が立ちこめていったのである。

4-3. 建設作業凍結

1941年4月付の人民委員会最高会議決議においてソヴィエト宮殿建設局は、当時建設中であつたV.I.レーニン記念国立図書館の建設を請負うこととなつた。この決議によれば建設局はその建設に必要な予算の見積りを行い、1944年9月までに完成させると記されている⁴⁵³。この決議が下される以前に既に建設局は国立図書館建設を任されることを把握しており、人民委員会議に対して1943年の完成予定を1944年に変更すること、建設局主導で国立図書館の建設を進めることを要求していた⁴⁵⁴。その国立図書館の建設作業によってソヴィエト宮殿建設そのものの作業の重要性が薄れていく。1941年

⁴⁵² Sutton *Western Technology and Soviet Economic Development 1930 to 1945*, pp. 324-325.

⁴⁵³ ГАРФ, ф. 5446, оп. 25, д. 2287, л. 5.

⁴⁵⁴ ГАРФ, ф. 5446, оп. 25, д. 2287, л. 6, 22.

8 月には造船産業人民委員部付属でチェリャビンスクにある工場「ストロイセミ」の早期建設を図るため、この工場建設を統括する建設人民委員部付属第 22 トラストとソヴィエト宮殿建設局を合併する案が国防人民委員部から提出されている⁴⁵⁵。国立図書館とチェリャビンスクの工場への人員割当を巡るやり取りの中ではソヴィエト宮殿建設の状況が明示されていなかったが、1941 年 8 月 23 日に当時外国貿易人民委員であった A.ミコヤンから I.スターリンに「ソヴィエト宮殿建設中断に関して」という文書が送られた⁴⁵⁶。この文書では、ウラルアルミニウム工場の建設を 1941 年度末までに終了させるため「高度な技術を有する」ソヴィエト宮殿建設に携わった人員を割り当てることが提案され、A.プロコフィエフと主任建築家の B.イオフアンの了承を得ていると記されている。つまり、1941 年 8 月の時点では既にソヴィエト宮殿建設作業は中断され、その時点から各機関がソヴィエト宮殿の建設作業に配分されていた資材や人員の供与を求めている点は興味深い。A.ミコヤンが文書で記しているようにソヴィエト宮殿建設に携わる技術者並びにそこで用いられた資材は建築関連のものとはいえ、既に記してきたように当時の最新のものである。また、戦時体制であったことを考慮すると、武器ないしはそれらの基幹産業への転用が見込まれていたことが、こうした動きからわかる。

一方でソヴィエト宮殿建設局もそれまで培われた経験や資材の転用、その中でも特に設計や意匠の作成に従事した建築家、彫刻家、画家達の斡旋を同じ時期に V.モロトフに対して積極的にはたらきかけている。例えば、1941 年 8 月 12 日付の建設局から V.モロトフ宛ての文書では「ソヴィエト宮殿の建設作業が中断」したので、彼らを「創造的な作業のため適切な部署へ配置すること」を陳情している⁴⁵⁷。また同年 9 月 1 日の文書では「戦争のため建設作業が中断した」と明記され、「戦時中においても建築、絵画、彫刻分野での担当者やアトリエの創作活動は続けられるべき」で、そのことによって「戦争終了後既に着手した建築物の構成に関する作業や技術的な問題の処理にすぐ取り掛かることができる」として、実際の建設作業以外で設計に関する活動継続を求めた⁴⁵⁸。この要求を受けて人民委員会議はソヴィエト宮殿建設作業に携わった主要建築家並びに

⁴⁵⁵ ГАРФ, ф. 5446, оп. 25а, д. 5777, л. 13-14.

⁴⁵⁶ ГАРФ, ф. 5446, оп. 25а, д. 5777, л. 16.

⁴⁵⁷ ГАРФ, ф. 5446, оп. 43, д. 349, л. 9.

⁴⁵⁸ ГАРФ, ф. 5446, оп. 43, д. 349, л. 8.

芸術家達から成るワーキンググループを設置し、そこで建設局が建設作業中に行うべき建築ならびに技術的問題の処理を継続させることを採決した⁴⁵⁹。

この時点で正式にソヴィエト宮殿の建設作業は中断した。だが、中断の際に予め「戦争終了後すぐに」再開することが約束され、設計上の作業は続けられた。そのため、ソヴィエト宮殿に関する活動は実務ではなく主任建築家 V.イオフアンを中心としたワーキンググループの設計活動に集中する。同年 12 月 11 日付けの人民委員会議決議ではソヴィエト宮殿の建築物の基礎部分に関する工事の中断とワーキンググループの活動のみを継続させる点が正式に認められ⁴⁶⁰、約 1 週間後の 1941 年 12 月 19 日に正式なかたちでソヴィエト宮殿建設作業の中断が通達された。こうした凍結に至るまでの一連の経緯を整理すると以下のようなになる(表 13)。

表 13: ソヴィエト宮殿建設作業凍結に至るまでの時系列上の流れ

1939 年 9 月 21 日(建設局長 A.プロコフィエフから建設会議代表 V.モロトフ宛書簡)	同年9月13日付の国民経済最高会議決議で採択された該当年度建設リストの中にソヴィエト宮殿の建設が加えられていない点、ソヴィエト宮殿建設に携わる人員の中から500人を防衛事業に割り当てることが全ソ連邦共産党モスクワ市委員会の決議で採択された点を列挙。 →建設局側は建設作業中止を懸念。
1940 年 7 月 18 日(建設局長 A.プロコフィエフから建設会議代表 V.モロトフ宛書簡)	国民経済最高会議が算出した 1942 年度に予定されるソヴィエト宮殿の骨組みに必要な資材の供給量が引用され、1940 年度四半期の一期目はその算出した一定量の供給をはるかに下回っている点を指摘。こうした状況では「建設局は閉鎖も避けられない」と。 →建設資材の供給が行き届いていないことを示している。
1940 年 8 月 17 日(建設局長 A.プロコフィエフから建設会議代表 V.モロトフ宛報告書)	大ホールの収容数を 21,000 へと増加したプランの承認を建設会議に求める。「1941 年度のソヴィエト宮殿建設計画に関する指示と建設資材調達に関する援助がなければ建設作業の指導と遂行が困難なものになる」。 →この時点で政府当局があまりソヴィエト宮殿に関係を持たなくなっていることがわかる。
1940 年 10 月 7 日(建設局長 A.プロコフィエフから建設	外観装飾に関する記述、大ホールの収容数の増加(21,000)の

⁴⁵⁹ ГАРФ, ф. 5446, оп. 43, д. 349, л. 7.

⁴⁶⁰ ГАРФ, ф. 5446, оп. 43, д. 349, л. 11.

会議代表 V.モロトフ宛建設局決議報告書)	決定、及び 1945 年末までに完成させるという見通し。 →供給資材の減少を受けて、具体的な見通しを立てて建設作業を早めることがねらい。
1941 年 4 月 (人民委員会最高会議決議)	ソヴィエト宮殿建設局が当時建設中であった V.I.レーニン記念国立図書館の建設を請け負う。 →ソヴィエト宮殿に従事する作業員の削減により建設作業に遅れが生じる。
1941 年 8 月 18 日 (建設局長 A.プロコフィエフから国家防衛委員会議長代理 V.モロトフ宛書簡)	造船産業人民委員部管轄のチェリャビンスクにある工場「ストロイセミ」の早期建設のため、建設局がこの工場建設を統括する建設トラストの合併することがほぼ決定事項として記されている。
1941 年 8 月 23 日 (外国貿易人民委員 A.ミコヤンから I.スターリン宛書簡)	「ソヴィエト宮殿建設中断に関して」「ソヴィエト宮殿建設組織の最も合目的な利用とその保存のため」と上記建設トラストとの合併を後押し。 →ソヴィエト宮殿建設作業の中断がこの時点で初めて明記される。
1941 年 9 月 1 日 (建設局長 A.プロコフィエフから建設会議代表 V.モロトフ宛書簡)	「戦争のため建設作業が中断した」との記述。そのため、設計に従事する担当者(主に建築家、画家、彫刻家)が再開後すぐに建設作業に取りかかれるよう何らかの形で設計作業を継続させることを陳情。
1941 年 12 月 19 日 (人民委員会会議採決)	ソヴィエト宮殿の基礎部分建設作業一時的中止(凍結)に伴い、設計を担当していたグループ(ワーキンググループ)は解散せずに設計作業を継続させること(つまり未完成部分を建設作業に応じて設計し直すという作業:建設作業が継続することを示している)、そのほかの活動(資材調達、運搬、建設)は中断と通達される。

ソヴィエト宮殿の設計に従事する建築家や技術者は、1942 年には産業基盤が疎開していたスヴェルドロフスクに移住し工場や住宅建設、この頃既に戦争で荒廃した都市の復興案作成に従事するようになった。一方でソヴィエト宮殿用に確保されていた資材や設備ないしは建設作業の際に使用されていた設備を巡って、他の機関から供給の要請とそれらに関する交渉が進められている。1942 年から 1943 年の間は完全に建設作業が中断していたため建設作業に関する報告はされていないが、設計作業を担当したワーキンググループはソヴィエト宮殿を改善するため設計作業を行っている。

1944年7月にワーキンググループはモスクワへ戻り、建設作業中断以前の建設作業に従事していた技術者や労働者を建設作業へ呼び戻し、建設作業再開に関する報告を行った⁴⁶¹。またこの時点で既にソヴィエト宮殿内部構造を改良した設計プランが仕上がっており、建設会議での承認を B.イオフアンは V.モロトフに対して求めている⁴⁶²。建設作業中断前には建設局長が主導して建設会議ならびにその会議に名を連ねている人民委員への働きかけを行っていたが、建設作業再開にあたっては、設計作業を主導する主任建築家の B.イオフアンが中心となって行われている。また設計案の承認要求に加えて、「建設会議のメンバーが観賞し、彼らにとって都合がつきやすいように」その設計案をクレムリン内で展示することも提案している⁴⁶³。そのため、設計作業やそれに関する指示のみならず、設計案が承認されるよう、主任建築家からいわゆる根回しがこの頃から積極的に行われるようになる。時代状況を勘案すれば、建設事業の最大の関心事は戦争によって荒廃した都市の復興と破壊された産業基盤の回復、それに伴う交通網の再整備である。現に1944年の時点では未だ戦争は終結していなかったが、既に破壊された都市復興に向けた設計案の作成、産業基盤回復のため各地で工場の建設や疎開していた工場の機能を大都市部へ戻すことが行われ始めていた。そのため、ソヴィエト宮殿建設に関する実質的な作業がすぐには再開できないのが現状であった。

4-4. 建設作業復興の萌し

主任建築家 B.イオフアンを中心としたワーキンググループは、1946年4月に、1941年までの建設作業と進捗状況の報告を I.スターリン宛に提出した⁴⁶⁴。この報告書の半分は1941年までに完成している部分を踏まえ、今後改良すべき点が挙げられ、それに基づいた新たな設計案作成が提案されている。この改良点の中で著しく変更されているのは建築物のファサード並びに外観である。

⁴⁶¹ ГАРФ, ф. 5446, оп. 46, д. 3395, л. 47.

⁴⁶² ГАРФ, ф. 5446, оп. 46, д. 3395, л. 60.

⁴⁶³ Там же.

⁴⁶⁴ ГАРФ, ф. 5446, оп. 49, д. 3777, л. 1-11.

その要点が3層の円筒から成るファサードの構成で、この1946年提出の設計案では、「より威厳あるものとするために2層に変更し、ポルチコを高くする」⁴⁶⁵としている(図224)。いずれにしても1937年の最終案では正面入口から頂部のレーニン像まで長細い三角柱状に均斉がとれているのに対して、1946年の案では下層部の高さを上げることで正面入口部分が強調され、建築物全体が裾広がりピラミッド状に見える。正面入口のポルチコが高くなることで遠くからの全体像よりもソヴィエト宮殿を訪れる来訪者の視点から「威厳あるもの」へと意匠を変化させている。この点を強調しているのは、「正面入口に同志スターリンの治世と結びついたモニュメンタルな塔門を6つ配置し」、「正面入口両翼にK.マルクスとF.エンゲルスの彫刻を配置する」⁴⁶⁶変更である。1937年の最終案とその後の1940年の改訂案では、正面入口部分にはV.レーニンの発言、両翼にはV.レーニンとI.スターリンの発言が配置することになっていた。それ以前の案と新しい案を比較すると、前者はソヴィエト体制の転換期を象徴するような指導者の発言を刻むことで、国家の歩みを振り返る意匠である。他方、後者はそういった発言の銘文を取り入れず、この案が作成された時期の「同志スターリンの治世」を象徴化した塔門によって入口部分が視覚的に強調され、意匠の力点が「同志スターリンの治世」に絞られている。この点で挙げられているのが、設計者の独ソ戦での体験である。1942年の時点で主任建築家B.イオフアンは当時のソヴィエト人民委員会議議長代理を務めていたロザーリヤ・ゼムリャーチカに対して次のように記している：

私はソヴィエト宮殿の構成に関するいくつかの問題を懸命に考えてみました。そのほとんどが1941年の(4月に：著者註)建設会議で課題となったものです。そして同様に大祖国戦争(独ソ戦を指す：著者註)における野蛮なファシストとの我が国の英雄的な戦いぶりを反映させることが主なものです。こうした考えをソヴィエト宮殿の建築、絵画、彫刻に具体化できないものかと私は始終考えを巡らせています。同志スターリンによって英雄的気質を鼓舞された人民の強力な戦いぶりをなんとかして反映させたいのです。このような方針で我々のワーキンググループは創造的な探求に熱を入れており、おそらく、その成果がないわけではないと思います⁴⁶⁷。

⁴⁶⁵ ГАРФ, ф. 5446, оп. 49, д. 3777, л. 7. なお、このシリンダーの数は資料の通りに記述したが、透視図では3層に見える。これは、一番下の塔門のついている大ホール上部はカウントしていないためと思われる。37年案では透視図では4層に見えるのに5層と言う記述もあり、これもカウントの仕方が違うと思われる。

⁴⁶⁶ Там же.

⁴⁶⁷ ГАРФ, ф. 5446, оп. 43, д. 349, л. 85.

この点に加えて、正面入口の上部にあたるシリンダー部にも変更点が認められ、シリンダー部の下にあたる直方体各層の切れ目となる部分の対角状に配置していた塔門を無くすことで、訪問者の視線を正面入口に集中させている。こうした手法は、これだけにとどまらない。建築物のシリンダー部下層ファサードには「内戦、社会主義建設、大祖国戦争の英雄を寓話化した巨大な16の彫刻を帯状に配置」し、最終案で見込んでいたシリンダー部上部に配置を予定していた32の塔門は16に減らすとしている⁴⁶⁸。頂部に配置される「レーニン像とソヴィエト宮殿の建築物の組み合わせをよりよくさせる」⁴⁶⁹ことがねらいである。レーニン像の高さが1940年の改訂案で縮小され、正面入口の高さが増したことを考慮すると、建築物全体が最終案と比べて小さくなるが、正面入口から見上げた場合、頂部と正面入口の距離が縮まりかつシリンダー部の装飾が少なく、さらに正面入口を形成する1階部分が高くなり、建築物を見上げる訪問者の視界を覆うようになる。そのため、シリンダー部の下にあたる直方体部分に強調点が置かれ、建築物としての重厚感あるいは安定感を増す表現にシフトした。

この1946年提出の設計案では、建築物の内部構成、特に施設の配置に関しても幾つかの変更が見られる。利便性向上のため、建築物の高層部に配置していたソヴィエト最高会議用の執務室を小ホールと同じ階層へ移し、その高層部には大祖国戦争に関連したメモリアルホールが配置される。2,500人収容の政府レセプションホール、このホールとセレモニーホール、大使や外交団の接待用ホールは正面入口付近に設けられた。正面入口の規模を大きくするために1階部に多くの施設が集中しているが、多くの施設を配置すると各々に分断され、空間の一体性が損なわれるおそれがある。この点を解消するために、「大ホールと小ホール周囲にある各室はアンフィラード(列状で部屋が続く構成: 著者註)で区切り」⁴⁷⁰広大な内部空間のパースペクティブが確保される。単に1階部の規模を大きくしたのみならず、内部空間においてもその規模を反映させるような見せ方に趣向が凝らされたのである。また戦時中に資材として撤収された鉄鋼の代わりに鉄筋コンクリートを用いるとされた。1946年に提出された設計案の主な特徴を最終設計案と比較したものをまとめると次のような表になる(表14)。

⁴⁶⁸ ГАРФ, ф. 5446, оп. 49, д. 3777, л. 7.

⁴⁶⁹ Там же.

⁴⁷⁰ ГАРФ, ф. 5446, оп. 49, д. 3777, л. 6.

表 14: 1946 年提出のソヴィエト宮殿新設計案

		1937 年承認最終設計案	1946 年提出新設計案
外観	ファサード全体	3 層から成る円筒状のファサード。	2 層から成る円筒状のファサード。層を減らすかわりに下層部の高さを上げ、正面入口のポルチコを高くする。
	正面入口	正面入口には V.レーニンの発言、両翼には V.レーニンと I.スターリンの発言が配置。	「正面入口に同志スターリンの治世と結びついたモニュメンタルな塔門を六つ配置し」、「正面入口両翼に K.マルクスと F.エンゲルスの彫刻」を配置。
	ファサードの彫刻	32 の塔門と彫刻群。	「内戦、社会主義建設、大祖国戦争の英雄を寓話化した巨大な彫刻を 16 体帯状に配置」。
内部構成	高層部	ソ連最高会議用執務室。	メモリアルホール(ソ連最高会議用執務室は小ホールと同じ階層(地下 1 階部)へ配置)。
	正面入口付近		2,500 人収容のレセプションホール。これに伴い、大小ホール周囲にある各室をアンフィラード(列状で部屋が続く構成)で区切り、入口付近のパースペクティブを確保。

報告書の最後に今後の活動手順が記され、それには「1946 年に、期限を 1 年までとしたアメリカへの出張」が含まれていた。この出張目的は 1935-36 年のものと同じく「最新の建設技術習得と助言を得るためであり、また設備のサンプルを受け取るため」とされている⁴⁷¹。こうしたことが再び必要になったのは、おそらく、建設作業中断まで作業していた技術者が戦争によって減少したこと、また彼らが戦時中に他の建設作業に従事していたためそのノウハウを再確認し、更新する必要が生じたことなどが推測できる。この頃からソヴィエト建築界が積極的にアメリカの建築界と交流を深め始め、アメリカ側にもソヴィエト建築界と交流を図る協会が設立されたことなどが、この出張を企画する後押しになったと考えられる⁴⁷²。

⁴⁷¹ ГАРФ, ф. 5446, оп. 49, д. 3777, л. 2.

⁴⁷² 1943 年頃からソヴィエト建築界では、ソヴィエト建築家同盟と全連邦対外文化協会を中心にアメリカ建築界から建材の規格化、簡易住宅建設に関する情報の提供を受けており、一方でアメリカ建築界も積極的にソヴィエト建築の現状を紹介するためソ連側から資料の提供を受けている。詳細は Yuya Suzuki, “The Transformation of the Soviet Architectural World in the Totalitarian Era (1930-1950) through Contact with American Architecture,” in *Tradition, Translation, Transformation* (Tokyo University of Foreign Studies Press, Tokyo, 2015), P. 59-69. を参照。

上記のように、1946年の報告書で提示された設計案は戦争の体験を大々的に反映させながらも、その指導者である I.スターリンの治世がモチーフの中心となっている。社会主義の建設といった 1930 年代のソ連における主要なテーマも彫刻や内装の壁画などで反映されてはいるが、訪問者の目に最初に飛び込んでくるのは指導者スターリンの発言を反映させた意匠である。3 章で見てきたように、内部構成の設備に関してはアメリカの最新技術に頼らざるを得ない状況には変わりがない。

しかし建設作業再開は再び難航する。1946年10月29日付 B.イオフアンからラヴレンチー・ベリヤ宛の書簡では、同年に I.スターリンが出した指示について言及がなされている⁴⁷³。その指示とは、ソヴィエト宮殿全体の高さを減らすことで、この方針に従って、「建築物全体を416m から300m まで減らし、レーニン像も高さ50m まで低くする」ようにし、「大ホールの収容数を12,000まで縮小し」、「小ホールの収容数も6,000から5,000まで縮小し」、「建築物全体の容積も7,800,000立方メートルから4,800,000立方メートルまで縮小させる」となった⁴⁷⁴。このような規模縮小により「完成までの時間が短縮でき、ソヴィエト宮殿の建築芸術的処理を改善し、モスクワ中心部の周囲の建築物とのつながりをより良いものにした」⁴⁷⁵。

こうした指示を基に 1946 年の設計案報告書に変更を加えた上で、1947 年には「ソヴィエト宮殿建設に関する状況とソヴィエト宮殿建造に関する優先的作業に関する」報告書が提出された。この報告書では上記の変更点をそれ以前の 1939-40 年における設計案と比較させて、その違いを際立たせている。しかし、当時の建設状況を示す重要な情報が、この報告書以前に V.モロトフ宛に送られた A.プロコフィエフの書簡の中にある。

この書簡では建設局の従事すべき作業が挙げられているが、1945-47年のソヴィエト宮殿建設作業以外の建築物に関する作業が割り当てられ、ソヴィエト宮殿の建設自体は未だ「凍結状態」にあることが窺われる⁴⁷⁶。であれば、B.イオフアンが疎開先からモスクワに戻り作成済みの設計案を積極的に報告していたのは、ソヴィエト宮殿建設そのものの「凍結状態」を解くことにあったと考えられる。ソヴィエト宮殿建設作業以外の作業と

⁴⁷³ ГАРФ, ф. 5446, оп. 51, д. 3785, л. 58-61.

⁴⁷⁴ ГАРФ, ф. 5446, оп. 51, д. 3785, л. 59.

⁴⁷⁵ ГАРФ, ф. 5446, оп. 51, д. 3785, л. 61.

⁴⁷⁶ ГАРФ, ф. 5446, оп. 51, д. 3785, л. 50.

は「1948年末から受け持つ32階建てと26階建ての高層建築物(後に言及するモスクワ国立大学新館とザリヤージェ通りの政庁ビル:著者註)の設計」、「その高層建築物の完成」、「この高層建築物の資金を工面し、その作業に付随する準備」、「クレムリンを含む政府の特殊建築物に関する作業、国立図書館の完成、ホテル・ソヴィエトスキイの建設、ヴァフタンゴフ劇場と組合会館の修復」⁴⁷⁷である。この状況から見てソヴィエト宮殿の建設作業を同時に行うのはほぼ困難で、「国家計画委員会(ゴスプラン)による1948年度のソヴィエト宮殿建設に関する予算配分は」この時点で「見込まれていない」⁴⁷⁸。そのため、未だ完成が見込めないソヴィエト宮殿の規模を縮小して、それ以外の作業に建設局が移行することをI.スターリンは示唆していたのかもしれない。こうした推測は、このA.プロコフィエフ書簡の後に閣僚会議へ提出された1947年の「ソヴィエト宮殿建設局の状況に関する」報告書によっても裏書きされる。

この報告書では建設局を管轄していたソヴィエト人民委員会議が閣僚会議に変更されたのに伴い建設局の所属が変更され、それに関連してソヴィエト宮殿ならびに建設局に関する新たな決議が閣僚会議で採択された。ここでも「ソヴィエト宮殿建設局はソヴィエト宮殿の設計と建設、並びに閣僚会議の特別決議に沿った高層建築群やその他の建築物の設計と建設も実行する」⁴⁷⁹ことが求められている。この決議に従えば、建設局はソヴィエト宮殿に関する作業に集中できないばかりか、予算に関しても閣僚会議が割り当てた予算内でソヴィエト宮殿の建設作業を進めなければならず、ソヴィエト宮殿建設作業再開に向けた状況は以前に比べて厳しくなっていた。

ここで挙げられている「閣僚会議の特別決議に従った高層建築物」とはモスクワ国立大学新館のことで、この建築物の設計にB.イオファンを中心としたソヴィエト宮殿のワーキンググループが携わった。しかし、1948年の7月2日付B.イオファンからL.ベリヤ宛書簡で記されているのは、1947年の人民委員会議宛報告書で規定されていた期限(1948年末)よりも早くモスクワ国立大学新館設計案を提出する期限には設計案が間に

⁴⁷⁷ Там же.

⁴⁷⁸ Там же.

⁴⁷⁹ ГАРФ, ф. 5446, оп. 50, д. 3848, л. 38.

合わないこと、そのため設計作業が他の建築家(L.ルードネフ)に委託され、B.イオフアンが設計作業から外されたことである⁴⁸⁰。

この5日後の1948年7月7日に再びB.イオフアンはL.ベリヤに宛てて、同年7月3日付閣僚会議決議にてモスクワ国立大学の設計から自らが外されたことに異を唱え、この建築物に関する「設計報告書を自らの義務と考え、送る」⁴⁸¹としている。さらに、「10月1日までに設計案を提出するから擁護して欲しい」、つまりもう一度設計作業に携わることをB.イオフアンは懇願している。本来の業務であるソヴィエト宮殿の建設業務が再開していないにもかかわらず、B.イオフアンがモスクワ国立大学新館の設計にこだわるのはモスクワ国立大学新館の建設という「ヨシフ・ヴィサリオノヴィチ(スターリンの名前と父称:著者註)のアイデアを実現することに参加できるのは偉大なこと」⁴⁸²と彼が考えていたからだ。このようなやり取りから、I.スターリンを中心とした政府首脳部がソヴィエト宮殿建設よりも「ヨシフ・ヴィサリオノヴィチのアイデア」であるモスクワ国立大学新館の設計と建設に重きを置いており、またその任務を担ったB.イオフアンもその点を理解していることがわかる。

また同日付(1948年7月7日)のB.イオフアンからV.モロトフ宛の書簡ではモスクワ国立大学新館の設計を外されたことに対する自らの沈痛な心境が語られている。この書簡では建設局が担当するソヴィエト宮殿以外の設計も難航し、そのほとんどが承認されず他の建築家ないしは設計グループに委ねられた経緯も記されている。しかし、「完全にソヴィエト宮殿の設計に戻り、その設計で同じ過ちを犯さないように、担当した他の設計案での失敗を知る必要がある」⁴⁸³として担当した設計から外された理由を問うている。またソヴィエト宮殿設計に関する規模縮小に関しても直接的な書面での指示はなく、L.ベリヤからの間接的な通達であり、「8年もの間、建設会議によってワーキングプランは目を通されておらず、建設会議からの反応なしで創造的な探求を深めていくことは難しく、「ソヴィエト宮殿の建設作業が行われていないため、現段階で建設局はおそらく関心を持っていない」⁴⁸⁴とB.イオフアンは危惧する。

⁴⁸⁰ ГАРФ, ф. 5446, оп. 51, д. 3785, л. 42.

⁴⁸¹ ГАРФ, ф. 5446, оп. 51, д. 3785, л. 44.

⁴⁸² ГАРФ, ф. 5446, оп. 51, д. 3785, л. 42.

⁴⁸³ ГАРФ, ф. 5446, оп. 51, д. 3785, л. 44.

⁴⁸⁴ Там же.

こうした中で1948年12月31日に「建築物の高さと規模を縮小したソヴィエト宮殿設計案に関する説明書」が提出されている(表15)。

表15: 1946年の新設計案と1948年提出の報告書に付された設計案の変更点の比較

	1946年提出の設計案 (作成は1942-45年)	1947-48年作成設計案(1946年にI.スターリンがL.ベリヤに宛てた指示を基に作成したもの)
建築物の高さ	416m	320m
レーニン像の高さ	80m	60-65m
大ホール収容数	21,000	13,500
小ホール収容数	5,500	4,250
建築物全体の容積	7,800,000m ³	5,315,000m ³

既に記したような建築物の高さや規模の縮小に関する具体的な数値と変更点、それ以外にこの説明書が提出された時点での設計およびそれに基づいた建設作業の方向性が記されている。設計および建設の方向性は1938年までの最終設計案に基づくものだが、この点に加えて「1941年4月にソヴィエト宮殿の建設技術設計案を検証した際の政府関係者達による口頭での指示」に基づき、「正面入口を荘厳なものに仕上げること、そして建築物ファサードをより簡潔なものに仕上げるという手法は、ソヴィエト宮殿の規模を縮小したものにも用いられなければならない⁴⁸⁵」としている。こうした方向性は1946年4月にI.スターリン宛に提出された作業報告書で述べられていた改善点を基にしており、具体的には正面入口やその軒の部分などにモニュメンタルな彫刻を刻むことが盛り込まれた。一方でI.スターリンに対する個人崇拜の傾向を反映させた箇所が随所に見られる。例えば、1946年の報告書では記されていなかった小ホールは「スターリン憲法と結びつき」、「幹部会の場所にはI.スターリンの彫刻が配置される⁴⁸⁶」。また建築物正面入口は「同志スターリンの誓い」と結びつき、この「誓い」を1946年の報告書で提案された正面入口上にある「同志スターリンの治世と結びついた6つの塔門」の場所に配置するとしている⁴⁸⁷。さらに1941年の段階で新たにソヴィエト宮殿に含まれる施設として加えられたレセプションホールは、「同志I.スターリンがK.ヴォロシーロフにソヴィエト

⁴⁸⁵ ГАРФ, ф. 5446, оп. 81, д. 3400, л. 21-22.

⁴⁸⁶ ГАРФ, ф. 5446, оп. 81, д. 3400, л. 14.

⁴⁸⁷ ГАРФ, ф. 5446, оп. 81, д. 3400, л. 17.

宮殿建設の指導をする任務を与えたことに応じて」⁴⁸⁸設計されたことが明記されている。実際にこの頃からソヴィエト宮殿建設局がソヴィエト宮殿建設以外に担っていた事業の予算配分や建設資材の調達、ならびに建設作業に付随する様々な事柄の最終判断は閣僚会議の代表である I.スターリンの裁可によって決定されている。もちろんこのことは形式上のものであって指導者 I.スターリン自身の判断によるものではないが、指導者の影響力が少なからず作用していることを示している。

4-5. ソヴィエト宮殿の消滅

「建築物の高さと規模を縮小したソヴィエト宮殿設計案に関する説明書」から約2年経った1950年2月に閣僚会議副議長となった L.ベリヤ宛にソヴィエト宮殿主任建築家 B.イオフアンと V.ゲリフレイフからソヴィエト宮殿に関連した提言がなされた。この提言は、直接的には、ソヴィエト宮殿建設局が設計を請け負うとされていたザリヤージェ通り(赤の広場に隣接し、モスクワ河沿いの通り: 著者註)の政庁ビルに関する閣僚会議決議と結びつけられ、ソヴィエト宮殿そのものに関する提言ではない。この政庁ビルは高層建築物として計画され、「プロポーションとシルエットはこの都市と来るべきソヴィエト宮殿のシルエットという歴史的に見て最も複雑な建築と結びついていなければならない」⁴⁸⁹ものであった。そのため、ソヴィエト宮殿とザリヤージェ通りの政庁ビルの外観が比較されている(図225、226)。この比較は「互いに近い場所に配置されるため」で、そのため「レーニン像を配置したソヴィエト宮殿は首都のシルエットを構造的に作り上げなければならず、特に重要なのはザリヤージェ通りの政庁ビルの高さとシルエットがソヴィエト宮殿の高さとそのシルエットと結びつくことである」⁴⁹⁰からだ。規模を縮小するかたちで1947-48年に提案されたソヴィエト宮殿の設計案とザリヤージェ通りの政庁ビルの高さ(ソヴィエト宮殿は320m、ザリヤージェ通りの政庁ビルは280m)、そしてクレムリン側(北東)から見たそれぞれの建築物の外観がこの報告書では提示され、「両建築物のシルエットと高さは、互いに競合することになり、ソヴィエト宮殿の規模を縮小した場合、ほぼ同じものとして受け

⁴⁸⁸ ГАРФ, ф. 5446, оп. 81, д. 3400, л. 21.

⁴⁸⁹ ГАРФ, ф. 5446, оп. 81, д. 3400, л. 29.

⁴⁹⁰ Там же.

止められてしまう」⁴⁹¹という懸念を B.イオフアンと V.ゲリフレイフは表明している。「この場合、モスクワ東部の景観からして政庁ビルの頂部は(ソヴィエト宮殿の)レーニン像の部分に設計されたものと同じで、部分的もしくは全体的にレーニン像を隠すことになる」ため、「政庁ビルの高さとシルエットをソヴィエト宮殿のそれに調整する必要がある」⁴⁹²と提言を行った。

この提言に基づき、建設局は 1951 年 8 月 28 日に閣僚会議幹部会に対して 1950-51 年に設計部門によるソヴィエト宮殿設計案に関する報告が行われた(表 16)。

表 16: 1951 年に提出された報告書で触れられている設計案の変更点

	1947-48 年作成設計案	1951 年閣僚会議幹部会に提出した設計案
建築物の高さ	320m	400m
大ホール収容数	13,500	21,000
小ホール収容数	4,250	6,000
建築物全体の容積	5,315,000m ³	6,000,000m ³

1947-48 年に考案された設計案はそれ以前の設計案に比べて大幅に規模を縮小したもののだが、1950-51 年作成の設計案では「大戦前の基本的な数値が保たれている、つまり高さは 400m、大ホールの収容数は 21,000、小ホールの収容数は 6,000」⁴⁹³とされた。再び規模を大戦前の設計案のものに戻したのは「ソヴィエト宮殿の高さを縮小させることは都市のシルエットの中で優位に立つという意義を損ねかねない」⁴⁹⁴からである。この報告書では設計案の図版が添えられず、視覚的にその変更点を確認するのは難しいが、1947-48 年版のものとはなく大戦前の最終設計案改訂版(1939-40 年版)との比較で変更点が詳細に説明されている。

正面入口部分は 1947-48 年版と同じくモニュメンタルな趣を反映させるため「宮殿の正面入口を含む直方体の層の部分で大戦前の設計案で 28m だったものを 36m の高さまで増す」⁴⁹⁵ことになり、3 層からなる層に彫刻を配置することで「イデオロギー的に充実し

⁴⁹¹ ГАРФ, ф. 5446, оп. 81, д. 3400, л. 29 об.

⁴⁹² Там же.

⁴⁹³ ГАРФ, ф. 5446, оп. 81, д. 3400, л. 98.

⁴⁹⁴ Там же.

⁴⁹⁵ ГАРФ, ф. 5446, оп. 81, д. 3400, л. 96.

たものとなり」、頂部の「レーニン像までの緩やかな移行がなされる」⁴⁹⁶ことが狙いであった。この「移行」というのは、正面入口からソヴィエト宮殿を見上げた場合に視点が後方から前方に向かうかたちで、ソヴィエト政府の創設者レーニンを起点にソ連の国章とソ連構成共和国の国章が視界に入り、前面にはその国家を築き上げた民衆の歴史、そして現段階での統治者 I.スターリンの発言が続くという構成になっている。正面入口の高さ自体に関する記述はないが、1941-46 年度版と 1946-47 年度版と同じであるとすれば、直方体部分の層の高さが増したことでより安定感のあるものとなる。

全体的には高さを大戦前の設計案に戻したことで、建設計画中であったザリャージェ通りの政庁ビルとの差異化を図り、モスクワの中でも高さで突出するようになった。だが上記したように低層部の高さが増したことで正面入口から見上げた場合、頂部のレーニン像が遮られるあるいは直方体の層に配置された彫刻のほうが訪問者の視覚に入りやすくなる。

各施設の配置も多少異なっている。ソ連最高会議幹部会ホールとそれに付随する各種施設は正面入口のある棟に配置され、低層部の1階部の上、つまり3層で構成される2層目に配置される。このホールは大戦前の設計案ではシリンダー状部分の上層部、1947-48年の設計案では小ホールと同じ階層に配置されていた。正面入口の棟に実用性の高いホールが集められたと考えられる。1947-48年の設計案ではソ連最高会議幹部会ホールのあった場所にメモリアルホールが配置されることになっていたが、1950-51年の設計案ではこれに加えてメモリアルホールの下階層に大ホールを照らすための照明を設置した灯室を配置することが記されている。またソヴィエト宮殿全体の容積を、大戦前の設計案では約 75,000 m³から 60,000 m³に縮小することに伴い、大ホールの高さも縮小される⁴⁹⁷。この点と関連して建築物全体の奥行きと幅が減少するため、「アホートヌイ・リヤードから宮殿前広場までの並木道の遊歩道を計画している」⁴⁹⁸。ただし、こうした変更点は「1933-38年までの建設会議の指示と1941年4月の設計案審議の際に政府メンバーから出た口頭の指示」⁴⁹⁹を念頭に置いて設計したと説明されている。そのた

⁴⁹⁶ ГАРФ, ф. 5446, оп. 81, д. 3400, л. 95.

⁴⁹⁷ ГАРФ, ф. 5446, оп. 81, д. 3400, л. 93-94.

⁴⁹⁸ ГАРФ, ф. 5446, оп. 81, д. 3400, л. 93.

⁴⁹⁹ ГАРФ, ф. 5446, оп. 81, д. 3400, л. 92.

め、上記してきたような変更(規模の縮小)によって、ソヴィエト宮殿の建設自体の費用が大幅に削減されること、完成までの期間が早まるという利点が得られると報告書は締めくくる。

この1951年の報告書で興味深いのは、ソヴィエト宮殿とザリヤージェ通りの政庁ビルの比較で用いられているソヴィエト宮殿のモデルがI.スターリンの指示に立脚していないことである。建設局は閣僚会議の附属機関であるが、権力者であり閣僚会議議長のI.スターリンが出したソヴィエト宮殿の規模縮小という直接の指示には、閣僚会議経由ではないとしても、断れない立場にあった。しかし、このI.スターリンの指示には、規模縮小に伴う技術プラン作成指示が伴っていなかった。1950年4月に主任建築家(B.イオフアンとV.ゲリフレイフ)がL.ベリヤ宛てに規模縮小に伴う設計の際に必要な技術プラン作成に関する指示を求めている。そこでは「高さを400-416mにした3つの設計案と高さを320-340mにした2つの設計案」を送り、建設会議の指示に基づき新たに作成した設計案とI.スターリンの指示により規模縮小に基づいた設計案の比較が報告された。高さ400-416mにした3つの設計案の中で最も良いとする設計案に対しては「ソヴィエト宮殿のレーニン像が優位に立つという状況を保ちつつ、政庁ビルの高さを導いている」⁵⁰⁰と記しているのに対して、高さ320-340mにした2つの設計案に対してはそうした利点のようなコメントは記されていない。こうしたことからI.スターリンの指示とはいえ、政庁ビルの高さがソヴィエト宮殿とほぼ変わらず、ソヴィエト宮殿の「社会主義の首都にそびえる」という意義そのものが薄れてしまうことにB.イオフアンとV.ゲリフレイフはよい印象を抱いていないことがわかる。

建設会議からの作業再開に関する承認はこの報告書の後に与えられることはなかった。1952年1月にB.イオフアンは再び閣僚会議議長I.スターリンに直訴状を送っている。この書簡ではソヴィエト宮殿の作業を取り巻く状況が芳しくなく、建設局長から設計作業に関わる人員を削減する通達が出されることが記されていた⁵⁰¹。またこの人員削減は「いつ、どこにそしてどのようにソヴィエト宮殿が建設されるかわからない」⁵⁰²という建設局長の発言を基にしたものとB.イオフアンは説明している。建設局は設計と建設作業を

⁵⁰⁰ ГАРФ, ф. 5446, оп. 81, д. 3400, л. 31.

⁵⁰¹ ГАРФ, ф. 5446, оп. 86, д. 3291, л. 49.

⁵⁰² Там же.

統轄する機関で、それらに関連した必要経費の算出、資材調達または斡旋、建設会議の指示による設計案の作成等を上位機関である建設会議に提出し判断を仰ぐことが業務であった。既に決定した建設会議の指示があり、その指示に基づいて判断を下す機関が「いつ、どこにそしてどのようにソヴィエト宮殿が建設されるかわからない」という見解は、ソヴィエト宮殿の建設についてはプロジェクトそのものが既に暗礁に乗り上げていることを示唆している。この点を裏付けるように 1952 年 1 月 12 日に閣僚会議決議に応じた五カ年計画(1951-55 年)におけるソヴィエト宮殿建設局に対する資本投資額は、建設局が請け負っていたモスクワ国立大学新館とザリヤージェ通りの政庁ビルのみを対象にしたものであり、ソヴィエト宮殿はその投資対象に含まれていない⁵⁰³。また 1951 年にはモスクワ市の拡張と交通網の整備を狙いとした長期にわたる都市計画のマスタープラン、いわゆる「ゲンプラン 1951-60」が発表されており、その中で上記 2 つの建築物完成後にソヴィエト宮殿建設が着手されるという決定が採択された⁵⁰⁴。こうしたことから、ソヴィエト宮殿は都市計画におけるドミナントとしての自らの意義を失いつつあった。

またこの段階においてもなお、建設会議からの指示は出されていない。同年 9 月 30 日付 I.スターリンに宛てられた建築家 N.ルポフの書簡ではこの後のソヴィエト宮殿建設に関する展開を示唆するような記載がある。この建築家はモスクワ国立大学新館が完成した後、「曇りの時に建築物の上部が雲に隠れてしまい」、「あたかも上部が切れているかのようになっている」ことを気に留めていると伝えている⁵⁰⁵。そして、「こうした現象は尖塔のかたちで仕上がった建築物にとっては耐え得ること」であるが、「既に建立された高層建築物よりも高く設計されたソヴィエト宮殿の場合ではどうか、また何が彫刻的な意匠となるか」と問っている。完成した高層建築物の状況を鑑み、ソヴィエト宮殿の象徴でもある「同志レーニンの像が部分的にしか見えない状況」によって、「かなり高い位置にある 100m を誇るレーニン像が歪んだかたちで見える」ことを N.ルポフは危惧している。そのため、「ソヴィエト宮殿の構造的解決法を変える、例えば建築物は(レーニン像を外して: 著者註)建築的な要素だけにして、レーニン像を建築物の前の低い位置に設置する

⁵⁰³ ГАРФ, ф. 5446, оп. 86, д. 3291, л. 185.

⁵⁰⁴ Там же.

⁵⁰⁵ ГАРФ, ф. 5446, оп. 86, д. 3291, л. 138.

などの必要がある」⁵⁰⁶と彼は提言する。ここで述べられているソヴィエト宮殿を「建築的要素だけにする」ということは、「頂部にレーニン像を頂き、建築物はその台座となること」という競技設計後に通達された最終設計案の基本コンセプトを覆すものである。この提言に対して閣僚会議副議長となっていた L.ベリヤはソヴィエト宮殿がレーニン像の台座であるという基本構造を認識していた。その上で、「こうした決断は、思うに、根本的に変えなければならず、あなたのみがそうすることができるため、こうしてお知らせするに至りました」⁵⁰⁷と I.スターリンに建築家 N.ルポフの提言を後押ししている。このやりとりでわかることは、L.ベリヤが閣僚会議にこの提言を付託せず、直接 I.スターリンに知らせていること、ソヴィエト宮殿に関する実質的な審議機関である建設会議を通していないことである。第2次世界大戦後、ソヴィエト宮殿の建設作業再開を巡る建設局ならびに主任建築家からスターリンに宛てられた請願は、何度も行われてきた。閣僚会議副議長かつ I.スターリンの側近であった L.ベリヤは I.スターリンにそうした請願を報告していない。だが、ここでは L.ベリヤは「レーニン像を建築物の前に設置する」という提案を、そうした数多く提出された提言ないしは請願の中でも I.スターリンのみが決定できる事項、ソヴィエト宮殿の上位機関である建設会議を超えた権限を行使できる案件として処理している。「レーニン像をソヴィエト宮殿の最上部に頂く」という指示は元来 I.スターリン個人が発したものでなかった。1933年5月11日の人民委員会議(閣僚会議の前身)幹部会決議によって採択されたものである。だが、その権限を超えて「建設の指導を委ねられた」I.スターリンのみがソヴィエト宮殿の基本構造の変更許可を下すことができるということを、L.ベリヤの発言は物語っている。

では、なぜ高層建築群(ザリヤージェ通りの政庁ビルとモスクワ国立大学新館)の設計と建設作業を担当したソヴィエト宮殿建設局からこういった提言がなされなかったのか。既に指摘してきたように、建設局は上位機関である建設会議での決議やそこでの議論を踏まえてソヴィエト宮殿の設計を行ってきた。既に決定した枠組みの中でのみ意匠の変更が行われ、全貌を著しく変えるような意匠は提案されておらず、建設局、特に主任建築家によって意匠を考案する権限は大幅に制限され、建設局ないしは主任建築家か

⁵⁰⁶ ГАРФ, ф. 5446, оп. 86, д. 3291, л. 137.

⁵⁰⁷ Там же.

らソヴィエト宮殿の基本路線の大幅な変更に関する提言はほぼ不可能であった。大幅な変更を促すような提言は、外部要因、つまり建設会議と建設局という枠組みから外れたところからでしか生じ得なかった。そのためある建築家(N.ルポフ)からの提言は、一般からの意見というかたちを借りたソヴィエト宮殿の大々的な変更指示であり、もしくはその変更ができなければ中止するという閣僚会議からの通達であった可能性も否定できない。

この提言にあった「高い位置にあるレーニン像が歪んだかたちに見える」という点は、建国者の姿だけでなく、その後継者である I.スターリン指導の下で建設されている社会そのものが歪んでいることを意味し、この土台として下層に連なる「同志スターリンの治世」を彩った装飾が意味を失う。この点は、1939年のソヴィエト建築家同盟理事会第5回総会で批難された「角度によって300m程の高さに位置するレーニン像はひどく歪んだかたちになる」⁵⁰⁸という点に対処する必要があると、主任建築家 B.イオフアの1939年の報告書でも触れられ、必ずしも新たに噴出した問題点ではなかった。「レーニン像の歪み」という点は、主任建築家が留意していたが、従来は特に問題とならなかった。しかしそのことを N.ルポフによる指摘は改めて衝き、さらにソヴィエト宮殿の源泉ともなるレーニン像に触れていたため、それを「指導」する立場にある I.スターリンがソヴィエト宮殿の意匠に対して介入する余地を与えることになったと言えるかもしれない。

「レーニン像を建築物の前の低い位置に設置する」という点は、建設作業期間の短縮が狙いであった可能性もある。ザリヤージェ通りの政庁ビル(当初の完成予定は1954年)とモスクワ国立大学新館(当初の完成予定は1952年)が完成した後にソヴィエト宮殿の建設が再開すると仮定した場合、1955年からとなり「ゲンブラン 1951-1960」の枠組みでソヴィエト宮殿の完成が見込まれていたのであれば、およそ5年間で全てを完成させなければならない。1941年のソヴィエト宮殿建設凍結までに完成していたのは、建築物の基礎部分のみである。1940年10月の段階で「小ホールを含むコンプレックスは部分的に1943年末から、大ホールを含むコンプレックスは1945年末から使用可能になる」⁵⁰⁹と見積もられていたことを勘案すると、基礎部分完成から建設が再開した場合に

⁵⁰⁸ ГАРФ, ф. 5446, оп. 82, д. 121, л. 29.

⁵⁰⁹ ГАРФ, ф. 5446, оп. 82, д. 121, л. 39.

完成まで要するのは約 5 年ということになる。高層建築物の完成からすぐにソヴィエト宮殿の建設が再開されたとしても上記ゲンプランの最終年 1960 年までの完成は難しいと推測される。また従来通りにレーニン像を頂部に据えた状態で「レーニン像の歪み」を修正するべくその意匠を変えれば、さらに時間を費やすことになる。他方 N.ルポフの提言に従って、レーニン像をソヴィエト宮殿そのものから外すことになれば、「レーニンの記念碑としての建築物」⁵¹⁰というコンセプトを放棄することになる。この提言に対する I.スターリンの返答は文書として保存されておらず、彼がどのような反応を示したかは不明である。L.ベリヤから I.スターリンへの提言以降ソヴィエト宮殿の建設に関する公的な資料が全く登場することがないことを考慮すると、この時点でもはや建設作業再開が打ち切られたとって良いかもしれない、つまりソヴィエト宮殿は基礎部分を残したまま建設作業は再開されずに終了したのである。そのきっかけとなったのが、建設に向けた最終案でソヴィエト宮殿の根幹とされた「レーニン像」をめぐるやり取りとなったのは皮肉なことである。

結

I.スターリンの死後、1957 年に再びソヴィエト宮殿という名の建築競技設計が開催される。この建築物は「社会主義文化の高邁な原理に応えたモニュメンタルな建築物として気品ある簡潔さで制作された建築作品」⁵¹¹を目指し、「レーニン像のための土台」となり「建築と彫刻の融合」が謳われたソヴィエト宮殿と本質的には異なっていた。また建設予定地も中心部ではなくモスクワ南西部で、周囲の建築物のドミナントではなく、この建設予定地の近くに既に建設されていたモスクワ国立大学新館との調和を取り、またソヴィエト宮殿を含めた地区計画の特徴を備え、競技設計ではそのことが予め課題とされている⁵¹²。1957 年に開催されたソヴィエト宮殿競技設計は、既に見てきたような「社会主義の首都の中心地にそびえる」ソヴィエト宮殿とは違ったもの見なされていた。B.イオファンの勝利案(イオファン(d)案)を基に何度も変更が加えられたソヴィエト宮殿は、この時

⁵¹⁰ Дворец Советов СССР. С. 56.

⁵¹¹ Дворец Советов: материалы конкурса 1957-1959 гг. М., 1961. С. 199.

⁵¹² Там же, С. 13-14.

点で「ソ連人のイデオロギーにとって異質なもの」で、既に「ソヴィエト宮殿が考案された時代の要求に建築物の構造は応えていなかった」⁵¹³。そのため「古いソヴィエト宮殿のプロジェクトが拒否され、新しいプログラムに則った新たなソヴィエト宮殿の競技設計が通達されたのであった」⁵¹⁴。こうしたことから、1920年代に「モニュメント芸術の形式を用いた最もよきレーニンの記念碑」として考案され、1931年から1933年の競技設計を経て、1941年まで建設作業が行われ、1952年まで設計案の変更が行われてきた建築プロジェクト・ソヴィエト宮殿は、新たなソヴィエト宮殿建築プロジェクトの登場と共に消滅したのである。

⁵¹³ Там же, С. 11-12.

⁵¹⁴ Там же.

結び

以上の分析から建築プロジェクトソヴィエト宮殿は次のような 3 つの特徴にまとめることができる。第 1 にイデオロギー的性質を備えた建築物の集大成、加えてあらゆる機能を内包した建築物として考案され記念性を追求した結果、国家建築様式の先駆けとなったという側面、そのことから第 2 に競技設計以降比較的長きに亘った実施設計から着工・中断までの過程で広汎なパブリシティが行なわれ、民衆の間に威圧的なイメージを確立したという点、そして第 3 には、建築プロジェクト・ソヴィエト宮殿の諸特徴が一定の価値体系を形成し、その頂点に指導者 I.スターリンが位置づけられていたという点である。

まず第 1 の特徴に関してだが、ソヴィエト宮殿の名称についても一度触れなければならない。この建築プロジェクトが企画当初は「大会ビル」という名称で審議がすすめられていた際には、単なる政府関連の施設と文化施設を統合した建築物に過ぎなかった。だが競技設計の開始に合わせて「ソヴィエト宮殿」という名称へ変更したことから、S.キーロフの提唱した「労働者の代表者達が会合できるモニュメント」としての性質、つまり建築物にその時代精神を刻み後世に伝えようとする記念性が追求されるようになった。そのため、この建築プロジェクトは宮殿という言葉が持つ本来の意味をさらに強め、権威の象徴であることをソ連国内のみならず国外へ伝播したのである。

その権威の主体である党とその指導者を顕揚することがモニュメントたる「宮殿型」の与件だったが、それは同時に民衆による支持と参加を必要とした。そのことから建築物の利便性やデモンストレーションを重視した建築的表現が建築競技設計の 1 巡目と 2 巡目では多く見受けられた。しかし続く 3 巡目と 4 巡目、そして建設段階の最終設計案において歴史主義建築から範を得たモニュメンタリティの重視に傾き、それまでの与件を超えてまで周囲の建築物から抜きん出る高さが求められるようになった。建国の父、V.レーニンを頂点にその下では国家の課題を審議し、政治もしくは文化的な成果を発表する場として大ホール、そしてその脇（もしくは下）に小規模なコンサートや集会のための小ホールが位置するという構図によって、建国者を頂点に、国家の政治的もしくは文化的代表者、そしてそれを支える民衆という順で形成されたヒエラルキーが展開され、その全体が

権威の象徴となったのである。このように宮殿という名称によって象徴される権威が、建設段階ではその統治システムの表現へと具体的に変容していった。この変容は 1932 年以降党政府により打ち立てられた政治方針の下でソヴィエト建築界が統一的な建築潮流を確立していく時期と重なっている。この頃には政府指導者達の統領としてその先頭に立つ I.スターリンと民衆の代表者が描かれる作品が多く制作され、その中でも建国者 V.レーニンのモニュメントの下で政府指導者と民衆の代表が議論・報告を行う場面を描いた作品がある（図 227）。これはソヴィエト宮殿で反映されたヒエラルキーの図式が絵画作品でも一種のイコノグラフィとして定着していたことを物語っている。そのため「労働者の代表者達が会合できるモニュメント」を目指したソヴィエト宮殿は、当初その強調点が漠然と「労働者」という部分に置かれていたが、建設段階に入ると「労働者の代表者達」にその強調点に移り、また「モニュメント」とはこの時点で彼らが築き上げている国家統治機構そのものを表象するようになる。こうした点を担う運命となったソヴィエト宮殿は「社会主義の首都にふさわしい」建築物という受動的立場から国家そのものを表象し、都市を牽引するという能動的な立場を反映する建築物となった。またそれによって国家建築様式の典型という地位をソヴィエト宮殿は獲得したのである。ここで注意しなければならないのは、その国家建築様式自体がこの時点では具体的な特徴に関する叙述がなされていないことである。当時のソヴィエト建築界では歴史主義建築を模範としながらもその内実の議論が行われ、その中で排除対象となる建築様式またはスタイル（近代主義建築）が挙げられるようになってはいた。この点は裏を返せば、排除対象とならなかった建築様式やスタイルが国家建築様式としての候補となりえたということでもある。歴史主義建築ではあるが、それ以上のスタイルを限定しないソヴィエト宮殿の行き方が国家建築様式の典型として受容される素地となっていたのはこのためである。

第 2 の特徴である「ソヴィエト宮殿はある種のイメージを確立した」という点は第 1 の点と関連している。建設段階で競技設計勝利案を基にしたソヴィエト宮殿最終設計案が 1937 年に「建築技術プロジェクト」というかたちで完成した。そ

の頃から最終設計案で描かれたソヴィエト宮殿が、序文で触れた映画作品の中で現れていたように、当時のモスクワの将来像を映し出した作品（主に絵画や映画）に登場し始める。そうした作品の中で描かれるソヴィエト宮殿は、円筒の層が垂直に積み上げられ、その頂部に V.レーニンを讃えた姿を特徴としている。この特徴をかたちづくる部分は、最終案設計担当者達が最も腐心した部分である。レーニン像の部分と建築物の高層部分を自然な形で連結するという「建築と彫刻の総合芸術」として違和感のない仕上げにするといった複雑な課題の実現が求められていた。このような制作上の困難を克服することによって、ソヴィエト宮殿が建築物を超えたものになるという認識が設計者達の間でも形成されていった。そのためソヴィエト宮殿を統括する機関（ソヴィエト宮殿会議）とそれを利用する民衆、そして設計に携わる人々に思い起こされるようなソヴィエト宮殿の視覚的イメージがトータルに醸成されていったと言える。こうしたことによって、未完成のソヴィエト宮殿があたかも実在するかのように了解されていった。このような事前了解は、直接ソヴィエト宮殿が言及もしくは描かれた作品よりも当時のモスクワ都市景観を巡る動きにおいて強く現れることとなる。

当時の都市再編計画（「モスクワ再編」）ではソヴィエト宮殿に従うように規模や高さを抑えた政府関連の建築物が設計され、その中でソヴィエト宮殿はモスクワ中心部に配置されていた。モスクワ中心部のいくつかの地区に建築ドミナントとなるように計画・設計された建築物は、歴史主義建築を簡素化し、オーダーやアーチといった要素を強調するスタイルが用いられ、当時のソヴィエト建築界が目指す方向性の影響を強く受ける一方で、ソヴィエト宮殿を中心とした調和の取れた建築的環境、いわゆる建築アンサンブルの整備が行われていった。この建築アンサンブルには、もちろん既存の建築物も取り入れられてはいたが、新たに建設されるその地区の建築ドミナントが中心となるような街路や広場が中心となっていた。新たに再編されるモスクワの街並を描いた絵画作品『新しいモスクワ』（1937年）（図 228）もその例として挙げられる。当時のモスクワ中心部を描いた何の変哲もない風景画とも言えるが、運転手の目を通してモスクワ中心部が描かれている点に着目したい。自動車を運転する女性の視界の左前方には新たに建

設されたホテル・モスクワ、右前方には国家計画委員会（ゴスプラン）ビルがあり、正面の弧状に続くモホヴァヤ通りの先にはソヴィエト宮殿が控えているはずである。この作品は「モスクワの芸術的な外観はその社会主義的な内実によって規定され、その内実は[...]新たなアンサンブルとモスクワの新しい中心-ソヴィエト宮殿を創り出すことで表現された」⁵¹⁵ことを端的に物語っている。つまり、ソヴィエト宮殿は当時の建築及び都市景観の特徴を方向付ける重要なランドマークとなっていたのである。またそのことがソヴィエト宮殿を実現させなければならないという強迫概念となり、最終設計案で確立された視覚的イメージが当時の人々の中で一層定着していったと推測し得る。

ソヴィエト宮殿の視覚的イメージを補強する動きは、興味深いことに当時のソ連国内ではなく、国外でソ連という国家を表象する建築物の中に明確なかたちで認められる。その例として挙げられるのが、1937年のパリ万博でB.イオフアンとV.ムヒナによって設計されたソ連パヴィリオン（図229）と1939年のニューヨーク万博でB.イオフアンとK.アラビヤンによって設計されたソ連パヴィリオン（図230）である。万博でのソ連パヴィリオンは、一致するとまではいかないが、中央に配置された建築物の頂部にシンボルとなる彫刻が据えられ、建物正面はタワー状となり、ソヴィエト宮殿と相似する。この2つのパヴィリオンでは彫刻と建築という「2つの芸術の総合化が実現」し、「何よりもまず、建築物の建築的なコンポジションが彫刻を何か有機的な必然性として提示」⁵¹⁶されている。ここで述べられている「何か有機的な必然性」とは、いかにして違和感のないかたちで彫刻と建築物を配置させるかというコンポジションにかかわるもので、ソヴィエト宮殿のレーニン像と土台となる建築物の関係、そして記念碑としての建築物という課題を踏まえたものである。

第3に挙げた特徴である「価値体系を形成した」というのは、ソヴィエト宮殿そのものが国家の象徴としての意味付けが行われる際にどのような手順が踏まれていたかということである。ここではその価値体系がどのように生み出されるか

⁵¹⁵ Генеральная схема реконструкции Москвы // Архитектура СССР. № 5. 1933. С. 55.

⁵¹⁶ Д.А. Советский павильон // Архитектура СССР. 1937. № 9. С. 6-7.

をまとめてみる。建設作業段階では多くの時間が費やされ、またその中で競技設計とは異なる方向性が確立されていったことは既に本文で確認してきた。この過程において、第2の特徴でも挙げたように、国家のランドマークとしての視覚的及び概念的イメージがソヴィエト宮殿には付与されていった。またそれを実現するために当時の最新建設技術や特殊な建築材料が用いられていたことは既に3章で触れた。この点は当時の建築雑誌もしくは出版物を通じて伝えられ、ソヴィエト宮殿の姿（またはその後に着する視覚的イメージ）とともにその品質についても一般には知られていた。だが、そのことはあくまでイメージであって、実態を伴うものではなかった。このことが価値として汎用するようになるのは、ソヴィエト宮殿の建設にのみ用いられる鉄鋼材が当時開発されてからである。それに加えて、一般建築物とは異なり、「ソヴィエト宮殿用」に特別な建築材料が使用されたということがマスコミ等で喧伝された。パリとニューヨークのソ連パヴィリオン建設ではソヴィエト宮殿と全く同種の建築材料が用いられていた。パリのパヴィリオン建設で使用されたソ連産大理石がニューヨークのソ連パヴィリオン建設の際にパリから搬入され、ニューヨーク万博終了後にはソヴィエト宮殿の建設に用いるためニューヨークからモスクワへ搬送されている⁵¹⁷。自らのイメージを踏襲したソ連パヴィリオンの建築材料の使い回しではあるが、国家を象徴するパヴィリオンから大理石を通じてさらにそのイメージが再強化された。

さらにこの頃になると、ソヴィエト宮殿の建設は「レーニンの宮殿型モニュメントにして、彼の銅像を冠した巨大な台座の建物を垂直状に仕上げ、社会主義の中心地の姿を創り出し、またその最も重要な新しいアンサンブルを創るという同志スターリンの意図」⁵¹⁸によるものであると盛んに伝えられる。ソヴィエト政権が望む都市の姿を生み出すものとしてのソヴィエト宮殿の位置付けが、ここでは「同志スターリン」とされていることに着目すべきであろう。このソヴィエト宮殿建設の意義が建築雑誌に発表された1939年は、国家の指導者達を束ねる「同志スターリン」に対する個人崇拜が隆盛を極めていた時期である。そのためソヴィ

⁵¹⁷ ГАРФ, ф. 5673, оп. 1, д. 23, л. 98.

⁵¹⁸ Корнфельд Я. Архитектура Сталинских пятилеток // Архитектура СССР. 1939. № 12. С. 28.

エト宮殿は彼の創意によって発案されたと伝えることで、一大国家建築プロジェクトを生み出す創造主としての「同志スターリン」の偉大さが示される。さらに、ソヴィエト宮殿が国家指導者のお墨付き、つまり社会主義建設において価値あるものということが明示されている。しかし、「同志スターリン」個人が全てを決定しているわけではない。この相関関係を示す絵画が『党政府指導者達によるソヴィエト宮殿設計案視察』（図 231）である。この作品は党及び政府の指導者がソヴィエト宮殿設計アトリエを訪問し、その最終設計案の進捗具合に関する報告を受けているという場面を描いている。ソヴィエト宮殿を巡って制作者とその発注者（ここでは党政府指導者）が会し、「特別な建築物」であるソヴィエト宮殿が「同志スターリン」1人の思いつきなどではなく、設計者達の議論や報告、そしてスターリンを中心とした党政府指導者からの承認を経ているということが示されている。先に上げた絵画作品（図 227）では「同志スターリン」個人のみが他の登壇者に何かを説明する立場にいるが、ソヴィエト宮殿に関するこの絵画作品で I.スターリンは飽くまで指導者達の統領として中央にいるものの、彼らと同じく報告を受ける立場にある。こうした絵画作品を通じてソヴィエト宮殿の建設作業中断まで、「特別な建築物」としてソヴィエト宮殿の価値は補強され、高められていった。

建設作業中断後になると、ソヴィエト宮殿建設用として管理されていた建築材料や建設作業に携わっていた人員が他事業へ譲渡され、ソヴィエト宮殿建設局と本来の業務であるソヴィエト宮殿建設事業とのつながりも薄れたが、この希薄化した「特別な建築物」としての価値のシステムは存続し続け、その価値は高層建築物に転用され。この過程で、「原作者は予め与えられた成果を生み出す」⁵¹⁹という命題が成立する。高層建築物（ここではモスクワ国立大学新館とザリャージュ通りの政庁ビル）の「原作者」は建設作業を担当した建設局ではなく、また最終的に設計を担当した建築家でもない。B.イオファンが述べたようにアイデアを生み出した「ヨシフ・ヴィサリオノヴィチ」であり、それ故「与えられた成果を生み出す」ようにしなければならない。ソヴィエト宮殿では事前に審議が重

⁵¹⁹ Паперный. Культура Два (前注 1 参照). С. 247.

ねられ、競技設計を経て建設着手に至り徐々にそのイメージが形成され、価値が伴っていった。だが高層建築物ではその原作者である「ヨシフ・ヴィサリオノヴィチ」の指示がまずあり、その時点で「特別な建築物」という価値が与えられている。この高層建築物建設の構想が公になった2年後の1949年当時、この建築物は次のように紹介されている：

「建築及び建設の具体的な実践として社会主義リアリズムの手法を更に深化させた戦後の建築活動の中で最大の出来事は、モスクワの高層建築群建設に関わる設計であり、この設計は同志スターリンのイニシアチヴと指示によって着手された[...]モスクワの高層建築群建設が担う進歩的かつ刺激的な役割はソヴィエト建築全てに力強い影響を与えている」⁵²⁰。

ソヴィエト宮殿にかつて期待されていた役割がモスクワの高層建築群に担われ、さらに当時の芸術方針である社会主義リアリズム建築の模範例として提示されている。自らの価値を失ったソヴィエト宮殿はもはや建築プロジェクトというよりも単なる名義に過ぎなくなっていた。1952年まで建設局は建設作業再開に向けたソヴィエト宮殿の改訂版を作成・提案していたが、政府上層部から建設作業再開の承認を得られなかったことは、4章で述べてきたとおりである。場所と内容を変えて行われた新たなソヴィエト宮殿競技設計で再び「ソヴィエト宮殿」という名称は陽の目を見る。だが、もはやそこにはかつての国家のシンボルであり都市モスクワを牽引する「特別な建築物」という価値は伴っていなかった。ソヴィエト宮殿が体現しようとしたそのような価値は高層建築物（モスクワ国立大学新館）によって既に果たされ、なおかつその価値体系によって生み出された元来のソヴィエト宮殿は新しいソヴィエト宮殿競技設計において非難的的となってしまった。

「スターリンはレーニンを追悼するにあたり不敬をはたらきました。ヴラジーミル・イリイチの記念碑であり、30年以上も前にその建設が決定したソヴィエト宮殿が建設されなかったのは偶然ではありません。その建設に関する問題はずっと後回しにされ、そして忘れ去られてしまったのです。このことを正さなければなりません [...]スターリンの治世では[...]レーニンが、十月革命の時でさえ、あたかも二義的な

⁵²⁰ Цапенко М. Социалистический реализм – метод советского зодчества // Архитектура СССР. 1949. № 11. С. 10.

役割を果たしたかのように、あらゆる出来事が解説されていました。多くの映画作品、文学作品でレーニンの姿は不正確に取り上げられ、許し難いかたちで卑しめられていました。こうしたこと全ては断固として見直さなければなりません、それは歴史や文学、芸術作品に V.I.レーニンの役割と、我が共産党とソ連国民-創造者である国民そして建設者である国民-の偉大なる活動が正確に反映されることを見出すためであります」⁵²¹。

1956年の第20回ソ連共産党大会におけるニキータ・フルシチョフが行った「個人崇拜とその結果」に関する報告、いわゆる「スターリン批判」では、ソヴィエト宮殿が本来「レーニンの記念碑」、つまり建国者を讃えるモニュメントであることが強調されている。ここではソヴィエト宮殿未完成の咎、そしてそのことが建国の父に対する侮蔑として I.スターリンが非難されるにとどまらない。「建設に関する問題」、つまり都市モスクワの建築アンサンブルの中心となり社会主義国家のシンボルとなるようなこと、そうしたシンボルが生み出される過程で国父と国民が抜け落ちていること、そして最終的に I.スターリンのみにその価値が回収されるというプロセスをも糾弾し、そのような価値体系との決別を N.フルシチョフは表明しているのである。このことによって、ソヴィエト宮殿が I.スターリンに対する個人崇拜と結びつけられ、それと関連して形成された強固な価値体系が明らかにされたのである。

⁵²¹ РГАНИ (Российский Государственный Архив Новейших Историй), ф. 1, оп. 2, д. 17, л. 74.

参考文献

《日本語文献》

- ・ 池田嘉郎「社会主義の都市アイデア」吉田伸之、伊藤毅編『伝統都市1 アイデア』東京大学出版会、2010年、209-232頁。
- ・ 池田嘉郎「ユーラシア地政学としてのソヴィエト建築学—モスクワ、ノヴゴロド、北京」『地域研究』10巻2号、2010年、90-108頁。
- ・ 石井規衛「ロシア革命とソ連邦の成立」和田春樹編『新版世界各国史 22 ロシア史』山川出版社、2002年、276-308頁。
- ・ 石井規衛「スターリンと社会主義体制の発展」和田春樹編『新版世界各国史 22 ロシア史』山川出版社、2002年、309-360頁。
- ・ 井上章一『夢と魅惑の全体主義』文春新書、2006年。
- ・ 近江榮『建築設計競技』鹿島出版会、1986年
- ・ 小林克弘『アールデコの摩天楼』鹿島出版会、1990年。
- ・ 塩川伸明「社会主義体制の変貌・成熟・停滞」和田春樹編『新版世界各国史 22 ロシア史』山川出版社、2002年、361-387頁。
- ・ 下斗米伸夫著『スターリンと都市モスクワ』岩波書店、1994年。
- ・ 本田晃子『天体建築論：レオニドフとソ連邦の紙上建築時代』東京大学出版会、2014年。
- ・ 八束はじめ『近代建築のアポリア—転向建築論序説』PARCO 出版局、1986年。
- ・ 八束はじめ『思想としての日本近代建築』岩波書店、2005年。
- ・ 八束はじめ『ロシア・アヴァンギャルド建築』INAX 叢書 8、1993年。
- ・ 八束はじめ、小山明『未完の帝国ナチスドイツの建築と都市』福武書店、1991年。
- ・ アルバート・シュペール（品田豊治訳）『ナチス狂気の内幕』読売新聞出版社、1970年。
- ・ イーゴリ・ゴロムシトク（貝澤哉訳）『全体主義芸術』、水声社、2007年。
- ・ ケネス・フランプトン（中村敏男訳）『現代建築史』青土社、2003年。
- ・ ジークフリート・ギーディオン（生田勉訳）『現代建築の発展』みすず書房、1961年。
- ・ ディヤン・スジック（東郷えりか訳、五十嵐太郎監修）『巨大建築という欲望：権力者と建築家の20世紀』紀伊國屋書店、2007年。
- ・ トーマス・ファン・レーウェン（三宅理一、木下壽子訳）『摩天楼とアメリカの欲望』工作舎、2006年。
- ・ パオロ・ニコローゾ（桑木野幸司訳）『建築家ムッソリーニ：独裁者が夢見たファシズムの都市』白水社、2010年。
- ・ ヴェンフリード・ネルティンガー（海老澤模奈人訳）『建築・権力・記憶：ナチズムとその周辺』鹿島出版会、2004年。
- ・ ポール・ゴールドバーガー（渡辺武信訳）『摩天楼：アメリカの夢の尖塔』鹿島出版会、1988年。
- ・ ボリス・グロイス（亀山郁夫、古賀義顕訳）『全体芸術様式スターリン』現代思潮新社、2000年。
- ・ 「ソヴィエト中央議場」『国際建築』8巻10号、1932年、403-406頁。
- ・ 「ソヴィエト中央議場建築競技設計案解説」『国際建築』8巻10号、407-415頁。

《英語文献》

- A. Malenky, *Magnitogorsk: The Magnitogorsk Metallurgical Combine of the Future* (Moscow: Co-operative publishing society of foreign workers in the USSR, 1932).
- Allan Nervins and Frank Ernest Hill, *Ford: Expansion and Challenge, 1915-1933* (New York: Charles Scriber's Sons, 1957).
- Anatole Kopp, *Town and revolution: Soviet Architecture and City planning* (New York: G. Braziller, 1970).
- Anatole Kopp, *Constructivist Architecture in Soviet Union* (London: St. Matins Press, 1985).
- Anatole Senkevitch Jr., *Soviet Architecture 1917-1962: A Bibliographical Guide to Source Material* (Charlottesville: Univ. Press of Virginia, 1974).
- Andrew Elam Day, "Building socialism The politics of the Soviet cityscape in the Stalin era" (PhD. Diss., Columbia University, 1998).
- Antony C. Sutton, *Western Technology and Soviet Economic Development 1917 to 1930* (California: Hoover Institution Press, 1968).
- Antony C. Sutton, *Western Technology and Soviet Economic Development 1930 to 1945* (California: Hoover Institution Press, 1971).
- Barbara Keys, "The Body as a Political Space: Comparing Physical Education under Nazism and Stalinism," *German History* 27, no. 3 (2009), p. 395-413.
- Branko Mitrovic, "Studying Renaissance Architectural Theory in The Age of Stalinism," *I Tatti Studies in the Italian Renaissance* 1, vol. 12 (2009), p. 233-263.
- William Craft Brumfield, *A history of Russian architecture* (Cambridge: Cambridge University Press, 1994).
- Catherine Cooke, "Mediating Creativity and Politics: Sixty Years of Architectural Competitions in Russia," in Paul Wood Paul et al., eds., *The Great Utopia: The Russian and Soviet Avant-Garde, 1915-1932* (New York: Solomon R. Guggenheim Museum, 1992), p. 680-715.
- Catherine Cooke and Igor Kazus, *Soviet Architectural Competitions, 1920s – 1930s* (London: Phaidon Press Ltd, 1992).
- Claude Schnaidt, *Hannes Meyer: Buildings, Projects, and Writings* (New York: Architecture Book Publishing, 1965).
- E. H. Carr and R. W. Davies, *Foundations of a Planned Economy 1926-1929 (vol. 1, part 1)* (London: Macmillan, 1969).
- E. H. Carr and R. W. Davies, *Foundations of a Planned Economy 1926-1929 (vol. 1, part 2)* (London: Macmillan, 1969).
- Eric Mumford, *The CIAM Discourse on Urbanism, 1928-1960* (Cambridge: MIT Press, 2000).
- Evgeny Dobrenko and Eric Naiman, *The Landscape of Stalinism: The art and Ideology of Soviet Space* (Seattle: University of Washington Press, 2003).
- Frederic Starr, "Le Corbusier and the USSR," *Cahiers du monde russe et soviétique* 21, no. 2 (1980), p. 209-221.
- Grant Hilderbrand, *Designing for Industry: Architecture of Albert Kahn* (Cambridge: MIT Press, 1974).

- H. R. Knickerbocker, *The Red Trade Menace: Progress of the Soviet Five-Year Plan* (New York: 1931).
- Hans Gunther, *The Culture of the Stalin period* (London: Palgrave Macmillan, 1990).
- Harold Dorn, "Hugh Lincoln Cooper and the First Détente," *Technology and Culture* 20, no. 2 (1979), pp. 322-347.
- Hugh D. Hudson, Jr. *Hudson Blueprints and Blood: The Stalinization of Soviet Architecture, 1917-1937* (Princeton: Princeton University Press, 1993).
- James C. Young, "Soviet Power Project Rivals Muscle Shoals" *New York Times* (October 17, 1926), p. 18.
- Jean-Louis Cohen, *Le Corbusier and the Mystique of the USSR: Theories and Projects for Moscow, 1928-1936* (Princeton: Princeton University Press, 1991).
- John Scott, *Behind the Urals* (New York: Arno Press, 1971).
- Katherine Clark, *Moscow, the Fourth Rome: Stalinism, Cosmopolitanism, and the Evolution of Soviet Culture, 1931-1941* (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 2011).
- Konstantin Akinsha, Grigorii Kozlov, Sylvia Hochfield *The Holy Place Architecture, Ideology, and History in Russia* (New Heaven: Yale University Press, 2007).
- Malte Rolf, "A Hall of Mirros: Sovietizing Culture under Stalinism," *Slavic Review* 68, no. 3 (2009), p. 601-630.
- Martine Hammer and Christina Lodder, *Constructing Modernity: The Art and Career of Naum Gabo* (New Haven: Yale University Press, 2000).
- Maurice F. Parkins, *City Planning in Soviet Russia: An Interpretative* (Chicago: University of Cicago Press, 1953).
- Norman E. Saul, *Friends or Foes? The United States and Soviet Russia, 1921-1941* (Lawrence: University Press of Kansas, 2006).
- Park J.D., *Culture, Conflict and Coexistence American-Soviet Cultural Relations, 1917-1958* (Jefferson: McFarland, 1983).
- Patricia Bayer, *Art Deko Architecture* (London: Thames and Hudson, 1999).
- Peter Lizon, *The Palace of Soviets: the Paradigm of Architecture in the USSR* (Colorado: Three Continents Press INC, 1992).
- Rene Fueleop-Miller, *The Mind and Face of Bolshevism: An Examination of Cultural Life in Soviet Russia* (New York: Harper Torchbook, 1962).
- Richard Stites, *Revolutionary Dreams. Utopian Visions and Experimental Life in the Russian Revolution* (Oxford: Oxford University Press, 1989).
- Sheila Fitzpatrick, *Cultural revolution in Russia 1928-31* (Bloomington: Indiana University Press, 1978).
- Sheila Fitzpatrick, *The Cultural Front: Power and Culture in Revolutionary Russia* (London: Cornell University Press, 1992).
- Sona Stephan Hoisington, "'Ever Higher': The Evolution of the Project for the Palace of Soviets," *Slavic Review* 62, no.1 (2003), p. 41-68.
- William Bostick, *Legacy of Albert Kahn* (Detroit: The Detroit Institute of Arts, 1970).
- "Construction of a Palace of the Soviets in Moscow," *Soviet Culture Bullentin*, no. 6-7 (1931), p. 30.

- “Grand Smash,” *Time*, 14. 12. 1931.
- “Hamilton’s Palace,” *Time*, 14. 03. 1932.
- “Happy Man!,” *Time*, 19. 09. 1932.
- “Soviet Palace,” *Time*, 19. 03. 1934.
- “The Palace of Soviets, Moscow,” *The Architectural Review* 71, no. 5 (1932), p. 196-200.
- “Unhappy Man,” 14. 11. 1932.

《ロシア語文献》

- *Адамов О.И.* Образы пространственных построений в творческом процессе архитектора. Мастера Русского Авангарда: А.А. Веснин, И.А. Голосов, И.И. Леонидов, К.С. Мельников: автореф. дис. ... канд. арх. М., 2000.
- *Алабян К.С.* Против формализма, упрощенчества, эклектики // *Архитектура СССР*. 1936. № 4. С. 1-6 .
- *Андреев В.* Против штампа в архитектуре // *Архитектура СССР*. 1952. № 5. С. 17-19.
- *Аркин Д.* Архитектура современного Запада. М., 1934.
- *Аркин Д.Е.* Архитектурное значение высотных зданий Москвы. М., 1954.
- *Аркин Д.Е.* О ложной «классике», новаторстве и традиции // *Архитектура СССР*. 1940. № 3. С. 12-30.
- *Аркин Д.Е.* О ложной «классике», новаторстве и традиции // *Архитектура СССР*. 1939. № 4. С. 12-19.
- Архитекторы держат экзамены: Против реакционных и утопических проектов (На диспуте о Дворца Советов) // *Советское искусство*. 28. 09. 1931.
- *Архитектура Дворца Советов*. М., 1939.
- Архитектурно-технический проект Дворца Советов Союза ССР // *Архитектура СССР*. 1937. № 6. С. 27-33.
- АСНОВА: Дворец Советов // *Советская архитектура*. 1931. № 4. С. 52-55.
- *Астафьева М.И.* Формирование проблематики теории и истории советской архитектуры 1917-1954 гг.: автореф. дис. ... док. арх. М., 1990.
- *Астафьева-Длугач М.И., Волчек Ю.П.* О конкурсе на Дворец Советов // *Зодчество*. 1989. № 3 (22). С. 222-238.
- *Атаров Н.С.* Дворец Советов. М., 1940.
- *Афанасьев К.Н.* А.В. Щусев. М., 1978.
- *Беккер Н.* Дворец Советов и творческая самостоятельность трудящихся // *Советская архитектура*. 1932. № 2-3. С. 117-121.
- *Борисова А.Е.* Русская архитектура второй половины XIX века. М., 1979.
- *Борисова А.Е.* Русская архитектура конца XIX начала XX века. М., 1971.
- *Боровьев А.Ю.* Архитектурные конкурсы 1930-1932 годов на театр массового действия и синтетический театр в СССР поиск театра нового типа: авторы. дис. ... канд. арх. М., 2012.
- *Бочаров Ю.П.* Архитектура СССР. 1917-1987. М., 1987.
- *Быков В.* К итогам общественного обсуждения конкурсных проектов Дворца Советов // *Архитектура СССР*. 1958. № 8. С. 9-51.
- *Быков В.Е.* Георгий Гольц. М., 1978.

- *Былинкин Н.П.* История советской архитектуры, 1917 - 1954 гг. М., 1985.
- Бюллетень Управления строительством дворца Советов при Президиуме ЦИК СССР. М., 1931. № 1.
- Бюллетень Управления строительством дворца Советов при Президиуме ЦИК СССР. М., 1931. № 2-3.
- ВОПРА: Дворец Советов // Советская архитектура. 1931. № 4. С. 49-51.
- XVIII съезд Всесоюзной коммунистической партии (б). 10–21 марта 1939 г. Стенографический отчет. М., 1939.
- Все на конкурс! // Строительства Москвы. 1931. № 7. С. 8-10.
- Всеобщая история архитектуры: в 12 т. Т. 12. Кн. 1. М., 1975.
- *Гельфрейх В., Иофан Б., Шуко В.* Проект Дворца Советов // Строительства Москвы. 1934 № 3. С. 5-11.
- *Гинзбург М.Я.* Новые методы архитектурного мышления // Современная архитектура. 1926. № 1. С. 41-46.
- *Гинзбург М.Я.* Проблемы современной архитектуры // Архитектура СССР. 1934. № 2. С. 63-69.
- *Гинзбург М.Я.* Стиль и эпоха. М., 1924.
- *Громов Е.* Сталин: Искусство и власть. М., 2003.
- *Д. А.* Советский павильон // Архитектура СССР. 1937. № 9. С. 4-11.
- *Д. С.* Первые проекты Дворца Советов // Строительства Москвы. 1931. № 8. С. 2-7.
- *Дамский А.И.* Работа по художественной осветительной арматуре Дворца Советов // Информационно-технический бюллетень строительства Дворца Советов. 1940. № 5-6. С. 42-49.
- Дворец рабочих // Искусство Коммуны. Петроград. 19. 01. 1919.
- Дворец Советов // Архитектура СССР. 1933. № 1. С. 3-9.
- Дворец Советов: проект бригады АРУ // Советская архитектура. 1931. № 4. С. 45-48.
- Дворец Советов: Третий и четвертый этапы проектирования // Советская архитектура. 1933 № 5. С. 1-16.
- Дворец Советов Материалы конкурса 1957-1959 гг. Государственное Издательство литературы по строительству, архитектуре и строительной технике. М., 1961.
- Дворец Советов СССР. М., 1933.
- Дворец Советов – памятник Ленину // Строительства Москвы. 1933. № 5-6. С. 1-10.
- Доклад на закрытом заседании XX съезда КПСС. М., 1959.
- *Заплетин Н.* Дворец Советов СССР (по материалам конкурса) // Советская архитектура. 1932. № 2-3. С.10-117.
- *Заплетин Н.П.* Магнитострой архитектуры // Строительства Москвы. 1933. № 5-6. С. 10-32.
- *Заплетин Н.П.* Переломный этап пролетарской архитектуры (по материалам комиссии технической экспертизы) // Строительства Москвы. 1932. № 3. С. 16-34.
- *Зиновьева О.А.* Облик Москвы как отражение культуры сталинской эпохи: авторреф. дис. ... канд. кул. М., 2006.
- *Иванов С.Г.* Реакционная культура: От авангарда к большому стилю. СПб., 2010.

- Из истории создания Союза советских архитекторов: К 75-летию творческого Союза зодчих. М., 2007.
- *Иконников, А.В.* Архитектура XX века: Утопии и реальность: В 2 т. Т. 1. М., 2001.
- *Иконников А.В.* Архитектура Москвы XX век. М., 1984.
- *Иконников А.В.* Историзм в архитектуре. М., 1997.
- *Иконников А.В.* Советская архитектура: реальность и утопии // Образы истории отечественной архитектуры / Под. ред. А.В. Иконникова. М., 1996. С. 194-223.
- *Иконников А.В.* Тысяча лет русской архитектуры. М., 1990.
- *Иконников А.В.* Утопическое мышление и архитектура: социальные, мировоззренческие и идеологические тенденции в развитии архитектуры. М., 2004.
- *Ильин И.А.* Будущий Петроград: Архитектурный облик Петрограда // Красная нива. 1919. № 35. С. 20-21.
- *Ильинский Н.* Взять всё лучшее из американского проектирования // Строительство Москвы. 1931. № 11. С. 25-27.
- *Иофан Б.М.* Архитектурные проблемы строительства многоэтажных зданий // Архитектура и строительство. М., 1947. № 3. С. 10-13.
- *Иофан Б.* Дворец Советов СССР // Плановое хозяйство. 1933. № 7-8. С. 169-176.
- *Иофан Б. М.* Об архитектуре Дворца Советов. Доклад на первом съезде архитекторов // Архитектурная газета. 21. 06. 1937.
- *Иофан Б.* Площадь и проспект Дворца Советов // Архитектура СССР. 1935. № 10-11. С. 25-28.
- *Иофан Б.* Пояснительная записка к проекту сооружения Дворца Советов СССР автора проекта арх. Бориса Михайловича Иофана. 13. 07. 1931.
- История советской архитектуры (1917-1958). / Под. ред. П.В. Баранова. М., 1962.
- Итальянский Дворец Советов: Каталог к выставке Музея архитектуры им. А.В. Щусева. М., 2007.
- Итоги величайшего архитектурного конкурса // Строительства Москвы. 1932. № 2-3. С. 13-34.
- *Казусь И.А.* Архитектурные конкурсы 1917-1933 гг.: Опыт сравнительного статистического анализа // Проблемы истории советской архитектуры. 1980. № 5. С. 5-15.
- *Казусь И.А.* Всероссийский конкурс на проект Дворца Труда в Москве (1922-1923) // Архитектура в истории русской культуры. Вып. 3 / Под. ред. Бондаренко И.А. М., 2001. С. 251-256.
- *Казусь И.А.* Об особенностях включенности конкурсного проектирования в организационную структуру архитектурно-строительного дела в годы становления советской архитектуры // Проблемы истории советской архитектуры. 1977. № 3. С. 65-69.
- *Казусь И.А.* Организация конкурсного проектирования в советской архитектуре (дискуссии и практика) // Проблемы истории советской архитектуры. 1983. № 6. С. 21-34.
- *Казусь И.А.* Советская архитектура 1920-х годов: организация проектирования. М., 2009.
- *Кандидов Б.* За Дворец Советов. М., 1931.
- *Карра А., Симбирцев В.* Форпост пролетарской культуры (конкурс на проект Дворца культуры Пролетарского района) // Строительство Москвы. 1930. № 8-9. С. 20-24.

- *Кириченко Е.И.* Храм Христа Спасителя в Москве. История проектирования и создания собора. Страницы жизни и гибели 1813—1931. М., 1992.
- *Киров С.М.* Избранные статьи. 1912-1934. М., 1957.
- *Колли Н.Я.* Летопись советской архитектуры 1917-1947 // Архитектура СССР. 1947. № 17-18. С. 21-45.
- *Комеч А.И.* О достоинстве советского архитектора // Архитектура СССР. 1937. № 9. С. 2-3.
- Коммунистическая партия Советского Союза в резолюциях и решениях съездов, конференций и пленумов ЦК (1898-1986). Т. 3: 1922-1925. М., 1984.
- Конкурс на проекты Дворца труда // Коммунальное хозяйство. 01. 10. 1922.
- *Коньшова Е.В., Меерович М.Г.* Эрнст Май и проектирование соцгородов в годы первых пятилеток (на примере Магнитогорска). СПб., 2012.
- *Корнфельд Я.* Архитектура Сталинских пятилеток // Архитектура СССР. 1939. № 12. С. 22-41.
- *Корнфельд Я.* Дворец Культуры пролетарского района Москвы // Архитектура СССР. 1934. № 1. С. 28-35.
- *Корнфельд Я.* Интерьеры Дворца Советов // Архитектура СССР. 1938. № 11. С. 38-43.
- *Корнфельд Я.А.* История советской архитектуры 1917-1958. М., 1962.
- *Косенкова Ю.Л.* Архитектура сталинской эпохи. Опыт исторического осмысления. М., 2010.
- *Косенкова Ю.Л.* Советское градостроительство 1920 – 1930-х годов: Новые исследования и материалы. М., 2010.
- *Красин Г.Б.* Сущность некоторых технических проблем, стоящих перед строительством Дворца Советов // Информационно-технический бюллетень строительства Дворца Советов. 1940. № 1. С. 10-18.
- *Кулешов Н.* Высотные здания Москвы. М., 1954.
- *Кут А.* Дворец Советов: Тов. А.В. Луначарский об архитектурных проектах // Советское искусство. 26. 01. 1932.
- *Ладовский Н.А.* Архитектор Н.А. Ладовский – Пояснительная записка к проекту Дворца Советов С.С.С.Р. 12. 07. 1931.
- *Лисицкий Л.* Форм социалистической Москвы // Архитектура СССР. 1934. № 10. С. 4-5.
- *Лихоцкий В. Г.* Иван Фомин и метаморфозы русской неоклассики. СПб., 2008.
- *Луначарский А.В.* Речь о пролетарской архитектуре // Архитектура СССР. 1934. № 8. С. 4-7.
- *Луначарский А.* Современный театр и революционная драматургия // На посту. 1925. № 1. С. 121-130.
- *Луначарский А.В.* Социалистический архитектурный монумент // Строительство Москвы. 1933. № 5-6. С. 3-10.
- *Майзель С.* Световое оформление Дворца Советов // Архитектура СССР. 1934. № 5. С. 68-73.
- Мастера искусств об искусстве: в 7 т. Т. 6. / Под. ред. Д. Е. Аркина. М., 1969.
- Мастера советской архитектуры об архитектуре: в 2 т. Т. 1 / Под. ред. М.Г. Бархина

- А.В. Иконникова. М., 1975.
- Материалы по истории СССР 7. М., 1959.
 - *Маца И.Л.* К вопросу о художественном образе в архитектуре // Архитектура СССР. 1933. № 5. С. 36-41.
 - *Маца И.Л.* О конструктивизме (историко-художественные заметки) // Искусство. 1971. № 8. С. 40-47.
 - *Маца И.Л.* Советское искусство за 15 лет. М., 1933.
 - *Маца И.Л.* О природе архитектуры // Архитектура СССР. 1935. № 3. С. 7-9.
 - *Меерович М.Г.* Альберт Кан в истории советской индустриализации. [http://archvuz.ru/2009_2/10] (2014 年 10 月 15 日 閱覽).
 - *Меерович М.Г.* Рождение соцгорода. Иркутск. 2008.
 - *Меерович М.Г.* Наказание жилищем. Жилищная политика в СССР как средство управления людьми. 1917-1937. М., 2008.
 - *Мельчаков К.* Павильон СССР на международной выставке в Нью-Йорке // Архитектура СССР. 1939. № 9. С. 62-69.
 - *Милютин Н.А.* Опыт тематической композиции // Информационно-технический бюллетень строительства Дворца Советов. 1940. № 3. С. 20-27.
 - *Михайлова В.* Дворец Советов должен быть произведением большого искусства большевизма // Строительства Москвы. 1931. № 9. С. 3-8.
 - *Минкус М.* Владимир Алексеевич Щуко: Творческий путь // Архитектура СССР. 1939. № 1. С. 31-51.
 - *Михайлов А.* О выставке проектов Дворца Советов // За пролетарское искусство. 1931. № 9. С. 14-19.
 - *Михайлов Б.П.* Ордер в советской архитектуре // Архитектура СССР. 1939. № 8. С. 31-36.
 - *Михайлов Б.П.* Стиль в архитектуре // Архитектура СССР. 1933. № 12. С. 28-32.
 - *Морозов А.И.* Конец утопии. М., 1995.
 - *Насонов В.Н.* Стальные каркасы Дворца Советов // Стальные каркасы многоэтажных зданий / Под ред. В.А. Балдина. М., 1939. С. 79-99.
 - *Незабываемые встречи* // Архитектура СССР. 1939. № 12. С. 6-10.
 - *Никифорова Л.В.* Дворец в истории русской художественной культуры. СПб., 2006.
 - *Николаев В.* Конструкции Дворца Советов // Архитектура СССР. 1937. № 6. С. 34-38.
 - *Новицкий П.* Проблема пролетарского стиля: Проба сил на выставке проектов Дворца Советов // Бригада художников. 1932. № 3. С. 14-30.
 - *Объединение архитекторов урбанистов АРУ* Пояснительная записка к проекту Дворца Съездов в Москве. 10. 07. 1931.
 - *Олтаржевский В.* Архитектура Соединенных Штатов Америки // Архитектура СССР. 1935. № 9. С. 52-59.
 - *Паперный В.* Культура Два. М., 2006.
 - *Петров В.* АСНОВА за 8 лет // Советская Архитектура. 1931. № 1-2. С. 48-52.
 - *Поляков Н.Х.* Элементы архитектурного ансамбля Москвы // Строительство Москвы. 1936. № 5. С. 15.
 - *Попов Б.П.* Фундаменты высотной части Дворца Советов // Строительство Москвы. 1936.

№ 8. С. 20-24.

- Постановление Совета строительства Дворца Советов при Президиуме ЦИК СССР. II. Об организации работ по окончательному составлению проекта Дворца Советов Союза СССР в г. Москве. // Советская архитектура. 1932. № 2-3. С. 116.
- Постановление о конкурсе на составление проектов Дворца Советов // Правда. 18. 07. 1931.
- Постановление о конкурсе на составление проектов Дворца Советов: Программа проектирования Дворца Советов СССР в Москве // Известия. 18. 07. 1931.
- Постановление Совета строительства Дворца Советов при президиуме ЦИК Союза ССР // Строительства Москвы. 1934. № 3. С. 4.
- Пусть рабочие массы скажут свое мнение о проектах Дворца Советов // Вечерняя Москва. 20. 08. 1931.
- Путь к дворцу: Всесторонне изучить материалы конкурса // Советское искусство. 20. 12. 1931.
- *Рабинович И.* Образ вождя в произведениях живописи и скульптуры // Архитектура СССР. 1939. № 12. С. 11-21.
- Рабочий дворец // Жизнь искусства. 28. 05. 1919.
- *Рожин И.* Интерьер Дворца Советов // Архитектура СССР. 1939. № 6. С. 13-17.
- *Рябушин А.В.* Советская архитектура. М., 1984.
- *Рябушин А.В.* Этапы развития советской архитектуры. М., 1979.
- *Савицкий Ю.Ю.* Каро Алабян // Советская архитектура. 1969. № 18. С. 92-94.
- *Смирнов Л.Н.* Социалистическая утопия как архитектурная реальность: Архитектура Москвы 30-х – начала 50-х годов // Наше наследие. 1995. № 35-36. С. 198-209.
- *Степанов В.В.* А.Е. Белогруд. Ленинград. 1939.
- Творческая дискуссия Союза Советских Архитекторов // Архитектура СССР. 1933. № 3-4. С. 4-25.
- Творческая трибуна // Архитектура СССР. 1934. № 7. С. 3-16
- *Тер-Акопян К.Н.* Проект и строительство Дворца Советов СССР в Москве 1931-1932 исторический очерк // Наум Габо и конкурс на Дворец Советов, Москва 1931-1933. Каталог выставки. Берлин. 1993. С. 289-296.
- *Толстой А.Н.* Поиски монументальности // Известия. 27. 02. 1932.
- *Урбан А.* Архитектура жилого дома // Архитектура СССР. 1935. № 6. С. 11-16.
- Уроки майской архитектурной выставки: творческая дискуссия в союзе архитекторов // Архитектура СССР. 1934. № 6. С. 4-17.
- *Фаворский В.А.* Предметность, масштабность, реализм // Архитектура СССР. 1934. № 11. С. 5-6.
- *Филокова Н.И.* Каталог коллекции проектов конкурса на Дворец Советов Музея им. Щусева в Москве. М., 1989.
- *Хазанова В.Э.* Из истории советской архитектуры 1917-1925 гг. документы и материалы. М., 1963.
- *Хазанова В.Э.* Из истории советской архитектуры 1926-1932 гг. М., 1984.
- *Хазанова В.Э.* Из истории советской архитектуры 1926-1932 гг., документы и материалы,

- творческое объединение. М., 1970.
- *Хазанова В.Э.* К истории проектирования Дворца Советов СССР в Москве // Советское изобразительное искусство и архитектура 60-70-х годов / Под. ред. В.Э. Хазановой. М., 1979. С. 166-213.
 - *Хазанова В.Э.* Опыт изучения истории советской архитектуры 1917-1932 гг.: Автореф. дис. ... док. иск. М., 1996.
 - *Хазанова В.Э.* Советская архитектура первой пятилетки. М., 1980.
 - *Хазанова В.Э.* Советская архитектура первых лет Октября 1917-1925 гг. М., 1970.
 - *Хан-Магомедов С.О.* Александр Веснин и конструктивизм. М., 2007.
 - *Хан-Магомедов С.О.* Архитектура советского авангарда: В 2 кн. Кн. 1. М., 1996.
 - *Хан-Магомедов С.О.* Архитектура советского авангарда: В 2 кн. Кн. 2. М., 2001.
 - *Хан-Магомедов С.О.* Архитектурные школы 1917-1932 годов // Теория композиции в советской архитектуре / Под ред. Л.И. Кирилловой. М., 1986. С. 20-34.
 - *Хан-Магомедов С.О.* Генрих Людвиг. М., 2007.
 - *Хан-Магомедов С.О.* Илья Голосов. М., 1988.
 - *Хан-Магомедов С.О.* К истории выбора места для Дворца Советов // Архитектура и строительство Москвы. 1988. № 1. С. 21-23.
 - *Хан-Магомедов С.О.* Конструктивизм – концепция формообразования. М., 2003.
 - *Хан-Магомедов С.О.* Рационализм — «формализм». М., 2007.
 - *Хан-Магомедов С.О.* Сто шедевров советского архитектурного авангарда. М., 2005.
 - *Хан-Магомедов С.О.* Супрематизм и архитектура (проблемы формообразования). М., 2007.
 - *Хан-Магомедов С.О.* Творческие течения, концепции и организации советского авангарда. М., 1997.
 - *Хигер Р.* Дворец Советов (на выставке предварительных проектов) // Известия. 22. 08. 1931.
 - *Хигер Р.* Общество современных архитекторов - ОСА // Советская Архитектура. 1969. № 18. С. 13-19.
 - *Хигер Р.* Путь архитектурной мысли 1917-1932. М., 1933.
 - *Хмельницкий Д.* Архитектура Сталина – психология и стиль. М., 2007.
 - *Хмельницкий Д.* Зодчий Сталин. М., 2007.
 - *Цапенко М.* О реалистических основах советской архитектуры. М., 1952.
 - *Цапенко М.* Социалистический реализм – метод советского зодчества // Архитектура СССР. 1949. № 11. С. 2-11.
 - *Чиняков А.Г.* Братья Веснины. М., 1970.
 - *Щерваков В.* Культурный Днепрстрой. Второй конкурс проектов Дворца Культуры в Ленинской слободе // Строительство Москвы. 1931. № 1. С. 29-34.
 - *Эйгель И.* Борис Иофан. М., 1978.
 - *Эйгель И.* К истории построения и сноса Храма Христа Спасителя // Архитектура и строительство Москвы. 1988. № 7. С. 30-33.
 - Эскизный проект Дворца Советов // Архитектура СССР. 1934. № 3. С. 1-7.

《アーカイヴ資料》

アーカイヴ資料はアーカイヴ名とフォンド名を(ロシア語:日本語)で挙げ、以下詳細を記すこととする。

- ・ ГАРФ (Государственный архив Российской Федерации: ロシア連邦国立アーカイヴ), ф. 3316 (ЦИК СССР: ソ連中央執行委員会), ф. 5446 (Совет Министров: 閣僚会議) .
 - ・ РГАЛИ (Российский государственный архив Литературы и искусства: ロシア国立文学芸術アーカイヴ), ф. 694 (Союз Советских архитекторов: ソヴィエト建築家同盟), ф. 1981 (Иван Машков: イヴァン・マシコフ).
 - ・ РГАНИ (Российский государственный архив новейших историй: ロシア国立現代史アーカイヴ), ф. 1 (Съезды КПСС: ソ連共産党大会).
 - ・ РГАСПИ (Российский государственный архив социально-политической истории: ロシア国立社会政治史アーカイヴ), ф. 81 (Каганович. Л.М. 1920-1957 гг.: カガノーヴィチ L.M. 1920-1957), ф. 82 (Молотов В.М. 1907-1986 гг.: モロトフ V.M. 1907-1986).
 - ・ ЦАГМ (Центральный архив города Москвы: モスクワ市中央アーカイヴ), ф. 694 (Управление строительства Дворца Советов: ソヴィエト宮殿建設局).
-
- ・ ГАРФ, ф. 3316, оп. 64, д. 562, л.1-3, 5, 7-8, 11-12, 16, 21, 23-26.
 - ・ ГАРФ, ф. 3316, оп. 64, д. 563, л.1-3, 9-10, 23-26, 29-31, 36-37, 67-74.
 - ・ ГАРФ, ф. 3316, оп. 64, д. 564, л.1-3, 32 об.
 - ・ ГАРФ, ф. 3316, оп. 64, д. 563, л.1-3, 23-26, 29-31, 36-37, 67-74.
 - ・ ГАРФ, ф. 5446, оп. 16а, д. 560, л. 2-6.
 - ・ ГАРФ, ф. 5446, оп. 20, д. 2210, л. 39.
 - ・ ГАРФ, ф. 5446, оп. 20, д. 2210а, л. 6-7, 10.
 - ・ ГАРФ, ф. 5446, оп. 23, д. 4431, л. 50, 66.
 - ・ ГАРФ, ф. 5446, оп. 25, д. 2287, л. 5-6, 22.
 - ・ ГАРФ, ф. 5446, оп. 28, д. 5777, л. 13-14, 16.
 - ・ ГАРФ, ф. 5446, оп. 43, д. 349, л. 7-9, 11, 85.
 - ・ ГАРФ, ф. 5446, оп. 46, д. 3395, л. 47, 60.
 - ・ ГАРФ, ф. 5446, оп. 49, д. 3777, л. 1-11, 103.
 - ・ ГАРФ, ф. 5446, оп. 50, д. 3848, л. 38.
 - ・ ГАРФ, ф. 5446, оп. 51, д. 3785, л. 28, 39, 42, 44, 50, 58-61.
 - ・ ГАРФ, ф. 5446, оп. 81, д. 3400, л. 14, 17, 20-21, 29-29 об, 39, 92-96.
 - ・ ГАРФ, ф. 5446, оп. 82, д. 121, л. 22, 27, 31, 36, 39, 51.
 - ・ ГАРФ, ф. 5446, оп. 86, д. 3291, л. 49, 137-138, 185.
 - ・ ГАРФ, ф. 5446, оп. 87, д. 2139, л. 15.
 - ・ РГАЛИ, ф. 694, оп. 1, д. 39, л. 25-26.
 - ・ РГАЛИ, ф. 694, оп. 1, д. 50, л. 26-31.
 - ・ РГАЛИ, ф. 1981, оп. 1, д. 50, л. 15-16, 21, 27-28.
 - ・ РГАЛИ, ф. 1981, оп. 1, д. 158, л. 57-59 об.

- РГАНИ, ф. 1, оп. 2, д. 17, л. 74.
- РГАСПИ, ф. 81, оп. 3, д. 99, л. 133-134.
- РГАСПИ, ф. 82, оп. 2, д. 505, л. 133-134.
- РГАСПИ, ф. 82, оп. 2, д. 506, л. 2-4, 74, 76-79
- ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 1, л. 1-3, 8 об-9.
- ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 2, л. 1-1об, 2 об-3, 4-6 об, 20, 21, 36, 101, 102, 106, 116.
- ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 3, л. 2, 65, 67, 68-72.
- ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 4, л. 3, 4, 6-8.
- ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 10, л. 13, 23, 112, 144, 168-169, 170, 209, 221.
- ЦАГМ, ф. 694, оп. 1, д. 11, л. 45.